

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

# 加茂B古墳群 金谷遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書XV

平成 20 年 3 月

東日本高速道路株式会社  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

加<sup>か</sup>茂<sup>も</sup>B古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>群<sup>ぐん</sup>  
金<sup>かな</sup>谷<sup>や</sup>遺<sup>い</sup>跡<sup>せき</sup>

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書X V

平成 20 年 3 月

東日本高速道路株式会社  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めています。北関東自動車道建設整備事業も、その目的に添って計画されたものです。

このたび、東日本高速道路株式会社は、桜川市加茂部地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定しました。この事業地内には、埋蔵文化財包蔵地である加茂B古墳群が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、東日本高速道路株式会社から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成17年6月から同年9月、平成18年10月から平成19年3月まで加茂B古墳群の発掘調査を実施しました。

本書は、加茂B古墳群及び金谷遺跡の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である東日本高速道路株式会社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、桜川市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 人 見 實 徳

## 例 言

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成17年度及び18年度に発掘調査を実施した、茨城県桜川市加茂部799番地の3ほかに所在する加茂B古墳群と、同市西飯岡金谷882番地の2ほかに所在する金谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
 

調 査	平成17年6月1日～平成17年9月30日、平成18年10月1日～平成19年3月31日
整 理	平成19年8月1日～平成20年3月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
 

平成17年度	
首席調査員兼班長	川又 清明
主任調査員	稲田 義弘
主任調査員	田月 淳一 平成17年6月1日～平成17年6月30日
主任調査員	市村 俊英 平成17年7月1日～平成17年9月30日
平成18年度	
首席調査員兼班長	櫻村 立行
主任調査員	稲田 義弘
主任調査員	小園江 徹朗 平成18年10月1日～平成19年1月31日
主任調査員	小川 貴行 平成18年11月1日～平成18年11月30日
調査員	川井 伸也 平成18年12月1日～平成19年3月31日
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員川井伸也が担当した。
- 5 本書を作成するにあたり、当遺跡から出土した旧石器時代の遺物においては窪田恵一氏、ガラス小玉の材質同定においては筑波大学世界文化遺産学専攻保存科学博士松井敏也氏、弥生土器においては茨城県立歴史館行政資料室長海老沢愷氏、鉄鏡においてはひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化振興課文化財調査事務所主幹稲田健一氏、古墳時代の土器においては財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査官（当時）坂野和信氏、墨書土器の判読は国立歴史民俗博物館平川南氏に御指導いただいた。直刀のレントゲン撮影においては、財団法人とちぎ生涯学習文化財団栃木県埋蔵文化財センター主査車塚哲久氏、土壌分析においてはパリオ・サーヴェイ株式会社へ委託した。



## 凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標K系座標に準拠し、X軸＝＋38,760m、Y＝＋29,200mの交点を基準点（A 1a1）とした。なお、抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いた。北から南へはA、B、C……、西から東へは1、2、3……0とし、「A 1区」、「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c……、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」、「B 2b2区」のように呼称した。

- 2 土層の観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 3 本文・全測図・実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	SI－住居跡	SB－掘立柱建物跡	SK－土坑	SD－溝跡	SA－櫓列跡	TP－陥し穴
	TM－古墳	PG－ピット群	P－ピット	K－攪乱		
遺物	P－土器・陶磁器	TP－拓本記録土器	DP－土製品	Q－石器・石製品	M－金属製品	
	N－自然遺物	G－ガラス製品				
土層	K－攪乱					

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は40分の1、遺構は60分の1の縮尺での掲載を基本とした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構及び遺物実測図中の表示は次のとおりである。

<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">■ 焼土・施釉・赤彩・還元部</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">■ 炉・火床面・鹿沼土</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">■ 甕部材・粘土・炭化材・旧表土・黒色処理</td> <td style="text-align: center;">■ 煤・柱あたり痕・ガラス質滓・油煙</td> </tr> </table>	■ 焼土・施釉・赤彩・還元部	■ 炉・火床面・鹿沼土	■ 甕部材・粘土・炭化材・旧表土・黒色処理	■ 煤・柱あたり痕・ガラス質滓・油煙	<p>●土器    ○土製品    □石器・石製品（旧石器集中地点に限り●で示した）    △金属製品</p> <p>▲自然遺物    ☆ガラス製品    ----- 硬化面</p>
■ 焼土・施釉・赤彩・還元部	■ 炉・火床面・鹿沼土				
■ 甕部材・粘土・炭化材・旧表土・黒色処理	■ 煤・柱あたり痕・ガラス質滓・油煙				

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の記載方法は、次のとおりである。

- (1) 計測値の単位は、法量をm、cm、重量をgで示した。なお、現存値は（ ）で、推定値は[ ]を付して示した。
- (2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、竪穴住居跡については炉または竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は、軸線が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N-10°-E）。

## 抄 録

ふりがな	かもびーこふんぐん かなやいせき									
書名	加茂B古墳群 金谷遺跡									
副書名	北関東自動車道 協和一友部 建設事業地内埋蔵文化財調査報告書									
巻次										
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告									
シリーズ番号	第30巻									
著者名	川井 伸也									
編集機関	財団法人 茨城県教育財団									
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587									
発行日	2008 平成20 年 3月 24日									
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因		
加茂B古墳群	茨城県桜川市加茂部 799番地の3ほか	08231 - 324084	36度 20分 52秒 〔36度 21分 03秒〕	140度 09分 23秒 〔140度 09分 11秒〕	84 ~ 107m	20050601 ~ 20050930  20061001 ~ 20070331	173㎡   417㎡	北関東自動車道協和一友部建設事業に伴う事前調査		
金谷遺跡	茨城県桜川市西飯岡 882番地の2ほか	08231 - 324081	36度 21分 54秒 〔36度 21分 42秒〕	140度 03分 53秒 〔140度 04分 05秒〕	48 ~ 51m	20060525 ~ 20060526	53419.04㎡ 内402.5㎡ の報告			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
加茂B古墳群	包蔵地	旧石器	旧石器集中地点 2か所		剥片		第6号墳は墳丘上に埋葬施設が2か所あり、第2主体部から直刀やガラス小玉などが出土した。古墳に隣接して墳丘や周溝などの施設を持たない小形の石棺を3基確認した。東斜面部は段切り状に整形され、奈良・平安時代の集落跡が形成されている。北側には、平安時代より続く加茂大神御子神主玉神社が立地し、関連性が考えられる。			
		縄文時代	陥し穴 7基							
	集落跡	弥生	竪穴住居跡	10軒	弥生土器 甕、土製品 紡錘車、石器 鎌、ガラス製品 小玉					
		奈良・平安	竪穴住居跡 鋳立柱建物跡 土坑	18軒 5棟 1基	土器器 杯・椀・皿・甕、高坏・高盤・鉢・甕・瓶・甕、甕、灰釉陶器 長頸瓶、緑釉陶器 蓋、金属製品 刀子					
		古墳群	古墳時代	方墳 円墳 石棺 墓坑	1基 8基 3基 3基	土器器 杯・椀、須恵器 杯・甕・甕、鉄器 直刀・鎌・刀子、ガラス製品 小玉				
	その他	時期不明	溝跡 横列跡 道路跡 土坑 ビット群 舟止め石	7条 4列 1条 29基 5か所 1か所						
金谷遺跡	集落跡	奈良・平安	竪穴住居跡 鋳立柱建物跡 溝跡	2軒 1棟 1条						
	その他	時期不明	土坑 ビット列	2基 1列	土器器 杯・高坏・甕、土製品 土玉・支脚					
要 約	旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡である。山頂から西斜面にかけて古墳が築造されている。東斜面は、段切り状に整形されており奈良・平安時代の竪穴住居跡や鋳立柱建物跡が構築されている。									

## 目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 加茂B古墳群	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 旧石器時代の遺構	8
調査方法	8
石器集中地点の記載方法	8
石器集中地点	8
2 縄文時代の遺構と遺物	14
陥し穴	14
3 弥生時代の遺構と遺物	18
竪穴住居跡	18
4 古墳時代の遺構と遺物	41
(1) 古墳	41
(2) 石棺	71
(3) 墓坑	76
5 奈良・平安時代の遺構と遺物	79
(1) 竪穴住居跡	79
(2) 掘立柱建物跡	125
(3) 土坑	132
6 その他の遺構と遺物	135
(1) 溝跡	135
(2) 柵列跡	139
(3) 道路跡	142
(4) 土坑	143
(5) ビット群	148
(6) 舟止め石	151
(7) 遺構外出土遺物	153
第4節 まとめ	155
第4章 金谷遺跡	169
第1節 遺跡の概要	169
第2節 遺構と遺物	169
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	169
(1) 竪穴住居跡	169
(2) 掘立柱建物跡	170
(3) 溝跡	170
2 その他の遺構と遺物	170
(1) 土坑	170
(2) ビット列	171
付章	
写真図版	
付図	

## 第1章 調査経緯

### 第1節 調査に至る経緯

東日本高速道路株式会社は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長（現東日本高速道路株式会社関東支社水戸工事事務所長）は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に現地踏査を、平成12年2月16日及び3月2日に試掘調査を実施し、加茂B古墳群の所在を確認した。平成12年9月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、事業地内に加茂B古墳群が所在する旨を回答した。

平成13年3月26日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現 第94条）の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年3月27日、茨城県知事あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成17年1月25日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる平成17年度埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成17年2月14日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、加茂B古墳群について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成17年6月1日から9月30日、平成18年10月1日から平成19年3月31日まで加茂B古墳群の発掘調査を実施することとなった。

金谷遺跡については、すでに取扱いが済んでいたが、工事中に遺構が発見されたため、平成18年5月25・26日に財団法人茨城県教育財団が補足調査を実施した。

### 第2節 調査経過

加茂B古墳群の調査経過については、その概要を表で記載する。

工程	平成17年度				平成18年度			平成19年度		
	6月	7月	8月	9月	10月	1月	12月	1月	2月	3月
調査準備										
表土除去										
遺構確認										
遺構調査										
遺物洗浄										
注記作業										
写真整理										
補足調査										
撤収準備										

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

加茂B古墳群は、茨城県桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）加茂部799番地の3ほかに所在している。

当遺跡が所在する旧岩瀬町は、茨城県の西部に位置し、北部には富谷山、高峯山があり、栃木県真岡市、益子町、茂木町に接している。東には雨引山、加波山、南には筑波山があり、丘陵性の山々に囲まれた盆地をなしている。町の中央部を北東から流れる桜川は、北東部に位置する鋤柄峠の山間、鏡ヶ池に源を発し、霞ヶ浦へ注いでいる。平地は、桜川、大川、築輪川などの流域と山間部に入りこんだ谷状の低地などに広がる。当遺跡は、桜川市の南東部に位置する標高100mほどの緩やかな丘陵に立地している。

当町域を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層と、これを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローマ層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、鹿沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また水田に利用されている桜川流域一帯は、河川の浸食・堆積作用による沖積地である<sup>1)</sup>。調査前の現況は、山林である。

### 第2節 歴史的環境

遺跡の所在する岩瀬盆地と、それを望む丘陵地や桜川及びその流域には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している<sup>2)</sup>。

旧石器時代の遺跡は少なく、遺構や出土状況が明確ではない。上野原地内では石槍が発見されているほか<sup>3)</sup>、加茂遺跡<sup>4)</sup>〈2〉、辰海道遺跡<sup>5)</sup>〈3〉からは、尖頭器や石刃、松田古墳群<sup>6)</sup>〈4〉からは、ナイフ形石器などが出土している。

桜川とその支流には沖積地が形成され、この沖積地を取り囲むような丘陵の縁辺部に、縄文時代の遺跡が多く立地している。主な遺跡は、磯部遺跡〈5〉、松田古墳群、加茂遺跡、花園遺跡〈6〉、裏山遺跡〈7〉、大田神社前遺跡〈8〉などがある。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布している。主な遺跡は、長辺寺遺跡〈9〉、松田古墳群、加茂遺跡、裏山遺跡、防人遺跡〈10〉、高橋遺跡〈11〉、当向遺跡〈12〉、辰海道遺跡、大田山神古墳〈13〉、大田神社前遺跡、大目下遺跡〈14〉などがある。当遺跡周辺に位置する松田古墳群、加茂遺跡、高橋遺跡からは、弥生後期の集落が確認されている。出土土器は、栃木県から茨城県西部にかけて分布している二軒屋式土器の要素が確認できる。また、茨城県北部に分布の中心をもつ十王台式土器の要素をもつ土器も出土しており<sup>7)</sup>、県北部域との地域間交流を考えるうえでも重要な地域である。

この地域には、古墳時代の遺跡も多く分布し、なかでも古墳の数が多し。古墳群は46か所周知されており、確認されている古墳の総数は170基を超え<sup>8)</sup>、桜川や大川、筑輪川の沖積地を望む丘陵部に多く分布している。大川と桜川の間にある長辺寺山の丘陵には、孤塚古墳〈15〉、その山頂には長辺寺山古墳〈16〉が位置している。孤塚古墳は、全長約40mの前方後方墳で、主体部内は粘土棺であり、副葬品として銅剣や短甲などが出土している。この墳形や副葬品から、孤塚古墳は岩瀬地域の最も古い古墳とされている<sup>9)</sup>。長辺寺山古墳は、

未調査のため墳丘の規模など明確ではないが、全長約120mを測る岩瀬地域最大の前方後円墳とされている<sup>10)</sup>。

調査された古墳には、間中古墳〈17〉、西沢古墳〈18〉、青柳古墳群〈19〉、松田古墳群、稲古墳群〈20〉、花園古墳群〈21〉、山ノ入古墳群〈22〉などがある。青柳古墳群の2号墳は、山稜地形を利用して作られた外径42mの円墳である。埋葬主体部は粘土郭で、粘土の状況から胴張りの木棺と考えられ、時期は6世紀前半とされている<sup>11)</sup>。松田古墳群は、6世紀前半から後半にかけて築造された古墳群である。埋葬施設が確認されている3基は、それぞれ埋葬形態が異なり、6世紀前半とされる前方後円墳の1号墳は粘土郭、6世紀後半とされる円墳の2号墳は半地下式の横穴式石室、6世紀後半以降とされる円墳の3号墳は壑穴形の石室である。1号墳は、副葬品として直刀や銅鏡、ガラス小玉、銅鋼、鉄鎌などが出土していることから、首長クラスの権力者が被葬者と想定されている<sup>12)</sup>。松田古墳群と対峙する当古墳群と同じ斜面の低地部には、加茂A古墳群〈23〉が位置しており、関連性が想定されている。

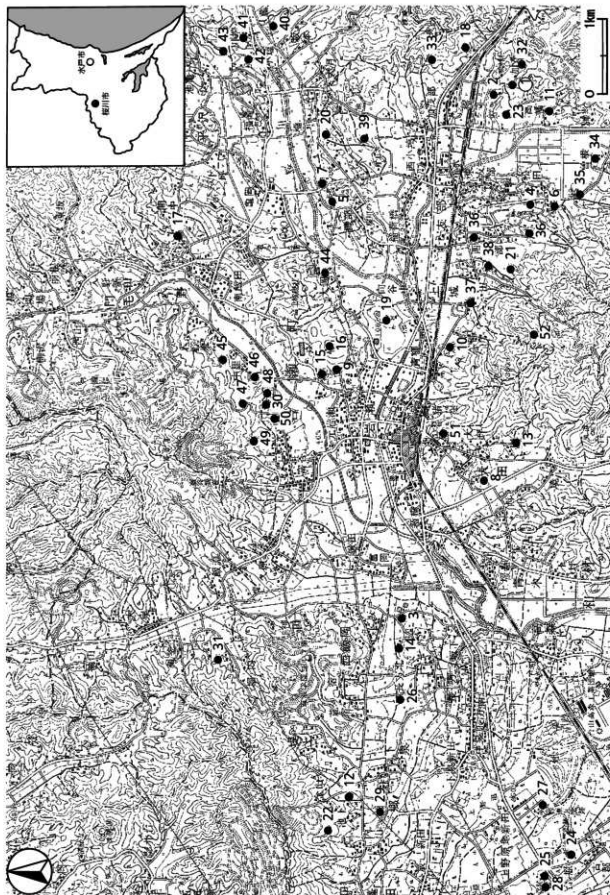
奈良・平安時代に入ると、この地域は新治郡大幡郷に編入される。新治郡には、国土統一神話や古代史に関わる神社の鴨大神御子神主玉神社、嶋鳥五所神社、稲田神社や加茂部、加茂といった地名が多くみられる。「カモ」を冠する神社や地名があることから、古代の豪族賀(加)茂氏との関わりがあると考えられている。賀茂氏の祖は、大国主命と伝えられ、出雲系の中核的氏族である。賀茂氏一統の地は大和葛城地方で、その地には賀茂氏の祖霊を奉祀する社があり、その社は「伊波瀬の社」とも呼ばれていた。これらのことから、当地域は出雲地方からの移住者、あるいは賀茂氏ゆかりの氏族集団によって開拓が進められた地域と推測されている<sup>13)</sup>。

田岩瀬町と田協町の境に新治郡高跡〈24〉が位置しており、そこから北西約600mに、新治郡の郡寺とされる新治廃寺跡〈25〉が位置している。集落跡は、辰海道遺跡、磯道遺跡、当向遺跡、大田神社前遺跡、金谷遺跡〈26〉といった大集落が確認され、そのほか生産遺跡も周知されており、新治廃寺跡の周辺には瓦を焼成していた上野原瓦窯跡〈27〉や久地家長町瓦窯跡〈28〉、本郷瓦塚遺跡〈29〉が位置している。さらに、富谷山の山裾には郷の窯跡〈30〉、城山から北に約9kmには須恵器焼成を行っていた堀の内古窯跡群〈31〉が位置している。新治郡は下野国と接する位置にあり、下野国との交流の深い地域であったと考えられる。また、窯跡も多く見られることから、新治群営の土器や瓦の生産地であったと想定できる。この当時の新治郡は、文化的にも物質的にも交流の場として繁栄した地域であった。

※文中の◇内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

#### 註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図(地名表編)(地図編)』茨城県教育委員会 2001年3月
- 3) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年3月
- 4) 高田和宏『加茂遺跡 北関東自動車道(協和・友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書X』『茨城県教育財団文化財調査報告書』第249集 2005年3月
- 5) 仲村浩一郎 後藤一成 宮田和男 賀友博 鴨志田祐一『辰海道遺跡1 北関東自動車道(協和・友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書1』『茨城県教育財団文化財調査報告書』第222集 2004年3月
- 6) 横倉要次『松田古墳群 北関東自動車道(協和・友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書III』『茨城県教育財団文化財調査報告書』第224集 2004年3月
- 7) 前掲4)と同じ
- 8) 瓦吹堅『岩瀬盆地考古学点描』『領域の研究-阿久津久先生選題記念論集-』阿久津久先生選題記念事業実行委員会 2003年4月
- 9) 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974年2月
- 10) 前掲9)と同じ
- 11) 伊東重敏『青柳2号墳調査報告』『岩瀬町文化財調査報告』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 12) 前掲5)と同じ
- 13) 前掲3)と同じ



第1図 加茂B古墳群周辺遺跡分布図(国土地理院「真岡」1:50000を使用)

表1 加茂B古墳群周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	時 代							番 号	遺跡名	時 代						
		旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
	加茂B古墳群								27	上野原瓦窯跡							
2	加茂遺跡								28	久地楽長町瓦窯跡							
3	辰海道遺跡								29	本郷瓦塚遺跡							
4	松田古墳群								30	郷の窯跡							
5	磯部遺跡								31	堀の内古窯跡群							
6	花園遺跡								32	加茂東遺跡							
7	裏山遺跡								33	諏訪古墳							
8	犬田神社前遺跡								34	曾根古墳群							
9	長辺寺遺跡								35	庚申塚古墳							
10	防人遺跡								36	ますみ古墳群							
11	高幡遺跡								37	御領塚古墳							
12	当向遺跡								38	花園遺跡							
13	犬田山神古墳								39	池下古墳群							
14	大日下遺跡								40	山口寺前古墳							
15	狐塚古墳								41	磯古墳群							
16	長辺寺山古墳								42	小塩古墳群							
17	間中古墳								43	向孫七古墳群							
18	西沢古墳								44	大岡古墳群							
19	青柳古墳群								45	剣前古墳							
20	稲古墳群								46	中里古墳群							
21	花園古墳群								47	富谷弥陀古墳							
22	山ノ入古墳群								48	岩屋家古墳							
23	加茂A古墳群								49	富谷古墳群							
24	新治郡衙跡								50	郷の塚古墳							
25	新治鹿寺跡								51	猪窪古墳群							
26	金谷遺跡								52	車塚古墳群							





## 第3章 加茂B古墳群

### 第1節 遺跡の概要

加茂B古墳群は、桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）加茂部799番地の3ほかに所在し、桜川市北東部の標高84～107mの緩やかな丘陵上に位置している。調査前の現況は山林である。

平成17・18年度に、5,908㎡について調査を行った。検出された遺構は、旧石器時代の石器集中地点2か所、縄文時代の陥し穴7基、古墳9基（円墳8、方墳1）、石棺3基、墓坑3基、竪穴住居跡28軒（弥生時代10、奈良・平安時代18）、掘立柱建物跡5棟、溝跡7条、柵列跡4列、道路跡1条、土坑30基（奈良・平安時代1、時期不明29）、ピット群5か所、舟止め石1か所などである。

調査の結果、古墳時代を中心に、旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが確認された。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に43箱が出土している。主な出土遺物は、弥生土器（壺）、土師器（杯・碗・皿・甕）、須恵器（杯・高台付杯・蓋・高杯・盤・高盤・鉢・壺・瓶・甕・甌）、灰軸陶器（甌）、緑軸陶器（蓋）、土製品（紡錘車）、石器・石製品（鉄・砥石）、金属製品（直刀、刀子）などである。

### 第2節 基本層序

調査区中央部（L8d5）にテストピットを設定し、基本層序の観察を行った（第3図）。

第1層は、表土であり、層厚は22～26cmである。

第2層は、極暗褐色を呈するソフトロームへの漸移層である。焼土を微量含み、粘性・締まりともに普通であり、層厚は15～19cmである。

第3層は、極暗褐色を呈するソフトロームへの漸移層である。粘性・締まりは普通であり、層厚は17～35cmである。

第4層は、暗褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりが強く、層厚は7～25cmである。

第5層は、褐色を呈するソフトローム層で、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は5～16cmである。

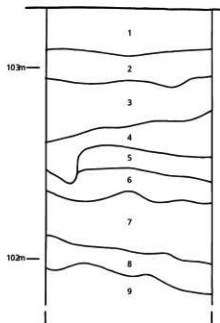
第6層は、褐色を呈するハードローム層で、粘性は強い。締まりも極めて強く、層厚は7～17cmである。

第7層は、褐色（第6層より彩度が高い）を呈するハードローム層で、粘性は強い。締まりも極めて強く、層厚は15～24cmである。

第8層は、褐色を呈する鹿沼軽石層（以下KPと略す）への漸移層で、粘性・締まりは普通であり、層厚は9～17cmである。

第9層は、褐色を呈するKP純層で、粘性・締まりは普通である。層厚は、下層が未掘のため本来の層厚は不明である。

遺構は第4層上面で確認された。



第3図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 旧石器時代の石器集中地点と遺物

##### (1) 調査の方法

遺構確認作業及び各時代の遺構調査を進めていく過程で、旧石器時代の石器が出土したため、それらの地点に調査区を設定し、ローム層の掘り下げを行った。

調査区は2か所設定した。第1調査区は、標高94.5～95.0mの緩斜面部であり、第2調査区は、標高105.00～106.25mの山頂付近の斜面部である。

調査の結果、第1調査区ではL 6 b7～L 6 d9区から34点、第2調査区ではM 8 a6～M 8 b9区から104点の石器が出土した。

調査の過程で出土した石器などは、原位置を保持しながら該期の遺構に配慮して掘り下げ、出土状況の写真撮影及び位置と標高の計測を行った。

##### (2) 石器集中地点の記載方法

2か所の石器集中地点から出土した石器などの総数は138点である。遺物番号は石器集中地点ごとに付した。実測図未掲載の剥片なども一覧表で記載した。(記載内容は「遺物番号」「器種」「石質」「グリッド」「標高」である。)

時期の特定については、「茨城県後期旧石器時代編年案」(『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題— 発表要旨・資料集』2002年)を参考にした。

##### (3) 石器集中地点

第1・2調査区において確認された2か所の石器集中地点を、それぞれ第1・2号石器集中地点とし、以下その特徴と出土した石器などについて記述する。

#### 第1号石器集中地点 (第4・5図)

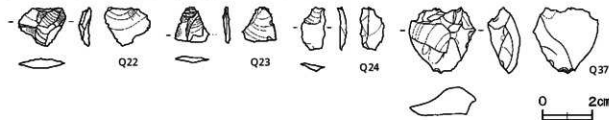
**位置** 調査区西部のL 6 b7～L 6 d9区、標高96mの丘陵西斜面に位置している。

**遺物出土状況** L 6 e8区を中心とする南北9.6m、東西7.0mの範囲で、34点の石器や剥片が出土している。

垂直分布は標高95.621～96.670mで、基本層序の第3層(土層断面図の第1層)から第6層の上部(土層断面図の第3層上部)である。

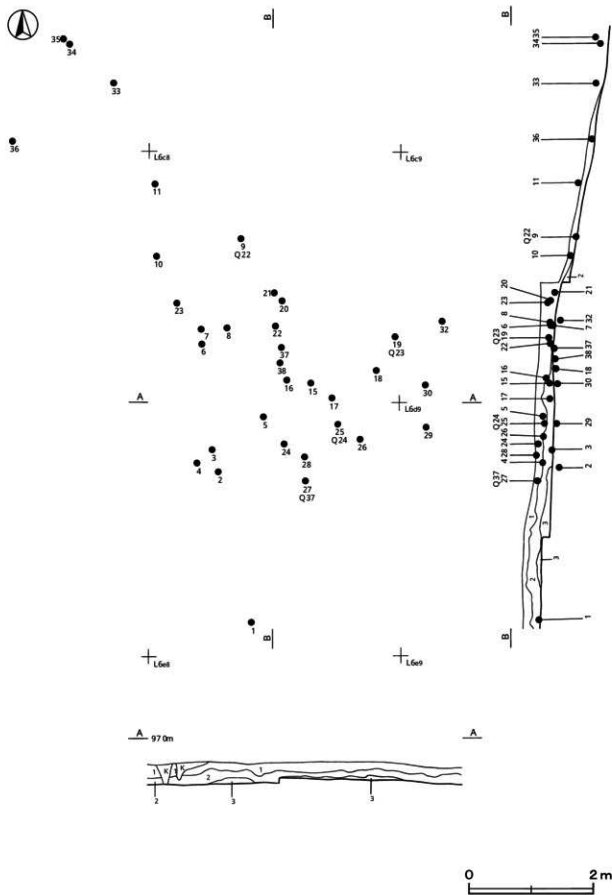
**遺物** 掻器1点(チャート)、剥片33点(黒曜石15、チャート18)が出土している。Q22・Q23は、二次加工された鱗状の形状をする剥片で、石材は黒曜石である。

**所見** 本地点は、黒曜石、チャートを素材とした石器製作の場と想定される。石核は確認されず、掻器と剥片のみである。尖頭器製作の際に剥離したと思われる鱗状の形状をする剥片がみられるため、尖頭器製作の場と考えられる。第2号石器集中地点と同様にⅡc期と考えられる。



第4図 第1号石器集中地点出土遺物実測図

加茂B古墳群



第5图 第1号石器集中地点实测图

第1号石器集中地点出土遺物観察表 第4図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 22	剥片	150	190	0.40	0.81	黒曜石	二次加工痕を有する 押圧剥離	L 6 c8	
Q 23	剥片	140	135	0.25	0.30	黒曜石	二次加工痕を有する 押圧剥離	L 6 c8	
Q 24	剥片	168	0.93	0.33	0.28	黒曜石	押圧剥離	L 6 c8	
Q 37	撻器	260	257	113	5.60	チャート	押圧剥離で刃部形成	L 6 c8	

表2 第1号石器集中地点出土石器一覧表

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1		剥片	チャート	L 6 c8	160	96.613			
2		剥片	チャート	L 6 c8	0.50	96.331			
3		剥片	チャート	L 6 c8	0.70	96.372			
4		剥片	黒曜石	L 6 c8	2.00	96.524			
5		剥片	チャート	L 6 c8	0.70	96.563			
6		剥片	チャート	L 6 c8	0.10	96.405			
7		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.20	96.395			
8		剥片	黒曜石	L 6 c8	6.70	96.402			
9	Q 22	剥片	黒曜石	L 6 c8	0.81	96.053			
10		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.30	96.111			
11		剥片	チャート	L 6 c8	0.60	96.013			
15		剥片	黒曜石	L 6 c8	1.40	96.480			
16		剥片	チャート	L 6 c8	0.70	96.486			
17		剥片	チャート	L 6 c8	0.40	96.444			
18		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.50	96.396			
19	Q 23	剥片	黒曜石	L 6 c8	0.30	96.461			
20		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.20	96.461			
21		剥片	チャート	L 6 c8	0.30	96.420			
22		剥片	チャート	L 6 c8	0.50	96.488			
23		剥片	チャート	L 6 c8	1.30	96.198			
24		剥片	チャート	L 6 c8	2.10	96.616			
25	Q 24	剥片	黒曜石	L 6 c8	0.28	96.521			
26		剥片	黒曜石	L 6 c8	0.20	96.542			
27	Q 37	撻器	チャート	L 6 c8	5.80	96.624			
28		剥片	チャート	L 6 c8	0.60	96.670			
29		剥片	チャート	L 6 c9	3.30	96.310			
30		剥片	チャート	L 6 c9	0.50	96.311			
32		剥片	黒曜石	L 6 c9	1.00	96.289			
33		剥片	チャート	L 6 b7	2.50	95.700			
34		剥片	黒曜石	L 6 b7	0.20	95.621			
35		剥片	黒曜石	L 6 b7	3.30	95.661			
36		剥片	チャート	L 6 b7	2.10	95.730			
37		剥片	チャート	L 6 c8	0.40	96.377			
38		剥片	黒曜石	L 6 c8	1.00	96.378			

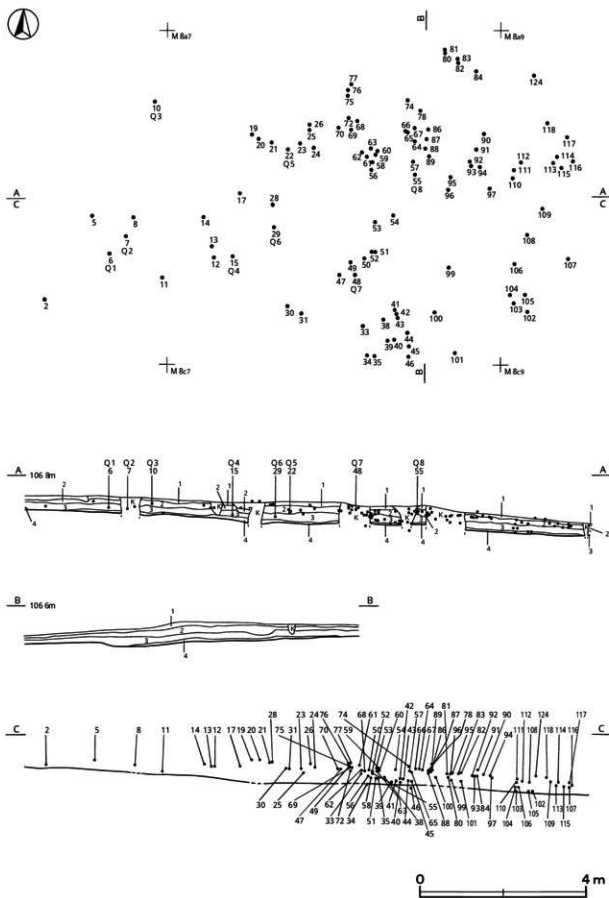
## 第2号石器集中地点 (第6・7図)

位置 調査区中央部のM 8 a6～M 8 b9区、標高106mの丘陵頂部に位置している。

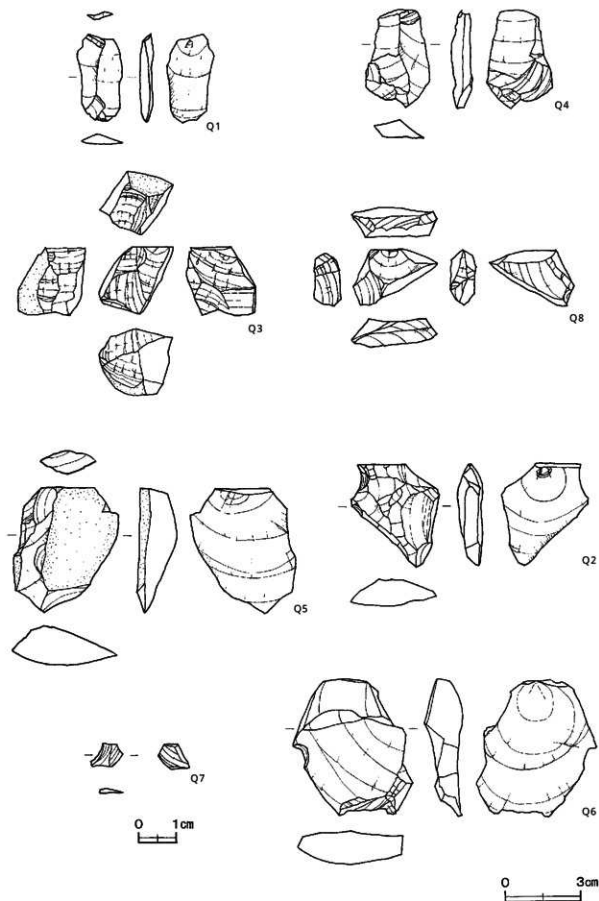
遺物出土状況 M 8 b8区を中心とする南北8m、東西13mの範囲で、104点の石器や剥片が出土している。垂直分布は標高105.410～106.276mで、基本層序の第3層(土層断面図の第1層)から第8層上部(土層断面図の第4層上部)であるが、基本層序でみられる第6・7層のハードローム層は確認されなかった。

遺物 石核2点(石英、チャート)、縦長剥片5点(頁岩1、チャート4)、剥片97点(頁岩3、石英7、チャート83、瑪瑙1、ホルンフェルス3)が出土している。Q 1・Q 4は頁岩の縦長剥片である。Q 3は石英の石核で、自然面を有する。Q 7はチャートで、二次加工痕を有する鱗状の剥片である。

所見 本地点は、出土している石器の様相から、チャートを主体とした素材を用いた石器製作の場と考えられる。石核は石英とチャートの2点が確認され、その他は剥片のみである。尖頭器製作の際に剥離したと思われる鱗状の形状をする剥片がみられるため、槍先形尖頭器製作の場と想定され、第1号石器集中地点と同様にII c期と考えられる。



第6图 第2号石器集中地点实测图



第7图 第2号石器集中地点出土遗物实测图

第2号石器集中地点出土遺物観察表 第7図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	短長削片	3.50	1.84	0.55	2.26	頁岩	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b6	
Q 2	削片	4.00	3.50	1.30	1.31	頁岩	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b6	
Q 3	石核	2.75	3.00	2.50	24.50	石英	上部・側部を打面として削片を剥離	M 8 a6	
Q 4	短長削片	3.90	2.60	0.87	6.45	チャート	正面に前段階の剥離痕を有する	M 8 b7	
Q 5	削片	5.00	4.17	1.63	30.30	頁岩	正面に剥離痕を有する	M 8 a7	
Q 6	削片	5.00	4.26	1.50	32.40	頁岩	正面に横方向の剥離痕を有する	M 8 b7	
Q 7	削片	0.65	0.82	0.16	0.09	チャート	二次加工痕を有する	M 8 b8	
Q 8	石核	2.20	3.40	1.00	7.70	チャート	多方向の剥離痕を有する	M 8 a8	

表3 第2号石器集中地点出土石器一覧表

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量 g	径高 m	備考
2		削片	珪瑠	M 8 b6	0.40	106.006	
5		削片	チャート	M 8 b6	0.60	106.191	
6	Q 1	短長削片	頁岩	M 8 b6	2.24	106.071	
7	Q 2	削片	頁岩	M 8 b6	1.31	105.944	
8		削片	チャート	M 8 b6	0.40	106.098	
10	Q 3	石核	石英	M 8 a6	24.50	106.154	
11		削片	石英	M 8 b6	7.50	105.869	
12		削片	チャート	M 8 b7	0.60	106.109	
13		削片	チャート	M 8 b7	0.10	106.020	
14		削片	石英	M 8 b7	0.40	106.058	
15	Q 4	短長削片	チャート	M 8 b7	6.45	105.869	
17		削片	チャート	M 8 a7	2.20	105.996	
19		削片	チャート	M 8 a7	0.90	106.133	
20		削片	チャート	M 8 a7	0.70	106.123	
21		削片	チャート	M 8 a7	0.20	106.110	
22	Q 5	削片	頁岩	M 8 a7	30.30	105.900	
23		削片	チャート	M 8 a7	0.20	105.950	
24		削片	チャート	M 8 a7	0.10	106.022	
25		短長削片	チャート	M 8 a7	0.40	106.092	
26		削片	チャート	M 8 a7	0.30	106.068	
28		削片	チャート	M 8 b7	0.80	106.060	
29	Q 6	削片	頁岩	M 8 b7	32.40	105.798	
30		削片	チャート	M 8 b7	1.60	105.952	
31		削片	チャート	M 8 b7	0.80	105.883	
33		削片	チャート	M 8 b8	5.60	105.856	
34		削片	チャート	M 8 b8	0.10	105.596	
35		削片	チャート	M 8 b8	1.80	105.702	
38		削片	チャート	M 8 b8	0.30	105.724	
39		削片	黒/2153	M 8 b8	0.10	105.610	
40		削片	チャート	M 8 b8	0.20	105.642	
41		削片	チャート	M 8 b8	0.70	105.735	
42		削片	チャート	M 8 b8	0.60	105.697	
43		削片	チャート	M 8 b8	0.20	105.696	
44		削片	チャート	M 8 b8	0.40	105.677	
45		削片	チャート	M 8 b8	0.40	105.637	
46		削片	チャート	M 8 b8	0.10	105.486	
47		削片	チャート	M 8 b8	0.40	105.981	
48	Q 7	削片	チャート	M 8 b8	0.08	105.950	
49		削片	チャート	M 8 b8	1.60	105.975	
50		削片	チャート	M 8 b8	0.40	105.908	
51		削片	チャート	M 8 b8	1.00	105.715	
52		削片	チャート	M 8 b8	0.30	105.941	
53		削片	チャート	M 8 b8	0.20	105.948	
54		削片	チャート	M 8 b8	0.10	105.974	
55	Q 8	石核	チャート	M 8 a8	5.76	105.913	
56		削片	チャート	M 8 a8	0.50	105.894	
57		削片	チャート	M 8 a8	0.20	105.909	
58		削片	チャート	M 8 a8	0.30	105.865	
59		削片	チャート	M 8 a8	0.20	105.888	
60		削片	チャート	M 8 a8	1.10	105.907	
61		削片	チャート	M 8 a8	2.20	105.873	
62		削片	チャート	M 8 a8	0.60	105.883	
63		削片	チャート	M 8 a8	0.50	105.807	
64		削片	チャート	M 8 a8	0.90	105.934	
65		削片	チャート	M 8 a8	0.90	105.914	
66		削片	チャート	M 8 a8	0.50	105.890	
67		削片	チャート	M 8 a8	0.30	105.917	
68		短長削片	チャート	M 8 a8	0.60	106.003	
69		削片	チャート	M 8 a8	3.40	106.052	
70		削片	チャート	M 8 a8	0.30	105.958	
72		削片	チャート	M 8 a8	0.70	105.923	
74		削片	チャート	M 8 a8	0.80	105.953	
75		短長削片	チャート	M 8 a8	2.40	106.035	
76		削片	チャート	M 8 a8	1.00	106.065	
77		削片	チャート	M 8 a8	2.40	106.015	
78		削片	チャート	M 8 a8	1.00	105.971	



番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量 g	標高 m	備考
80		剥片	チャート	M 8 aB	0.50	105.721	
81		剥片	チャート	M 8 aB	0.20	105.845	
82		剥片	チャート	M 8 aB	0.30	105.822	
83		剥片	石英	M 8 aB	27.90	105.817	
84		剥片	チャート	M 8 aB	0.90	105.776	
86		剥片	チャート	M 8 aB	0.30	105.899	
87		剥片	チャート	M 8 aB	0.30	105.983	
88		剥片	チャート	M 8 aB	0.30	105.913	
89		剥片	石英	M 8 aB	1.90	106.013	
90		剥片	珪石/珪石	M 8 aB	0.20	105.858	
91		剥片	石英	M 8 aB	2.20	105.983	
92		剥片	チャート	M 8 aB	0.30	105.806	
93		剥片	チャート	M 8 aB	0.20	105.856	
94		剥片	チャート	M 8 aB	0.10	105.818	
95		剥片	チャート	M 8 aB	0.50	105.867	
96		剥片	石英	M 8 aB	0.30	105.895	
97		剥片	チャート	M 8 aB	0.70	105.796	
99		剥片	チャート	M 8 bB	0.60	105.659	
100		剥片	チャート	M 8 bB	3.70	105.698	

番号	遺物番号	器種	材質	グリッド	重量 g	標高 m	備考
101		剥片	チャート	M 8 bB	2.10	105.647	
102		剥片	チャート	M 8 bB	0.60	105.437	
103		剥片	チャート	M 8 bB	0.90	105.570	
104		剥片	チャート	M 8 bB	0.60	105.530	
105		剥片	チャート	M 8 bB	0.30	105.423	
106		剥片	チャート	M 8 bB	0.30	105.572	
107		剥片	珪石/珪石	M 8 bB	0.30	105.514	
108		剥片	チャート	M 8 bB	0.40	105.603	
109		剥片	チャート	M 8 bB	0.30	105.618	
110		剥片	チャート	M 8 aB	3.50	105.410	
111		剥片	チャート	M 8 aB	0.90	105.723	
112		剥片	チャート	M 8 aB	0.80	105.724	
113		剥片	チャート	M 8 aB	0.50	105.627	
114		剥片	石英	M 8 aB	0.50	105.642	
115		剥片	チャート	M 8 aB	3.00	105.607	
116		剥片	チャート	M 8 aB	0.60	105.605	
117		剥片	チャート	M 8 aB	0.60	105.646	
118		剥片	チャート	M 8 aB	2.00	105.687	
124		剥片	チャート	M 8 aB	0.60	105.769	

## 2 縄文時代の遺構と遺物

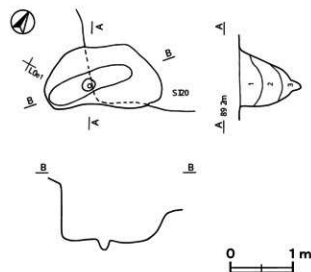
縄文時代の陥し穴 7 基を確認した。調査区東部に 7 基が確認されている。標高 89m～89.25m と 84.75m～85.5m の斜面部に位置している。主軸は、南北のものと、東西のものがみられる。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

### 第 1 号陥し穴（第 8 図）

**位置** 調査区東部の L 0 41 区、標高 89m の丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第 20 号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 長径 1.74m、短径 0.93m の不定形で、長径方向は  $N-51^{\circ}-E$  である。斜面に対して直交している。



第 8 図 第 1 号陥し穴実測図

深さは 102cm で、壁は南壁が直立しており、北壁は外傾し、短径方向も外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、中央部には逆茂木を立てたと考えられる深さ 16cm のビット 1 が所が検出された。

**覆土** 3 層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 コーム粒子少量
- 2 黒褐色 コーム粒子微量
- 3 黒褐色 コームブロック微量

**遺物出土状況** 覆土上層から混入したと思われる土師器片 2 点（甕）、須恵器片 6 点（杯 5、甕 1）が出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

## 第2号陥し穴（第9図）

**位置** 調査区東部のK0j2区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第8号溝に掘り込まれている。

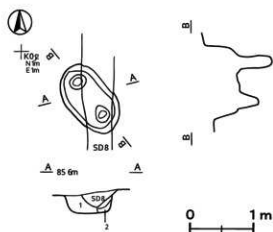
**規模と形状** 長径1.20m、短径0.72mの楕円形で、長径方向は $N-40^{\circ}-W$ である。斜面に対し平行である。深さは105cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ31cm・51cmのビット2か所が検出された。

**覆土** 2層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量  
2 黒褐色 ローム粒子微量

**所見** 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

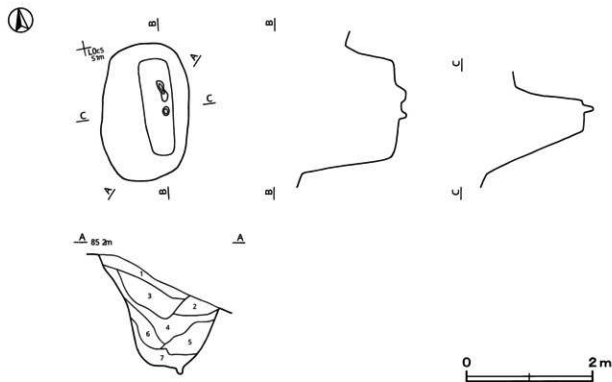


第9図 第2号陥し穴実測図

## 第3号陥し穴（第10図）

**位置** 調査区東部のL0c5区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径2.16m、短径1.37mの楕円形で、長径方向は $N-13^{\circ}-E$ である。斜面に対して直交している。深さは154cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ13cmのビット2か所が検出された。



第10図 第3号陥し穴実測図

**覆土** 7層に分層される。特に西側より土が流入した様相を示している自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	5 極暗褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック微量	6 黒褐色	ロームブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック少量
4 黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量		

**所見** 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

**第4号陥し穴（第11図）**

**位置** 調査区東部のL0c4区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径1.50m、短径0.88mの不整形円形で、長径方向はN-55°-Eである。斜面に対して直交している。深さは160cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦である。

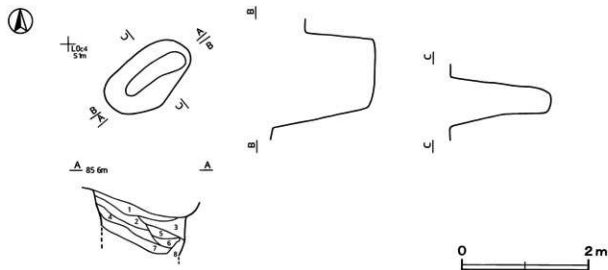
**覆土** 8層に分層される。特に西側から土が流入した様相を示している自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色	ローム粒子微量	5 黒色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ローム粒子少量	6 暗褐色	ローム粒子中量
3 黒色	ロームブロック微量	7 褐色	ローム粒子多量
4 黒褐色	ローム粒子中量	8 黒色	ローム粒子少量

**遺物出土状況** 覆土上層より混入したと思われる土師器片2点（坏、甕）、須恵器片1点（高坏）が出土している。

**所見** 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第11図 第4号陥し穴実測図

**第5号陥し穴（第12図）**

**位置** 調査区東部のL0c4区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第35号土坑を掘り込んでいる。

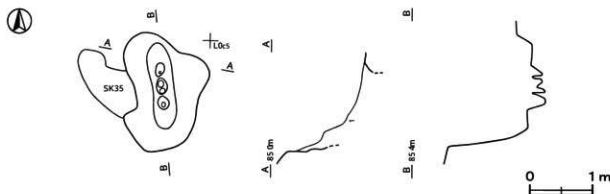
**規模と形状** 長径1.87m、短径1.21mの不整形で、長径方向はN-13°-Wである。斜面に対して平行である。深さは127cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ21~26cmのビット4か所が、直線的に並んで検出された。

**覆土** 単一層である。自然堆積と考えられる。

## 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



第12図 第5号陥し穴実測図

## 第6号陥し穴 (第13図)

位置 調査区東部のL011区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 長軸2.03m、短軸0.86mの隅丸長方形で、長軸方向は $N-69^{\circ}-E$ である。斜面に対して垂直している。深さは84cmで、西壁は直立、東壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、逆茂木を立てたと考えられる深さ7~10cmのピット3か所が検出された。

覆土 3層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

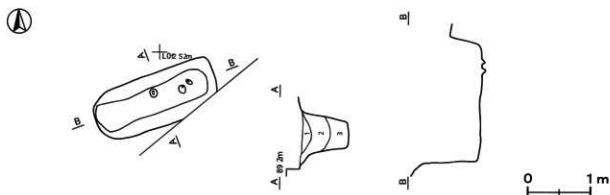
## 土層解説

1 雑褐色 ロームブロック少量

3 黒褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。



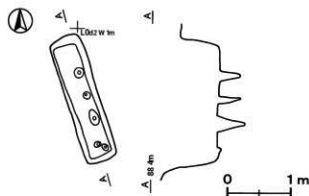
第13図 第6号陥し穴実測図

## 第7号陥し穴 (第14図)

位置 調査区東部のL0d1区、標高88mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第18号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.06m、短軸0.53mの長方形で、長軸方向は $N-14^{\circ}-W$ である。斜面に対して平行である。



第 14 図 第 7 号陥し穴実測図

深さは88cmで、壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦で、遊茂木を立てたと考えられる深さ36～47cmのピットが3か所、直線的に並ぶように検出された。

所見 時期は、遺構の形状から縄文時代と考えられる。

表 4 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	縄文時代 相対関係 考案
				長径 軸	短径 軸	深さ cm					
1	L 0 d1	N - S1 - E	不定形	174	093	102	直立外傾	平坦	自然	土師器片, 須恵器片	本跡 SD20
2	K 0 J2	N - 40 - W	楕円形	120	072	105	外傾	平坦	自然		本跡 SD 8
3	L 0 c5	N - 13 - E	楕円形	216	137	154	外傾	平坦	自然		
4	L 0 c4	N - 55 - E	不整形楕円形	150	088	160	外傾	平坦	自然		
5	L 0 c4	N - 13 - W	不定形	187	121	127	外傾	平坦	自然		SK35 本跡
6	L 0 f1	N - 69 - E	隅丸長方形	203	086	84	直立外傾	平坦	自然		
7	L 0 d1	N - 14 - W	長方形	206	053	88	外傾	平坦	-		本跡 SE18 20

### 3 弥生時代の遺構と遺物

当時代の竪穴住居跡10軒が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

#### 第 1 号住居跡 (第15・16図)

位置 調査区西部のL 6 g6区、標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第 4 号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側の壁は削平により残存していないため、規模や形状は明確ではない。確認された範囲は南北軸4.98m、東西軸3.75mで、平面形は隅丸長方形と推定される。主軸方向はN-21°-Wである。壁高は19～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、南部のP 5付近が硬化している。

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ30～64cmで、規模と形状から柱穴である。P 5は深さ22cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。

覆土 10層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然地積である。

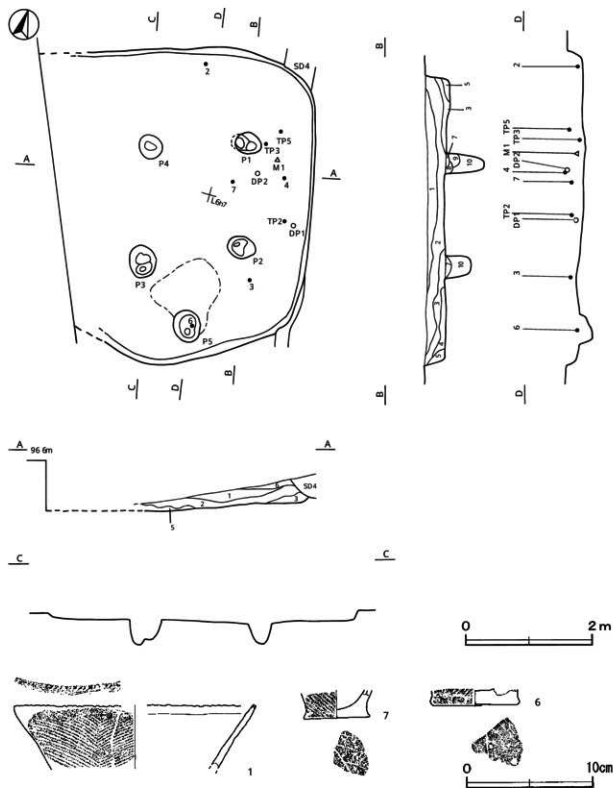
#### 土層解説

1 雑褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 雑褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	粘土ブロック中量, 焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック・甕酒バミス少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック中量, 甕酒バミス少量
5 褐色	ロームブロック中量	10 褐色	ロームブロック多量

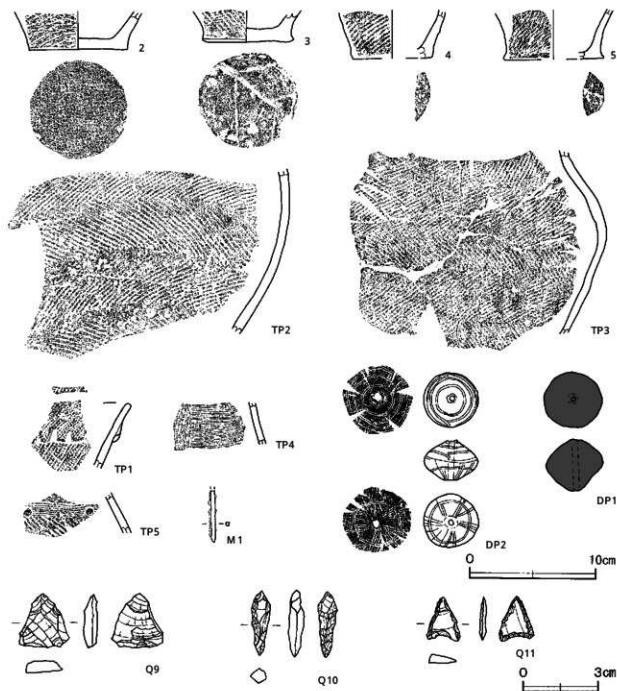
遺物出土状況 弥生土器片514点(壺)の他に、混入した須恵器片3点(坏), 土師器片3点(坏)が東部の覆

土上層から床面にかけて出土している。土器の多くが細片である。2は北壁際、3は南東コーナ部のそれぞれ覆土下層、TP2・TP5は東壁際の覆土上層からそれぞれ出土している。Q10・Q11は南西部の覆土上層から出土しており、流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第15図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第16図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 第15・16図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	文様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺	190	51	-	石英	黒褐色	普通	口縁部織文部残存 口縁部附加糸一種 付加2糸 織文を羽状に構成	南部屋土中	5%
2	弥生土器	壺	-	30	77	長石・石英・雲母	にびろ黄褐色	普通	胴部附加糸二種 付加2糸 織文施文 底部布目縷	北部屋下層	10%
3	弥生土器	壺	-	25	75	長石・石英	黒褐色	普通	胴部附加糸一種 付加2糸 織文を羽状に構成 底部木葉縷	南東部下層	10%
4	弥生土器	壺	-	38	62	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部附加糸一種 付加2糸 織文施文 底部布目縷	東部屋上層	5%
5	弥生土器	壺	-	39	78	長石・石英・雲母	オリーブ褐色	普通	胴部附加糸一種 付加2糸 織文施文 底部木葉縷	北西部屋土中	5%
6	弥生土器	壺	-	12	70	石英・雲母	にびろ黄褐色	普通	胴部附加糸一種 軸縷不明 織文施文 底部木葉縷	P5層土下層	5%
7	弥生土器	壺	-	22	50	石英・白色砂子・棕色粘土	橙	普通	付加糸一種 付加2糸 織文施文 底部木葉縷	東部屋上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺	-	52	-	長石・石英・雲母	にぶい焼	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加飾一種 付加2条 施文 口縁部下縁に縄文部押在 頸部付加飾一種 付加2条 縄文施文	南部覆土中	5%
TP2	弥生土器	壺	-	131	-	長石・石英・雲母	橙	普通	頸部付加飾一種 付加2条 縄文を羽状に構成	東部上層	10%
TP3	弥生土器	壺	-	145	-	長石・石英	橙	普通	頸部付加飾一種 付加2条 縄文を羽状に構成	東部下層	5%
TP4	弥生土器	壺	-	34	-	石英・赤色粘土	橙	普通	頸部押在工具 10本程度による縦状帯内に横状充填	南部上層	5% P L 16
TP5	弥生土器	壺	-	33	-	長石・石英	橙	普通	頸部下縁に横状施文施文ボタン状の粘着付 頸部付加飾一種 軸縁不明 縄文施文	北東部上層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	紡錘織	45	41	045	652	土 長石・ 雲母	外面に煤付着	東部下層	
DP2	紡錘織	43	32	045	497	土 長石・ 雲母	半籠竹留により同心円状に施文 裏面放射状に施文後円状に施文	東部上層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	石鏡	210	200	051	212	石英	側面に押圧剥離痕 未製部カ	南部上層	
Q 10	鏡	260	065	067	112	チャート	両面に剥離痕 両先端部摩滅	南部上層	P L 21
Q 11	石鏡	178	110	030	054	チャート	両側面に押圧剥離痕	南部上層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 1	不明鉄製品	41	03	04	128	鉄	棒状 断面方形	東部下層	

## 第2号住居跡（第17・18図）

**位置** 調査区西部のL7h1区、標高99mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 第8号墳、第1号土坑、第5号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が調査区域外のため規模や形状は明確ではない。確認された範囲は南北軸9.68m、東西軸4.66mで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-3°-Eである。壁高は24~46cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**ピット** 9か所。P1~P9は深さ12~28cmで、規則性が認められないため主柱穴は不明である。

**覆土** 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

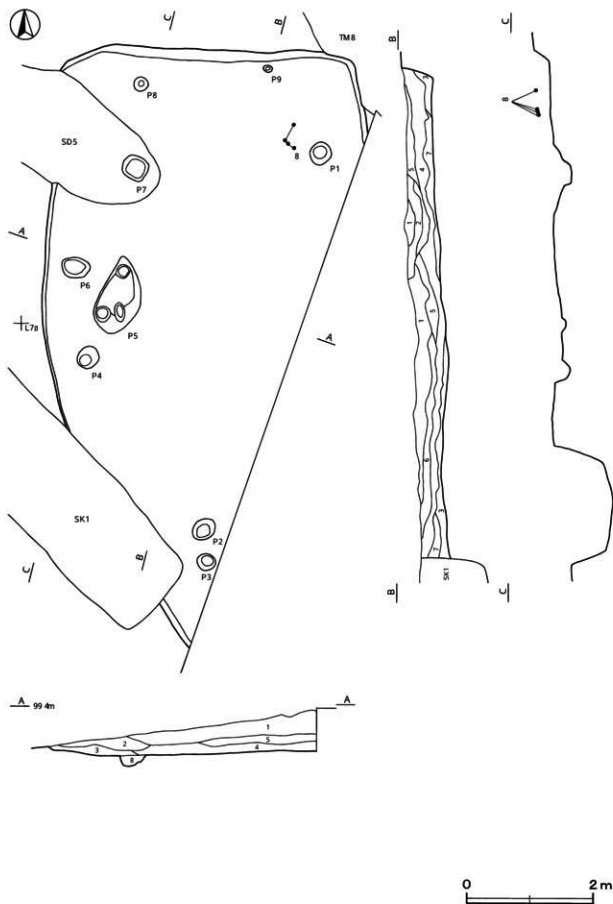
### 土層解説

- 1 黒 褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量
- 2 黒 褐色 ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス少量、焼土粒子
- 3 暗 褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土
- 4 暗 褐色 鹿沼バミス中量、ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 極 褐色 ローム粒子少量
- 6 黒 褐色 ローム粒子少量
- 7 暗 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量
- 8 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量

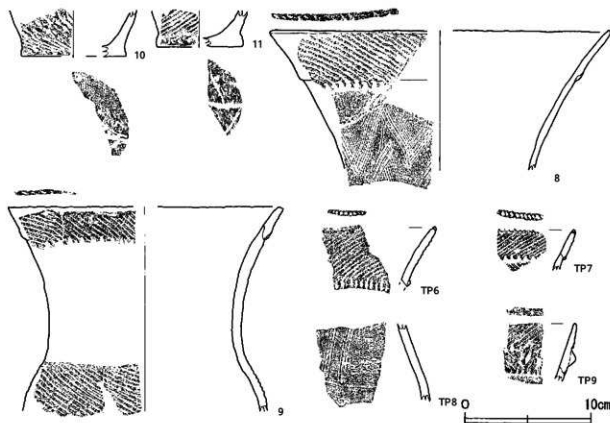
**遺物出土状況** 弥生土器片169点（壺）が東部の覆土上層から下層にかけて出土している。覆土上層からは土師器片3点（杯2、小皿1）も出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。8は北東部の覆土上層、10・TP6・TP7は北東部の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。出土土器が少ないため判断は難しいが、住居廃絶後に廃棄されたものと考えられる。今回の調査で確認された弥生時代の住居跡の中では、大形の長方形を呈しており、第4号住居跡と同じような形状をするものと思われる。





第17图 第2号住居跡実測图



第18図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表 第18図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
8	弥生土器	甕	268	111	-	長石・石英	にがみ赤褐色	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下端に縄文胴体押圧 胴部に櫛歯状工具 9本程度 による山形文施文	北東部上層	10%
9	弥生土器	甕	216	162	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下端に縄文胴体押圧 胴部施文 胴部付加条一種 付加2条 縄文施文	南部下層	10% P.L. 16
10	弥生土器	甕	-	37	83	長石・石英	褐	普通	胴部付加条一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	北東部下層	5%
11	弥生土器	甕	-	29	68	長石・石英・雲母	にがみ黄褐色	普通	胴部付加条一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	南東部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP6	弥生土器	甕	-	46	-	長石・石英	にがみ黄褐色	普通	口縁部ヘラ状工具による刻み 口縁部付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下端に縄文胴体押圧	北部下層	5%
TP7	弥生土器	甕	-	32	-	長石・石英	橙	普通	口縁部縄文胴体押圧 口縁部付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下端に縄文胴体押圧 胴部付加条一種 付加2条 縄文施文	北部下層	5%
TP8	弥生土器	甕	-	62	-	長石・石英	にがみ黄褐色	普通	胴部櫛歯状工具 5本程度 による縦区画内に波状文充填	南部下層	5% P.L. 16
TP9	弥生土器	甕	-	46	-	長石・石英・雲母	にがみ黄褐色	普通	口縁部ヘラ状工具による刻み 口縁部二段に縄文胴体押圧 胴部付加条一種 付加2条 縄文施文	南部下層	5%

## 第3号住居跡 (第19図)

位置 調査区西部のL6g8区、標高97mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第5号溝に掘り込まれている。

規模と形状 西側と南側の壁は削平により残存していないため、規模や形状は明確でない。確認された範囲は

長軸5.50m、短軸2.85mで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-27°-Eである。壁高は12~19cmで外傾している。

**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**炉** 長径90cm、短径57cmの楕円形状の範囲が火を受けて赤変している。掘り込みを持たない地床炉と考えられる。

**ピット** 2か所。P1・P2は深さ12cm・60cmで、規模と配置から支柱穴と考えられるが、この他にピットは確認できない。

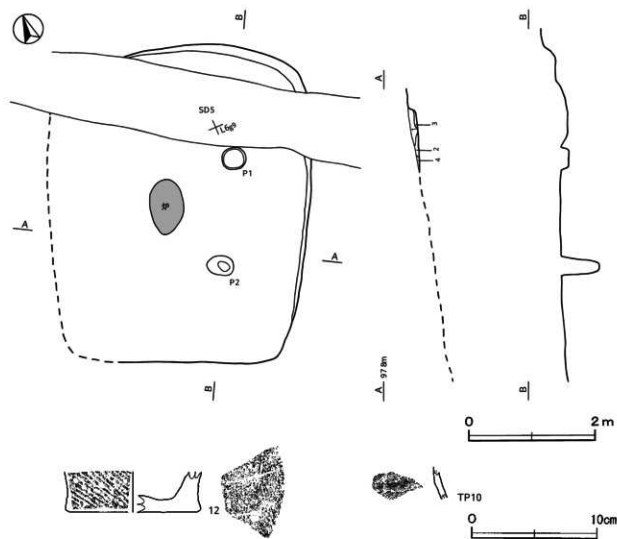
**覆土** 4層に分層される。堆積状況は、層厚が薄いため不明である

**土層解説**

- |      |                 |       |                 |
|------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量 |
| 2 褐色 | 鹿沼バミス少量         | 4 褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量  |

**遺物出土状況** 弥生土器片16点（壺），土師器片1点（坏）が出土している。床面が露出しているため、遺物はほとんどみられないが、土師器片は埋没途中に流れ込んだものと考えられる。12・TP10は北部の覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第19図 第3号住居跡・出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表 第19図

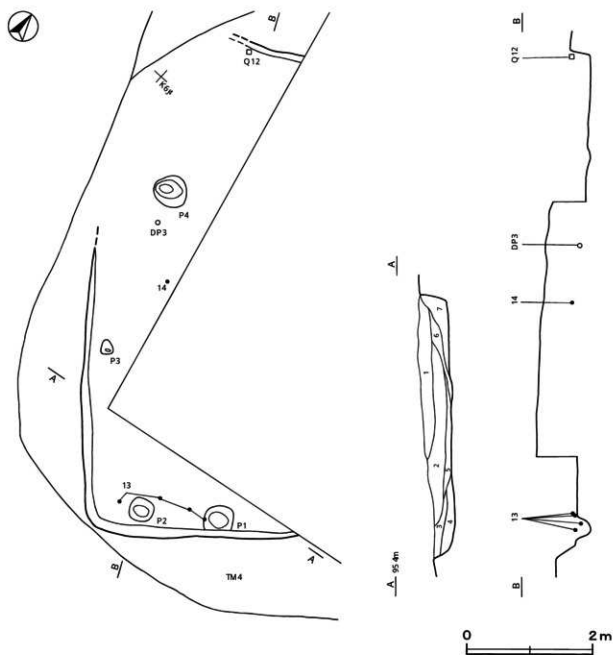
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
12	弥生土器	壺	-	32	100	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 底部木炭痕	北部覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP10	弥生土器	壺	-	25	-	石英	にぶい橙	普通	頸部縹緞状工具 8本彫線 による波状文施文	北部覆土中	5%

## 第4号住居跡 (第20・21図)

位置 調査区西部のK6J4区、標高94.5mほどの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第4号墳の墳丘下に構築されている。



第20図 第4号住居跡実測図

**規模と形状** 北東部が調査区域外に延びているため、規模や平面形は明確でない。確認された範囲は長軸7.86m、短軸は3.28mだけで、平面形は長方形と推定される。主軸方向はN-40°-Wである。壁高は30~40cmで、外傾している。

**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**ピット** 4か所。P1は深さ91cmで規模と配置から支柱穴と考えられる。P2~P4は深さ12~22cmで、性格は不明である。

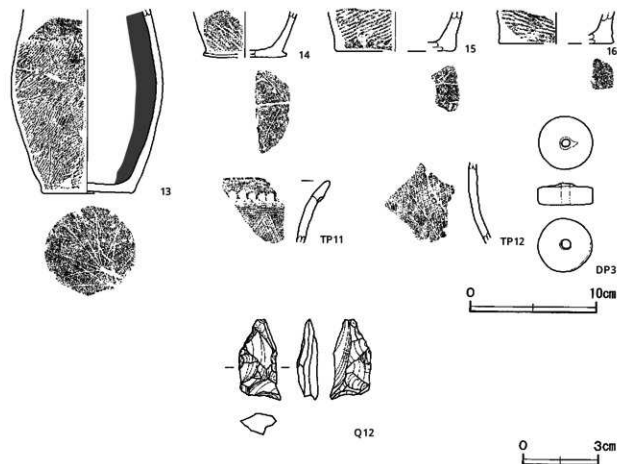
**覆土** 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

- |       |                  |       |                             |
|-------|------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量     | 5 黒色  | 炭屑バミス多量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色  | ローム粒子・焼土粒子微量     | 6 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量           |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量          | 7 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量         |
| 4 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |       |                             |

**遺物出土状況** 弥生土器片247点（壺）、土製品1点（紡錘車）が床面を中心に散在した状態で出土している。また、覆土上層からは陶器片1点（碗）、黒曜石の未製品が出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。13は南部覆土下層、14・DP3は、西壁付近の覆土下層から出土している。Q12は北壁際の覆土上層から出土しており、埋没途中に流れ込んだものと思われる。

**所見** 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第21図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表 第2図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
13	弥生土器	甕	-	146	72	長石・石英・雲母	に濃い褐色	普通	胴部彫文 胴部下腹に縄文帯体部押圧 胴部付加糸一種 付加2条 縄文彫文 底部木葉文	南部下層	50%
14	弥生土器	甕	-	37	65	長石・石英・雲母	褐色	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文彫文 底部木葉文	西部下層	5%
15	弥生土器	甕	-	31	94	長石・石英・雲母	明確	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文彫文 底部木葉文	覆土中	5%
16	弥生土器	甕	-	25	90	長石・石英・雲母	に濃い黄褐色	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文彫文 底部布目文	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP11	弥生土器	甕	-	50	-	長石・石英	褐色	普通	口縁部下腹に指押圧文 胴部に線刻状工具 8本横線による縄文彫文後山形文彫文	南部下層	5%
TP12	弥生土器	甕	-	64	-	長石・石英・雲母	に濃い褐色	普通	胴部へラ工具による格子文彫文	覆土中	5% P.L.16

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
DP3	銅線盤	43	17	07	35.8	土器・銅	丸形	ナゲ	西部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
Q12	未製品	32	17	0.81	310	黒曜石	押圧割縁	石器未製品か	北部上層	

## 第5号住居跡 (第22図)

**位置** 調査区西部のL6c7区、標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 第6号住居跡を掘り込み、第1号墳の墳丘下に構築されている。

**規模と形状** 長軸5.20m、短軸3.67mの長方形で、主軸方向はN-42°-Wである。壁高は11~30cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、南側の一部が踏み固められている。

**炉** はほぼ中央に付設されている。長径75cm、短径55cmの楕円形を呈し、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

## 伊土層解説

1 細粒赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量

**ビット** 5か所。P1~P4の深さは60~75cmで、規模と配置から主柱穴である。P5の性格は不明である。

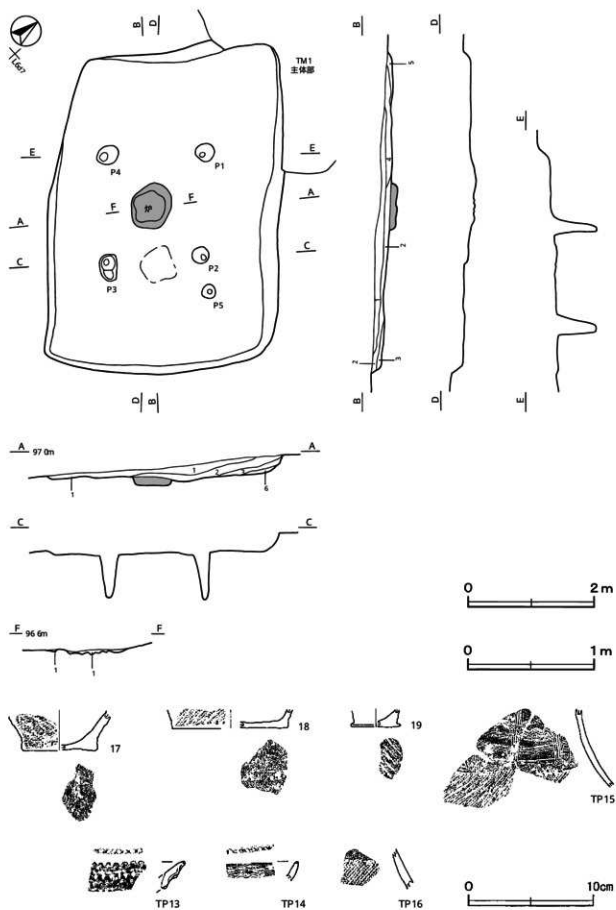
**覆土** 6層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
- 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 弥生土器片200点(壺)が出土している。土器のほとんどが細片で、全域に散在した状態で出土している。また、黒曜石が5点覆土上層から出土しており、埋設途中で流れ込んだものと思われる。17・18・TP13は西部、19・TP15・TP16は南部の覆土中からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期と考えられる。第6号住居跡と類似する土器がみられるが、重複関係から若干時期が下るものと考えられる。



第 22 图 第 5 号住居跡・出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 第2図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
17	弥生土器	甕	-	32	54	長石・石英・雲母・小礫	にぶい黄褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 底部無文	西部覆土中	5%
18	弥生土器	甕	-	15	90	長石・石英	にぶい褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 底部布目縷	西部覆土中	5%
19	弥生土器	甕	-	14	40	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	底部付加帯一種 付加2条 縄文施文	南部覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP13	弥生土器	甕	-	22	-	長石・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部縄文帯押圧 2段の複合口縁 口縁下部にへら状工具による刻痕	東部上層	5%
TP14	弥生土器	甕	-	15	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部へら状工具による刻痕 口縁部櫛歯状工具による縷文 による流注文	北部上層	5%
TP15	弥生土器	甕	-	62	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部櫛歯状工具 5本縷文 による縄文施文 屈区施文後流注文施文 胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文	南部上層	5%
TP16	弥生土器	甕	-	33	-	石英	にぶい褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文	南部上層	5% P.L. 16

## 第6号住居跡 (第23・24図)

位置 調査区西部のL 6 b7区で、標高95.5mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第5号住居に掘り込まれており、第1号墳の墳丘下に構築されている。

規模と形状 長軸4.40m、短軸4.00mの方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁高は12~60cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、枌を囲むように中央部が踏み固められている。

炉 はほぼ中央に付設されている。長径66cm、短径54cmの楕円形を呈し、床面を8cmほど掘り込んでいる地床炉である。枌床は火を受けて赤変硬化している。枌の中心部には、長さ30cmの石が1点確認された。石の表面は、火を受けて赤変しており、枌石として使用していたと考えられる。

## 炉土層解説

- 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量 3 黒褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子微量
- 褐色 ロームブロック多量

ピット 5か所。P 1~P 4の深さは67~78cmで、規模と配置から主柱穴である。P 5の深さは32cmで、南東壁際に位置していることから出入り口施設に伴うピットである。

覆土 11層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

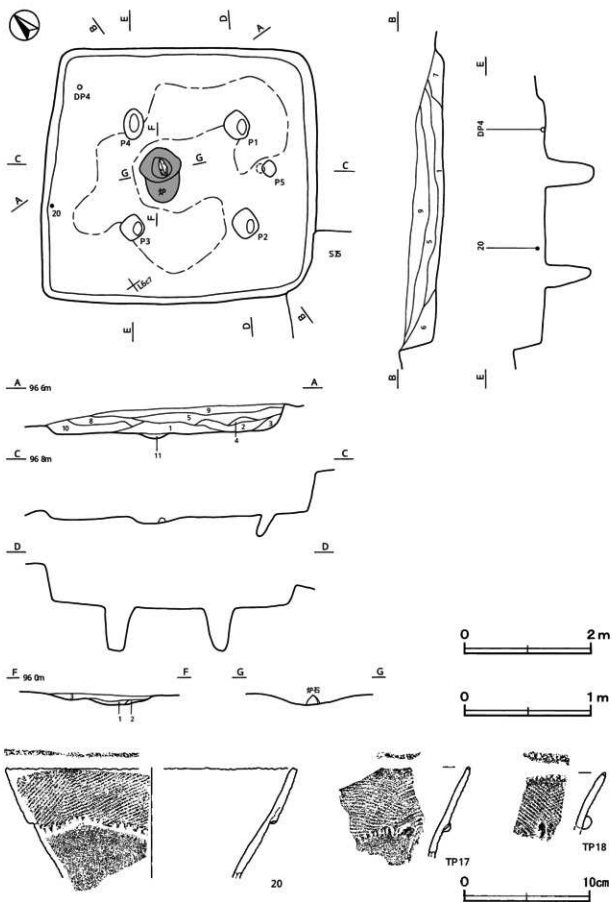
## 土層解説

- 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 7 黒褐色 ロームブロック少量
- 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 8 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量、焼土粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量 9 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量 10 黒褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量 11 明黄褐色 ロームブロック・焼土パミス中量
- 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

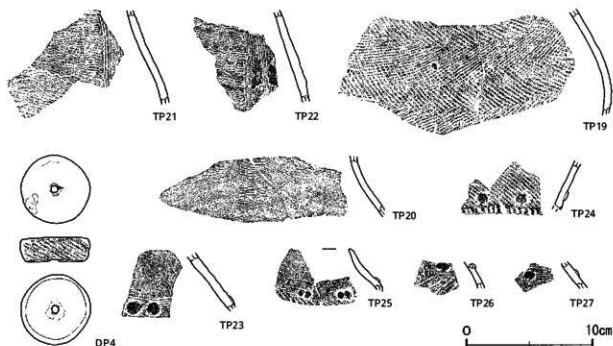
遺物出土状況 弥生土器片184点(壺)、土製品1点(紡錘車)が全域に散在した状態で出土している。20は西壁際の覆土下層、TP17・TP21・TP23は西部の覆土中、TP20・TP22・DP 4は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 第1号墳の墳丘部の中心で、主体部の下に位置しており、古墳の主軸とはほぼ同じ主軸である。時期は、出土土器から後期と考えられる。





第23图 第6号住居跡・出土遺物実測図



第24図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表 第23・24図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴		出土位置	備考
									口縁部	器体		
20	弥生土器	壺	228	87	-	長石・石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加糸一種 付加2条 縄文施文 口縁部下部に縄文部体押圧 器部縞縞状工具 9本縞縞 による縞区画内に縞状施文	西部下層	5% P.L.16	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴		出土位置	備考
									口縁部	器体		
TP17	弥生土器	壺	-	71	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加糸一種 付加2条 縄文を羽状に構成 口縁部下部に縄文部体押圧 器部縞縞状工具による縞状施文	西部覆土中	5%	
TP18	弥生土器	壺	-	44	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部縄文部体押圧 口縁部付加糸1種 付加2条 縄文を羽状に構成 貼履付	北部覆土中	5%	
TP19	弥生土器	壺	-	83	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文を羽状に構成	西部下層	5%	
TP20	弥生土器	壺	-	48	-	長石・石英・赤色粘土	明黄褐色	普通	器部縞縞状工具 7本縞縞 による縞状施文	東部下層	5% P.L.16	
TP21	弥生土器	壺	-	76	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	器部縞縞状工具 4本縞縞 による縞区画内に縞状施文	西部覆土中	5% P.L.16	
TP22	弥生土器	壺	-	73	-	長石・石英	明黄褐色	普通	器部縞縞状工具 4本縞縞 による縞区画内に縞状施文	東部覆土中	5%	
TP23	弥生土器	壺	-	47	-	長石・石英・赤色粘土	暗褐色	普通	器部下部に縞縞状工具 5本縞縞 による縞状施文 貼履付	西部覆土中	5% P.L.16	
TP24	弥生土器	壺	-	39	-	長石・石英・白色粘土	にぶい黄褐色	普通	口縁部付加糸一種 付加2条 縄文施文 貼履付 口縁部下部に縄文部体押圧 器部縞縞状工具 5本縞縞 による縞状施文 貼履付 胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文	東部覆土中	5%	
TP25	弥生土器	壺	-	33	-	長石・石英	明黄褐色	普通	器部下部に縞縞状工具による縞状施文 貼履付 胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文	北部覆土中	5% P.L.16	
TP26	弥生土器	壺	-	23	-	長石	黄褐色	普通	器部下部に縞縞状工具による縞状施文 貼履付 胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文	東部覆土中	5% P.L.16	
TP27	弥生土器	壺	-	21	-	長石	黄褐色	普通	器部下部に縞縞状工具 10本縞縞 による縞状施文 貼履付	北部覆土中	5% P.L.16	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
							断面	付加		
DP4	胡蝶網	54	19	05	69.6	土質石質・赤色粘土	断面に付加糸一種 付加2条 縄文施文		北部下層	

## 第7号住居跡 (第25・26図)

位置 調査区中央部のM8c7区で、標高106mほどの丘陵南斜面部に位置している。

規模と形状 長軸4.82m、短軸4.10mの長方形で、主軸方向はN-62°-Wである。壁高は26~54cmで、外傾

して立ち上がっている。

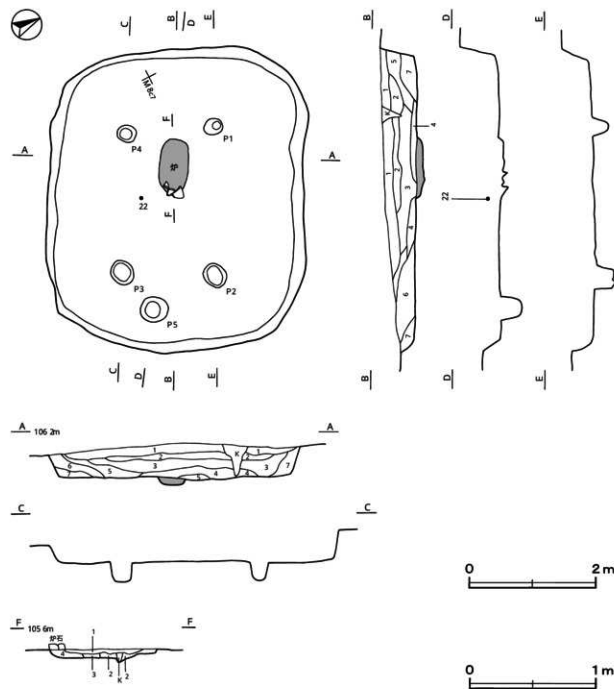
**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**炉** ほぼ中央に付設されている。長径90cm、短径46cmの楕円形を呈し、床面を7cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉床は火を受けて赤変硬化している。

**伊土層解説**

- |        |                       |        |                       |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量     | 3 黒褐色  | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 |

**ピット** 5か所。P1～P4の深さは26～31cmで、規模と配置から支柱穴である。P5の深さは32cmで、東壁際に位置している出入り口施設に伴うピットである。



第25図 第7号住居跡実測図

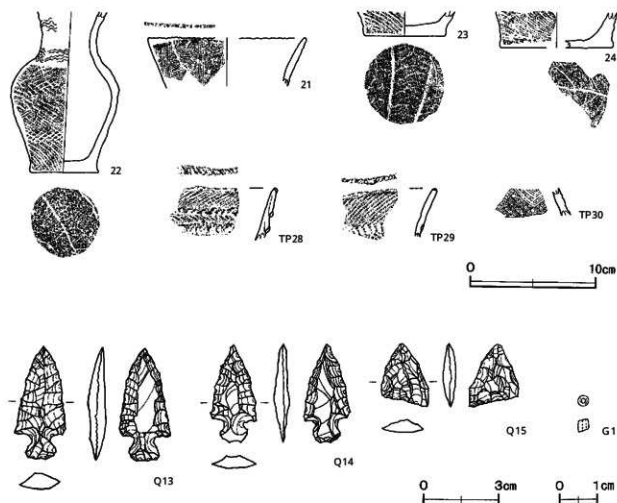
**覆土** 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

- |        |                |        |                  |
|--------|----------------|--------|------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子微量        | 5 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 極暗褐色 | ローム粒子微量        | 6 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色  | ロームブロック少量      | 7 暗褐色  | ロームブロック中量        |
| 4 暗褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量 |        |                  |

**遺物出土状況** 弥生土器片337点（壺）、石器3点（石鏃）、ガラス製品1点（小玉）が出土している。土器は全域から散在した状態で出土している。22は中央部の覆土下層から完形に近い状態で横位で出土している。Q13・Q14は北部の覆土上層、Q15は西部の上層からそれぞれ出土している。G1は、住居の覆土下層を1mmメッシュの篩にかけたところ1点のみ確認できた。

**所見** 完形に近い弥生土器が出土している唯一の住居跡である。アメリカ式石鏃やガラス玉なども出土している。弥生時代の住居跡のうち最も標高の高い場所に位置しており、他の住居とは出土遺物の様相が異なっている。時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第26図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表 第26図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
21	弥生土器	壺	12.3	3.8	-	長石・石英	にじみ焼	普通	口唇部へラ状工具による刻み、口縁部磨面状工具による磨面による磨面帯内に充填痕状	覆土中	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
22	弥生土器	壺	-	127	55	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部埋藏状工具による波状文 胴部付加条一種 付加2条 縄文を帯状に構成 底部木炭層	中央部下層	80% P L 16
23	弥生土器	壺	-	19	64	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	胴部付加条一種 付加2条 縄文施文 底部木炭層	東部覆土中	10%
24	弥生土器	壺	-	28	88	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部付加条一種 付加2条 縄文施文 底部木炭層	東部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP28	弥生土器	壺	-	41	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部へう状工具による刻み 2段の複合口縁付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下面に縄文彫刻押圧	北部上層	5%
TP29	弥生土器	壺	-	44	-	長石	にぶい黄褐色	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加条一種 付加2条 縄文施文 口縁部下面に縄文彫刻押圧	東部覆土中	5%
TP30	弥生土器	壺	-	21	-	石英・雲母・白色粒子	明赤褐色	普通	胴部埋藏状工具による山形文施文 竹篋による円形刻突文施文	南部覆土中	5% P L 16

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 13	石鏝	450	210	075	474	チャート	両側面に押圧刻線層 アメリカ式石鏝	北部上層	P L 21
Q 14	石鏝	390	185	065	262	チャート	両側面に押圧刻線層 アメリカ式石鏝	北部上層	P L 21
Q 15	石鏝	250	190	053	204	黒曜石	両側面に押圧刻線層	西部上層	P L 21

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G1	ガラス小玉	029	031	010	004	ガラス	水色	覆土下層	

## 第8号住居跡 (第27・28図)

**位置** 調査区中央部のL710区で、標高105mほどの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 第1号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸6.10m、短軸5.41mの長方形で、主軸方向はN-0°である。壁高は8～59cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**炉** 中央部の床面に長径70cm、短径50cmの楕円形状の範囲に焼土が確認されていることから、この位置に炉が付設されていたと考えられる。

### 伊土層解説

1 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量

**ビット** 5か所。P1～P4の深さは48～70cmで、規模と配置から主柱穴である。P5の深さは32cmで、西壁際に位置している出入り口施設に伴うビットである。

**覆土** 6層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

### 土層解説

1 暗褐色 色 ローム粒子微量

2 黒褐色 色 ローム粒子微量

3 暗褐色 色 ローム粒子・鹿沼バミス微量

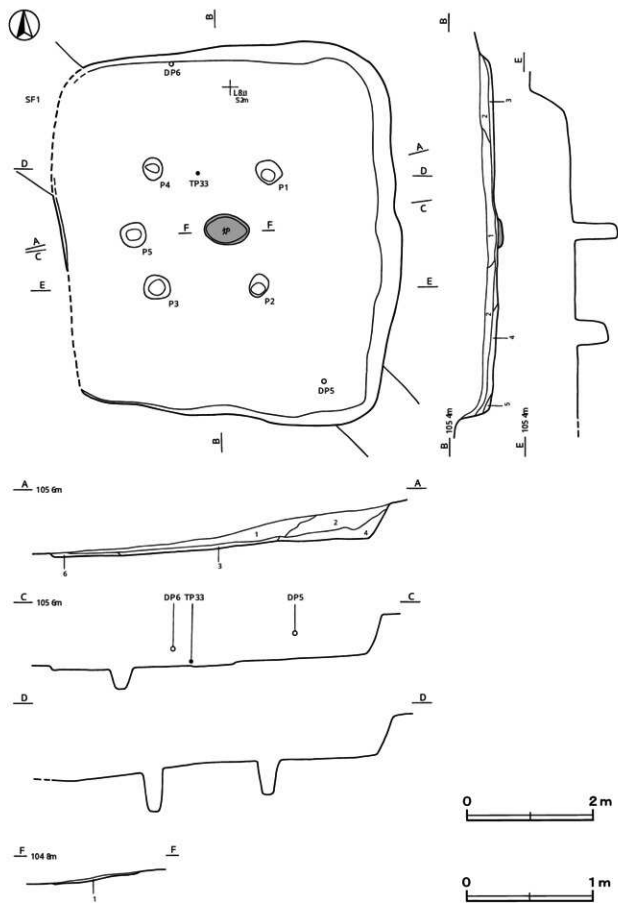
4 褐色 色 ローム粒子少量

5 暗褐色 色 ローム粒子少量、鹿沼バミス微量

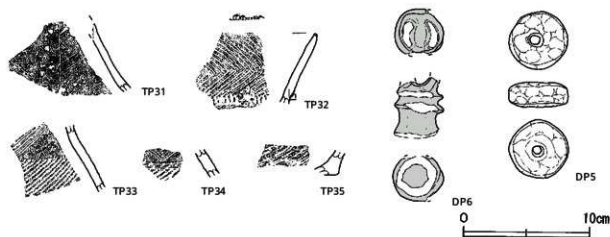
6 にぶい褐色 色 鹿沼バミス中量、ローム粒子少量

**遺物出土状況** 弥生土器片295点(壺)が出土している。また、上層から土師器片4点(杯)、須恵器片1点(壺)、土製品1点(不明)が出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。TP31は北部の覆土下層、TP33は中央部の覆土下層から出土している。DP6は、赤彩が施されている土製品で、北壁際の覆土上層から出土していることから流れ込んだ可能性も考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第 27 图 第 8 号住居跡実測图



第 28 図 第 8 号住居跡出土遺物実測図

第 8 号住居跡出土遺物観察表 第 28 図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP31	弥生土器	甕	-	54	-	長石・石英	明赤褐	普通	胴部へラ工具による縦区画内に格子文及び斜線文施文	北部下層	5% P L 16
TP32	弥生土器	甕	-	55	-	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部縄文施文 口縁部付加条一種 付加2条 縄文を帯状に横施 口縁部下縁に縄文帯体伸延 胎	南部上層	5%
TP33	弥生土器	甕	-	54	-	石英・雲母	明赤褐	普通	胴部縦溝状工具による山形文施文 胴部付加条一種 付加2条 縄文施文	中央部下層	5% P L 16
TP34	弥生土器	甕	-	23	-	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部縦溝状工具による山形文施文 胴部下縁に横施文施文 胴部付加条一種 付加2条 縄文施文	北部下層	5% P L 16
TP35	弥生土器	甕	-	20	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部付加条一種 付加2条 縄文施文 底部縄文施文	北部上層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP5	紡錘器	47	20	10	46.2	土 長石・石英	同・側面指線痕	南東部上層	

番号	種別	長さ	幅	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP6	不明土製品	48	39	557	土 長石・石英	全面赤彩 上部二又 下部凹み	北部上層	

## 第 9 号住居跡 (第 29・30 図)

位置 調査区中央部の L 7 h 区、標高 103m の丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 第 1 号道路に掘り込まれている。

規模と形状 西部が削平により残存していないため、規模や形状が明確ではない。確認された範囲は、長軸 6.0m、短軸 4.5m で、平面形は長方形と推定される。主軸方向は N-12°-W と推測される。壁高は 10~33cm で、外傾して立ち上がっている。

床 全体的に西に傾斜しており軟弱である。

炉 はほぼ中央の床面に長径 70cm、短径 60cm の楕円形状の範囲に焼土が確認されていることから、この位置に炉が付設されていたと考えられる。

## 伊土層解説

1 灰・褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・黒面バミス微 2 黒 褐色 色 黒面バミス少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ビット 4 か所。P 1~P 4 の深さは 6~64cm で、規模と配置から主柱穴である。

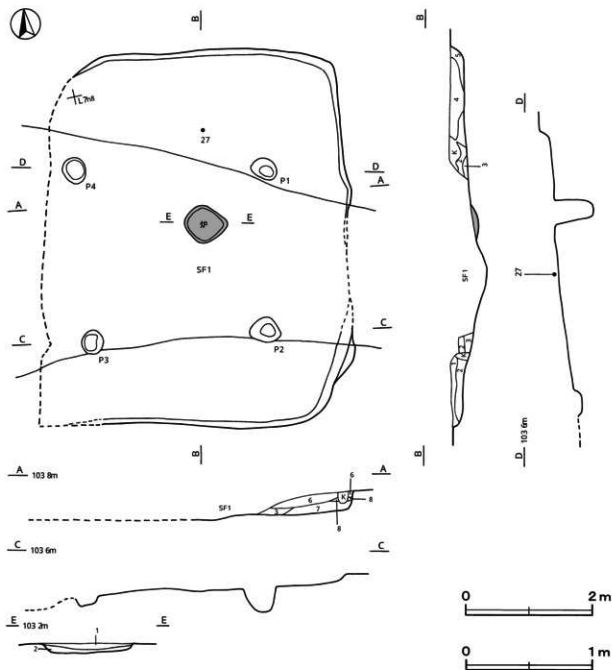
**覆土** 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

- |       |                |       |               |
|-------|----------------|-------|---------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量        | 5 暗褐色 | ローム粒子少量       |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭屑バミス微量  | 6 黒褐色 | ローム粒子少量       |
| 3 灰褐色 | ローム粒子・炭屑バミス少量  | 7 黒褐色 | ローム粒子・炭屑バミス少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子・炭屑バミス少量 |

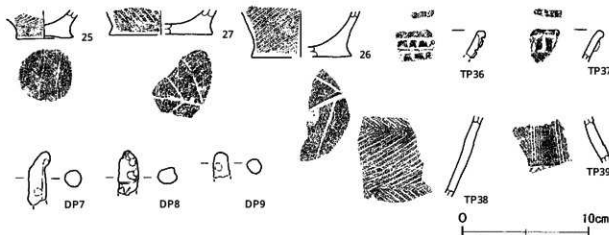
**遺物出土状況** 弥生土器片348点(壺)が全域に散在した状態で出土している。また土師器片4点(坏2, 甕2), 土製品3点(不明)も出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。26は北西部の覆土上層, 27・TP37・TP38・DP7・DP8は北部の覆土下層, TP36は南部の覆土下層, DP9は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。



第29図 第9号住居跡実測図





第30図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表 第31図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
25	弥生土器	壺	-	22	42	長石・礫	にがしめ	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	北西部上層	5%
26	弥生土器	壺	-	37	78	長石・石英・雲母・赤色粒子	にがしめ	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	北西部上層	5%
27	弥生土器	壺	-	19	80	長石・石英・雲母	にがしめ	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	北部下層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP36	弥生土器	壺	-	22	-	石英・雲母	にがしめ	普通	口唇部縄文施文 口縁部縄文施文後へつ状工具による隆起付出	南部下層	5%
TP37	弥生土器	壺	-	25	-	長石・石英	にがしめ	普通	口唇部縄文部体施文 折り返し口縁部に隆起部付後遺緒列のみ	北部下層	5%
TP38	弥生土器	壺	-	65	-	長石・石英・赤色粒子	明黄緑	普通	胴部付加糸一種 付加2条 縄文を羽状に構成	北部下層	5%
TP39	弥生土器	壺	-	36	-	長石・石英	にがしめ	普通	胴部隆起状工具による縦区画内に格子文充填	北部下層	5% P.L.16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	不明土製品	42	14	13	77	土・長石・雲母	指跡痕 壺形土製品か	北部下層	
DP8	不明土製品	35	16	13	65	土・長石・雲母	指跡痕 壺形土製品か	北部下層	
DP9	不明土製品	20	13	11	31	土・長石・雲母	指跡痕 壺形土製品か	南部上層	

## 第10号住居跡 (第31・32図)

位置 調査区中央部のL 8 g8区、標高105mの丘陵北東斜面部に位置している。

規模と形状 長軸6.08m、短軸3.94mの長方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は11~74cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、P 5北側の一部が踏み固められている。

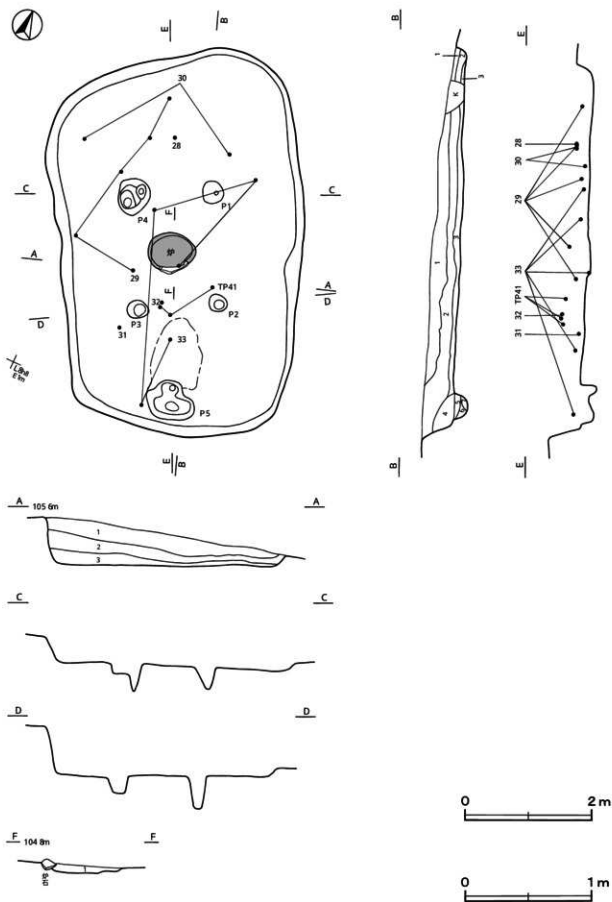
炉 中央に付設されている。長径78cm、短径62cmの楕円形で、床面を15cmほど掘り込んでいる地床炉である。

## 炉土層解説

1 黒 褐色 黄沼パミス少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ビット 5か所。P 1~P 4の深さは27~50cmで、規模と配置から主柱穴である。P 5は深さ26cmで、南東壁際の位置にあることから出入り口施設に伴うビットである。

覆土 7層に分層される。南西から土が流入した様相を示している自然堆積である。



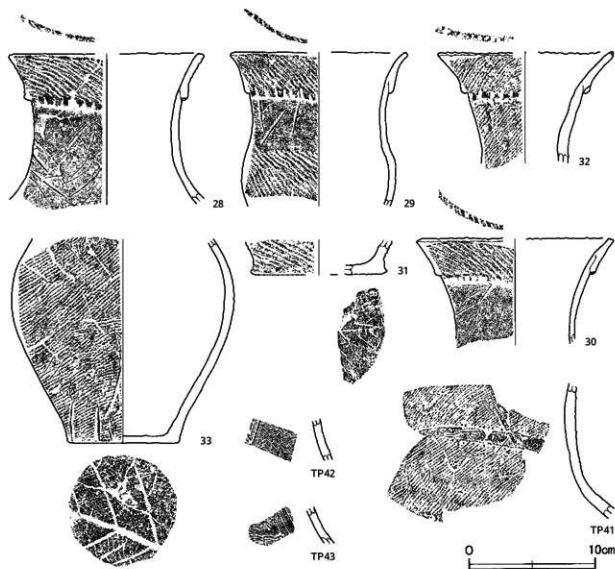
第 31 图 第 10 号住居跡実測図

## 土層解説

- |       |                 |       |                 |
|-------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子微量         | 5 暗褐色 | ローム粒子少量・鹿沼パミス微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量   | 6 黒褐色 | ローム粒子少量・鹿沼パミス微量 |
| 3 黒褐色 | 鹿沼パミス少量・ローム粒子微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量   |
| 4 黒褐色 | 鹿沼パミス微量         |       |                 |

遺物出土状況 弥生土器片241点(壺)が、全域に散在した状態で出土している。また、上層から土師器片17点(甕)も出土しており、埋没途中に流れ込んだものと考えられる。28・30は北部の覆土下層、31・TP43は南部の覆土下層、32は中央部の覆土上層、TP42は南部の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から後期中葉と考えられる。調査区内では北東の斜面部に構築された住居である。



第32図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 第32図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
28	弥生土器	壺	146	119	-	長石・石英・雲母・燧石	にがみ黄褐色	普通	口唇部縄文施文 口縁部付加糸一種 付加2条 縄文施文 口縁部下縁に縄文器体押圧 器部縦溝状 工具7本押痕による山形文施文 器部付加糸一種 付加糸 縄文施文	北部下層	1% P.L.16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
29	弥生土器	壺	137	122	-	長石・石英	にぶい赤褐色	普通	口縁部縄文様体施文 口縁部付加帯一種 付加2条 縄文施文 口縁部下縁に手衝作痕による縄文文 頸部縞帯状工具 5本縞帯による波状文 胴部付加帯一種 付加条 縄文施文	北東部下層	39% P.L.16
30	弥生土器	壺	150	84	-	長石・石英・雲母 小磯	明褐色	普通	口縁部縄文文 口縁部付加帯一種 付加1条 縄文施文 口縁部下縁に縄文文作痕 頸部縞帯状工具 4本縞帯による波状文	北部下層	5% P.L.16
31	弥生土器	壺	-	28	10.8	長石・石英・雲母・ 白色粘土	明赤褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	南部下層	5%
32	弥生土器	壺	139	87	-	長石・石英・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部縄文押印 口縁部付加帯一種 付加2条 縄文施文 口縁部下縁に縄文様体押印 胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文	中央部上層	5%
33	弥生土器	壺	-	162	87	長石・石英	褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 底部木葉痕	覆土下層	50% P.L.16

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP41	弥生土器	壺	-	107	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文 胴部付加帯一種 付加2条 縄文施文	中央部上層	5%
TP42	弥生土器	壺	-	33	-	石英	にぶい褐色	普通	頸部縞帯状工具による縞帯内に波状文充填	南部床面	5%
TP43	弥生土器	壺	-	29	-	石英	にぶい褐色	普通	頸部縞帯状工具による縞帯内に波状文充填	南部下層	5%

表5 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸 m 短軸 m	壁高 cm	坪面	内部構造				埋土	主な出土遺物	時期	遺 構 関係 古 新	
							主軸穴	出入 口 ピット	竈	貯蔵穴					
1	L 6 g6	N - 21 - W	隅丸 長方形	498 375	19~35	平坦	-	4	1	-	-	自然	弥生土器	後期	本跡 SD4
2	L 7 h1	N - 3 - E	長方形	968 466	24~46	平坦	-	-	-	9	-	自然	弥生土器	後期	本跡 TM 85K1SD5
3	L 6 g8	N - 27 - E	長方形	550 410	12~19	平坦	-	-	-	2	炉1	不明	弥生土器	後期	本跡 SD5
4	K 6 j1	N - 40 - W	長方形	786 328	30~40	平坦	-	1	-	3	-	自然	弥生土器	後期	本跡 TM4
5	L 6 c7	N - 42 - W	長方形	520 367	11~30	平坦	-	4	-	1	炉1	自然	弥生土器	後期	55% 本跡 TM1
6	L 6 b7	N - 50 - W	方形	440 400	12~60	平坦	-	4	1	-	炉1	自然	弥生土器	後期	本跡 53% TM1
7	M 8 c7	N - 62 - W	長方形	482 410	26~54	平坦	-	4	1	-	炉1	自然	弥生土器	後期	
8	L 7 d	N - 0	長方形	610 541	8~59	平坦	-	4	1	-	炉1	自然	弥生土器	後期	本跡 SF1
9	L 7 h8	N - 12 - W	長方形	600 450	10~33	傾斜	-	4	-	-	炉1	自然	弥生土器	後期	本跡 SF1
10	L 8 g8	N - 29 - W	長方形	608 394	11~74	平坦	-	4	1	-	炉1	自然	弥生土器	後期	

## 4 古墳時代の遺構と遺物

当時代の古墳9基、石棺3基、墓坑3基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

## 第1号墳 (第33・34図)

位置 調査区西部のL 6 b7区を中心とした、標高96mの丘陵西斜面部に位置している。

重複関係 墳丘下から第5・6号住居跡が確認され、周溝が第4号墳、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 周溝の北部が調査区域外に延びているため規模は明確ではないが、墳丘や周溝の形状から方墳と推定され、墳丘は一辺12~14mで、周溝外縁を含む一辺16~17mである。

墳丘 表土の下に旧表土が確認されたが、盛土の痕跡は認められない。旧表土面は緩やかに傾斜しており、西に向かって傾斜する斜面を利用して墳丘としたと考えられる。

周溝 上幅1.8~2.6m、下幅0.3~0.9m、深さ0.5~0.9mである。北側は上幅が広く、緩やかなU字状の断面形である。南側は上幅が狭く、U字状の断面形で、北側より20cmほど深く掘り込まれている。北側と南側では

1.5mほどの標高差があり、斜面部の地形を意識して掘り込んだものと考えられる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

#### 墳丘・周溝土層解説

1 黒褐色	ローム粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量	11 黒褐色	ロームブロック微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量	12 黒褐色	ロームブロック少量
5 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	13 褐色	ロームブロック多量
6 暗褐色	ローム粒子少量	14 褐色	ロームブロック多量、鹿沼パミス微量
7 褐色	ロームブロック中量	15 暗黄褐色	鹿沼パミス多量、ロームブロック中量
8 暗褐色	ロームブロック少量	16 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

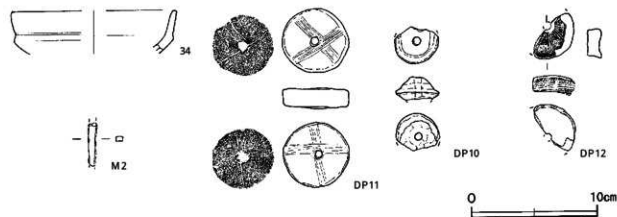
**埋葬施設** 墳頂部に位置する、木棺直葬である。掘り方は長径5.2m、短径3.4mの不整楕円形で、長径方向はN-48°-Wである。旧表土を深さ0.5m掘り込んでいる。掘り方内の外周部には、鹿沼土を多く含む黒褐色土や暗褐色土を埋め込み、その内側の長軸3.7m、短軸0.8mの長方形に暗褐色土が堆積しており、この部分に木棺が安置されたと推定できる。断面形より、割竹形木棺と考えられる。第1～6層は木棺部、第7～13層は掘り方の土層である。

#### 主体部土層解説

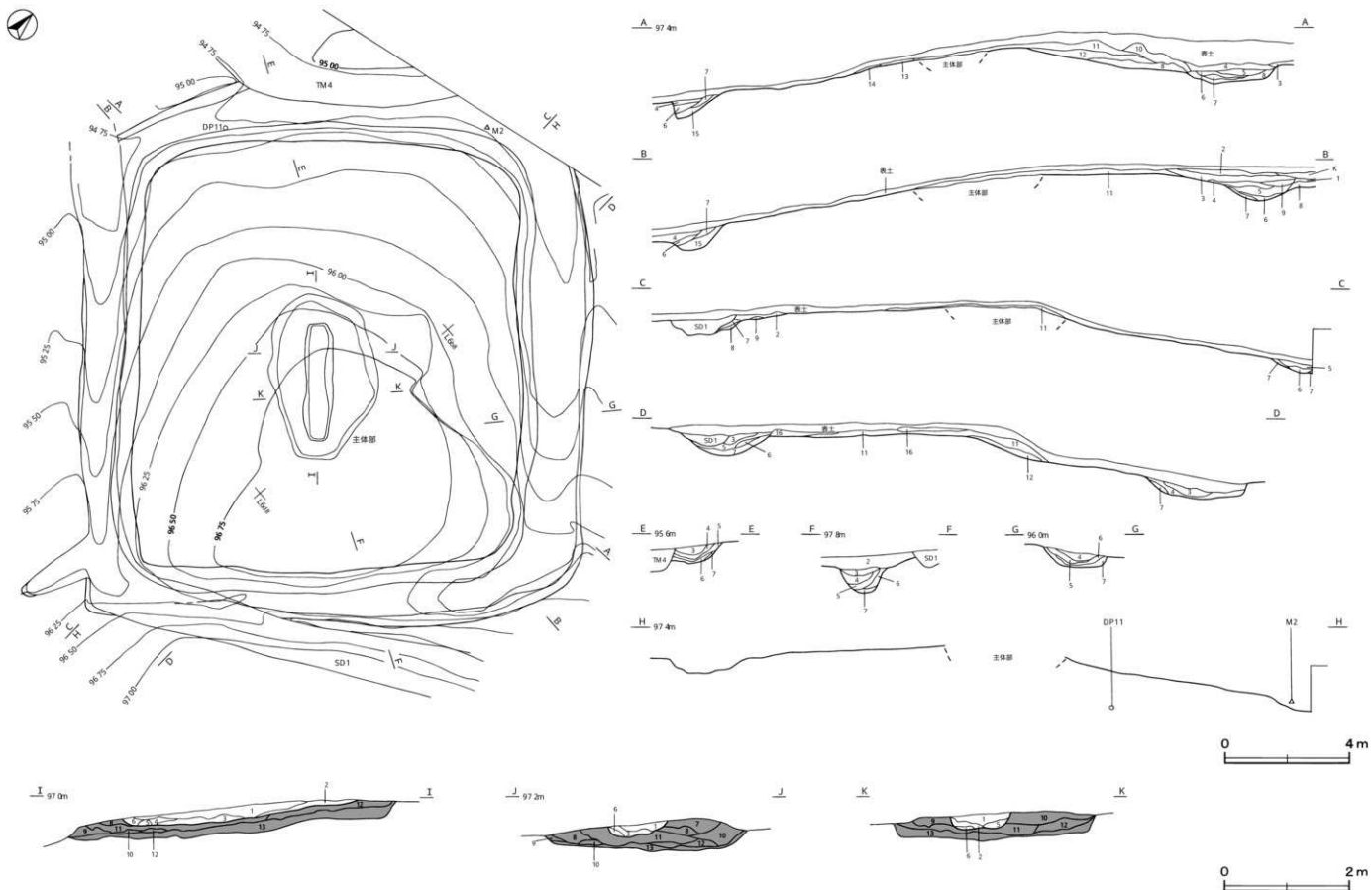
1 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子少量	8 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量
2 暗褐色	ロームブロック少量	9 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス中量
3 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	10 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
4 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス微量	11 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
5 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	12 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量
6 暗褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量	13 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼パミス微量
7 褐色	ロームブロック中量、鹿沼パミス少量		

**遺物出土状況** 周溝から、土師器1点(杯)、土師器片11点(杯)、須恵器片15点(杯3、蓋1、甕11)のほか、埋設途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片79点が出土している。また混入したと思われる土製品3点(紡錘車)、金属製品1点(鎌)、瓦片2点が出土している。34は北東部の覆土上層、DP10は南東部の覆土上層、DP11は西部の覆土下層、DP12は西部の覆土上層、M2は北部の覆土下層からそれぞれ出土している。34は第4号墳に掘り込まれた部分の近くから出土しているため、第4号墳に伴う可能性が高い。

**所見** 今回調査された中で唯一の方墳である。主体部は木棺直葬であり、鹿沼層を掘り込んだ際に出た鹿沼土を木棺の周囲に埋めて柵としている鹿沼土柵である。南東に隣接する第2号墳は、本墳の周溝を避けるように周溝を極端に狭くして構築している。また、このことは南西側に位置している第3号墳にも共通しており、本墳の周溝を避けるように構築しているため、周溝の形状が若干ゆがんでいる。これらのことから本墳がこの2基の古墳より前に構築されており、古墳として認識されていたことがうかがえる。よって本墳の時期は、重複関係から5世紀中葉と考えられる。



第33図 第1号墳出土遺物実測図



第34图 第1号墳実測图

## 第1号墳周溝出土遺物観察表 第33図

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
34	土師器	杯	130	31	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通	口縁部内・外面横子デ 体部外面へウケリ	内面	周溝北東部 上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP10	紡錘車	35	18	06	119	土 長石・石英・雲母	にぶい褐色	周溝南東部 上層	
DP11	紡錘車	52	17	07	567	土 長石・石英	両面ハケ状工具による施文 にぶい褐色	周溝西部 下層	P L 21
DP12	紡錘車	44	15	05	104	土 長石・石英	上面側面横線状工具 3本線画による施文	周溝西部 上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 2	皿	34	05	04	26	鉄	茎	周溝北部 下層	

## 第2号墳 (第35・36区)

**位置** 調査区西部のL640区を中心とした、標高98mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 周溝の一部が第1号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 周溝の一部が掘り込まれているため規模や形状が明確ではない。墳丘や周溝の形状から円墳と推定されるが、歪んだ形状を呈している。墳丘径約8m、周溝外縁径約10mである。

**墳丘** 表土の下に旧表土が確認されているが、盛土をした痕跡は認められない。

**周溝** 上幅は1号墳のある北西部が0.4mと狭く、その他の部分は0.6~1.3mである。下幅約0.2~0.7m、深さ0.2~0.4mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

## 周溝土層解説

- |        |                |       |                 |
|--------|----------------|-------|-----------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量       |
| 2 極暗褐色 | ロームブロック少量      | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭沼バミス少量 |

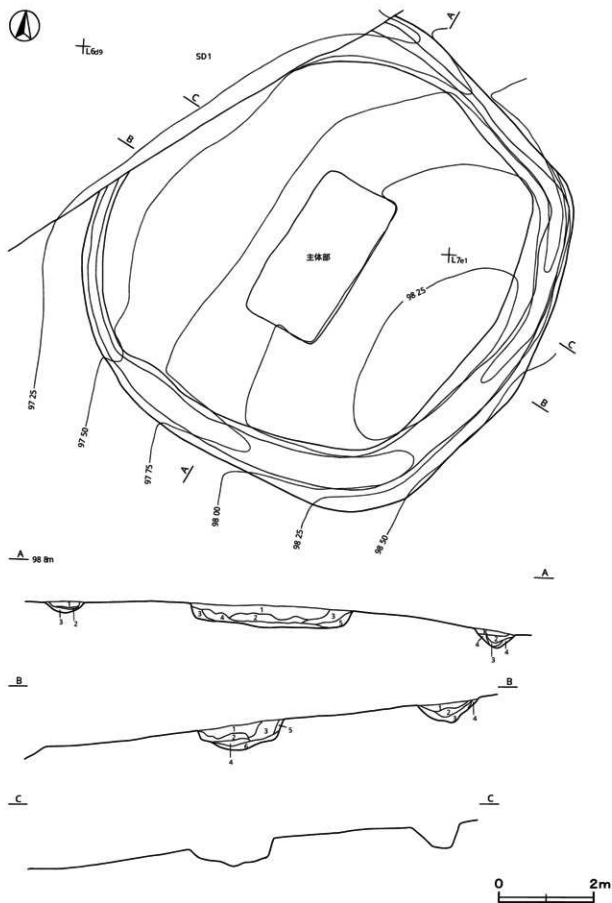
**埋葬施設** 中央部に位置する木棺直葬である。掘り方は長軸3.4m、短軸1.8mの長方形で、長軸方向はN-29°-Eである。旧表土を深さ0.5m掘り込んでいる。底面の中央部に楕円形にわずかにくぼむ部分のみられ、土層からは判断できないが、木棺が安置された痕跡と考えられる。断面や平面形より割竹形木棺と推定される。この底面からM3が鋒を南西に向けた状態で出土しており、副葬品として棺内に納められたものと考えられる。土層は人為堆積であるが、崩落したような様相も呈している。

## 主体部土層解説

- |       |                   |        |                   |
|-------|-------------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭沼バミス少量 | 4 極暗褐色 | ロームブロック少量         |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量         | 5 褐色   | ロームブロック多量         |
| 3 褐色  | ロームブロック中量、炭沼バミス少量 | 6 褐色   | ロームブロック中量、炭沼バミス微量 |

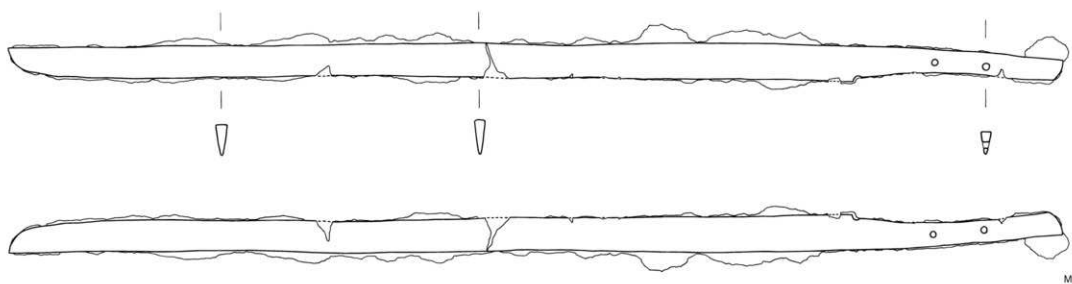
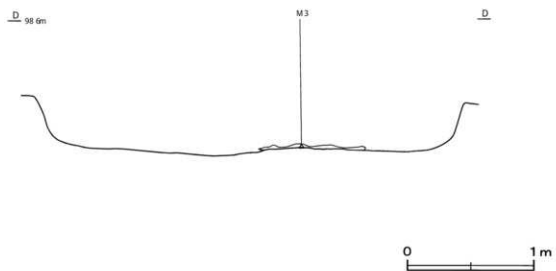
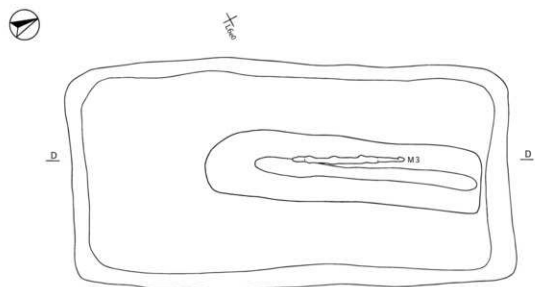
**遺物出土状況** 周溝から、土師器片2点(甕)の他に、埋没途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片73点が出土している。

**所見** 周溝は主体部の掘り方より深く掘り込まれている。他の古墳と比べて小規模な周溝であるが、主体部の規模は大きい。遺物は、主体部から出土した副葬品の直刀のみで、周溝内から伴う遺物は確認されなかった。時期は、5世紀後葉から6世紀代と考えられる。



第 35 图 第 2 号墳実測图





第36図 第2号墳・出土遺物実測図

## 第2号墳主体部出土遺物観察表 第36図

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M3	蓋刀	φ36	27	09	540	鉄	片断 目釘孔2ヶ所	主体部底面	P L 21

## 第3号墳 (第37・38図)

**位置** 調査区西部のL6e5区を中心とした、標高95mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 周溝の一部が第4号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 西側が削平により残存していないため、確認できるのは東側の一部分のみで、規模や形状は明確でない。墳丘や周溝の形状から円墳で、墳丘径約11m、周溝外縁径約18mと推定される。

**墳丘** 表土下は地山であり、盛土は認められない。

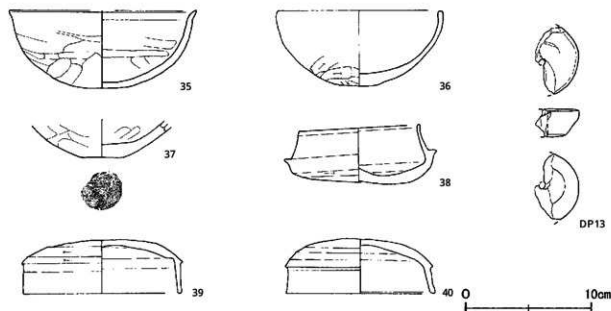
**周溝** 上幅2.1~3.6m、下幅1.0~1.6m、深さ0.3~0.9mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側からは、黒褐色土や暗褐色土が流入しているため、本来は盛土して墳丘を構築していたものと考えられる。

## 周溝土層解説

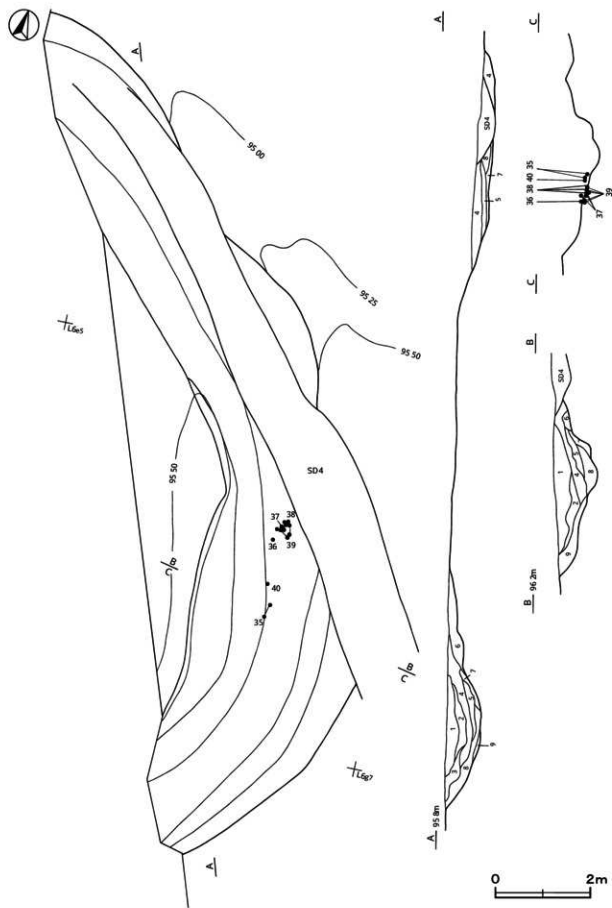
- |       |                        |       |                   |
|-------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量                | 6 暗褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量    | 7 褐色  | ロームブロック・鹿沼パミス少量   |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量           | 8 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量   |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量         | 9 褐色  | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | 鹿沼パミス少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |       |                   |

**遺物出土状況** 周溝から、土師器3点(杯)、土師器片84点(杯61, 甕12, 埴4), 須恵器3点(杯1, 蓋2), 須恵器片6点(杯1, 甕5)のほかに、埋設途中に流れ込んだと考えられる弥生土器259点、土製品1点(紡錘車)が出土している。35~40は東部の覆土下層からまとまって出土している。

**所見** 南東に位置する第1号墳を避けるように構築されている。主体部は、丘陵という地形から墳丘の封土が流出したことによって失われたものと推測される。時期は、出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第37図 第3号墳出土遺物実測図



第 38 图 第 3 号墳実測図

## 第3号墳出土遺物観察表 第37図

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
35	土師器	環	148	62	-	長石・雲母	明赤焼	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部外面へラ削り 内面ナデ	西溝東部 下層	80%
36	土師器	環	130	59	-	長石・石英・雲母	明赤焼	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部外面手持ちへラ削り	西溝東部 下層	70%
37	土師器	環	-	30	32	長石・雲母	浅黄	普通	体部外面手持ちへラ削り 内面ミガキ	西溝東部 下層	20%
38	須恵器	環	94	49	-	緑・黒色粒子	灰	普通	口縁部内・外面口クロナデ 体部外面回転へラ削り 内面口クロナデ	西溝東部 下層	99% P L 17
39	須恵器	蓋	126	43	-	長石・石英	灰	普通	内・外面口クロナデ 天井部回転へラ削り	西溝東部 下層	100% P L 19
40	須恵器	蓋	118	43	-	長石・雲母・黒色 粒子	灰	普通	内・外面口クロナデ 天井部回転へラ削り	西溝東部 下層	99% P L 19

番号	器種	径	厚さ	孔径	断面	材質	特徴	出土位置	備考
DP13	紡錘車	60	22	05	35.3	土・長石・ 石英	同部・朝顔ナデ	西溝南部 上層	

## 第4号墳 (第39・40図)

**位置** 調査区西部のL 6 J4区を中心とした、標高95mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 墳丘下から第4号住居跡が確認され、周溝の一部は第1号墳を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北から東側は調査区域外に延びており、西側は削平により残存していない。確認できたのは南側の一部分だけで、規模や形状は明確でないが、周溝が弧状に確認できたことから墳丘径約9.5mの円墳と推定される。

**墳丘** 表土下は地山であり、盛土は認められない。

**周溝** 上幅約1.2～2.0m、下幅約0.4～1.2m、深さ0.2～0.8mである。緩やかなU字状の断面形をしている。

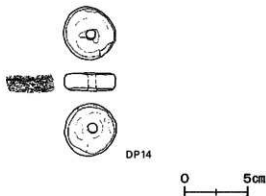
覆土は土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側から多く流入しているため、本来は盛土をして墳丘を構築していたものと考えられる。

## 周溝土層解説

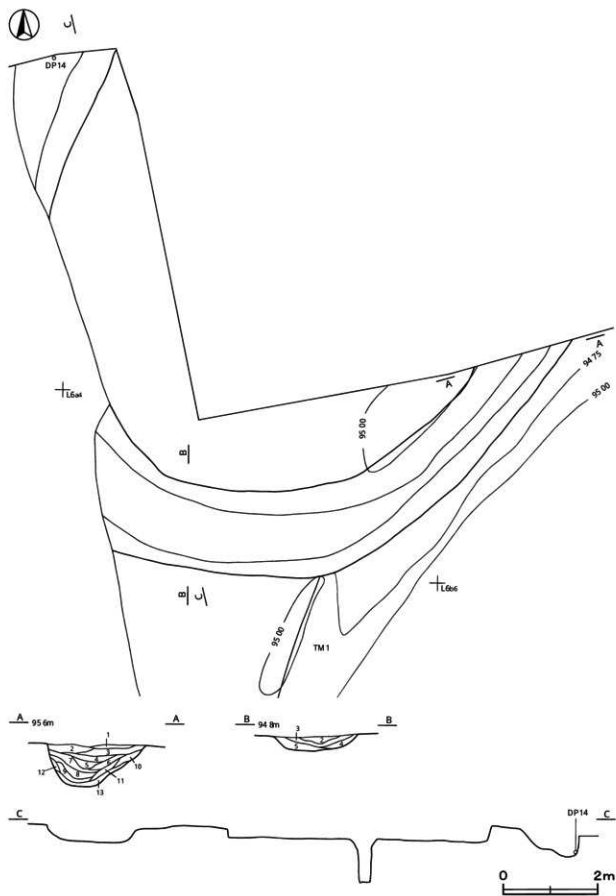
- |        |                  |         |                       |
|--------|------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色  | ローム粒子少量          | 8 暗褐色   | ロームブロック少量、焼土粒子少量      |
| 2 暗褐色  | ロームブロック少量        | 9 暗褐色   | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黒暗褐色 | ローム粒子少量          | 10 黒褐色  | ローム粒子・炭化粒子少量          |
| 4 黒褐色  | ロームブロック少量        | 11 黒暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子少量        |
| 5 黒暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量   | 12 褐色   | ロームブロック少量             |
| 6 黒褐色  | ロームブロック・焼土粒子少量   | 13 褐色   | ロームブロック多量、炭化粒子少量      |
| 7 暗褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子少量 |         |                       |

**遺物出土状況** 周溝から、土師器3点(甕)、土師器片3点(環)、須恵器片2点(蓋、甕)の他に、埋没途中に流れ込んだと考えられる弥生土器片143点、土製品1点(紡錘車)が出土している。この他に混入した陶器片も1点出土している。DP14は周溝北部の覆土下層から出土しており、墳丘下の第4号住居跡に伴う遺物の可能性がある。

**所見** 第1号墳の周溝を掘り込んでいることから、第1号墳と本墳とは時期差が認められる。第1号墳と重複している部分から6世紀前半の土師器杯片が出土しており、本墳に伴う土器と思われる。時期は6世紀前半と考えられる。



第39図 第4号墳出土遺物実測図



第40图 第4号填实测图

第4号墳周溝出土遺物観察表 第39図

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DFM	胡蝶形	42	14	07	27g	土・石灰・雲母	南朝制瓦文様	周溝北部 下層	

## 第5号墳 (第41図)

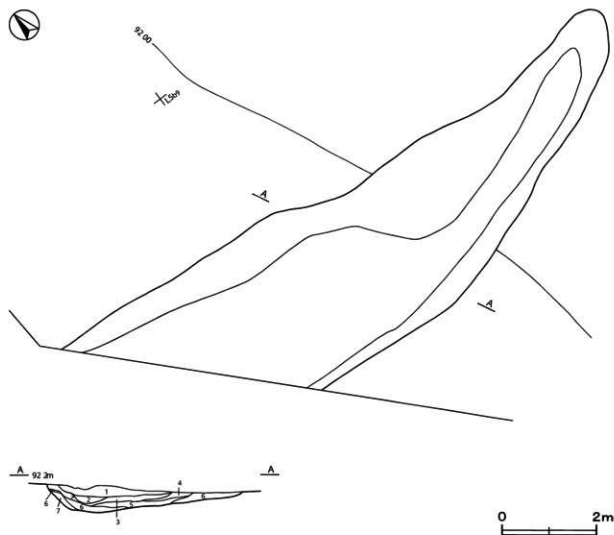
**位置** 調査区西部のL5e8区を中心とした、標高92mの丘陵西斜面部に位置している。

**規模と形状** 西部が調査区域外に延びているため、南側周溝の一部が確認された。

**周溝** 上幅1.3~3.6m、下幅0.5~2.9m、深さ0.5mである。緩やかなU字状の断面形である。緩やかに弧を描いていることから、円形に周溝が巡っていたものと推定される。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

## 周溝土層解説

- |        |                     |       |                  |
|--------|---------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色  | ローム粒子少量             | 6 暗褐色 | ロームブロック少量        |
| 3 黒褐色  | ロームブロック微量           | 7 褐色  | ロームブロック中量        |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子少量             |       |                  |



第41図 第5号墳実測図

**遺物出土状況** 周溝から、土師器片14点(杯4, 甕10), 須恵器片1点(杯)が、出土している。また、埋没途中に流れ込んだ弥生土器片105点が出土している。いずれも細片のため図示できない。

**所見** 古墳時代後期と思われる土師器の破片が出土していることから、時期は5世紀後半と考えられる。

### 第6号墳(第42・43図)

**位置** 調査区中央部のM840区を中心とし、標高104mの丘陵東斜面部に位置している。

**規模と形状** 南側の一部が削平により残存していないため規模は明確ではないが、墳丘や周溝の形状から墳丘径約13m、周溝外縁径約18.6mの円墳と推定される。

**墳丘** 旧表土上に黒褐色土や暗褐色土を盛土して構築している。高さは約0.2mである。

**周溝** 上幅2.0～3.6m、下幅0.8～2.0m、深さ0.5～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。墳丘側からの明瞭な土の流入がみられないため、低墳丘であったと推定される。

#### 墳丘・周溝土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	15 黒褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、鹿沼パミス・細砂微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	16 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・鹿沼パミス微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	17 黒褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量	18 暗褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
5 暗褐色	ローム粒子少量	19 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
6 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	20 黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
7 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	21 暗褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量
8 黒褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子微量	22 暗褐色	ロームブロック微量
9 暗褐色	鹿沼パミス・粘土粒子少量、ローム粒子微量	23 黒褐色	ロームブロック微量
10 褐色	鹿沼パミス・粘土粒子中量、ローム粒子少量	24 黒褐色	ローム粒子少量
11 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、鹿沼パミス・細砂微量	25 褐色	ロームブロック微量
12 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	26 褐色	鹿沼パミス少量、ロームブロック微量
13 黒褐色	ロームブロック中量		
14 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、鹿沼パミス微量		

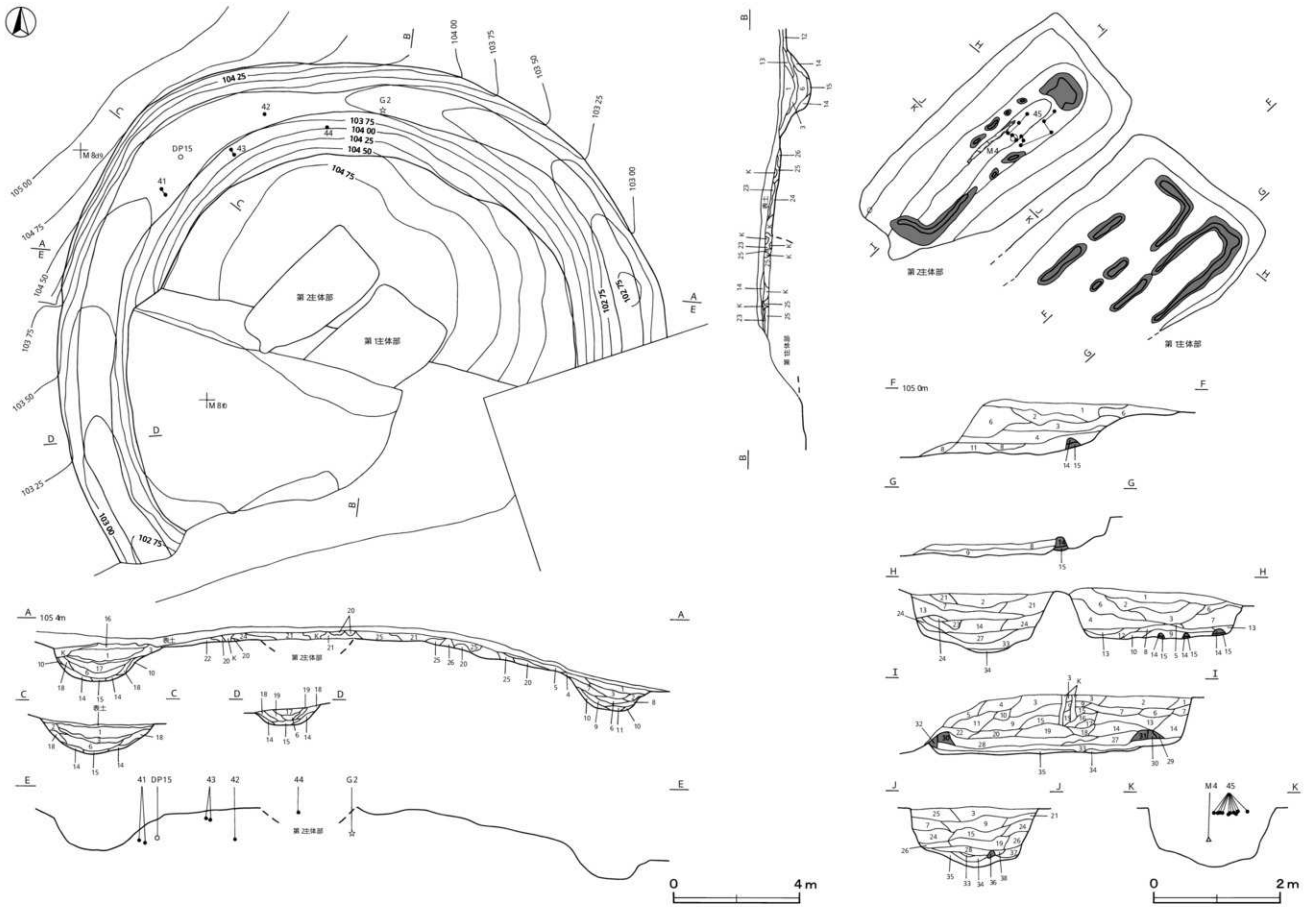
**埋葬施設** 墳頂部から2基の埋葬施設が確認できた。これらは0.3mの間隔で東西に並んでおり、東側を第1主体部、西側を第2主体部とした。

#### ア 第1主体部

南側が削平により失われているため規模は明確でないが、残存する長軸3.0m、短軸2.6mの長方形の掘り方内に2基の木棺が安置されていた状況が確認できた。長軸方向は $N-46^{\circ}-E$ である。深さ0.7mの底面は、隅丸長方形状に浅く掘りこぼめられている。青灰色の粘土が残存しており、この他に粘土が敷かれているような痕跡もなく覆土中にも粘土は多く含まれていないため、木棺を固定するための粘土と考えられる。覆土は一度に埋めた様相を示しているため、2基の木棺を同時に埋葬したものと考えられる。断面形より割竹形木棺と考えられる。

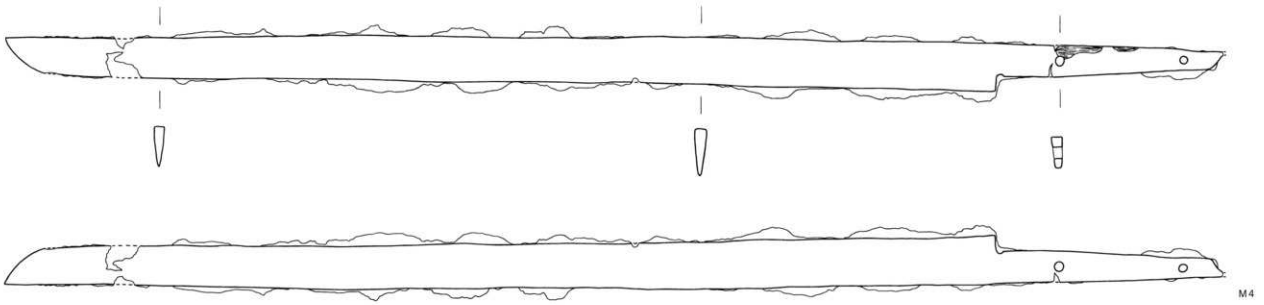
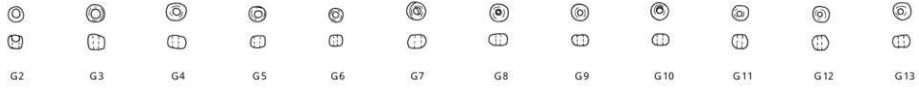
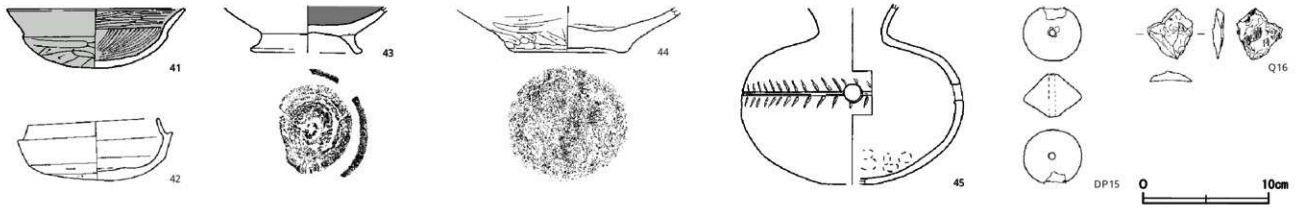
#### イ 第2主体部

木棺直葬である。掘り方は、南側が削平により残存していないため規模は明確でないが、長軸4.6m、短軸2.1mの長方形と推定され、深さは1mで、断面形は逆台形である。長軸方向は $N-45^{\circ}-E$ である。底面には長径4.1m、短径0.8m、深さ0.1mの楕円形状に掘り込みがみられ、断面形は緩やかなU字状である。この楕円形状の掘り込みの周りには青灰色の粘土が残存しており、楕円形状の掘り込みに木棺を置き、固定したものと考えられる。断面形より割竹形木棺と考えられる。



第42图 第6号墳実測图





第43図 第6号墳出土遺物実測図

## 第1・2主体部土層解説

1	灰 褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
2	黒 褐色	ローム粒子微量
3	暗 褐色	ローム粒子微量
4	黒 褐色	ローム粒子少量
5	にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
6	黒 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
7	黒 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
8	灰 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
9	暗 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
10	黒 褐色	ローム粒子中量
11	黒 褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
12	灰 褐色	鹿沼パミス少量、ローム粒子微量
13	黒 褐色	鹿沼パミス少量、ローム粒子微量
14	灰 褐色	ローム粒子微量
15	暗 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
16	黒 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
17	暗 褐色	鹿沼パミス少量
18	黒 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
19	黒 褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量

20	灰 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
21	褐 褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量
22	にぶい褐色	ロームブロック・鹿沼パミス少量
23	にぶい褐色	ローム粒子微量
24	黒 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス微量
25	にぶい褐色	ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
26	黒 褐色	ロームブロック微量
27	暗 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス・粘土粒子微量
28	暗 褐色	ロームブロック・鹿沼パミス・粘土粒子微量
29	暗 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
30	暗 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
31	褐 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量
32	褐 褐色	粘土粒子多量、ローム粒子少量
33	にぶい褐色	ローム粒子少量
34	褐 褐色	ローム粒子中量、鹿沼パミス少量
35	明 褐色	ローム粒子中量
36	褐 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量
37	褐 褐色	ロームブロック少量
38	褐 褐色	ローム粒子少量

**遺物出土状況** 周溝から、土師器3点(杯、高台付杯、甕)、土師器片115点(杯5、甕110)、須恵器1点(杯)、ガラス製品1点(小玉)のほかに、埋没途中に流れ込んだものと考えられる縄文土器片29点、弥生土器片385点、土製品1点(紡錘車)、石器1点(剥片)が出土している。41が正位、42が割れた状態で北部底面から、43・44は北部上層、G2は北部下層からそれぞれ出土している。43は9世紀以降の土器で、この時期に周溝が埋まりきっていないことがわかる。この遺物は東斜面に位置する平安時代の集落に伴うものと思われる。G2は主体部内から出土しているガラス小玉と様相が異なり、第7号住居跡から出土しているものと類似しているため弥生時代のものと思われる。第2主体部からは、須恵器1点(甕)、金属製品1点(直刀)、ガラス製品11点(小玉)が出土している。45が割れた状態で上層から、M4は楕円形状の掘り込み内から、鋒を南西に向けてそれぞれ出土している。G3～G13は、覆土下層を1mmメッシュの篩にかけて確認できた。出土している直刀とガラス小玉は副葬品と考えられる。

**所見** 主体部は墳頂部に2か所存在している。第1主体部には2人の被葬者が同時に埋葬されており、第2主体部は隣接するように位置していることから、縁故関係のあったものが被葬者であると考えられる。削平された部分の断面に、第2主体部が第1主体部を掘り込んでいるのが確認されており、墳丘の中央部に第1主体部が位置していることから、第1主体部が先に構築されたものと考えられる。副葬品は第2主体部のみから確認されている。第2主体部の上層から甕が破片で出土しており、破片や出土状況が人為的に破砕された様相を示していることから、埋葬に関する祭祀が行われたものと考えられる。周溝底面から須恵器杯である42が正位で、土師器杯である41が出土していることから、それらは据え置いていた可能性がある。時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。

## 第6号墳周溝出土遺物観察表 第43図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
41	土師器	杯	139	50	-	長石・雲母	明赤褐色	普通	口縁部外面縁ナデ 内面ミガキ 体部外面ヘラ削り	周溝北部底面	90% PL17
42	須恵器	杯	105	50	-	長石・雲母	灰	良好	口縁部内・外面口クロナデ 体部外面回転ヘラ削り 内面口クロナデ	周溝北部底面	100% PL17 自然葬
43	土師器	高台付杯	-	38	82	長石・雲母	にぶい褐色	普通	内面ミガキ 底部回転ヘラ切り後ナデ 高台削り付	周溝北部上層	20%
44	土師器	甕	-	36	95	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	内面ナデ 扉端 外面ヘラ削り 底部一方向のヘラ削り後ナデ 輪縁みぞ	周溝北部上層	10%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP15	紡錘車	46	39	05	41.5	土・長石・雲母	螺旋玉形	周溝北部下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	銅片	405	360	0.70	835	水晶	剥離痕	西溝北部 下層	

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G 2	ガラス小玉	0.31	0.35	0.20	0.04	ガラス	水色 銅と鉛で着色カ	西溝北部 下層	P L 21

## 第6号墳第2主体部出土遺物観察表 第43図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
45	須恵器	皿	-	143	-	長石・石黄・雲母	灰	良好	内・外面口クロナデ 外周欠線文 刺突文	第2主体部 上層	50% PL20

番号	器種	長さ	径	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
G 3	ガラス小玉	0.37	0.42	0.20	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 4	ガラス小玉	0.31	0.48	0.15	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 5	ガラス小玉	0.24	0.42	0.20	0.06	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 6	ガラス小玉	0.28	0.38	0.10	0.06	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 7	ガラス小玉	0.34	0.47	0.20	0.11	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 8	ガラス小玉	0.31	0.46	0.17	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 9	ガラス小玉	0.29	0.46	0.15	0.08	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 10	ガラス小玉	0.30	0.47	0.15	0.09	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 11	ガラス小玉	0.37	0.40	0.12	0.10	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 12	ガラス小玉	0.37	0.41	0.12	0.09	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21
G 13	ガラス小玉	0.33	0.48	0.16	0.08	ガラス	濃青 鉛ガラスカ	第2主体部下層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 4	鍔刀	96.8	3.8	1.0	836	鉄	片開 目釘孔2ヶ所	第2主体部下層	P L 21

## 第7号墳(第44・45図)

位置 調査区中央部のL 8 h5区を中心とした、最も標高の高い標高107mの丘陵頂上部に位置している。

重複関係 第16号土坑に周溝の一部が掘り込まれている。

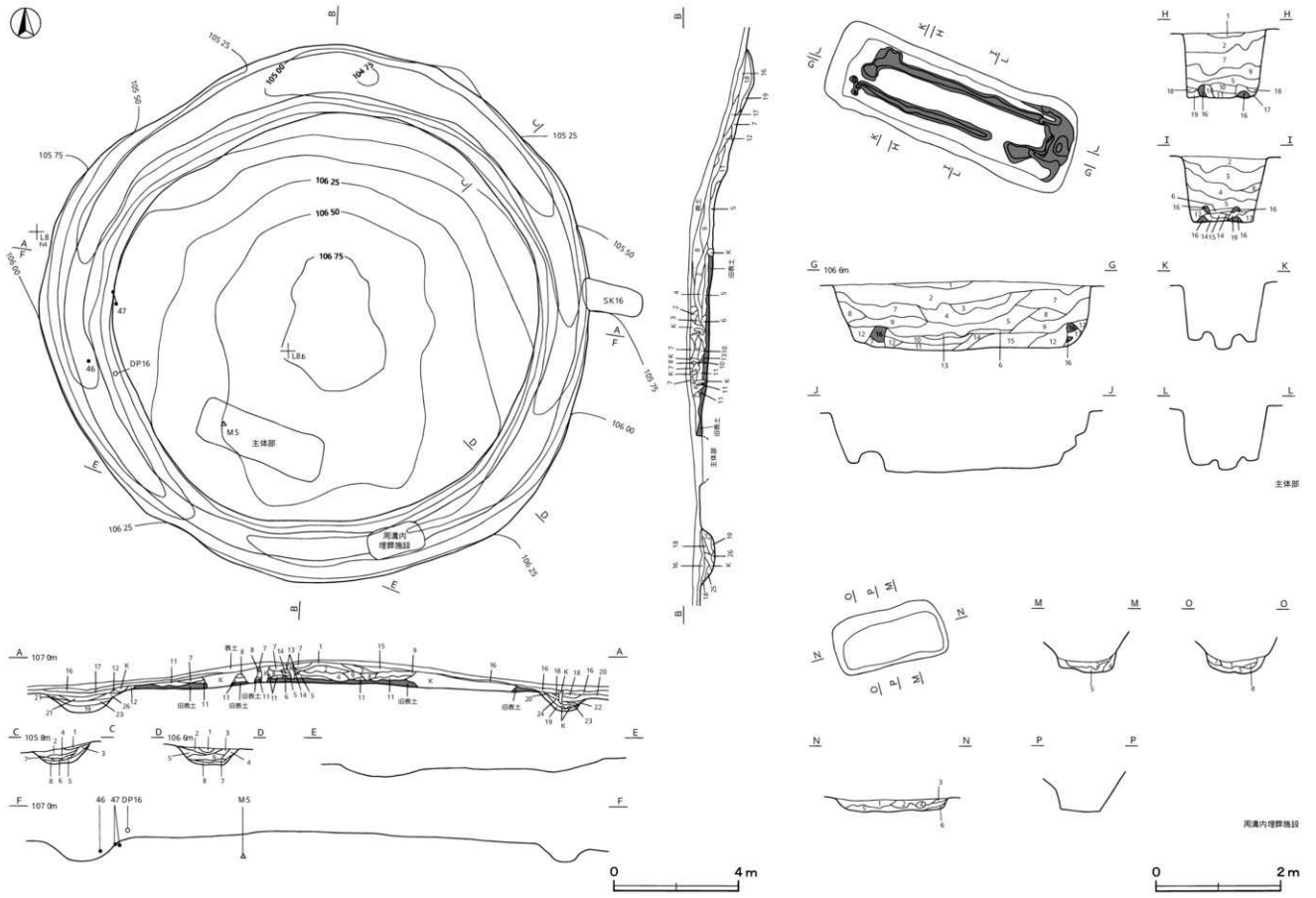
規模と形状 墳丘や周溝の形状から墳丘径約13m、周溝外縁径約17mの円墳である。

墳丘 旧表土の上に暗褐色土や黒褐色土を1～4層ほど重ねるように盛土して構築している。盛土は約0.5mで、北側に向かってわずかに傾いている。盛土はあまり高くなく、低墳丘であったことが推定される。

周溝 上幅2.0～3.6m、下幅0.8～2.0m、深さ0.5～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。覆土は土が流入した自然堆積の様相を示している。主体部南側の周溝内には地山を掘り残している部分があり、土橋として使用していたものと考えられる。

## 墳丘・周溝土層解説

1	褐色	ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・甕沼バミス少量	14	暗褐色	ロームブロック中量、甕沼バミス少量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	15	褐色	ロームブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック・甕沼バミス少量、炭化粒子少量	16	暗褐色	ロームブロック少量
4	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	17	暗褐色	ロームブロック少量
5	暗褐色	ロームブロック・甕沼バミス少量	18	黒褐色	ロームブロック少量
6	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・甕沼バミス少量	19	暗褐色	ロームブロック中量、甕沼バミス少量、炭化粒子少量
7	暗褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量	20	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、甕沼バミス少量
8	暗褐色	ロームブロック多量、炭化粒子少量	21	黒褐色	ローム粒子少量、甕沼バミス少量
9	暗褐色	ロームブロック中量	22	黒褐色	ローム粒子・甕沼バミス少量
10	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子少量	23	暗褐色	ロームブロック・甕沼バミス少量、炭化物少量
11	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子少量	24	暗褐色	ロームブロック・甕沼バミス少量、焼土粒子少量
12	暗褐色	ロームブロック中量	25	褐色	ロームブロック・甕沼バミス少量
13	暗褐色	ロームブロック中量、甕沼バミス少量	26	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子少量



第 44 图 第 7 号墳実測图

**埋葬施設** 墳丘南側と周溝内から埋葬施設が確認される。

#### 墳丘主体部

墳丘南側の裾部に位置している木棺直葬である。長軸4.1m、短軸1.3mの長方形で、長軸方向はN-69°-Wである。深さ1.1mで、底面には、粘土が長軸2.9m、短軸0.4mの隅丸長方形に残存していることから、木棺を固定していたものと思われる。この他に粘土が敷かれているような痕跡もなく、覆土中にも粘土は多く含まれていない。鹿沼バミスを含む黒褐色土を埋土としているが、木棺が安置されていた部分は、粘土粒子や鹿沼バミスを含む褐色土が堆積している。遺物は、M5が西部下層から出土しており、副葬品である。

#### 主体部土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量	12 褐色	粘土粒子多量、ロームブロック中量、鹿沼バミス少量
2 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	13 褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミス微量
3 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	14 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、粘土粒子微量
4 暗褐色	鹿沼バミス中量、ロームブロック少量	15 褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス・粘土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、鹿沼バミス微量	16 灰オリーブ色	粘土粒子多量、ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	17 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量、粘土粒子微量
7 褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量	18 暗褐色	ロームブロック少量
8 暗褐色	ロームブロック少量	19 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量
9 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス・粘土粒子少量		
10 褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス・粘土粒子少量		
11 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、粘土粒子微量		

#### 周溝内埋葬施設

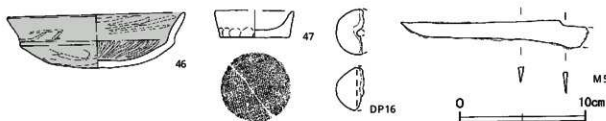
周溝南部に位置している、直葬である。長軸1.8m、短軸0.9mの隅丸長方形で、深さ0.2mである。長軸方向はN-73°-Eである。周溝の底面を掘り込んでいるが、覆土を掘り込んだ様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期、あるいは同時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。覆土はローム土や鹿沼バミスを多く含み、不規則な堆積状況を示しており、埋め戻されている。

#### 周溝内埋葬施設土層解説

1 褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量	6 黄褐色	鹿沼バミス多量、ローム粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量	7 黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
3 褐色	ローム粒子中量、鹿沼バミス少量	8 暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
4 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量	9 灰黄褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子少量
5 灰黄褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量		

**遺物出土状況** 土器器片1点(坏), 土器器片121点(坏16, 甕105), 須恵器片1点(甕)のほかに、埋没途中に流れ込んだものと考えられる縄文土器片15点、弥生土器片677点, ミニチュア土器1点が周溝から出土している。周溝内からは、46が西部の覆土下層, 47・DP16が西部の覆土上層からそれぞれ出土している。周溝内埋葬施設から遺物は出土していない。

**所見** 最も標高の高い位置に構築されている古墳である。主体部は墳丘の中心から南に外れており、第1・2・6号墳とは位置が異なっている。時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第45図 第7号墳出土遺物実測図

第7号墳周溝出土遺物観察表 第45図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
46	土師器	環	140	43	-	長石・雲母	橙	普通	口縁部外面横ナデ 内面ミガキ 体部外面(外周) 内面ミガキ	周溝西部下層	100% PL17
47	ミニチュア土器	-	61	22	55	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	西・外周ナデ 体部下縁面横縁 底面 内面ミガキ	周溝西部上層	90% PL20

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	紡錘織	36	33	05	20.4	土 長石・石英・雲母	扁盤玉形	周溝西部上層	

第7号墳主体部出土遺物観察表 第45図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M5	刀子	147	22	05	196	鉄	同開 茎欠	主体部西部下層	

## 第8号墳 (第46・47図)

**位置** 調査区中央部のL714区を中心とし、標高101mの丘陵西斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号住居跡、第19号土坑を掘り込み、第1号道路に掘り込まれている。

**規模と形状** 北西部が削平により残存していないため規模や形状が明確ではないが、墳丘の形状や周溝が弧を描いて巡ることから墳丘径約15mの円墳と推定される。

**墳丘** 旧表土上に盛土をして構築している。盛土は約0.2mである。盛土は少なく、斜面部の地形を利用して構築したと考えられる。

**周溝** 上幅1.6~2.8m、下幅0.6~1.0m、深さ0.3~1.0mである。緩やかなU字状の断面形である。標高の高い南東部は特に深く掘り込まれており、地形を利用して構築していることがうかがえる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

## 墳丘・周溝土層解説

1 褐色	ロームブロック多量、鹿沼バミス微量	10 にぶい褐色	ローム粒子中量
2 暗褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量	11 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
3 暗褐色	ロームブロック少量	12 暗褐色	ローム粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量	13 暗褐色	鹿沼バミス中量、ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	14 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量
6 暗褐色	ロームブロック少量	15 灰褐色	ローム粒子微量
7 黒褐色	ローム粒子少量	16 黒色	ローム粒子少量
8 黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量	17 黒褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量
9 黒色	鹿沼バミス少量、ローム粒子微量		

**周溝内埋葬施設** 周溝が最も深く掘り込まれている南東部の底面に2基の掘り込みがみられる。周溝の底面に沿うように並んでおり、北側を周溝内埋葬施設1、南側を周溝内埋葬施設2とする。

## 周溝内埋葬施設1

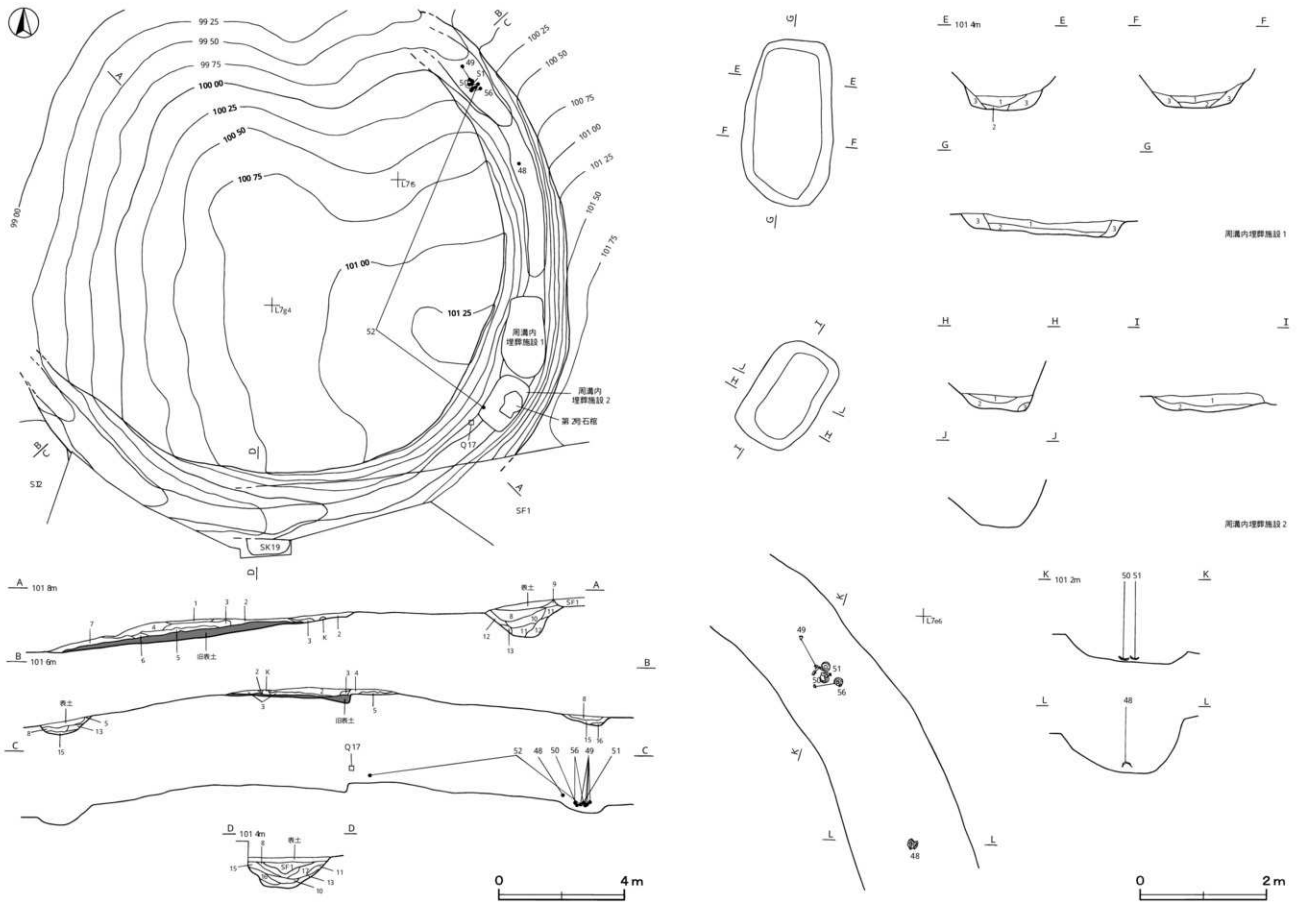
周溝の東部底面に位置している。長軸2.6m、短軸1.4mの隅丸長方形で、長軸方向はN-2°-Wである。深さは0.2mで、周溝の覆土を掘り込んでいた様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦で粘土などはみられない。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他の遺物は確認されなかった。

## 周溝内埋葬施設1土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	3 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス中量
2 灰褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量		

## 周溝内埋葬施設2

周溝の東部底面に位置している。長軸1.6m、短軸1.0mの長方形で、長軸方向はN-32°-Eである。深さ



第46图 第8号墳実測图

0.2mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他の遺物は確認されなかった。

#### 周溝内埋葬施設 2土層解説

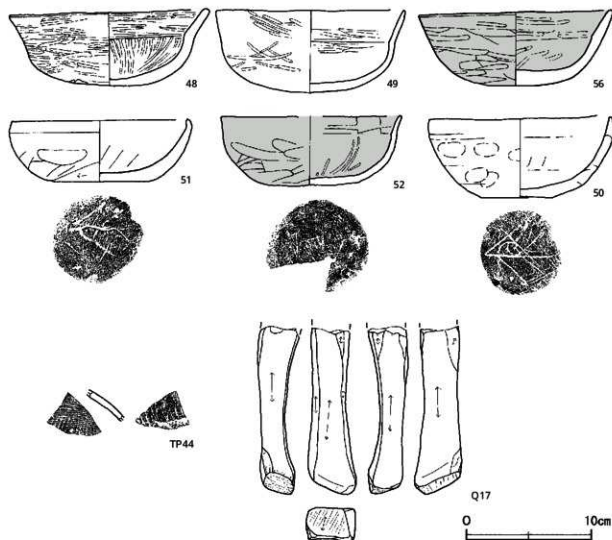
1 濃い褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス微量

2 褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス微量

3 暗褐色 ローム粒子多量、鹿沼パミス中量

**遺物出土状況** 土器器8点(杯6, 高台付杯1, 甕1), 土器器片23点(杯7, 甕16), 須恵器片1点(甕)のほかに、埋設途中に流れ込んだものと考えられる弥生土器片424点が周溝から出土している。また混入したと思われる石製品1点(砥石), 瓦片1点も出土している。48~51・56は周溝北東部の覆土下層からまともに出て出土している。52は南東部の覆土下層, Q17は南東部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 本墳の現存している部分から主体部は確認されなかった。最も深く掘り込まれている南東部の周溝内から土坑状の掘り込み2基が確認され、形状から埋葬施設のひとつと考えられる。大きさや形状が異なっているが、周溝底面と同じように掘り込んでいることから近い時期に構築されたもので、墳丘内に設けられたと想定できる埋葬施設後の追葬と考えられる。また、周溝の底面に正位で土器器杯が出土しており、第6・7号墳と同じように据え置かれていたもので、時期は出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第47図 第8号墳出土遺物実測図



第8号墳周溝出土遺物観察表 第4図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
48	土師器	環	158	59	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内・外面ミガキ	周溝北東部 下層	99% P L 17
49	土師器	環	149	65	-	長石・石英	明赤褐	普通	内・外面ミガキ	周溝北東部 下層	99% P L 17
50	土師器	環	144	64	57	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部内・外面ナズ 体部外面指環押圧痕 内面ナズ 底部木炭痕 輪轆み痕あり	周溝北東部 下層	99% P L 17
51	土師器	環	140	50	70	長石・石英・雲母・ 緑	にぶい黄緑	普通	口縁部内・外面ナズ 体部外面手持ちへう 割り 内面ナズ 底部木炭痕 輪轆み痕	周溝北東部 下層	99% P L 17
52	土師器	環	125	55	67	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部外面ナズ 内面ヘラナズ 体部外面 割り後ナズ 内面放射状のミガキ	周溝南東部 下層	40%
56	土師器	環	152	60	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	内・外面ミガキ後ナズ	周溝北東部 下層	99% P L 17

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP4	須恵器	甕	-	26	-	長石	黄灰	普通	外面横位の捺き目	周溝南東部 下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 17	磁石	134	38	26	1760	砂岩	縦断5面	周溝南東部 上層	P L 21

## 第9号墳 (第48・49図)

**位置** 調査区西部のL5g8区を中心とし、標高90mの丘陵西斜面部に位置している。

**規模と形状** 南西部の削平により周溝の一部しか確認できない。周溝が弧を描いて巡ることから周溝外縁径約19mの円墳と推定される。

**周溝** 上幅1.8～3.4m、下幅0.8～1.8m、深さ0.4～1.2mである。緩やかなU字状の断面形である。標高の高い東部は他の部分より深く掘り込まれており、地形を利用して構築していることがうかがえる。覆土は、土が流入した自然堆積の様相を示している。

## 周溝土層解説

- |           |                   |         |                |
|-----------|-------------------|---------|----------------|
| 1 黒 褐 色   | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗 褐 色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 極 暗 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量      | 5 褐 色   | ローム粒子多量        |
| 3 暗 褐 色   | ローム粒子少量、炭化粒子微量    |         |                |

**周溝内埋葬施設** 周溝の北東部の底面に2基の掘り込みがみられる。周溝の底面に沿うように並んでおり、北側を周溝内埋葬施設1、南側を周溝内埋葬施設2とする。

## 周溝内埋葬施設1

周溝の北東部底面に位置している。長径2.0m、短径1.3mの楕円形で、長径方向はN-61°-Wである。深さは0.4mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他には確認されなかった。

## 周溝内埋葬施設1土層解説

- |         |                 |       |                 |
|---------|-----------------|-------|-----------------|
| 1 黒 褐 色 | ローム粒子少量         | 3 褐 色 | ローム粒子少量、鹿沼バミス微量 |
| 2 褐 色   | ローム粒子少量、炭化バミス少量 |       |                 |

## 周溝内埋葬施設2

周溝の北部底面に位置している。長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、長径方向はN-37°-Wである。深さは0.3mで、周溝の覆土を掘り込んでいる様相はみられないことから、周溝の掘削後から間もない時期に掘り込まれたものと考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は弥生土器片が混入しているのみで、他には確認さ

れなかった。

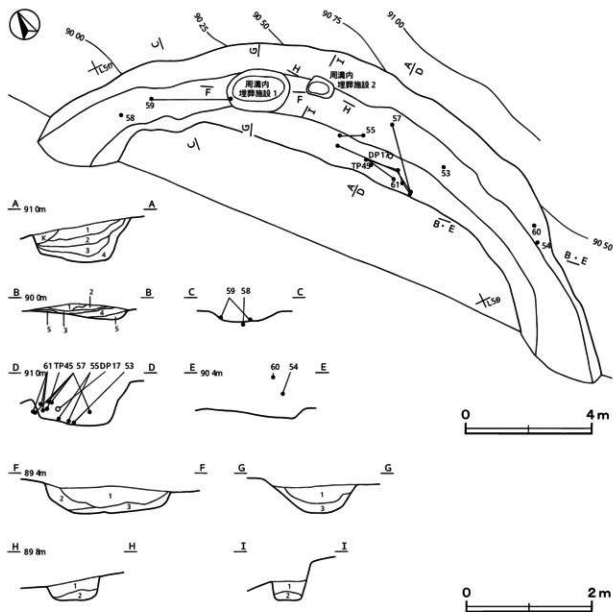
#### 周溝内埋葬施設 2 土層解説

1 に近い褐色 ローム粒子多量, 鹿沼バミス微量

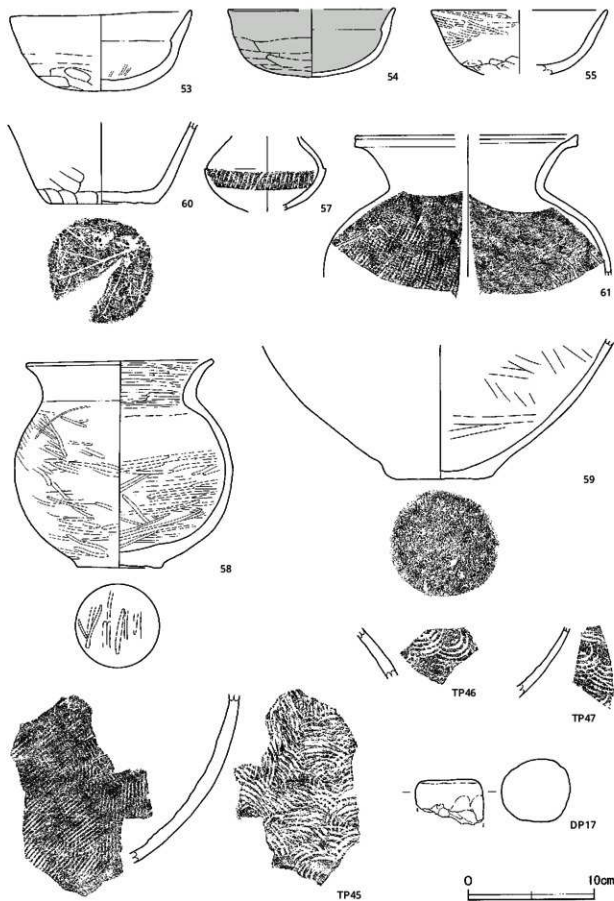
2 褐色 ローム粒子多量, 鹿沼バミス微量

**遺物出土状況** 土師器 6 点 (杯 3, 甕 3), 土師器片 68 点 (杯 6, 甕 62), 須恵器 2 点 (甕, 甕), 須恵器片 23 点 (杯 9, 蓋 2, 甕 10, 短頸壺 1, 甕 1) が周溝から出土している。他に埋没途中に流れ込んだと考えられる縄文土器片 5 点, 弥生土器片 486 点や, 混入したと思われる土製品 8 点 (支脚), 鉄製品 2 点 が出土している。53 が東部の覆土下層, 54・60 が南部の覆土上層, 55・61・TP45 は北東部の覆土下層からまともに出て出土している。58・59 は北部の底面から出土している。

**所見** 周溝内から須恵器が破片の状態では出土しており, 須恵器より耐久性の弱い土師器がほぼ完形で出土している。このことから須恵器は故意に破砕されたものと考えられる。第 6 号墳と同じような祭祀の可能性もある。時期は, 出土土器から 5 世紀後葉と考えられる。



第 48 図 第 9 号墳実測図



第 49 图 第 9 号墳出土遺物実測図

第9号墳出土遺物観察表 第4図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
53	土師器	環	141	63	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外面横ナズ後ナズ 内面横ナズ 体部外面附リ後ナズ 内面ミガキ	周溝東部下層	99a P L 17
54	土師器	環	132	54	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ナズ 体部外面附リ	周溝東部上層	90a P L 17
55	土師器	環	140	51	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	内面ナズ 口縁部外面ミガキ 体部外面へラ削リ	周溝北東部下層	50b
57	須恵器	皿	-	59	-	石英	灰色	良好	内面口コナズ 外面刺突文施文	周溝東部下層	30a P L 20
58	土師器	小形甕	146	167	66	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面横ナズ 内面へラミガキ 体部外面へラ削リ後へラミガキ 火跡あり 底部附リ後へラミガキ	周溝北部下層	90a P L 20
59	土師器	甕	-	110	80	長石・石英	明赤褐	普通	内・外面ナズ	周溝東部上層	20c
60	土師器	甕	-	65	82	長石・石英・雲母・赤	にぶい黄	普通	外面へラ削リ 底部本線施	周溝東部上層	15a
61	須恵器	甕	175	112	-	石英	にぶい黄緑	良好	体部外面平行叩き 内面同心円当て具傷	周溝北東部下層	10a 自然軸

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP45	須恵器	甕	-	131	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	外面平行叩き 内面同心円当て具傷	周溝東部下層	
TP46	須恵器	甕	-	41	-	長石	黄灰	普通	内面同心円当て具傷	周溝層土中	自然軸
TP49	須恵器	甕	-	56	-	長石・石英	灰	普通	内面同心円当て具傷	周溝層土中	

番号	器種	長さ	最大径	最小径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP17	支那	35	-	51	118.2	土 長石・石英・雲母・赤色粒子	ナズ	周溝東部下層	火跡痕

表6 古墳一覽表

番号	位置	墳形	墳丘主軸方向 主部部主軸方向	墳丘規模 m		周溝規模 m			埋葬施設	主な出土遺物	時期	備考 遺構関係 古 新
				全長	径	高さ	最大上幅	最大下幅				
1	L6b7	方墳	N - 46 - W	138	-	26	09	02-05	木棺直葬 鹿沼土師	土師器 環	5世紀中葉	S5 S5 本墳 TM4 SD1
2	L6d0	円墳	N - 29 - E	83	-	13	07	02-04	木棺直葬	直刀	5世紀後半 -6世紀	本墳 SD1
3	L6e5	円墳	-	115	-	36	16	03-09	-	土師器 環 須恵器 環、甕	5世紀後半	本墳 SD4 SD1
4	K6j4	円墳	-	95	-	20	12	02-08	-	土師器 環、甕 須恵器 環、甕	6世紀前半	S3 TM1 本墳
5	L5c8	円墳	-	-	-	36	20	05	-	-	5世紀後半	
6	M8d0	円墳	N - 46 - E N - 45 - E	132	02	36	20	05-12	木棺直葬	土師器 環、直刀 須恵器 環、ガラス小玉	6世紀前半	
7	L8h5	円墳	N - 69 - W	136	05	36	20	05-12	木棺直葬 周溝内埋葬	土師器 環	6世紀前半	本墳 SK16
8	L7f4	円墳	-	148	02	28	10	03-10	周溝内埋葬	土師器 環	5世紀後半	S2SK19 本墳 須恵器 甕
9	L5g8	円墳	-	-	-	34	18	12	周溝内埋葬	土師器 環、甕 須恵器 甕	5世紀後半	

## (2) 石棺

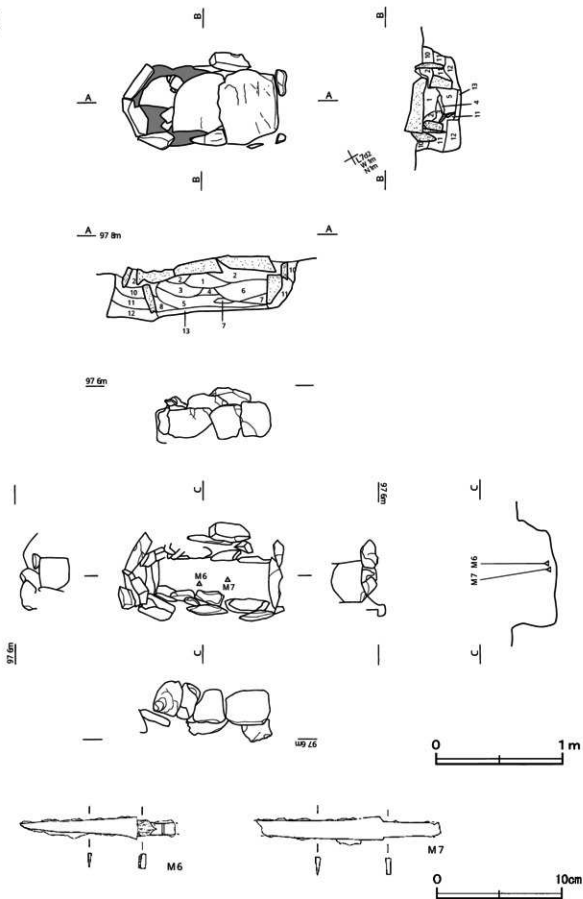
## 第1号石棺 (第50図)

位置 調査区中央部L7c1区、標高97mの丘陵西斜面部に位置している。

確認状況 第8号墳の北側に位置し、墳丘や周溝はみられない。遺構確認の際に蓋石が確認された。

規模と形状 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.93m、幅0.21～0.29mの長方形で、主軸方向はN-63°-Wである。

構築状況 長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さは0.4mで長方形に地山を掘り込み、その内部に石棺を構築している。側壁は板状の石を加工して、平坦な面を内側にするように組み合わされて構築されている。北・南側壁



第50图 第1号石棺·出土遺物実測図

は長さ20～35cm程度の長方形や方形の石を3・4枚立てて構築し、東・西側壁は40cmほどの1枚の大きな石を使用して構築している。壁の隙間や裏側には、裏込めとして青灰色の粘土が充填されており、頑丈な作りをしている。床面に石は敷かれていない。蓋石は3枚の板状の石を使用しており、長さ40～60cmである。端の部分が加工されており、重なり合うように置かれている。石材は北西から順に、ホルンフェルス、砂岩、花崗岩である。

**覆土** 13層に分層される。第1～9層は石棺内、第10～13層は裏込めの土層である。いずれもブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

**土層解説**

1 褐色	ロームブロック多量、粘土粒子少量	8 極暗褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ロームブロック・粘土粒子中量	9 灰オリーブ色	粘土粒子多量
3 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	10 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
4 濃い黄褐色	ローム粒子多量	11 極暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
5 暗褐色	ロームブロック少量	12 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
6 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量	13 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
7 褐色	ローム粒子多量		

**副葬品** 刀子2点が中央部の覆土下層から出土している。M6・M7とも鋒は北西方向を向いている。

**所見** 第8号墳の北西が残存していないため明確ではないが、推定できる第8号墳の周溝より外側に位置している。東側には同じような主軸で第3号石棺が位置していることから、近い時期に構築されたものと考えられる。今回調査された他の古墳の周囲からは石棺は確認されおらず、第8号墳を意識して構築したものと思われる。出土している2点の刀子はいずれも鋒を北西に向けていることから、埋葬された遺体の頭部は北西に向けられていたものと考えられる。時期は、岩瀬地域で石棺や石室が確認されている山ノ入古墳群や松田古墳群、間中古墳群の調査成果から、6世紀後半から7世紀代に構築されたものと考えられる。

**第1号石棺出土遺物観察表 第5図**

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M6	刀子	124	18	0.4	12.3	鉄	同調 茎に木製付着	石棺内下層	
M7	刀子	146	19	0.4	20.4	鉄	同調 茎に木製付着	石棺内下層	

**第2号石棺 (第51図)**

**位置** 調査区中央部L7g5区、標高100mの第8号墳周溝内に位置する。

**確認状況** 第8号墳の周溝南東部で、覆土中から蓋石が確認された。

**規模と形状** 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.78m、幅0.22mの長方形で、主軸方向はN-23°-Eである。

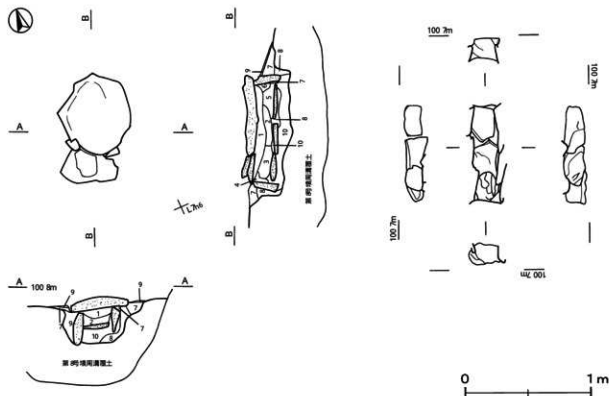
**構築状況** 長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ0.5mの不定形に第8号墳の周溝覆土を掘り込み、その内部に石棺を構築している。床面には長さ25～30cmの板状の石が3枚敷かれている。側壁は板状の石を加工して、平坦な面を内側にするように立てて並べられている。北・南側壁は長さ30cmの石を立てて構築しており、東・西側壁は長さ25～40cmの長方形の石を3枚立てて構築している。壁の隙間の一部には青灰色の粘土を裏込めとして使用している。長さ45cm・65cmの2枚の板状の石をわずかに重なるように置いて蓋としている。石材は花崗岩である。

**覆土** 10層に分層される。第1～6層は石棺内、第7～10層は裏込めの土層である。ブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

## 土層解説

- |         |                     |        |                   |
|---------|---------------------|--------|-------------------|
| 1 褐色    | ローム粒子多量             | 6 暗褐色  | ローム粒子中量、粘土粒子微量    |
| 2 褐色    | ローム粒子多量、砂粒少量、粘土粒子微量 | 7 暗褐色  | ロームブロック・鹿沼バミス少量   |
| 3 褐色    | ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒微量 | 8 暗褐色  | ロームブロック中量、鹿沼バミス少量 |
| 4 濃い黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量        | 9 極暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量   |
| 5 暗褐色   | ローム粒子中量、粘土粒子少量      | 10 暗褐色 | 鹿沼バミス中量、ロームブロック少量 |

所見 時期は、第8号墳の周溝の覆土中から確認されていることから、第8号墳の構築時期より若干時期は新しく、6世紀後半と考えられる。



第51図 第2号石棺実測図

## 第3号石棺 (第52・53図)

位置 調査区中央部L7c1区、標高97mの丘陵西斜面部に位置する。

確認状況 第8号墳の北側に位置し、墳丘や周溝はみられない。遺構確認の際に蓋石が確認された。

規模と形状 小形の石棺である。形状は、内法で長さ0.9m、幅0.18~0.25mの長方形で、主軸方向はN-72°-Wである。

構築状況 長軸約1.6m、短軸約1.1m、深さ0.5mで長方形に地山を掘り込み、この内部に石棺を構築している。側壁は板状の石を加工し、平坦面を内側にして1列に並ぶように構築されている。北・南側壁は長さ25~30cm程の長方形の揃った石を5枚重ならないように立てて構築し、東・西側壁は長さ30cm・50cmの1枚の大きな石を使用して構築している。壁の隙間や裏側には、裏込めとして青灰色の粘土が充填されており、頑丈な作りである。床面に石は敷かれていない。長さ24~60cmの板状の石を3枚使用し、蓋としている。石材は北西のものが玄武岩で、あとの2枚は花崗岩である。

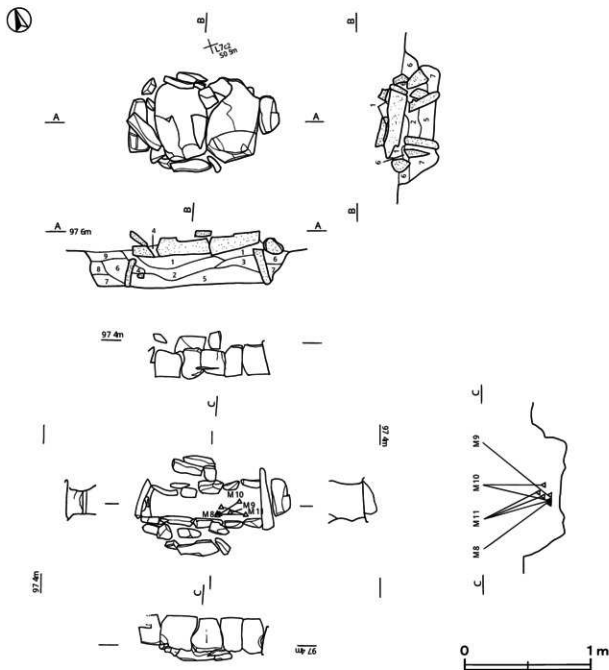
覆土 9層に分層される。第1~5層は石棺内、第6~9層は裏込めの土層である。ブロック状の不規則な堆積がみられることから、人為堆積である。

## 土層解説

- |          |                            |          |                  |
|----------|----------------------------|----------|------------------|
| 1 麻 暗 褐色 | ロームブロック・粘土粒子微量             | 5 暗 褐色   | ロームブロック少量、粘土粒子微量 |
| 2 暗 褐色   | 粘土粒子少量、ロームブロック微量           | 6 黒 褐色   | ローム粒子・粘土粒子少量     |
| 3 暗 褐色   | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 黒 褐色   | ローム粒子少量、粘土粒子微量   |
| 4 オリーブ灰色 | 粘土粒子多量、ローム粒子微量             | 8 麻 暗 褐色 | ローム粒子少量          |
|          |                            | 9 黒 褐色   | ローム粒子・粘土粒子微量     |

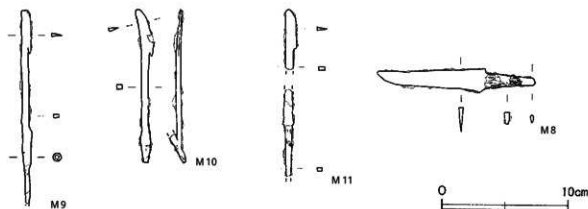
**副葬品** 東部の覆土下層からM8～M11がまとめて出土している。M8は刀子で、鋒を西に向けて出土している。またM9～M11の鉄鏝も同じように鋒を西に向けている。

**所見** 第8号墳の北西が残存していないため明確ではないが、推定できる第8号墳の周溝より外側に位置し、西側には第1号石棺が並んでいる。第1号石棺と同じように第8号墳を意識して構築したものと思われる。出土している鉄鏝は形状から5世紀後葉から6世紀前半のものである。時期は、岩瀬地域の石棺の調査成果から、6世紀後半から7世紀代と考えられ、出土している鉄鏝は伝世したものと想定できる。



第52図 第3号石棺実測図





第53図 第3号石棺出土遺物実測図

第3号石棺出土遺物観察表 第52・53図

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	刀子	126	19	05	165	鉄	同期 茎に木質付着	石棺内下層	P L 21
M9	鏃	152	08	03	84	鉄	長楕圓群 鏃身部片刃形 鏃身基部に逆刺 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21
M10	鏃	135	10	04	90	鉄	長楕圓群 鏃身部片刃形 鏃身基部に逆刺 台形茎 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21
M11	鏃	115	08	035	73	鉄	1個体 長楕圓群 鏃身部片刃形 台形茎 茎に木質残存	石棺内下層	P L 21

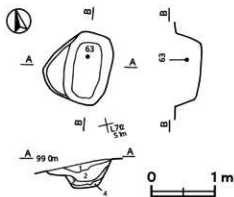
表7 石棺一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模			覆土	主な出土遺物	備考 遺物関係 古新
				長軸 m	短軸 m	深さ cm			
1	L 7 c1	N - 63 - W	長方形	093	029	28	人海	刀子	
2	L 7 g5	N - 23 - E	長方形	078	022	12	人海		TM 8 本跡 周溝内
3	L 7 c1	N - 72 - W	長方形	090	025	21	人海	刀子 鉄鏃	

## (3) 墓坑

## 第1号墓坑 (第54・55図)

位置 調査区中央部のL 7 f2区、標高99mの丘陵西斜面部に位置している。



第54図 第1号墓坑実測図

**規模と形状** 長径1.14m、短径1.04mの長楕円形で、長径方向はN-16°-Eである。深さ51cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

**覆土** 4層に分層される。ロームブロックが含まれており、古墳の周溝内埋葬施設と堆積状況が似ている埋められた土層である。

## 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、鹿沼バミス微量
- 4 褐色 ロームブロック・鹿沼バミス少量

遺物出土状況 土師器2点(杯), 土師器片4点(杯)が出土しているほか, 埋土中に混入したと思われる弥生土器片4点も出土している。

所見 時期は, 出土土器から5世紀後葉と考えられる。



第55図 第1号墓坑出土遺物実測図

第1号墓坑出土遺物観察表 第59図

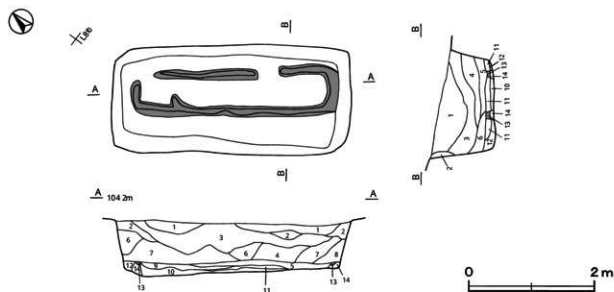
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	平法の特徴ほか	出土位置	番号
62	土師器	杯	17.4	6.7	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部・内外面積ナデ 体部内面ナデ	埋土中	50%
63	土師器	杯	36.0	7.1	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部・内外面積ナデ 底ナデ 内面ナデ	北基壇土中層	30%

#### 第2号墓坑(第56図)

位置 調査区中央部のL8f0区, 標高104mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 掘り方は, 長軸3.81m, 短軸1.72mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-39°-Wである。深さ98cmで, 底面は平坦である。第7号墳の墳丘主体部にみられるような青灰色の粘土がみられる。長軸約3.0m, 短軸約0.4mの長方形を囲むように粘土が残存しており, 木棺を固定していたものと思われる。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 14層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況や, 古墳の主体部と類似した堆積状況を示している。



第56図 第2号墓坑実測図

## 土層解説

- |       |                   |          |                   |
|-------|-------------------|----------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量   | 8 暗褐色    | ロームブロック・鹿沼パミス少量   |
| 2 暗褐色 | 鹿沼パミス少量、ロームブロック微量 | 9 暗褐色    | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量   | 10 褐色    | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 |
| 4 暗褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 | 11 暗褐色   | ロームブロック少量         |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、鹿沼パミス微量 | 12 褐色    | ローム粒子多量           |
| 6 褐色  | 鹿沼パミス多量、ロームブロック少量 | 13 褐色    | 粘土粒子多量            |
| 7 暗褐色 | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 | 14 にぶい褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量     |

遺物出土状況 埋土中に混入したと思われる弥生土器片32点が出土している。

所見 平面形や、木棺を固定していた青灰色の粘土が残存している状況が、第6・7号墳の主体部と特徴が類似していることから、埋葬施設と考えられる。時期は、第6・7号墳に近い時期と想定される。墳丘や周溝などの施設が確認できないため、それらを伴わない個別的な埋葬施設と推定される。

## 第3号墓坑 (第57図)

位置 調査区中央部のL7g9区、標高104mの丘陵西斜面部に位置している。

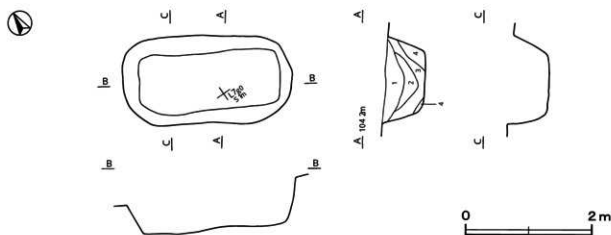
規模と形状 長軸2.68m、短軸1.40mの隅丸長方形で、長軸方向はN-55°-Wである。深さ70cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。土層は人為堆積であるが、崩落したような様相も呈している。

## 土層解説

- |       |                   |       |                      |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量    | 4 褐色  | ローム粒子少量、鹿沼パミス微量      |

所見 第2号墓坑より小形で、床面に粘土などはみられない。時期は、平面形が他の墓坑や周溝内埋葬施設に類似していることから、古墳時代の墓坑と考えられる。



第57図 第3号墓坑実測図

表8 墓坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模		覆土	底面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長軸 径	短軸 径					
1	L7g2	N-16-E	長楕円形	114	104	51	外傾	平坦	人為	土師器 環
2	L8g0	N-39-W	隅丸長方形	381	172	98	外傾	平坦	人為	
3	L7g9	N-55-W	隅丸長方形	268	140	70	外傾	平坦	人為	

## 5. 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、堅穴住居跡18軒、掘立柱建物跡5棟、土坑1基が確認されている。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## (1) 堅穴住居跡

## 第11号住居跡（第58～60図）

**位置** 調査区東部のL 0 a2区、標高86mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第29・47号土坑を掘り込み、第14号住居、第8・9号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.48m、短軸3.38mの方形で、主軸方向はN-12°-Wである。壁高は64～82cmで、直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は西壁際で確認されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅149cmである。第7～9・12層は竈構築土で、袖部は掘り残した地山面を基部とし、第7・8・12層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を25cmほど掘りくぼめて使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁内に46cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。第7～9・12層は天井部の一部で、内面は火を受け赤変硬化している。

## 竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量	7 褐色	ローム粒子・粘土粒子中量・砂粒微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	8 にぶい褐色	粘土粒子・砂粒少量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい褐色	粘土粒子中量、砂粒少量、ローム粒子微量
4 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	10 にぶい赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒微量
5 褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量	11 褐色	ローム粒子中量
6 にぶい褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量	12 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、砂粒微量
		13 にぶい赤褐色	焼土粒子多量、ロームブロック中量、炭化粒子微量

**ビット** 6か所。P1～P4・P6は深さ5～14cmと浅く、不規則に位置していることから性格は不明である。

P5は深さ12cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うビットである。

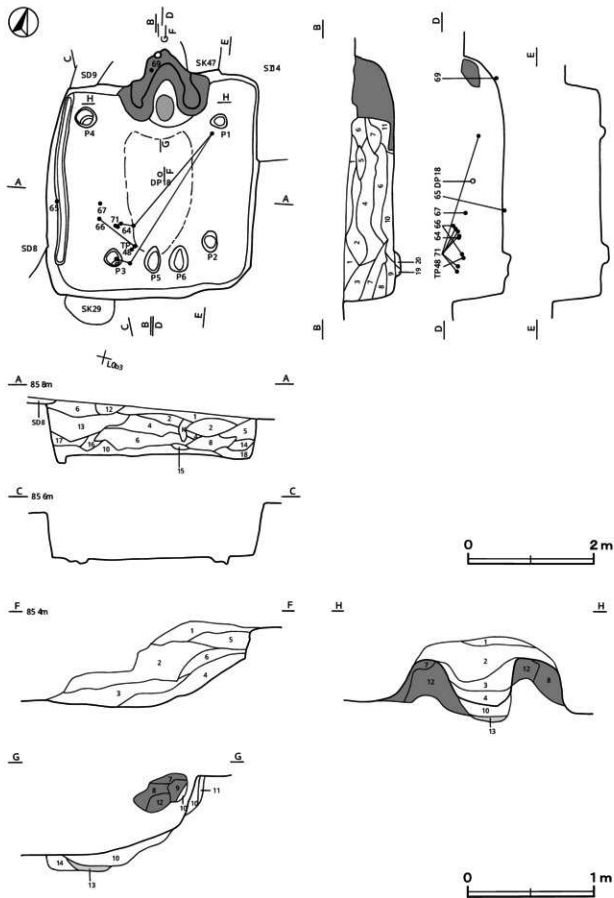
**覆土** 20層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

## 土層解説

1 暗褐色	ローム粒子微量	11 にぶい褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス微量	12 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼バミス微量	13 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	14 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量
5 褐色	ローム粒子微量	15 暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス・粘土粒子微量	16 黒褐色	ロームブロック微量
7 褐色	焼土ブロック多量	17 灰褐色	ロームブロック微量
8 黒褐色	ロームブロック少量、鹿沼バミス微量	18 黒褐色	ロームブロック少量
9 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
10 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	20 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器7点（坏1，鉢1，甕5），土師器片116点（坏25，甕2，甗89），須恵器1点（蓋），須恵器片60点（坏39，高盤1，蓋8，甕12），土製品1点（羽口），石器1点（砥石）が出土している。土器片は、南部の覆土上層から集中して出土している。64・66・67は、南部の覆土上層から、65は西壁際の下層から縦位で出土している。DP18は中央部の覆土中層から出土している。

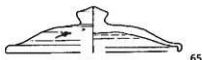
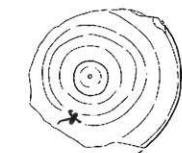
**所見** 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。



第 58 图 第 11 号住居跡実測図



64



65



67



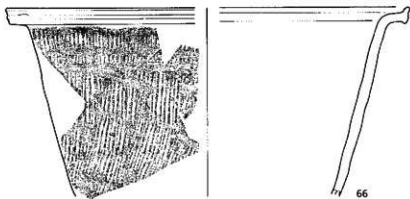
68



70



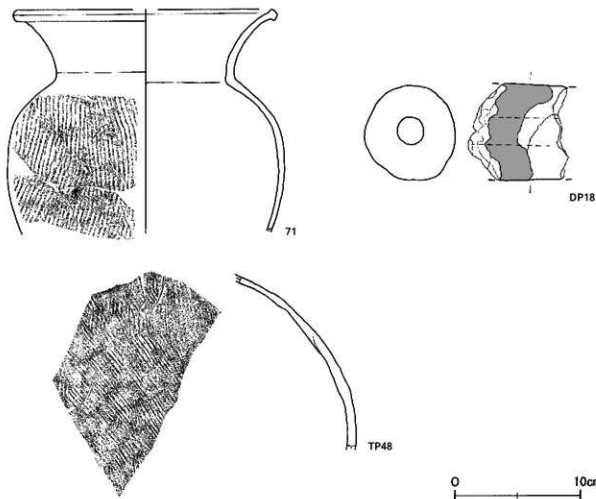
69



66



第59图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第 60 図 第 11 号住居跡出土遺物実測図 ( 2 )

第 1 号住居跡出土遺物観察表 第 59・ 6 図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
64	土師器	坏	15.9	5.2	7.9	長石・石英・雲母	にぶい黄緑	普通	内面ヘラミガキ 体部外面口のロナデ 体部下縁半持ちヘラ削り 底部多方向のヘラ削り痕ナデ	南部上層	30%
65	須恵器	蓋	14.0	3.6	-	長石・石英・礫	灰	普通	内面口のロナデ 外面上部回転ヘラ削り 下至のロナデ	西部下層	外面磨面「大」
66	須恵器	鉢	32.0	14.9	-	長石・石英・雲母	端灰黄	普通	体部外面平行叩き	南部上層	20%
67	土師器	甕	17.0	11.4	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部内・外面ナデ	南部上層	20% 火跡痕
68	土師器	甕	16.7	13.0	-	長石・石英・金雲母	にぶい黄緑	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部外面ナデ	覆土中	10%
69	土師器	甕	19.6	6.6	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外面積ナデ	覆下層	10%
70	土師器	甕	20.3	6.5	-	長石・石英・金雲母	にぶい橙	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部外面ナデ	覆土中	5%
71	須恵器	甕	20.3	17.8	-	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	口縁部内・外面積ナデ 体部外面平行叩き	南部上層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP48	須恵器	甕	-	14.0	-	長石・石英・礫	端赤褐	普通	斜位の平行叩き	南部上層	

番号	器種	長さ	幅	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP18	瓶口	8.0	7.5	2.2	370.0	土 長石・石英・雲母	断面に還元色の痕跡	中央部中層	20%

## 第12号住居跡 (第61・62図)

**位置** 調査区東部のK013区、標高94mの斜面部に位置している。

**規模と形状** 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが、確認された範囲は長軸4.06m、短軸3.80mである。平面形は方形もしくは長方形と推定される。主軸方向はN-17°-Wである。壁高は72cmで、直立している。

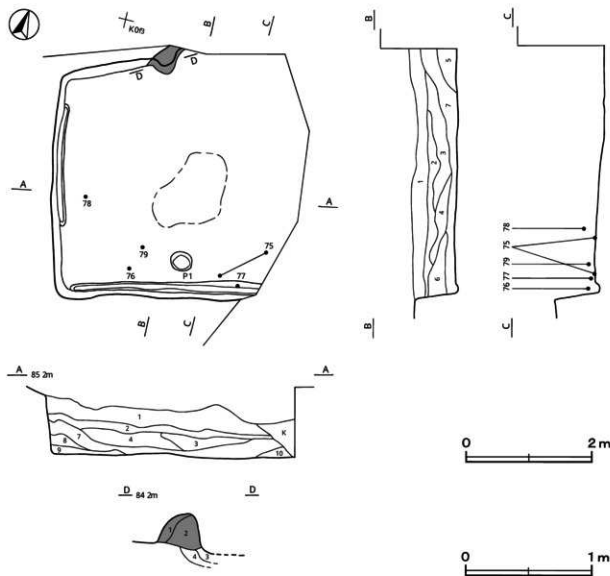
**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は西壁と南壁際で確認されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。第1～4層は竈の構築土で、左袖部の一部が残存しており、第1・2層を地山の上に積み重ねて構築している。

## 竈土層解説

- |       |                             |       |                          |
|-------|-----------------------------|-------|--------------------------|
| 1 褐色  | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量        | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子・砂粒微量 |
| 2 褐色  | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 |       |                          |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量 |       |                          |

**ピット** 深さ36cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットである。



第61図 第12号住居跡実測図



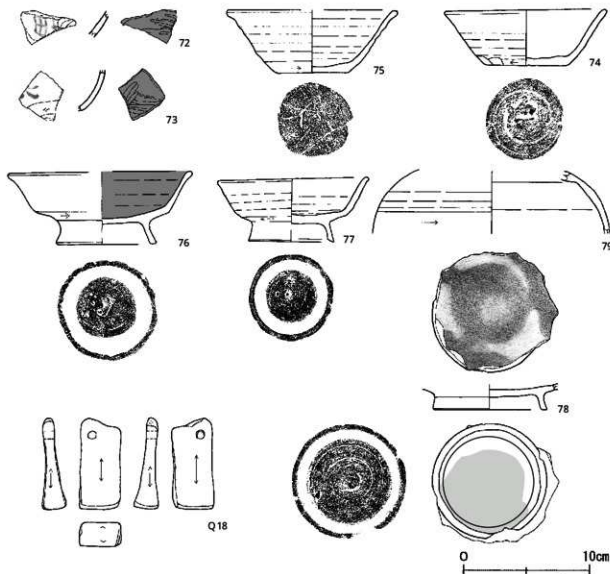
**覆土** 10層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

1 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・炭屑パミス少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック中量、炭屑パミス微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10 極暗赤褐色	焼土粒子・砂粒中量、ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子少量
5 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		
6 褐色	ロームブロック少量		

**遺物出土状況** 土師器4点(杯3, 高台付杯1), 土師器片194点(杯23, 甕171), 須恵器4点(杯, 高台付杯, 盤, 瓶), 須恵器片151点(杯103, 高台付杯13, 蓋14, 高盤4, 甕17), 鉄滓3点が出土している。また、混入したと思われる弥生土器片1点が出土している。土器片は、南部から多く出土している。76・77は南部の覆土下層から逆位で、75・79は南部の覆土下層から床面にかけて、78は西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第62図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表 第62図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
72	土師器	杯	-	21	-	石雲・霞母・赤色 粘土	橙	普通	内面へうらむが半	覆土下層	外観図(表)の P.L.20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
73	土師器	坏	-	32	-	長石・石英・金雲母・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	内面ヘラミガキ 体部下端回転ヘラ削り	覆土中	外周遺棄「大」か P L 20
74	須恵器	坏	126	45	64	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部外周ロクロナデ 体部下端手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ削り	覆土中	80%
75	須恵器	坏	132	50	56	長石・石英・雲母	灰	普通	内・外周ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り	南部下層	60%
76	土師器	高台付坏	143	57	75	長石・石英・金雲母・赤色粒子	黄	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け後ナデ	南部下層	63%
77	須恵器	高台付坏	117	52	67	長石・石英・雲母・緑	暗灰黄	普通	内外周ロクロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 高台部貼り付け後ナデ	南部下層	100% P L 18
78	須恵器	盤	-	20	89	長石・石英・雲母	青灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	西部下層	10% 体部内周磨面 底部外周未磨面 環状周力
79	須恵器	瓶	-	50	-	長石・雲母・黒色粒子	灰黄	普通	体部外周ロクロナデ	南部下層	5% 自然軸

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 16	磁石	72	32	19	232.0	凝灰岩	紙面5割 下げ磁石	覆土下層	P L 21

### 第13号住居跡 (第63図)

**位置** 東部のL 0 b3区、標高85mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第16号住居跡の上に構築し、第15・22号住居跡を掘り込んでおり、第23・24号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.32m、短軸3.10mの方形で、主軸方向はN-17°-Wである。壁高は73~88cmで、直立している。

**床** 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝がほぼ全周している。

**竈** 東壁中央部に付設されている。煙道部と左袖部の一部が削平により欠損しており、焚口部から煙道部まで72cm、袖部幅80cmだけが確認されている。袖部は床面と同じ高さの上に第3・4層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を4cmほど楕円形状に掘りくぼんでいるが、赤変した部分は認められなかった。煙道部は火床面から外傾して立ち上がっている。

#### 竈土層解説

- 1 暗褐色 焼土ブロック・粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック 3 暗褐色 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量 4 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量

**ビット** 5か所。P 1~P 4は深さ18~32cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5は深さ22cmで、西壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うビットと考えられる。

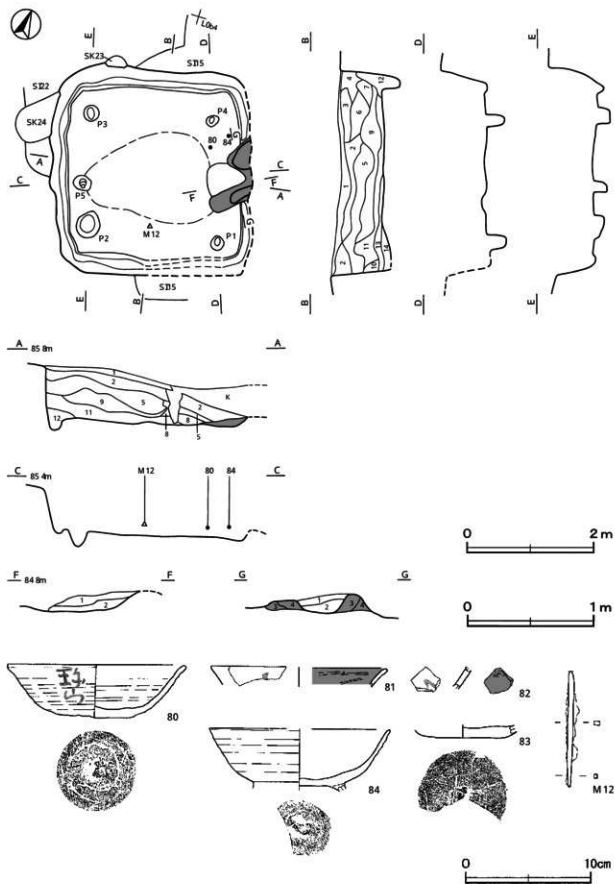
**覆土** 14層に分層される。第1~4層は、周囲から土が流入した様相を示している自然堆積で、第5~14層は不規則な堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 灰褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 7 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 8 灰褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量
- 11 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 12 にぶい褐色 ローム粒子中量
- 13 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量
- 14 黒褐色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土師器4点(坏3、高台付坏1)、土師器片432点(坏146、高台付坏3、甕283)、須恵器1点(坏)、須恵器片85点(坏37、高台付坏1、蓋10、甕29、鉢8)、土製品1点(土玉)、金属製品1点(鐵)、鉄滓1点が出土している。80・84は東部の覆土下層、M12は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、重複関係や出土土器から9世紀末から10世紀初頭と考えられる。



第63図 第13号住居跡・出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表 第63図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
80	土師器	坏	139	46	61	長石・雲母・赤色粘土	橙	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	東部下層	89% 外部磨面「P山」 内外面高麗 P.L.18
81	土師器	坏	139	14	-	長石・金雲母	にじみ黄橙	普通	内面ヘラミガキ	東部下層	外面磨面「」
82	土師器	坏	-	17	-	石英・金雲母	灰黄褐	普通	内面ヘラミガキ	東部下層	外面磨面「」
83	須恵器	坏	-	11	69	長石・石英	オリブ灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	覆土下層	ヘラ記号「」
84	土師器	高台付坏	142	49	-	長石・石英・雲母	橙	普通	体部内面ミガキ 底部回転ヘラ切り後ナデ	東部下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	磁	93	045	03	72	鉄	断面方形	南部下層	

## 第14号住居跡 (第64・65図)

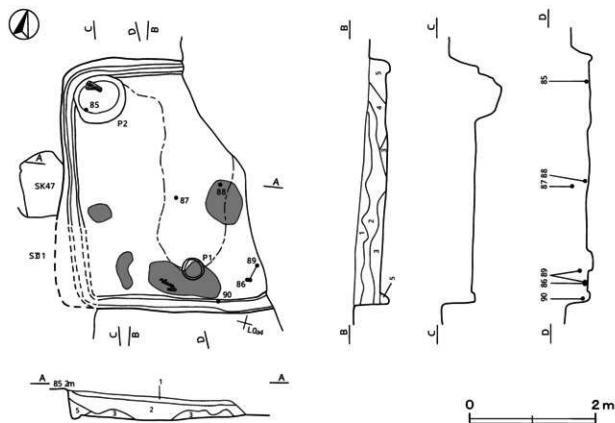
位置 調査区東部のK0J3区、標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第11号住居跡、第47号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状は明確ではないが、確認された範囲は、長軸4.00m、短軸2.87mで、主軸方向はN-21°-Wである。平面形は長方形と推定され、壁高は33~53cmで、直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。床面には炭化材が出土しており、炭化粒子も散在している。壁溝は残存している壁際で確認されている。

ピット 2か所。P1は深さ10cmで、南壁際中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットと考え



第64図 第14号住居跡実測図

られる。P 2は深さ36cmで、コーナー部に位置する貯蔵穴として使われていた可能性がある。

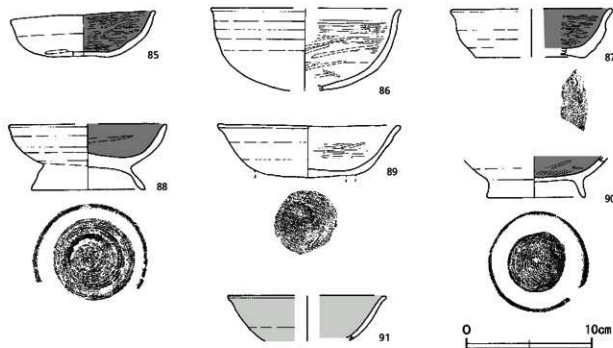
**覆土** 5層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており、人為堆積である。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量  
 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック微量  
 3 黒褐色 ロームブロック・炭化材・焼土粒子微量

**遺物出土状況** 土師器6点(杯3、高台付杯3)、土師器片126点(杯56、高台付杯2、甕68)、須恵器片25点(杯16、高台付杯3、蓋1、瓶2、甕3)、緑釉陶器1点(碗)が出土している。86・89・90は南部、87は中央部の覆土下層からそれぞれ出土している。85は北西部、88は中央部の覆土下層からそれぞれ逆位で出土している。85～88は外面の一部に火熱痕、90は外面、91は内外面にそれぞれ二次焼成の痕跡がみられ、火や熱を受けていることが認められる。

**所見** 床面に炭化材や炭化粒子がみられ、出土している土器にも二次焼成などの火や熱を受けた痕跡が認められることから、焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から10世紀代と考えられる。



第 65図 第 14号住居跡出土遺物実測図

第 14号住居跡出土遺物観察表 第 65図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
85	土師器	杯	11.3	3.7	-	金雲母	に淡褐色	普通	体部内面ヘラミガキ 口縁部外面横ナデ 体部外面クズリ横ナデ	北部下層	100% 口縁部火熱痕 P.L 17
86	土師器	杯	14.8	6.5	-	石英・雲母	明赤褐色	普通	体部外面口クロナデ 体部内面ヘラミガキ	南部下層	33% 底部火熱痕
87	土師器	杯	12.6	3.9	8.4	石英・雲母	に淡褐色	普通	体部内面ヘラミガキ 体部外面口クロナデ	中央部下層	15% 口縁部火熱痕
88	土師器	高台付杯	12.2	5.2	8.8	長石・石英・雲母	に淡褐色	普通	体部外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	中央部下層	70% 口縁部火熱痕
89	土師器	高台付杯	14.4	4.1	-	長石・石英・金雲母	に淡褐色	普通	体部内面ヘラミガキ 体部外面口クロナデ	南部下層	70% P.L 18
90	土師器	高台付杯	-	3.3	7.7	石英・雲母	に淡褐色	普通	体部内面ヘラミガキ 体部外面口クロナデ 底部内面放射状ヘラミガキ 底部回転糸切り後高台貼り付け後ナデ	南部下層	15% 二次焼成
91	緑釉陶器	碗	12.4	3.6	-	緻密	黄褐色	良好	体部外面口クロナデ 内・外面施釉	南部下層	20% 二次焼成

## 第15号住居跡 (第66・67図)

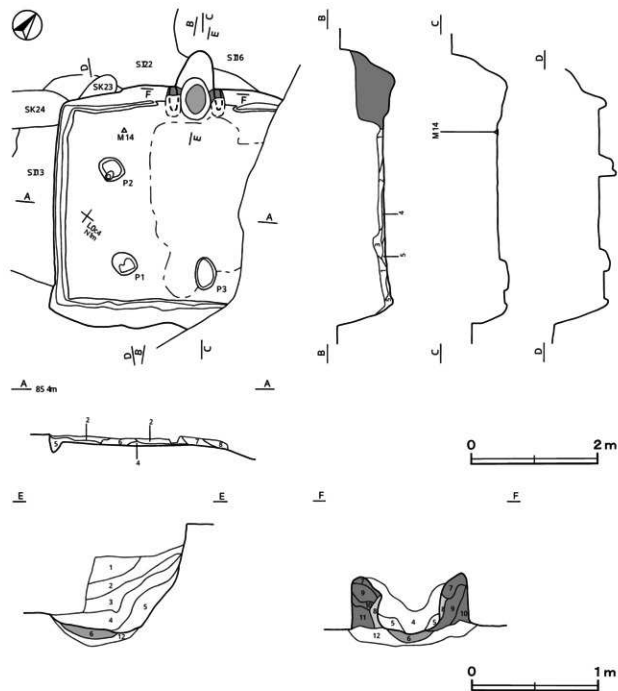
**位置** 調査区東部のL0b4区、標高85mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第16・22号住居跡を掘り込み、第13号住居、第23・24号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が残存していないため規模や形状は明確ではないが、確認された範囲は長軸3.52m、短軸3.37mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-36°-Wである。壁高は50~85cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、竈前面から中央部にかけて踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで110cm、袖部幅91cmである。第7~11層は竈



第66図 第15号住居跡実測図

構築土で、袖部は床面を13cmほど掘り込み、第12層を基部とし、その上に第7～10層を積み重ねて構築されている。火床部は13cmほど楕円形状に掘りくぼめており、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に55cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。

#### 覆土層解説

- |          |                                 |           |                          |
|----------|---------------------------------|-----------|--------------------------|
| 1 極 暗 褐色 | ローム粒子少量、粘土粒子・砂粒微量               | 7 灰 赤 色   | 粘土粒子中量、焼土粒子・砂粒少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗 褐 色  | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量                 | 8 暗 赤 褐色  | 焼土粒子多量、砂粒少量、ローム粒子微量      |
| 3 極暗赤褐色  | ローム粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量   | 9 灰 赤 色   | 粘土粒子多量、砂粒少量、焼土粒子微量       |
| 4 暗 赤 褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量 | 10 灰 赤 色  | 焼土粒子・粘土粒子少量、砂粒微量         |
| 5 暗 赤 褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・砂質粘土粒子少量         | 11 暗 赤 褐色 | 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量      |
| 6 暗 赤 褐色 | 焼土粒子少量、粘土粒子微量                   | 12 暗 赤 褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量         |

**ピット** 3か所。P1・P2は深さ6cm・13cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ5cmで南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

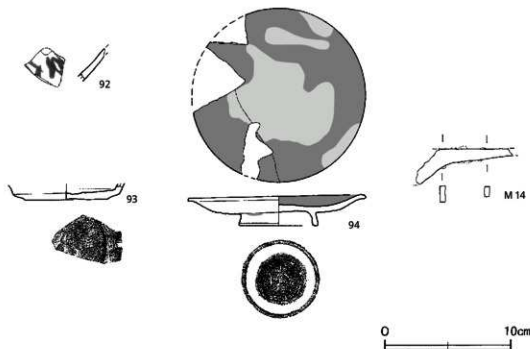
**覆土** 8層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

#### 土層解説

- |         |                   |         |                |
|---------|-------------------|---------|----------------|
| 1 暗 褐 色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐 色   | ロームブロック・炭化物微量  |
| 2 黒 褐 色 | ローム粒子・炭化粒子微量      | 6 暗 褐 色 | ロームブロック少量      |
| 3 灰 褐 色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量     | 7 暗 褐 色 | 焼土粒子中量、ローム粒子微量 |
| 4 暗 褐 色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量    | 8 黒 褐 色 | ロームブロック微量      |

**遺物出土状況** 土師器2点(杯、高台付皿)、土師器片227点(杯61、高台付杯7、甕159)、須恵器1点(杯)、須恵器片69点(杯35、高台付杯1、高盤1、蓋6、瓶3、甕10、鉢13)、金属製品1点(刀子)が出土している。92・94は北部覆土中、M14は北部の床面からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器や重複関係から9世紀後半と考えられる。



第 67 図 第 15 号住居跡出土遺物実測図

第 15 号住居跡出土遺物観察表 第 6 図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土師器	杯	-	26	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	内部内面ナデ	北部覆土中	5% 外面磨蝕↑

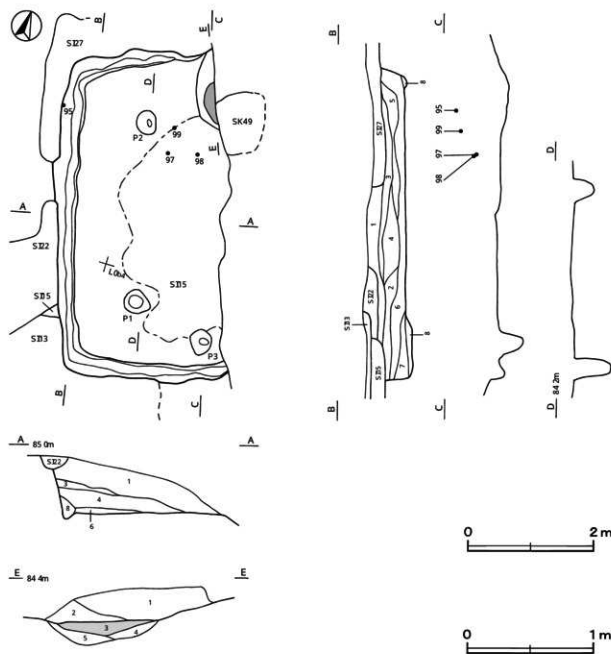
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	須恵系	杯	-	18	86	長石・礫	黄灰	普通	体部外面口クロナデ 底部回転ヘラ切	羅羅土中	10% ヘラ起物！
94	土師器	皿	138	24	62	長石	にがみ	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付け	北部羅土中	50% の外歪未 調査

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M14	刀子	77	29	0.4	13.5	鉄	刃部欠損	北部羅面	

## 第16号住居跡 (第68・69図)

位置 調査区東部のL0 a3区、標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第13号住居の下に位置し、第15・22・27号住居、第49号土坑に掘り込まれている。



第68図 第16号住居跡実測図



**規模と形状** 東部が削平により残存していないため規模や形状が明確でないが、確認された範囲は長軸5.24m、短軸2.80mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-18°-Wである。壁高は50~88cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。確認された範囲は、焚口部から煙道部まで130cmである。火床部は床面を20cmほど掘りくぼめて使用しており、火床面は火を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

- |        |                                     |        |                                       |
|--------|-------------------------------------|--------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土<br>粒子・砂粒少量   | 4 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒<br>少量、炭化粒子微量   |
| 2 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土<br>粒子・砂粒少量   | 5 暗赤褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子・<br>砂粒少量、炭化粒子微量 |
| 3 暗赤褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・<br>炭化粒子・砂粒少量 |        |                                       |

**ピット** 3か所。P1・P2は深さ33cm・60cmで、規模と配置から主柱穴である。P3は深さ39cmで、南壁際に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

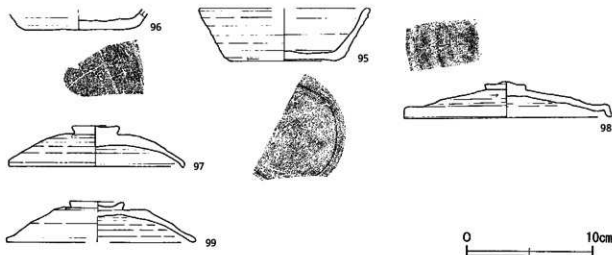
**覆土** 8層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

#### 土層解説

- |       |                       |       |              |
|-------|-----------------------|-------|--------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック微量    |
| 2 褐色  | ロームブロック少量、炭化粒子微量      | 6 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 7 黒褐色 | ローム粒子少量      |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 8 褐色  | ローム粒子中量      |

**遺物出土状況** 土師器片138点(坏24, 高台付坏2, 甕112), 須恵器5点(坏2, 蓋3), 須恵器片62点(坏22, 高台付坏1, 蓋10, 甕19, 甕10), 鉄製品1点(不明)が出土している。遺物は、特に北部から中央部にかけて出土している。95は北西壁際, 97・98・99は中央部の覆土上層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第69図 第16号住居跡出土遺物実測図

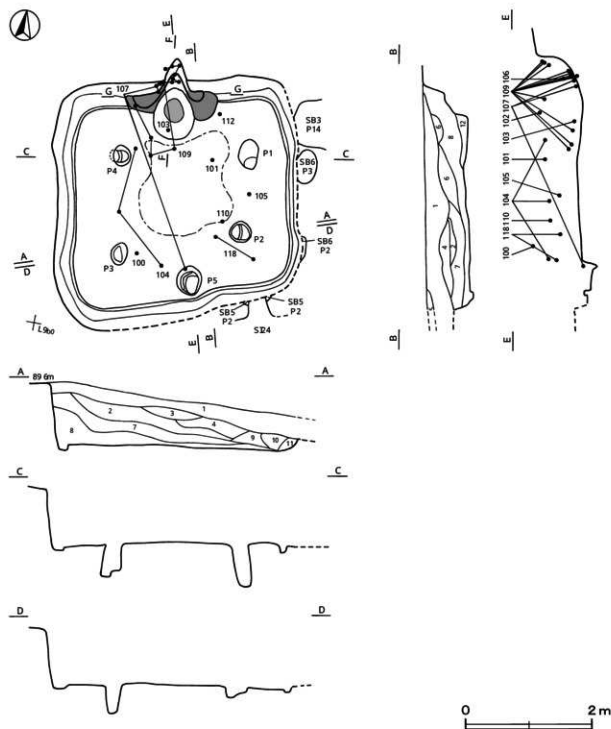
第16号住居跡出土遺物観察表 第69図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
95	須恵器	坏	134	42	95	長石・石英	灰黄	普通	体内内・外壁口ロナデ ヘラ切り後ヘラ削り	底部回転	西部上層	23%
96	須恵器	坏	-	16	97	石英・赤色粒子・ 小礫	浅黄	普通	体内外壁口ロナデ リ線ナデ	底部回転ヘラ切	覆土中	10% ヘラ削跡「」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
97	須恵器	蓋	138	32	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	中央部上層	93%
98	須恵器	蓋	163	29	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部上層	60% ヘラ記号「J」
99	須恵器	蓋	150	32	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 天井部回転ヘラ削り つまみ取り付け	北部上層	50%

## 第17号住居跡（第70～73図）

位置 調査区東部のL9a0区、標高89mの傾斜地に位置している。



第70図 第17号住居跡実測図(1)

**重複関係** 第24号住居跡、第3・5・6号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸3.95m、短軸3.80mの方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は93cmで、直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は全周している。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで130cm、袖幅143cmである。袖部は掘り残した地山面を基部として、第4・6・7層を積み重ねて構築されている。火床面は床面と同じ高さの面を使用し、火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に36cmほど掘り込み、火床面から外傾して立ち上がっている。

**竈土層解説**

- |         |                                 |        |                               |
|---------|---------------------------------|--------|-------------------------------|
| 1 褐色    | ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量          | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量 |
| 2 暗赤褐色  | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色  | ローム粒子・粘土粒子・砂粒微量               |
| 3 暗赤褐色  | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量 | 7 暗褐色  | 粘土粒子少量、ローム粒子・砂粒微量             |
| 4 にぶい褐色 | 粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量     |        |                               |

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ18～66cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ23cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

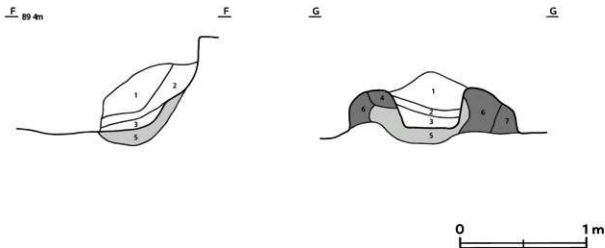
**覆土** 12層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

**土層解説**

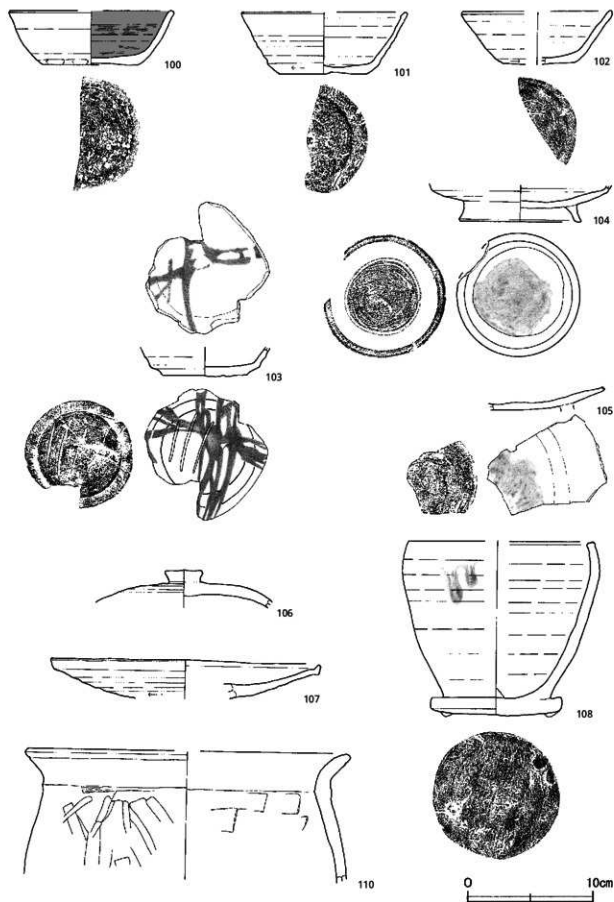
- |         |                    |         |                   |
|---------|--------------------|---------|-------------------|
| 1 褐色    | ローム粒子・鹿沼パミス微量      | 7 褐色    | ロームブロック・鹿沼パミス微量   |
| 2 褐色    | ローム粒子・鹿沼パミス・砂粒微量   | 8 灰褐色   | ローム粒子・鹿沼パミス微量     |
| 3 褐色    | 鹿沼パミス少量、ローム粒子微量    | 9 にぶい褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量     |
| 4 褐色    | ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 10 褐色   | ローム粒子・粘土粒子微量      |
| 5 黒褐色   | ローム粒子微量            | 11 暗褐色  | ローム粒子微量           |
| 6 にぶい褐色 | 鹿沼パミス少量、ローム粒子微量    | 12 灰褐色  | ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |

**遺物出土状況** 土師器3点（杯1，甕2），土師器片201点（杯13，甕188），須恵器8点（杯3，高台付杯2，蓋2，鉢1），須恵器片136点（杯48，高台付杯19，高盤9，蓋44，甕16）が全域に散在した状態で出土している。また、混入した弥生土器片2点（壺）も出土している。100は南部，102は北部のそれぞれ覆土上層，103は竈内の覆土下層から出土している。109は竈の覆土上層から下層と、竈周辺から出土した破片が接合したものである。104は西部，105は東部のそれぞれ覆土上層から出土しており、流れ込みと考えられる。

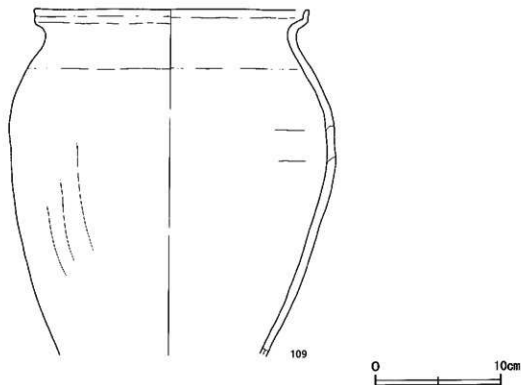
**所見** 時期は、出土土器や重複関係から9世紀中葉から後葉と考えられる。



第71図 第1号住居跡実測図(2)



第72図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第73図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表 第72・73図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
100	土師器	坏	12.8	4.3	7.4	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外周口クロナデ 体部内周へうしガキ 体部下端手押へうし削り 底部回転へうし削り	南部上層	50%
101	須恵器	坏	13.0	4.9	6.8	長石・石英・礫	黄灰	普通	体部内・外周口クロナデ 体部下端回転へうし削り 底部回転へうし削り後ナデ	中央部上層	30%
102	須恵器	坏	11.8	4.2	5.5	長石・石英	灰	良好	体部下端回転へうし削り	北部上層	90% へうし削り
103	須恵器	坏	-	2.4	6.6	長石・石英・小礫	灰	普通	底部回転へうし削り 火押	壺下層	20% へうし削り
104	須恵器	盤	-	2.9	9.5	長石・石英	灰	普通	体部内・外周口クロナデ 底部回転へうし削り後高台削り付	西部上層	60% 底部外周 磨痕 砥石付カ
105	須恵器	盤	-	1.9	-	長石・石英・礫	灰	普通	高台削離	東部上層	5% 底部外周 磨痕 砥石付カ
106	須恵器	蓋	-	2.9	-	長石・石英	灰	普通	天井部回転へうし削り	壺下層	30%
107	須恵器	高壁	21.2	3.1	-	長石・石英	灰	普通	体部外周口クロナデ 体部下端回転へうし削り	壺部・壺下層	30% 自然焼
108	須恵器	控鉢	14.7	13.9	10.3	長石・石英	灰	良好	体部内・外周口クロナデ	南部上層	30%
109	土師器	甕	21.7	27.4	-	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・外周ナデ 体部外周ナデ	北部下層	30% P L 20
110	土師器	甕	25.2	10.1	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外周ナデ	中央部上層	5%

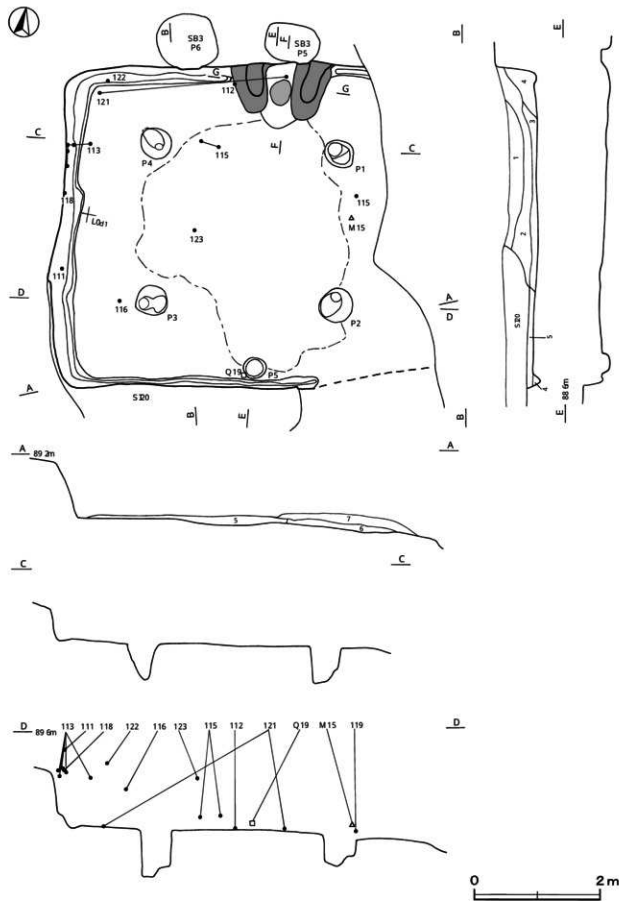
## 第18号住居跡 (第74~78図)

位置 調査区東部のL0c1区、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第7号陥し穴を掘り込み、第20号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸5.20m、短軸5.08mである。平面形は長方形と推定され、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は50~88cmで、直立している。

床 床面は1面確認された。廃絶時の床は平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で



第74図 第18号住居跡実測図(1)

確認されている。第1次の床面は確認されなかったため、掘り方内に4~35cm黒褐色土などを充填し、その上面を床面としていた。第1次の床面は、建て替えが行われた際にはがされたものと思われる。壁溝が西側に確認され、廃絶時より内側に位置することから、住居の拡張が想定される。

**竈** 北壁に付設されている。煙道部の一部が削平されており、焚き口から煙道部まで104cm、袖幅154cmである。袖部は掘り残した地山面を基部とし、第6~10層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。

#### 竈土層解説

1 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子微量	7 黒い黄褐色	粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量
2 暗赤褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
3 麻姑赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	9 暗赤褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量
4 麻姑赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子・砂粒微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子少量、砂粒微量	11 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
6 黒い黄褐色	粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子微量		

**ピット** 9か所。P1~P4は深さ50~75cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ12cmほどで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6~P9は床面をはがした状態で確認され、深さ15~28cmで、規模と配置から建て替え前の主柱穴と考えられる。

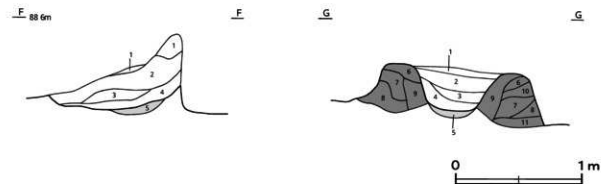
**覆土** 11層に分層される。第1~7層は廃絶時の住居の覆土、第8層は廃絶時の床面、第9~11層は貼り床の構築土である。

#### 土層解説

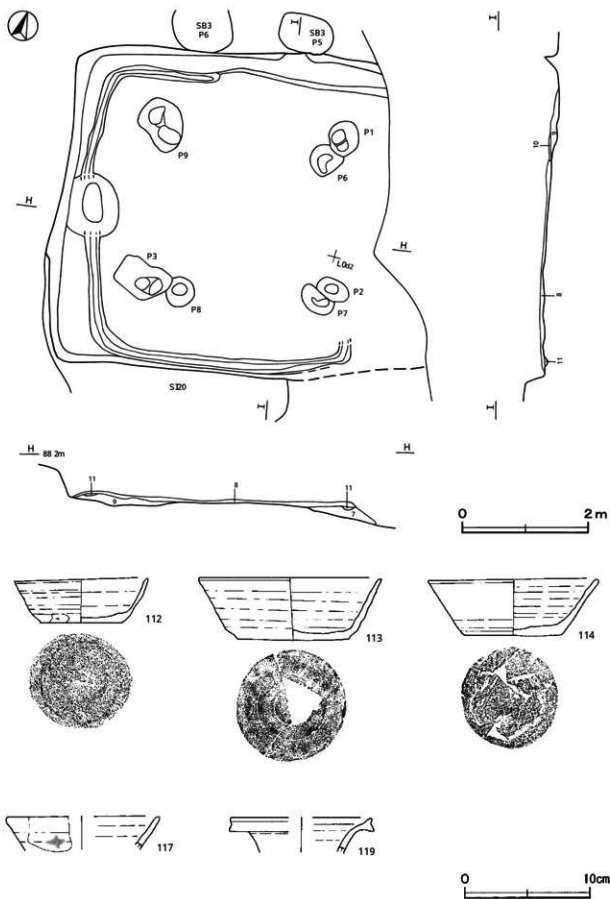
1 暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック少量
2 麻姑褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子微量
3 麻姑褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量	8 黒褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 麻姑褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
5 麻姑褐色	ローム粒子少量	10 黒褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
		11 灰褐色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土器器4点(坏1, 甕3), 土器器片145点(坏6, 甕139), 須恵器9点(坏6, 盤1, 瓶1, 甕1), 須恵器片156点(坏138, 蓋7, 甕11), 土製品1点(支脚), 石器1点(砥石), 金属製品2点(刀子, 鉄斧)がそれぞれ出土している。112は竈の左袖付近, 115は北部の覆土下層, 116は南西部の覆土中層, 119・M15は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。121は北西部の覆土下層と竈内の覆土下層から出土した破片が接合したものである。111・113・118は西部壁際の覆土上層から出土しており、流れ込んだ可能性が高い。

**所見** 貼床の下から、主柱穴や壁溝が確認されたことから、建て替えが行われている。貼床上で確認された主柱穴が、下から確認されたものより外側に位置しており、拡張しているものと想定される。時期は、建て替え後の住居の出土土器から8世紀中葉から後葉と考えられる。

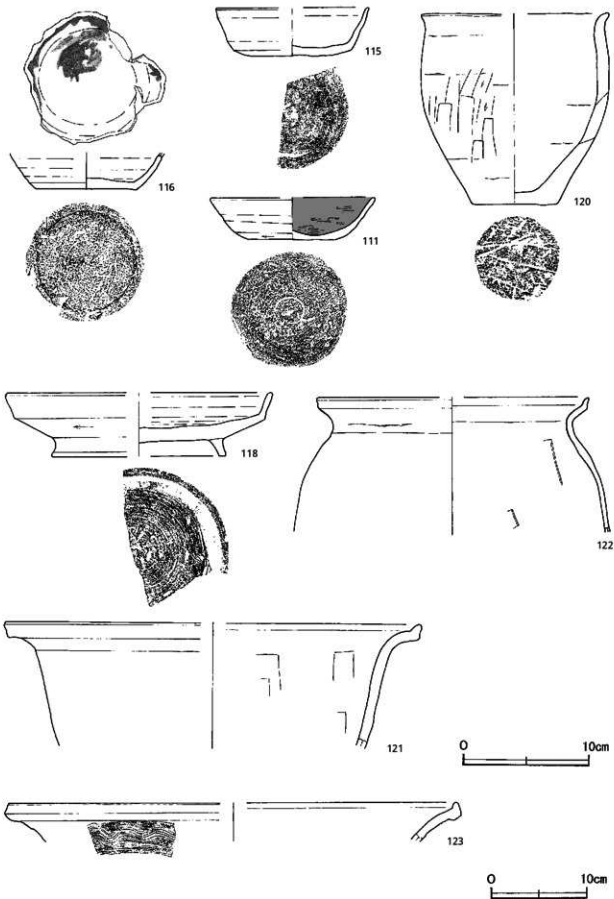


第75図 第18号住居跡実測図(2)

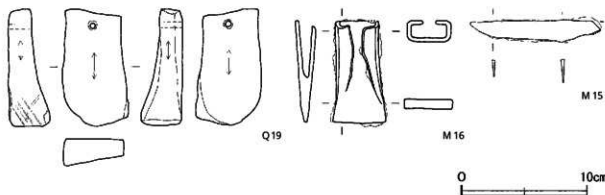


第76図 第18号住居跡・出土遺物実測図





第 77 図 第 18 号住居跡出土遺物実測図 ( 1 )



第78図 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

第18号住居跡出土遺物観察表 第76~78図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
111	土師器	坏	130	33	88	長石・石英・雲母	橙	普通	体部外周口クロナデ 体部内面へラミ刀半 底部回転へラ切り	西部上層	8%
112	須恵器	坏	106	35	80	長石・石英	灰	普通	体部内・外周口クロナデ 底部回転へラ切り後ナデ	北部下層	90% P L 18
113	須恵器	坏	143	50	87	長石・石英・礫	灰オリーブ	普通	体部内・外周口クロナデ 底部回転へラ切り	西部上層	70%
114	須恵器	坏	134	45	77	長石・石英・金雲母	灰黄	普通	体部内・外周口クロナデ 底部下縁回転へラ削り 底部回転へラ切り後ナデ	覆土下層	60%
115	須恵器	坏	118	38	92	長石・石英	黄灰	良好	体部内・外周口クロナデ 底部回転へラ切り	北部下層	30%
116	須恵器	坏	-	30	91	長石・石英	灰	普通	体部内・外周口クロナデ 底部回転へラ削り	西部上層	40% 内周部
117	須恵器	坏	120	26	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外周口クロナデ	覆土中層	外面磨き「大」 <i>n</i>
118	須恵器	甕	209	50	138	長石・石英	黄灰	良好	口縁部内・外周口クロナデ 体部下縁回転へラ削り 底部回転へラ削り後回転へラ削り	西部上層	30%
119	灰陶器	瓶	110	28	-	緑泥	灰	良好	内・外周口クロナデ	東部下層	5%
120	土師器	甕	146	152	65	長石・石英	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面縦方向のケズリ後ナデ 輪襷み痕 底部本葉痕	貼り床 雑土内	70%
121	土師器	甕	32.6	9.9	-	長石・石英・雲母	にんじょう黄	普通	口縁部横ナデ	北部・東下層	10%
122	土師器	甕	214	106	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部内・外周横ナデ 体部内・外周ナデ 体部内面当て真鍮	北部上層	20% 体部外周火焼痕
123	須恵器	甕	48.8	4.1	-	長石・石英	黄灰	普通	口縁部内・外周横ナデ 口縁部重状工具 4本使用 による波状文施文	中央部上層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 19	磁石	93	52	32	149.3	凝灰岩	紙面4面 下げ磁石	南部下層	P L 21

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 15	刀子	104	17	0.3	14.4	鉄	線欠損	東部下層	
M 16	鉄斧	81	39	17	1039	鉄	両刃の有縁鉄斧 刃部は梯形に開く	北部覆土中	

## 第19号住居跡 (第79~81図)

位置 調査区東部のK 9 e0区、標高89mの傾斜地に位置している。

規模と形状 北部が調査範囲外に延び、東部は削平されているため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸5.64m、短軸5.14mで、主軸方向はN-13°-Wである。平面形は方形もしくは長方形と推定される。壁高は98cmで、直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

ピット 3か所。P 1・P 2は深さ34cm・74cmで、規模と配置から主柱穴である。P 3は深さ27cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

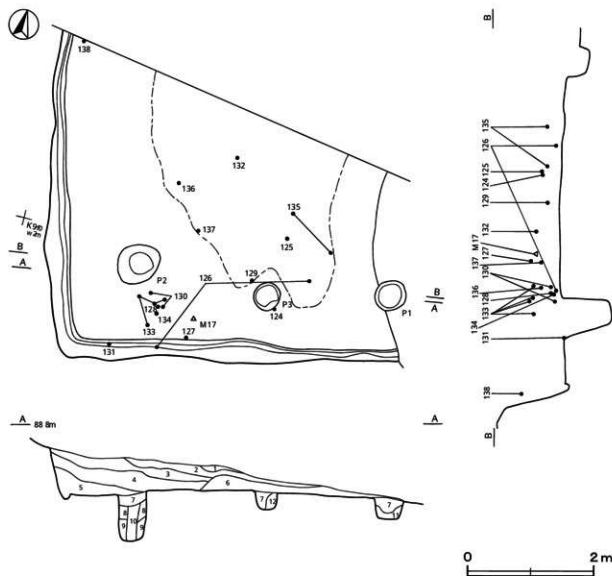
**覆土** 12層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

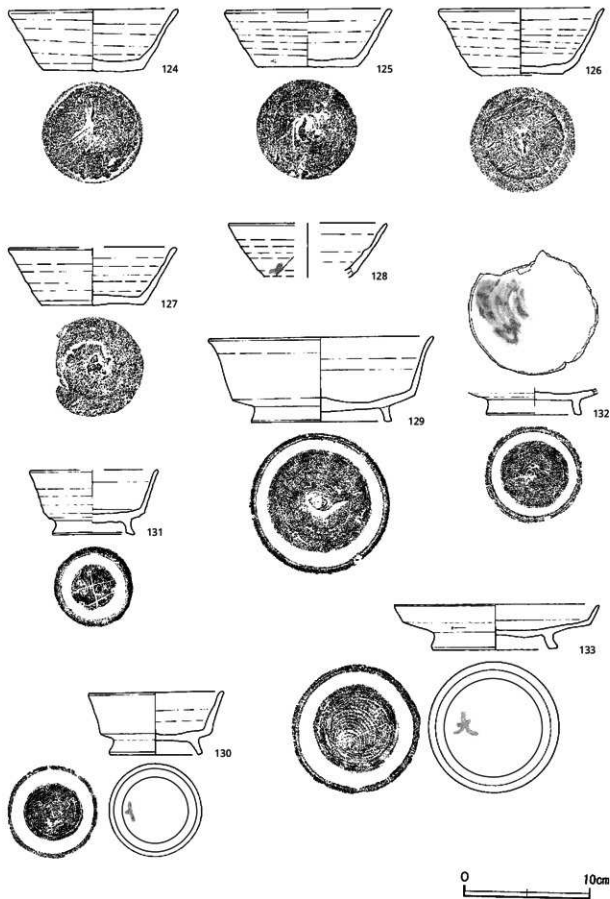
1 極暗褐色	ロームブロック少量	6 暗赤褐色	粘土粒子中量、ロームブロック、炭化粒子・砂粒少量、炭灰バミス微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭灰バミス・粘土粒子・砂粒少量、炭土粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子・炭灰バミス微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭灰バミス微量	8 褐色	ローム粒子少量
4 褐色	ロームブロック・炭灰バミス少量、炭土粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック・炭灰バミス少量
5 褐色	ローム粒子多量、炭灰バミス少量、炭化粒子微量	10 黒褐色	ローム粒子・炭灰バミス微量
		12 褐色	ロームブロック少量

**遺物出土状況** 土師器9点(杯1, 甕8), 土師器片201点(杯14, 甕187), 須恵器21点(杯8, 高台付杯4, 盤3, 蓋3, 瓶1, 短頸壺1, 高杯1), 須恵器片212点(杯153, 高台付杯5, 盤2, 蓋24, 瓶5, 甕23), 金属製品1点(刀子)が出土している。また、混入した陶器片2点(碗)も出土している。土器片は南東部の覆土上層から下層にかけて多く出土している。138は北西部の覆土上層, 133・M17は南部, 132・136は中央部の覆土中層, 124~126・130・131・134は南部の覆土下層からそれぞれ出土している。

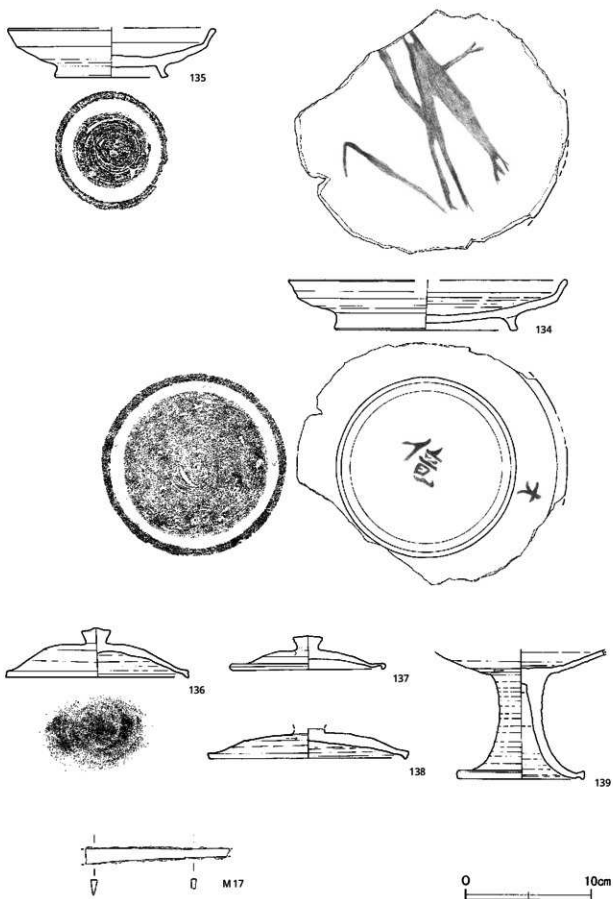
**所見** 須恵器の食器類が多く出土しているのが特徴的である。時期は, 出土土器より8世紀後葉と考えられる。



第79図 第19号住居跡実測図



第 80 图 第 19 号住居跡出土遺物実測図 ( 1 )



第 81 图 第 19 号住居跡出土遺物実測図 ( 2 )

第19号住居跡出土遺物観察表 第80・8図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
124	須臾器	坏	133	50	79	長石・石英・礫	灰黄	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部下層	90% ヘラ記号「J」
125	須臾器	坏	130	46	80	長石・石英・雲母・礫	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部下層	80%
126	須臾器	坏	129	52	82	長石・石英	灰黄	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部下層	70%
127	須臾器	坏	130	45	80	長石・雲母・礫	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	南部中層	60% P.L. 18
128	須臾器	坏	124	42	-	長石・石英	灰黄	普通	体内内・外開口口ロナデ	南部下層	10% 体部外面磨き「J」
129	須臾器	高台付坏	175	67	110	長石・石英・礫	灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	南部下層	80% P.L. 18
130	須臾器	高台付坏	105	50	68	長石・雲母	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	南部下層	底部外面磨き「J」 P.L. 18
131	須臾器	高台付坏	100	51	63	長石・石英	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	南部下層	底部ヘラ記号「キ」 P.L. 18
132	須臾器	高台付坏	-	21	76	長石・石英・礫	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	中央部中層	20% 体部外面磨き「大」
133	須臾器	盤	161	35	100	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ削り後回転ヘラナデ	南部中層	底部外面磨き「大」 P.L. 19
134	須臾器	盤	219	40	143	長石・石英・雲母・白色粒子	灰黄	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ削り 高台貼り付け後ナデ 火傷	南部下層	体部外面磨き「大」 底部外面磨き「大」 P.L. 19
135	須臾器	盤	161	39	90	長石・石英・雲母・礫	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 底部回転ヘラ削り後高台貼り付け	中央部下層	20%
136	須臾器	蓋	144	39	-	長石・礫	灰	普通	体内内・外開口口ロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部中層	天井部内部ヘラ記号「J」 P.L. 19
137	須臾器	蓋	120	27	-	長石・礫	灰	普通	体部外面開口口ロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部下層	90% P.L. 19
138	須臾器	蓋	156	22	-	長石・石英	灰黄	普通	体内内・外開口口ロナデ 天井部回転ヘラ削り	西部中層	70%
139	須臾器	高坏	-	102	100	長石・石英・礫・白色粒子	灰	普通	外開口口ロナデ 体部下端回転ヘラ削り	西部上層	50%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M.17	刀子	114	12	0.05	10.2	鉄	刃部欠損	南部中層	P.L. 21

## 第20号住居跡 (第82図)

位置 調査区東部のL041区、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第18号住居跡、第1号陥し穴を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.62m、短軸3.34mの方形で、主軸方向はN-29°-Wである。壁高は18~80cmで、直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は全周している。

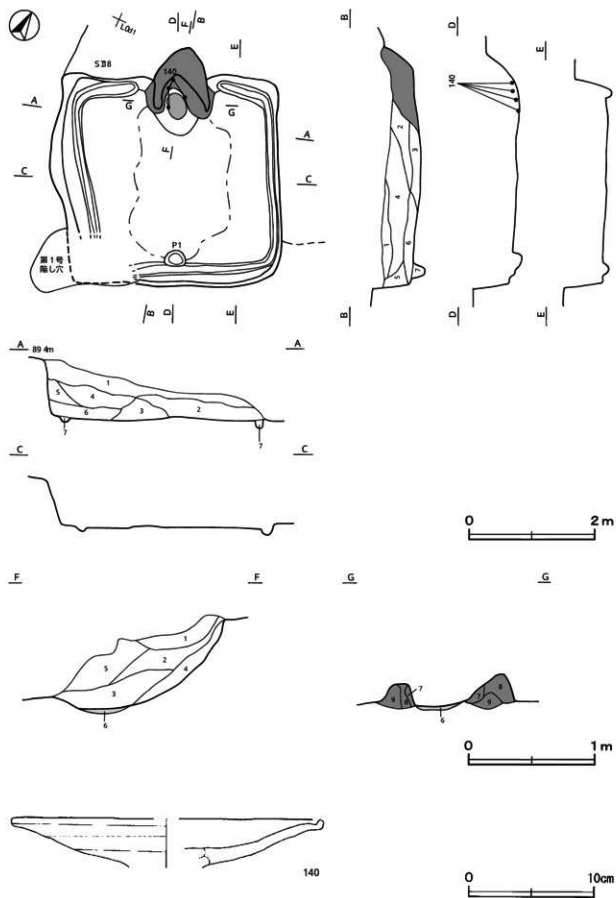
竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで140cm、袖部幅110cmである。袖部は床面と同じ高さの面を基部とし、第7~9層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。

## 竈土層解説

- |         |                                 |          |                                   |
|---------|---------------------------------|----------|-----------------------------------|
| 1 暗 褐 色 | ロームブロック・粘土粒子・砂粒中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 6 暗 赤 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・砂粒微量        |
| 2 暗 褐 色 | ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量        | 7 暗 赤 褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量   |
| 3 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量   | 8 紅・黄褐色  | 粘土粒子・砂粒中量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗 褐 色 | 砂粒多量、ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 9 紅・黄褐色  | 粘土粒子多量、砂粒中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗 褐 色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量   |          |                                   |

ピット 深さ18cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 7層に分層される。ロームブロックを含んだ不規則な堆積状況を示している人為堆積である。



第 82 図 第 20 号住居跡・出土遺物実測図

## 土層解説

1	暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量	4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子・砂粒少量、炭化粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量	6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
			7	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片66点（杯21，甕45），須恵器1点（高盤），須恵器片99点（杯74，高台付杯4，盤3，蓋13，甕5）が出土している。また、混入した弥生土器片3点（壺）も出土している。140は甕の覆土下層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器や重複関係から9世紀前葉と考えられる。

## 第20号住居跡出土遺物観察表 第8図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
140	酒甕	高甕	254	43	-	長石・石英	灰	普通	体部外周口ロケナゲ	覆土下層	40%

## 第21号住居跡（第83～87図）

**位置** 調査区東部のK9f0区、標高86mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第48号土坑を掘り込み、第25・26号住居に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が残存していないため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸6.50m、短軸5.83mである。平面形は方形と推定され、主軸方向は $N-3^{\circ}-W$ である。壁高は105～125cmで、直立している。

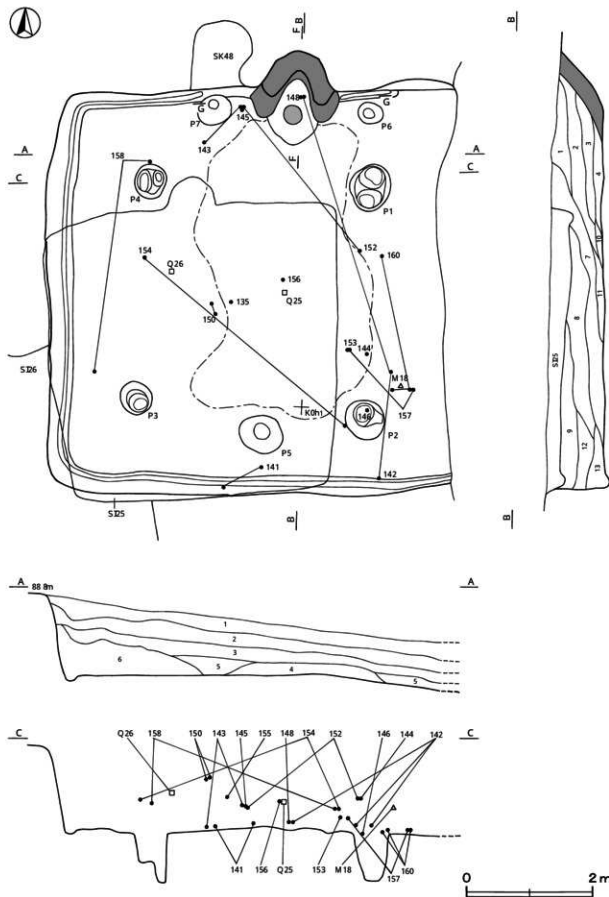
**床** 床は3面あることが確認されている。廃絶時の床は中央部が踏み固められている。第2次面の床面上に、砂粒を含む褐色土（貼床構築土層断面図，第1・4層）を厚さ2～5cm埋土して構築されている。第2次面は、第1次面の上に、ロームブロックや鹿沼パミスを含む褐色土（貼床構築土層断面図，第2・5・6・8層）を厚さ2～7cm埋土して構築している。この第2次面は、南北軸5.44m、東西軸5.34mで、方形と推定される範囲の掘り方内に構築されている。北部はこの面を掘りくぼめて焼土を含む褐色土を埋土しており、赤変硬化しているため、第2次面使用時の甕の跡と考えられる。第1次面は地山面と掘り方内に、厚さ2～7cmの暗褐色土（貼床構築土層断面図，第3・7層）を埋土して構築されている。第2次面の甕の南から焼土を含む褐色土がみられ、第1次面使用時の甕の跡と考えられる。西部の掘り方は地山を20～70cm掘り込んだ土坑状になっており、焼土や砂粒を含む褐色土を充填している。土層から第1次面を掘り込んでいることが確認できるため、第1次面使用時の甕を廃棄したものを掘り方内に充填し、第2次面の床として使用したものと考えられる。

**竈** 3次面の竈は北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで150cm、袖部幅140cmである。袖部は地山を9cmほど掘り込み、第6～8層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を5cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に67cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。

## 土層解説

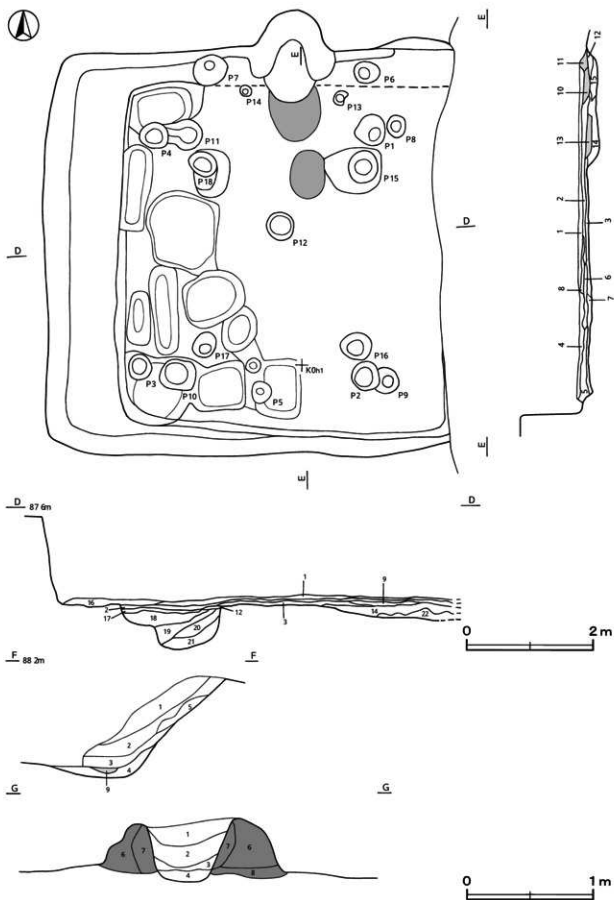
1	褐色	ロームブロック中量、粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5	暗赤褐色	ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土ブロック微量
2	にじみ褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化粒子微量	6	灰褐色	粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子少量
3	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子・砂粒少量	7	赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック・粘土粒子・砂粒微量	8	にじみ褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、砂粒微量
			9	赤褐色	焼土粒子多量、粘土粒子少量、砂粒微量





第 83 图 第 21 号住居跡実測図 ( 1 )

加茂B古墳群



第 84 图 第 21 号住居跡実測図 ( 2 )

**ビット** 18か所。P1～P7は第3次面に伴うものである。P1～P4は深さ74～89cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ45cmほどで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うビットと考えられる。P6・P7は深さ21cm・55cmで、竈の両側に均等に位置していることから竈施設に関するビットの可能性が考えられる。P8～14は第2次面に伴うものである。P8～11は深さ62～83cmで、規模と配置から主柱穴である。P12は深さ45cmで、覆土中に炭化した稲の胚や穎、炭化物などが含まれており、竈周辺の灰などが捨てられたものと考えられる。P13・P14は深さ27cm・40cmで竈の両側に均等に位置することから3次面と同様に竈施設に関するビットの可能性が考えられる。P15～P18は第1次面に伴うものである。深さは43～96cmで規模と配置から主柱穴である。

**覆土** 13層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示している人為堆積である。

#### 土層解説

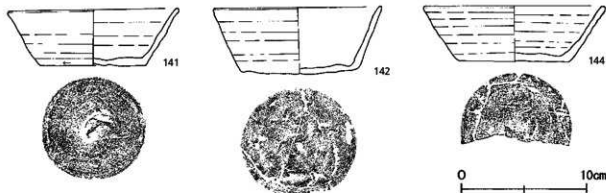
1 褐色	鹿沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量	7 褐色	鹿沼バミス少量、ローム粒子微量
2 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	8 暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス微量
3 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量	9 暗褐色	鹿沼バミス少量、ローム粒子微量
4 暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 褐色	鹿沼バミス・粘土粒子微量	11 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量
6 暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	12 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス・砂粒微量
		13 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス・砂粒微量

#### 貼り床構築土層解説

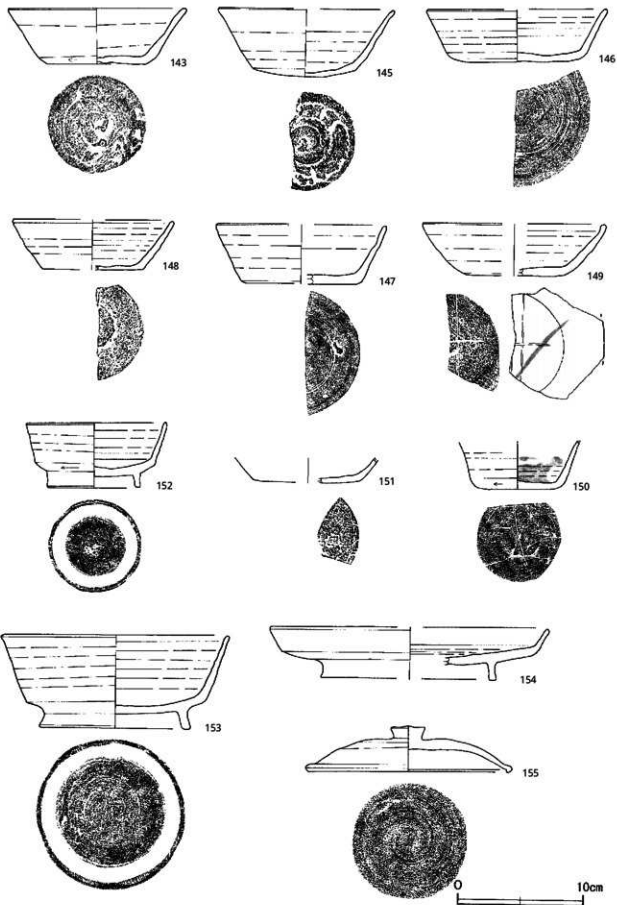
1 褐色	砂粒多量、焼土粒子少量、ロームブロック微量	14 褐色	ロームブロック・焼土粒子・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量
2 にぶい褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	15 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
3 褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	16 にぶい褐色	炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス微量	17 暗褐色	ローム粒子・鹿沼バミス・砂粒少量、焼土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量、鹿沼バミス微量	18 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス・砂粒少量、焼土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・鹿沼バミス・砂粒微量	19 にぶい褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量、焼土粒子・砂粒微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	20 にぶい褐色	鹿沼バミス少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
8 にぶい褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	21 にぶい褐色	焼土粒子・鹿沼バミス少量、ロームブロック・砂粒微量
9 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子・砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子微量	22 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂粒微量		
11 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、鹿沼バミス微量		
12 褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、砂粒微量		
13 黒褐色	焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量、鹿沼バミス微量		

**遺物出土状況** 土師器片396点(坏13, 甕383), 須恵器20点(坏11, 高台付坏2, 盤1, 蓋3, 高坏1, 瓶1), 須恵器片256点(坏219, 高台付坏4, 盤8, 蓋8, 甕17), 灰釉陶器1点(瓶)が全域から出土している。144は東部, 150・155・156・Q25・Q26は中央部の覆土中層, 141・146は南部, 143・145は北部, 153・160は東部の覆土下層からそれぞれ出土している。特に須恵器坏が多く出土している。

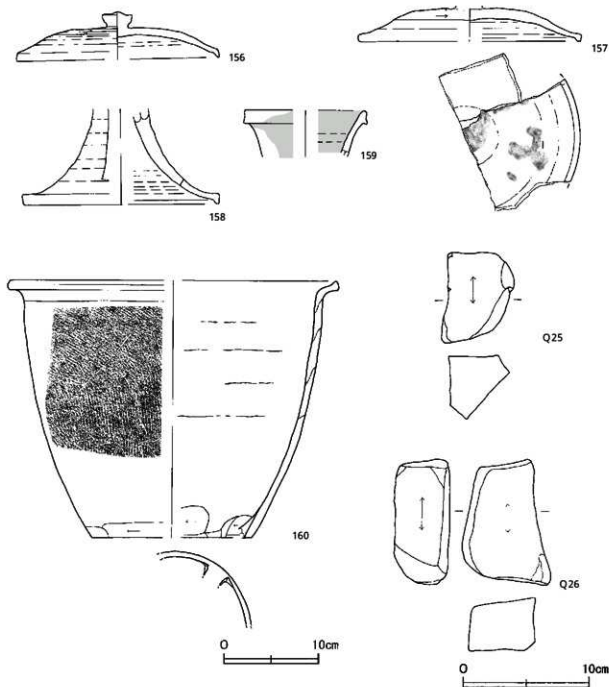
**所見** 規模や出土遺物は, 他の住居とは様相を異にし, 2度の建て替えて拡張している。時期は, 第三次面の覆土や床面から出土した土器から8世紀中葉と考えられる。



第85図 第21号住居跡出土遺物実測図(1)



第 86 図 第 21 号住居跡出土遺物実測図 ( 2 )



第 87 図 第 21 号住居跡出土遺物実測図 ( 3 )

第 2 号住居跡出土遺物観察表 第 85~8 図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
141	須恵器	坏	135	41	83	長石・石英	灰	普通	体内内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部下層	83%
142	須恵器	坏	131	54	92	長石・石英・雲母・矽	灰	普通	体外外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	東部・最下層	83%
143	須恵器	坏	139	44	76	長石・雲母	灰白	普通	体内内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	北部下層	90% P L 18
144	須恵器	坏	142	45	86	長石・石英・雲母	灰オリーブ	普通	体外外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	東部中層	60%
145	須恵器	坏	139	53	80	長石・石英	灰	良好	体内内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り	北部下層	40%
146	須恵器	坏	142	42	112	長石・石英・雲母・矽	灰黄	普通	体内内・外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	南部下層	30%
147	須恵器	坏	134	47	96	長石・石英	灰	普通	体外外面口クロナデ 底部回転ヘラ切り	P 2 掘り方内	40%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
148	須臾器	杯	12.8	4.0	7.9	長石・石英	黄灰	良好	体部外麗口クロナデ 底部回転ヘラ切り	竪下層	33%
149	須臾器	杯	14.2	4.1	8.2	長石	灰	普通	体部内・外麗口クロナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	南部床面	1% ヘラ記号「J」上
150	須臾器	杯	-	4.0	6.7	長石・石英	灰	普通	体部内・外麗口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	中央部中層	5% 底部ヘラ記号「J」内面産物
151	須臾器	杯	-	2.0	8.3	長石・石英	灰	良好	底部回転ヘラ切り後ナデ	南部上層	1% 底部ヘラ記号「J」
152	須臾器	高台付杯	11.0	5.2	7.3	長石・石英・黒色粘土	黄灰	普通	体部内・外麗口クロナデ 体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り 高台削り付け後ナデ	北部下層	70%
153	須臾器	高台付杯	17.8	7.4	11.6	長石・雲母・礫	灰	普通	体部内・外麗口クロナデ 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	東部下層	80%
154	須臾器	蓋	22.1	4.1	13.9	長石・石英・雲母	灰黄	普通	内・外麗口クロナデ 底部回転ヘラ削り後高台削り付け	南部・西部下層	30%
155	須臾器	蓋	15.8	3.7	-	長石・雲母・礫	オリーブ灰	普通	体部外麗口クロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部中層	100% 内面ヘラ記号「J」P.L.19
156	須臾器	蓋	16.0	3.8	-	長石・石英	灰	普通	内・外麗口クロナデ 天井部回転ヘラ削り	中央部中層	50%
157	須臾器	蓋	17.4	2.7	-	長石・石英	灰黄	普通	体部内・外麗口クロナデ	東部下層	30% 内面産物 転用破片
158	須臾器	高盤	-	7.6	15.2	長石・石英・雲母	灰	普通	脚部内・外麗口クロナデ 脚部3意カ	西部下層	1%
159	灰陶器	瓶	9.4	3.7	-	長石・石英	灰白	普通	内・外麗口クロナデ	P.3 削り方内	5% 自然産
160	須臾器	瓶	34.4	27.3	17.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	輪轆み産	東部下層	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q.25	磁石	7.2	5.8	5.0	230	砂岩	紙面1面	中央部中層	
Q.26	磁石	10	7.1	4.4	430	砂岩	紙面2面	中央部中層	

## 第22号住居跡（第88図）

**位置** 調査区東部のL0 b3区、標高85mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第16号住居跡を掘り込み、第13・15号住居に掘り込まれており、第23・24号土坑の下に位置する。

**規模と形状** 東部・南部が残存していないため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸3.75m、短軸2.90mである。平面形は長方形と推定される。壁高は65cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、竈前面が踏み固められている。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで117cmである。袖部は確認されなかった。火床部は床面と同じ高さで、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に60cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。

### 竈土層解説

- 1 褐色 色 ローム粒子微量 4 褐色 色 ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量  
2 暗褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量  
3 灰褐色 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

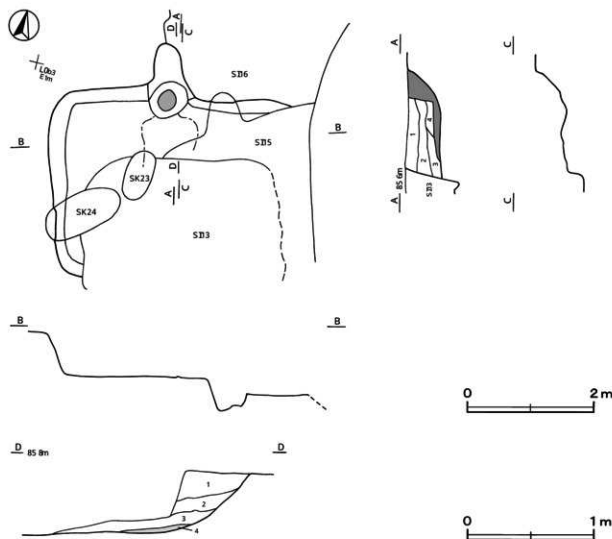
**覆土** 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

### 土層解説

- 1 黒褐色 色 ロームブロック・炭化粒子少量 3 暗褐色 色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 色 ローム粒子少量 4 暗褐色 色 ローム粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片63点（杯10、甕53）、須恵器片20点（杯5、蓋5、瓶1、鉢9）、鉄滓4点が出土している。

**所見** 時期は、重複関係や出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第 88 図 第 22号住居跡実測図

## 第23号住居跡 (第89・90図)

**位置** 調査区東部のK9J0区、標高89mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第5号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸3.24m、短軸3.06mの方形で、主軸方向はN-13°-Wである。壁高は68~76cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 平坦で、竈前面が踏み固められている。壁溝は全周している。

**竈** 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで116cmである。火床部は床面を6cmほど掘りくぼめ、火床面は火を受けて赤変している。

## 竈土層解説

1 にぶい褐色 焼土粒子・粘土粒子微量

2 褐色 ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

3 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量

4 極暗赤褐色 粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

**ピット** 深さ22cmで、南壁際の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットである。

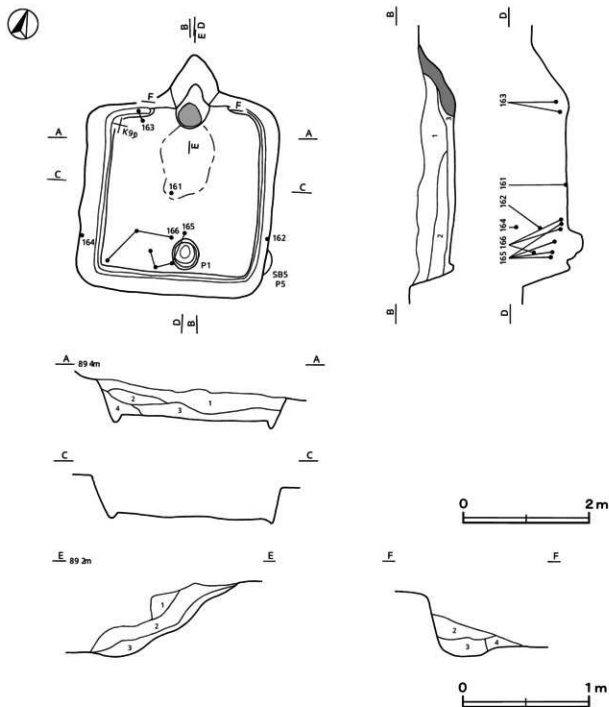
**覆土** 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

- |       |                       |       |                      |
|-------|-----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒 | 3 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス少量、砂粒少量 |
| 2 褐色  | 子・鹿沼バミス微量             | 4 褐色  | 鹿沼バミス中量、ロームブロック・砂粒少量 |
| 2 褐色  | ロームブロック・鹿沼バミス少量、砂粒少量  |       |                      |

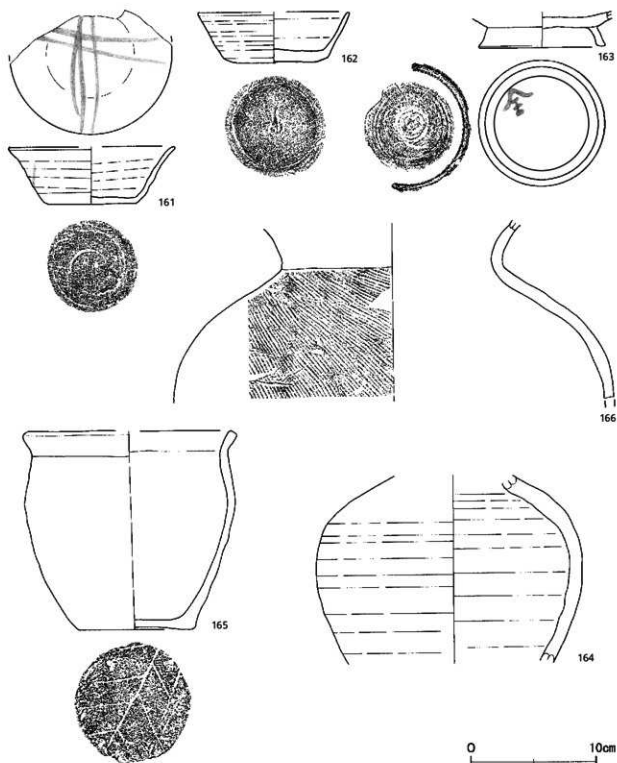
**遺物出土状況** 土師器1点(甕), 土師器片89点(杯5, 甕84), 須恵器5点(杯2, 高台付杯1, 瓶1, 甕1), 須恵器片46点(杯29, 高台付杯3, 盤1, 蓋6, 甕1, 高杯2, 鉢4)が出土している。163は北部の覆土下層, 165は南部の覆土中層, 166は南西部の覆土下層からそれぞれ出土している。

**所見** 時期は, 出土土器より9世紀前葉と考えられる。



第 89 図 第 23 号住居跡実測図





第 90 図 第 2 号住居跡出土遺物実測図

第 2 号住居跡出土遺物観察表 第 90 図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
161	須恵器	鉢	130	46	73	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ ラ切り後ヘラ削り 火押	底部回転ヘ ラ切り後ヘラ削り	中央部床面	60%
162	須恵器	鉢	120	40	82	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ ラ切り後ナデ	底部回転ヘ ラ切り後ナデ	東部中層	60%
163	須恵器	高台付鉢	-	28	100	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼り付付		北部下層	底部外面磨き 「金」 P.L.20

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
164	須恵器	瓶	-	148	-	長石・石英	灰	普通	体部内・外周口ノナデ	西部上層	30% 自然葬 P L 20
165	土師器	小形甕	160	148	90	長石・石英・雲母	に濃い橙	良好	口縁部内・外周縁ナデ 体部内・外周 ナデ 底部本層厚	南部中層	40% P L 20
166	須恵器	甕	-	143	-	長石・石英・雲母	灰	普通	縁部外周縁ナデ 体部外周叩き目	西部下層	10%

### 第24号住居跡 (第91・92図)

**位置** 調査区東部のL 9 b0区、標高89mの傾斜地に位置している。

**重複関係** 第28号住居跡、第5号掘立柱建物跡を掘り込み、第17号住居に掘り込まれている。

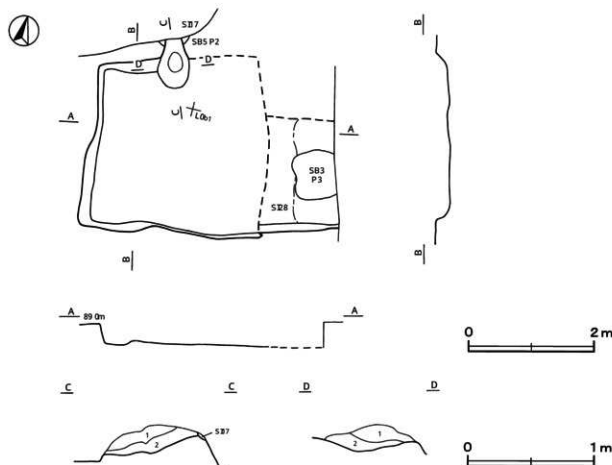
**規模と形状** 東壁が残存していないため規模や形状が明確ではないが、確認された範囲は、長軸2.90m、短軸2.90mである。平面形は方形と推定され、主軸方向はN-14°-Wである。壁高は20~31cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** 全体的に平坦で軟弱である。

**竈** 北壁中央部に付設されている。煙道部の一部が掘り込まれており規模は明確ではないが、確認された範囲は、焚口部から煙道部まで77cmである。火床部は床面と同じ高さで、赤変した部分は認められなかった。

#### 竈土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒 少量、炭化粒子少量  
2 褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量



第91図 第24・28号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片11点(杯2, 甕9), 須恵器片4点(杯)が出土している。

所見 床面が露出した状況で確認されたため, 覆土は確認できなかった。時期は, 出土土器や重複関係から9世紀前葉と考えられる。



第92図 第24号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡出土遺物観察表 第93図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
167	須恵器	杯	13.1	3.8	6.6	赤土・石英・赤色 長石・粘土	にぶい褐色	普通	体内内・外面口コノアデ 体部下縁田 転ヘラ削り 底面田転ヘラ切り	覆土中	30%

### 第25号住居跡 (第93・94図)

位置 調査区東部のK9g0区で, 標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第21・26号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.65m, 短軸4.60mの方形で, 主軸方向はN-9°-Wである。壁高は40~55cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。壁溝は全周している。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで127cm, 袖幅95cmである。袖部は, 床面と同じ高さの面を基部とし, 第5~8層を積み重ねて構築されている。火床部は床面を10cmほど掘りくぼめ, 火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に45cmほど掘り込み, 第8層を貼り付けて構築している。

#### 覆土層解説

1 にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	6 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
2 にぶい褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量	7 にぶい褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
3 褐色	焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	8 にぶい褐色	粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子・砂粒微量
4 暗赤褐色	焼土粒子中量, ローム粒子・炭化粒子微量		
5 にぶい褐色	粘土粒子中量, 砂粒少量, ローム粒子・炭化粒子微量		

ビット 5か所。P1~P4は深さ42~74cmで, 規模と配置から主柱穴である。P5は深さ19cmで, 南壁際の中央部に位置していることから, 出入り口施設に伴うビットである。

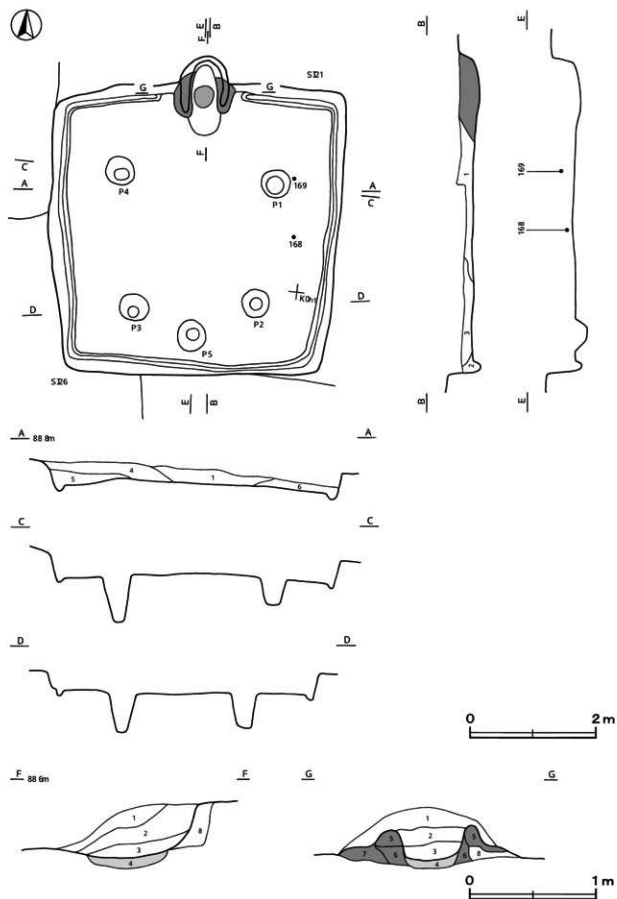
覆土 6層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示しており, 人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

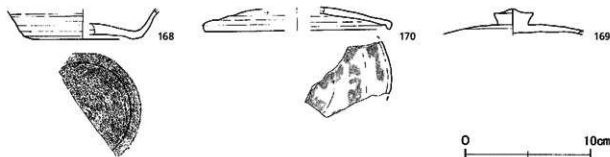
1 にぶい褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	4 にぶい褐色	炭化粒子・鹿沼バミス微量
2 褐色	ローム粒子微量	5 褐色	焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
3 褐色	ローム粒子・鹿沼バミス少量	6 にぶい褐色	炭化粒子・鹿沼バミス微量

遺物出土状況 土師器片101点(杯1, 甕100), 須恵器3点(杯1, 蓋2), 須恵器片91点(杯53, 高台付杯4, 蓋20, 瓶1, 甕2, 高杯2, 鉢9)が出土している。また, 混入した弥生土器片1点(壺)も出土している。168・169は東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 重複関係や出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第 93 图 第 25 号住居跡実測図



第94図 第25号住居跡出土遺物実測図

第25号住居跡出土遺物観察表 第94図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
168	須恵器	環	-	24	94	長石・石英	灰	普通	底部回転ヘラ作り	東部下層	20%
169	須恵器	蓋	-	22	-	長石・石英・雲母	灰	普通	体部内・外側口ロナデ	東部下層	20%
170	須恵器	蓋	146	18	-	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外側口ロナデ 天井回転ヘラ作り	西部下層	20% 内面黒炭層付

## 第26号住居跡 (第95・96図)

位置 調査区東部のK9h9区、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第21号住居跡を掘り込み、第25号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.00m、短軸4.82mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁高は70~110cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝は残存している壁際で確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで127cm、袖部幅151cmである。袖部は床面と同じ高さの面を基部とし、第5・6層を積み重ねて構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に73cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。

## 竈土層解説

1	褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒少量	5	赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子少量
2	にぶい褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒少量	6	にぶい褐色	粘土粒子中量、砂粒中量、ローム粒子少量
3	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・炭屑パミリス・砂粒少量	7	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、砂粒少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
4	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭屑パミリス・砂粒少量、炭化粒子少量			

ピット 5か所。P1~P4は深さ19~69cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ30cmで、南壁際の中央部に位置していることから出入り口施設に伴うピットである。

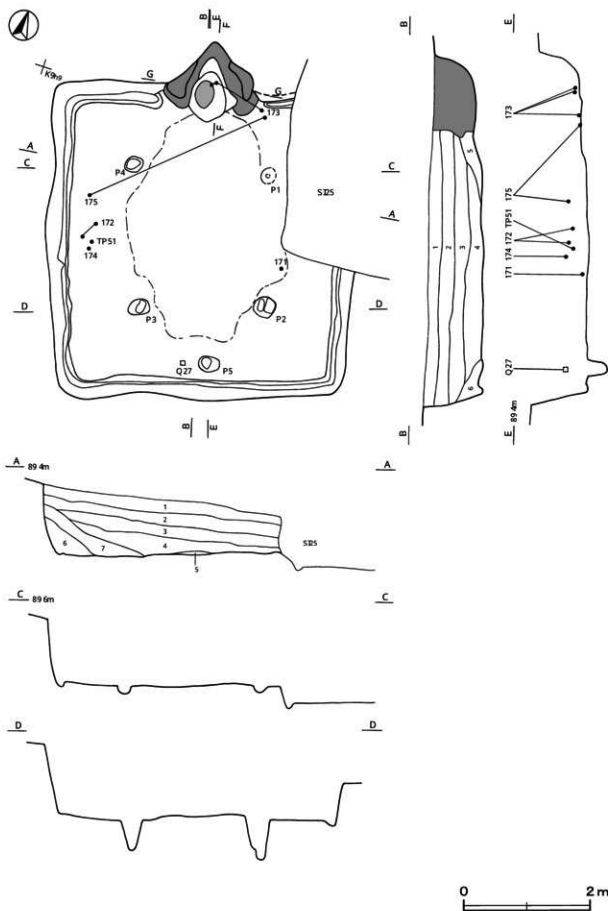
覆土 7層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子少量	5	にぶい褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量
2	にぶい褐色	ローム粒子・砂粒少量	6	褐色	炭屑パミリス少量、ローム粒子・砂粒少量
3	にぶい褐色	砂粒少量、ローム粒子少量	7	褐色	ローム粒子・炭屑パミリス少量、炭化粒子少量
4	にぶい褐色	ローム粒子・炭化粒子・砂粒少量			

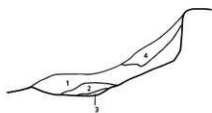
遺物出土状況 土師器2点(高台付杯、甕)、土師器片222点(杯3、甕219)、須恵器3点(杯1、盤2)、須恵器片152点(杯86、高台付杯7、高盤8、蓋28、甕12、鉢11)、鉄滓5点が出土している。171は東部の覆土下層から出土している。173は竈内の覆土下層と右袖付近から出土した破片が接合したものである。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第95图 第26号住居跡実測图

F 89.2m



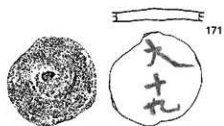
F

G

G



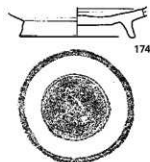
0 1m



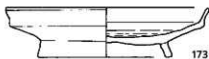
171



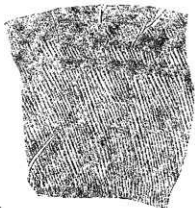
172



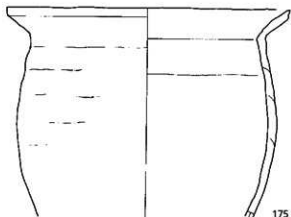
174



173



TP51



175



Q27

0 10cm

第 96 图 第 26 号住居跡・出土遺物実測図

第26号住居跡出土遺物観察表 第96図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
171	須恵器	坏	-	10	-	長石・石英・雲母	灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	東部下層	底部観察「大十九」P.L.20
172	土師器	高台付坏	144	54	98	長石・雲母	黄橙	普通	体部内・外部ナデ	西部中層	70%
173	須恵器	盤	161	40	106	長石・石英	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後ナデ	最下層	90%
174	須恵器	盤	-	24	91	長石・石英	黄灰	普通	体部内・外開口ウケナデ 底部回転ヘラ切り 高台貼り付け後ナデ	西部中層	30% 底部へう記号「1」
175	土師器	甕	224	165	-	長石・石英・雲母・棕色粘土	に3%以上	不良	口縁部内・外麗ヨコナデ 軸横み履	西部下層	30%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP51	須恵器	甕	-	126	-	長石・石英	暗灰黄	普通	体部外麗斜位の平行可き 体部内麗ナデ 当て具履	西部下層	5%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q27	紡錘車	46	28	0.7	43.7	粘板岩 灰色		南部中層	

## 第27号住居跡 (第97・98図)

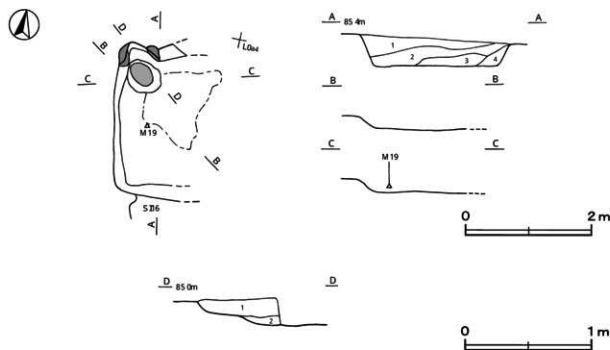
位置 調査区東部のL0 a3区、標高85mの傾斜地に位置している。

重複関係 第16号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが、長軸2.42m、短軸1.70mが確認され、主軸方向はN-40°-Wである。平面形は方形と推定され、壁高は16~18cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、竈前面が踏み固められている。

竈 北西コーナー部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで87cmである。右袖の一部が残存しており、粘土を含む極暗褐色土で構築されている。火床部は床面と同じ高さで、火床面は火を受けて赤変している。煙道部は壁外に17cmほど掘り込み、外傾して立ち上がっている。



第97図 第27号住居跡実測図



## 覆土層解説

- 1 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子・砂粒少 2 極暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子・砂粒微量  
 量、炭化粒子微量

覆土 4層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

- 1 極暗赤褐色 ロームブロック少量  
 2 極暗褐色 ロームブロック少量  
 3 極暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
 4 極暗褐色 ロームブロック・粘土粒子・砂粒少量、焼土粒子・炭化粒子

遺物出土状況 土師器1点(杯), 土師器片152点(杯43, 甕109), 須恵器片42点(杯31, 甕11), 金属製品2点(刀子, 釘), 鉄滓1点が出土している。M19は西部の覆土中層から出土している。ほとんどが細片であるが、須恵器片より土師器片の出土が多い。

所見 時期は、重複関係や出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第98図 第27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡出土遺物観察表 第98図

番号	種別	器種	口径	径高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
176	土師器	杯	132	32	79	長石・石英・雲母	橙	普通	底部回転ヘラ切り	覆土中	70%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴		出土位置	備考
M19	刀子	67	14	0.3	67	鉄	刀身・茎一部欠損	両側	西部中層	

## 第28号住居跡 (第91図)

位置 調査区東部のL0 b1区、標高89mの傾斜地に位置している。

重複関係 第24号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部が残存していないため規模や形状が明確でないが、長軸1.91m、短軸1.32mが確認されている。

床 平坦で、東部が踏み固められている。

所見 硬化面に焼土の散布が若干みられたため住居と判断した。時期は、重複関係から8世紀代と考えられる。

表9 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸 m 短軸	壁高 cm	床面	壁溝	内部施設				土	主な出土遺物	時期	備 考 重複関係 古 新
								主柱穴	出入口	ピット	竪穴				
11	L0 a2	N - 12 - W	方形	3.48 3.38	64-82	平壇	一部	-	1	5	1	-	人丸 土師器 須恵器 土製器	8世紀後半	SK29-47 本誌 5 J14, SD9 9
12	K0 f3	N - 17 - W	方形・ 幾方形	4.06 3.80	72	平壇	一部	-	1	-	1	-	板瓦 土師器 須恵器	9世紀後半	

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 m		築高 cm	坪面	築造	内部施設			墓主	主な出土遺物	時期	備考 調査報告 古 新			
				長軸	短軸				注柱穴	出入口	ピット					竪	割覆穴	
13	L 0 b3	N - 17 - W	方形	332	330	73-88	平壇	ほぼ全周	4	1	-	1	-	自然	土師器 土製陶 土製器 金銅製品	9世紀末- 10世紀初葉	SD15-16-22 本跡 SK23 24	
14	K 0 j3	N - 21 - W	長方形	400	287	33-52	平壇	全周	-	-	2	-	-	人為	土師器 須恵器 金銅製品	10世紀代	SD15K47 本跡	
15	L 0 b4	N - 36 - W	方形	352	337	50-85	平壇	全周	2	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器 金銅製品	9世紀後半	SD16 23 本跡 SD15SK23 24	
16	L 0 a3	N - 18 - W	方形	524	280	50-88	平壇	全周	2	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器 金銅製品	8世紀後半	本跡 SD13 15 22 27SK49	
17	L 9 a0	N - 15 - W	長方形	395	380	93	平壇	全周	4	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀中-後半	SD24SD3 5 6 本跡	
18	L 0 c1	N - 13 - W	長方形	520	508	50-84	平壇	全周	8	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器 土製陶 土製器 石製品 金銅製品	8世紀中-後半	TP7 本跡 SD0 SD3	
19	K 9 e0	N - 13 - W	扇形跡	564	514	98	平壇	全周	2	1	-	-	-	自然	土師器 須恵器 金銅製品	8世紀後半		
20	L 0 d1	N - 20 - W	方形	362	334	18-80	平壇	全周	-	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀前半	SD18TP1 本跡	
21	K 9 f0	N - 3 - W	方形	650	583	105-125	平壇	全周	12	1	5	1	-	人為	土師器 須恵器 石製品	8世紀中葉	SK48 本跡 SD25 26	
22	L 0 b3	N - 17 - W	長方形	375	290	65	平壇	-	-	-	-	1	-	自然	土師器 須恵器	9世紀中葉	SD16 本跡 SD13 1 5SK23 24	
23	K 9 j0	N - 13 - W	方形	324	306	68-76	平壇	全周	-	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器	9世紀前半	SD5 本跡	
24	L 9 b0	N - 14 - W	方形	290	290	20-31	平壇	-	-	-	-	1	-	-	土師器 須恵器	9世紀前半	SD28SD5 本跡 SD7	
25	K 9 g0	N - 9 - W	方形	465	460	40-55	平壇	全周	4	1	-	1	-	人為	土師器 須恵器	9世紀後半	SD21 26 本跡	
26	K 9 h0	N - 16 - W	方形	500	482	70-110	平壇	全周	4	1	-	1	-	自然	土師器 須恵器	8世紀後半	SD12 本跡 SD25	
27	L 0 a3	N - 40 - W	方形	242	170	16-18	平壇	-	-	-	-	1	-	自然	土師器 須恵器 金銅製品	10世紀中葉	SD16 本跡	
28	L 0 b1	-	不明	191	132	-	平壇	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8世紀代	本跡 SD4SD3

## (2) 掘立柱建物跡

## 第1号掘立柱建物跡 (第99区)

位置 調査区東部のK 0 h3区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第4号掘立柱建物、第1・2号柵列、第10号溝、第20号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 東部が残存していないため規模と構造は明確ではない。桁行3間、梁行1間が確認され、側柱建物跡と推定される。桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は桁行6.9m (23尺)、梁行2.1m (7尺)以上で、面積は14.49㎡と推定される。柱間寸法は、北妻から桁行2.4m (8尺)、2.1m (7尺)、2.4m (8尺)で、梁行は2.1m (7尺)を基調としている。

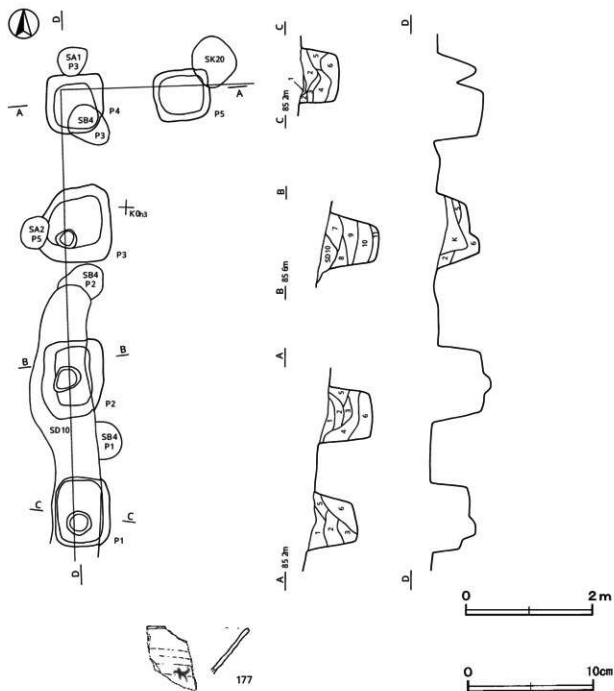
柱穴 5か所。平面形は隅丸長方形で、規模は長径90~118cm、短径81~95cmである。深さは66~90cmで、断面形は逆台形である。土層断面中の第1~3層は柱抜き取り後の覆土である。その他の層は埋土である。

## 土層解説 (各柱穴共通)

1	暗褐色	ロームブロック中量	7	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・鹿沼バミス少量	8	黒褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量、炭化粒子微量
3	褐色	ロームブロック中量、鹿沼バミス少量	9	灰褐色	ロームブロック微量
4	褐色	鹿沼バミス多量、ロームブロック少量	10	暗褐色	ロームブロック少量、砂粒微量
5	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量	11	褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量
6	暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量			

遺物出土状況 土師器片44点(坏2, 斐42), 須恵器1点(坏), 須恵器片63点(坏51, 高台付坏1, 蓋4, 瓶3, 斐4)が各柱穴から出土している。また混入した縄文土器片2点, 鉄滓1点も出土している。

所見 時期は、重複関係及び出土土器から8世紀後半と考えられる。



第99図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

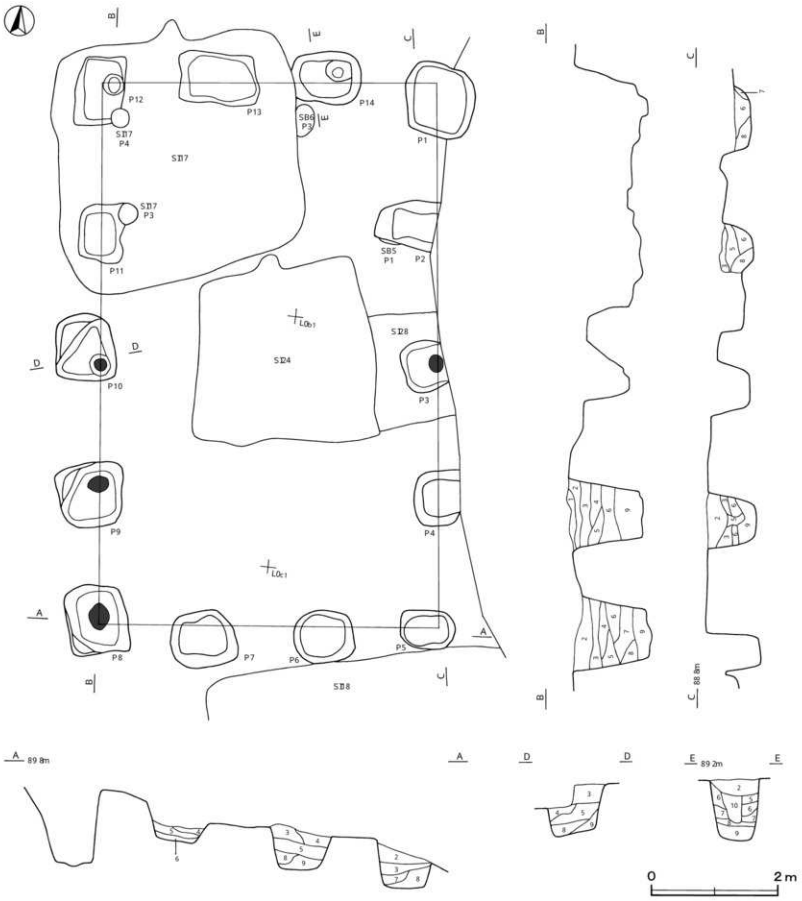
第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 第99図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
177	土師器	坏	-	36	-	長石・雲母	灰黒	普通	体部内・外面口ロナデ	P 4 探査取り掘	体部外面黒書「次」P L 20

## 第3号掘立柱建物跡 (第100図)

位置 調査区東部のL 9 b0区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第18・28号住居跡、第5・6号掘立柱建物跡を掘り込み、第17・24号住居に掘り込まれている。



第100图 第3号掘立柱建物跡実測图

**規模と構造** 桁行4間、梁行3間の側柱建物跡で、桁行方向がN-6°-Wの南北棟である。規模は桁行8.7m、梁行5.4mで、面積は46.98㎡である。柱間寸法は、桁行は北から2.25m（7.5尺）、1.95m（6.5尺）、1.95m（6.5尺）、2.25m（7.5尺）で、梁行は1.8m（6尺）を基調としている。

**柱穴** 14か所。平面形は長方形および隅丸長方形で、規模は長軸82~150cm、短軸60~121cmである。深さは50~120cmで、断面形は逆台形である。第10層は柱痕に相当し、締まりの弱い黒褐色土である。その他の層は埋土で、ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土が互層をなしている。深く掘り込まれているP8~10には、掘り方のコーナー部に段差をもつ。掘り込みの際にこの段を足場として利用していたものと考えられる。

**土層解説（各柱穴共通）**

1 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子微量	6 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
2 褐色 ロームブロック微量	7 褐色 ロームブロック中量、鹿沼パミス微量
3 暗褐色 ロームブロック微量	8 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
4 褐色 ロームブロック少量	9 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量
5 黒褐色 ロームブロック少量	10 黒褐色 ロームブロック微量

**遺物出土状況** 土師器片12点（坏2、甕10）、須恵器片7（坏6、蓋1）が各柱穴から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

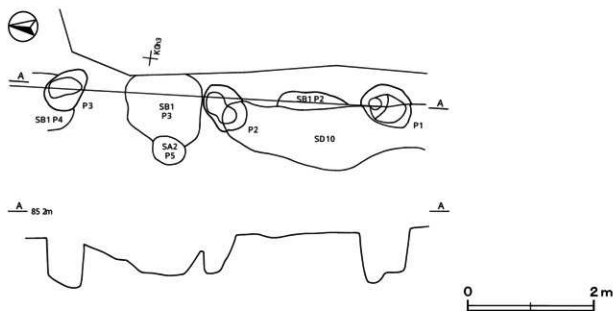
**所見** 桁行4間、梁行3間の大形の掘立柱建物跡である。斜面に築かれており、現在水田がある平地との比高差は10m以上あることから、倉庫としてみることは難しく、居宅と想定される。時期は、重複関係から8世紀後葉から9世紀初頭と考えられる。

**第4号掘立柱建物跡（第101図）**

**位置** 調査区東部のK 0 h3区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第1号掘立柱建物跡を掘り込み、第10号溝に掘り込まれている。

**規模と構造** 東部が残存していないため規模と形状が明確でなく、桁行2間のみが確認されている。西側に柱



第101図 第4号掘立柱建物跡実測図

穴は確認できないため、東側に展開していたものと思われる。桁行方向は $N-4^{\circ}-W$ で、他の掘立柱建物跡や斜面上に位置している点を考慮すると、南北棟と推定される。規模は桁行4.8mである。柱間寸法は、2.4m（8尺）を基調としており、均等に配置されている。

**柱穴** 3か所。平面形は楕円形で、規模は長径70～83cm、短径53～62cmである。深さは60～80cmで、断面形はU字形または逆台形である。

**遺物出土状況** 土師器片1点（甕）、須恵器片4点（杯）が各柱穴から出土している。いずれも細片のため、図示できない。

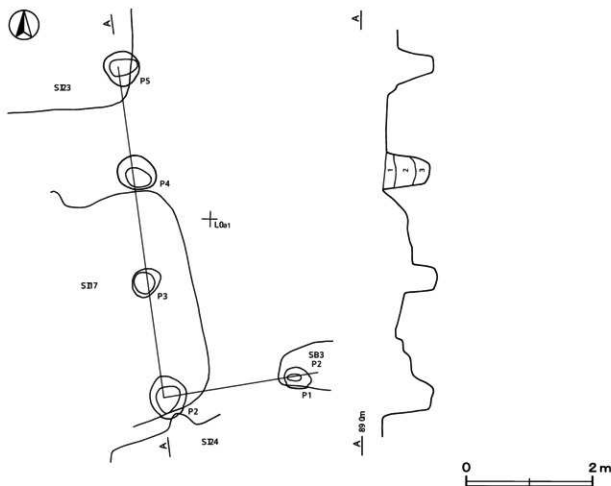
**所見** 掘立柱建物跡のみが重複し、竪穴住居跡との重複はみられないため、この場所を意識して構築したものと思われる。時期は、重複関係から9世紀代と考えられる。

### 第5号掘立柱建物跡（第102図）

**位置** 調査区東部のK9J0～L0a1区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第17・23号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

**規模と形状** 東部が削平されているため、規模や形状は明確でない。桁行3間、梁行1間以上の側柱建物跡で、桁行方向は $N-8^{\circ}-W$ の南北棟と推定される。規模は桁行5.4m、梁行2.1mが確認され、面積は11.34㎡である。



第102図 第5号掘立柱建物跡実測図

る。柱間寸法は桁行が1.8m（6尺）で、梁行は2.1m（7尺）を基調としており、規則的に配置されている。

**柱穴** 5か所。平面形は円形および楕円形で、規模は長軸43～68cm、短軸33～58cmである。深さは40～82cmで、断面形はU字形及び逆台形である。第1～3層は埋土で、ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が互層をなしている。

**土層解説（各柱穴共通）**

- |       |                 |      |               |
|-------|-----------------|------|---------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 3 褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量 |      |               |

**所見** L字状に規則的に並び、ほぼ同じ深さで掘られていることから掘立柱建物跡と考えられる。時期は、重複関係や同斜面部に奈良・平安時代の遺構が広がっていることから、8世紀前半と想定される。

**第6号掘立柱建物跡（第103図）**

**位置** 調査区東部のK9 J0～L9 a0区、標高89mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第17号住居、第3号掘立柱建物に掘り込まれている。

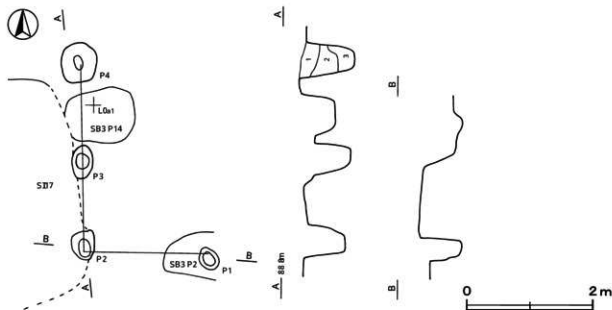
**規模と形状** 東部が削平されているため、規模や形状は明確でない。桁行2間以上、梁行1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Wの南北棟と推定される。規模は桁行3.0m、梁行2.1mが確認され、面積は6.3㎡である。柱間寸法は桁行が1.5m（5尺）、梁行が2.1m（7尺）を基調としており、規則的に配置されている。

**柱穴** 4か所。平面形は円形及び楕円形で、規模は長軸37～63cm、短軸28～56cmである。深さは60～87cmで、断面形は逆台形である。第1～3層は埋土で、ロームブロックを含む暗褐色土・褐色土が互層をなしている。

**土層解説（各柱穴共通）**

- |       |                 |      |           |
|-------|-----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス微量 | 3 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量       |      |           |

**所見** L字状に規則的に並び、ほぼ同じ深さで掘られていることから掘立柱建物跡と考えられる。時期は、重複関係や同斜面部に奈良・平安時代の遺構が広がっていることから、8世紀前半と想定される。



第103図 第6号掘立柱建物跡実測図

表 10 奈良・平安時代掘立柱建物跡一覧表

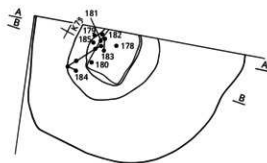
番号	位置	桁行方向	柱間数 桁長	規模 長軸 短軸	面積 ㎡	構造	桁行柱間 m	桁行柱間 m	柱六平面形	深さ cm	主な出土遺物	時期	備 考 調査関係 古 新
1	K 0 h3	N - 4° - W	3 1	69 21	1440	側柱	24/ 21	21	腰丸長方 形	66~90	土師器 杯・ 蓋・高台付 杯・蓋・雁・ 環	8世紀後半	本跡 SB4SD 10SA 1 2 SK20
3	L 9 b0	N - 6° - W	4 3	87 54	4698	側柱	225/ 195	18	長方形・ 腰丸長方 形	50~120	土師器 杯・ 蓋・高台付 杯・蓋 須恵器 杯・ 蓋	8世紀後半~ 9世紀初頭	本跡 S119 28SB 5 6 本跡 S117 24
4	K 0 h3	N - 4° - W	2 -	48 -	-	-	24	24	楕円形	60~80	土師器 須 恵器 杯	9世紀代	SB1 本跡 SD 10
5	K 9 j	N - 8° - W	3 1	54 21	1134	側柱	18	21	内形・楕 円形	40~82	-	8世紀前半	本跡 S117 23SB 3
6	L 9 a0	N - 1° - W	2 1	30 21	63	側柱	15	21	内形・楕 円形	60~87	-	8世紀前半	本跡 S117 SB 3

## (3) 土坑

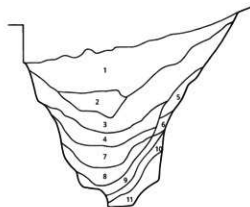
## 第51号土坑 (第104~106図)

位置 調査区西部のK 6 j0区、標高94mの丘陵西斜面部に位置している。

規模と形状 北東部が調査区域外のため、規模や形状は明確ではない。長径3.1m、短径は2.1mの楕円形と推定され、長径方向はN-16°-Wである。深さは2.5mである。確認面から掘鉢状に深さ150cm掘り込んだ後、下部はほぼ円筒状に掘り込んでいる。

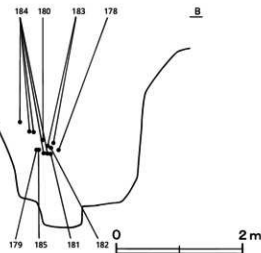


A 95.2m



A

B 94.6m



第 104図 第 51号土坑実測図



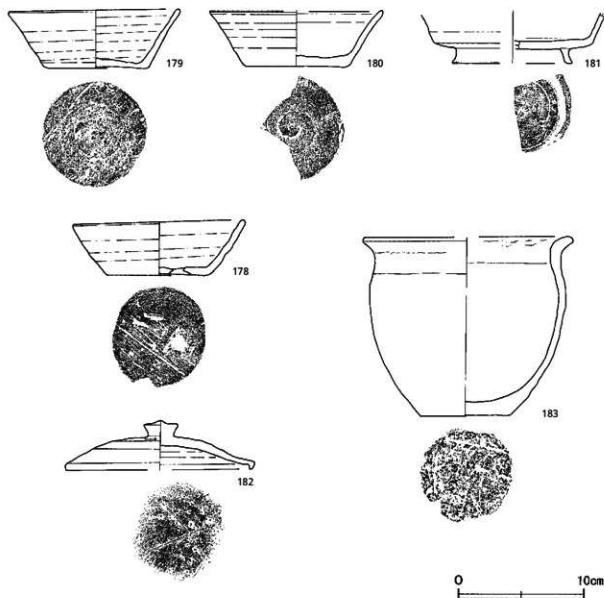
**覆土** 11層に分層される。周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

**土層解説**

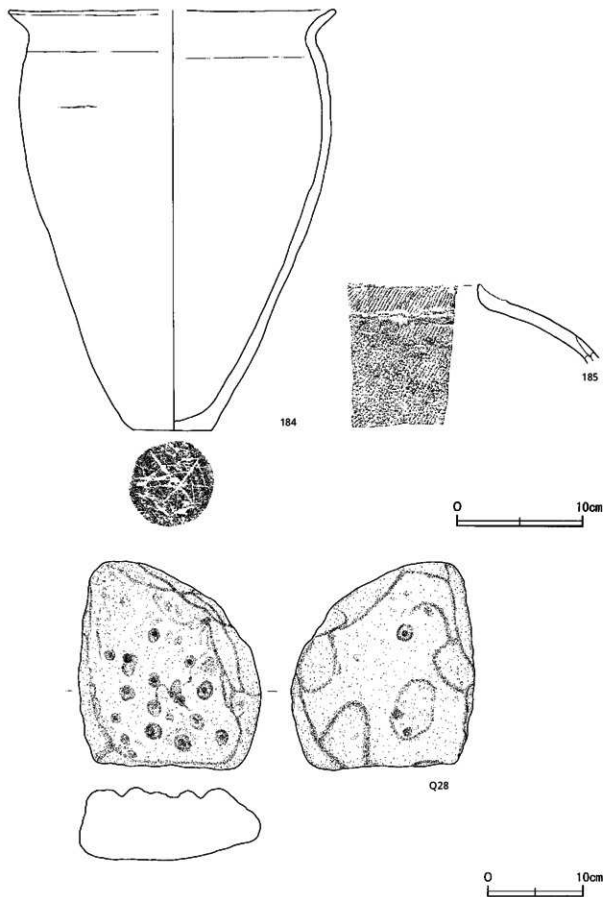
1 黒 褐色	ローム粒子微量	7 灰 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒 褐色	炭化粒子少量、ローム粒子微量	8 暗 褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量
3 黒 褐色	ローム粒子、炭化粒子微量	9 暗 褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
4 黒 褐色	ローム粒子中量	10 褐 色	ロームブロック多量
5 暗 褐色	ローム粒子中量	11 褐 色	ロームブロック中量
6 暗 褐色	ローム粒子多量		

**遺物出土状況** 土師器2点(甕), 土師器片39点(甕), 須恵器6点(坏3, 高台付坏1, 蓋1, 甕1), 須恵器片10点(坏4, 蓋1, 甕5), 石器1点(凹石)が出土している。また、混入した縄文土器片1点, 弥生土器片39点(壺)が出土している。178~185は中央部の覆土中層からまとめて出土している。

**所見** 丘陵西斜面部に位置し、底面にくぼみをもつ楕鉢状の土坑であり、氷室として使用されていたと考えられる。遺物が覆土中層に集中していることから、氷室としての機能が終了し、埋没途中に投棄されたと思われる。時期は、出土遺物から8世紀後半と考えられる。



第105図 第51号土坑出土遺物実測図(1)



第 106 图 第 51 号土坑出土遺物実測図 ( 2 )

## 第5号土坑出土遺物観察表 第105・106図

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
178	須恵器	坏	135	44	79	長石・石英・白色 粒子	灰黄	普通	体部内・外面口クロナデ 片取へラ削り・底部厚孔	体部下縁手 片取へラ削り	中央部中層	98% P L 18
179	須恵器	坏	134	47	82	長石・石英・礫	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 片取り後一方のへラ削り	底部回転へ ラ削り	中央部中層	80% P L 18
180	須恵器	坏	136	44	80	長石・雲母	灰	普通	体部内・外面口クロナデ 片取り	底部回転へ ラ削り	中央部中層	40% 底部へラ 記号「J」
181	須恵器	高台付坏	-	42	94	長石・礫	黄灰	普通	体部内・外面口クロナデ 片取り後高台削り付	底部回転へ ラ削り	中央部中層	20% 底部へラ 記号「J」
182	須恵器	甕	148	39	-	長石・雲母・小礫	灰	普通	天井部回転へラ削り	-	中央部中層	内面へラ記号 「J」 P L 19
183	土師器	小形甕	167	142	72	長石・石英・雲母・ 礫	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ 削り・体部内面ナデ	体部外面削り 削り・底部木槌痕	中央部中層	60% P L 20
184	土師器	甕	258	333	62	長石・石英・金雲 母	に淡褐色	普通	口縁部内・外面横ナデ 削り	体部上面四方 削りのナデ	中央部中層	70% P L 20
185	須恵器	甕	-	62	-	長石・石英	黄灰	普通	体部外面斜位の平行削き ナデ	体部内面ナ デ	中央部中層	自然焼

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 28	凹石	217	190	76	4480	安山岩	表面14孔 裏面1孔	覆土下層	

## 6 その他の遺構と遺物

今回の調査で以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## (1) 溝跡

## 第1号溝跡（第107図，付図）

位置 調査区西部のL 6 b4～L 7 b2区，標高95～98mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第1・2号墳，第3号溝跡を掘り込んでいる。

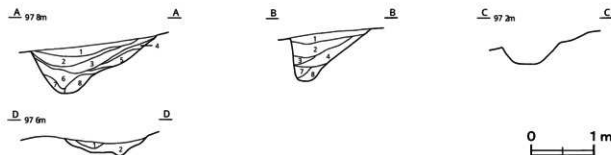
規模と形状 北西部が傾平によって消失している。L 6 b4区から南東方向（N-48°-W）へ直線的に約17m延びており，L 6 e7区で屈曲し，北東方向（N-59°-E）に直線的に約21m延びている。第1号墳の周溝に重なるように掘り込んでいる。確認された長さは37.44mで，上幅0.77～2.20m，下幅0.20～0.60m，深さ30～70cmである。断面形はU字形である。

覆土 8層に分層される。上層の第1層は硬化しており，埋没途中に道路として二次利用しているものと思われる。第2～8層は周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量	5 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	焼土粒子少量，ロームブロック微量	6 極暗褐色	ロームブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量
4 極暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量，炭屑パミス微量

遺物出土状況 流れ込みと思われる弥生土器片65点（壺），土師器片5点（坏）が出土している。



第107図 第1号溝跡実測図

**所見** 第1・3号墳間を通り、第1号墳の周溝を掘り込んでいることから、古墳を意識して掘り込んでいることがうかがえる。溝の時期や性格は不明である。二次利用されている道路は、尾根筋にあたり、丘陵上に近世の祠が存在することから、峠道として利用されていたものと考えられる。二次利用された道路の時期は、祠と同時期に存在していたとすると近世が想定されるが、明確な時期や性格は不明である。

### 第3号溝跡（第108図、付図）

**位置** 調査区西部のL6c5～L6d6区、標高95mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第1号溝に掘り込まれている。

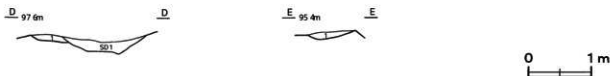
**規模と形状** L6c5区から南東方向（N-52°-W）に直線的に延びている。確認された長さは7.40mで、上幅0.50～0.70m、下幅0.22～0.40m、深さ10cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 単一層で、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 黒褐色 炭化粒子・鹿沼パミス少量、ローム粒子・焼土粒子微量

**所見** 出土遺物が無いため、時期や性格は不明である。



第108図 第3号溝跡実測図

### 第4号溝跡（第109図、付図）

**位置** 調査区西部のL6d5～L7j8区、標高95mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第1号住居跡、第3号墳を掘り込んでいる。

**規模と形状** 北西部が削平によって消失している。L6d5区から南東方向（N-44°-W）に直線的に約14m延びており、L6f7区で屈曲し、南方向（N-14°-W）に直線的に約16m延びている。第3号墳の周溝と重なるように掘り込んでいる。確認された長さは30.50mで、上幅1.40～2.70m、下幅0.27～0.83m、深さ20～40cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 9層に分層される。上層の第1層は硬化しており、埋没途中に道路として二次利用しているものと思われる。第2～9層は周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

#### 土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量

2 暗褐色 炭化粒子少量、鹿沼パミス微量

3 黒褐色 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量

4 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子微量

5 褐色 ロームブロック少量

6 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

7 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス中量

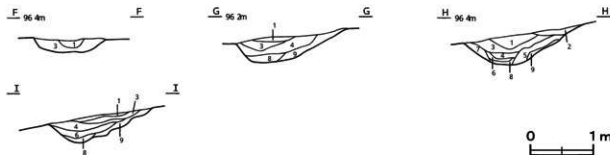
8 黒褐色 炭化粒子少量

9 明褐色 鹿沼パミス多量、ローム粒子中量

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる弥生土器片18点（壺），土師器片2点（杯，甕），須恵器片2点（杯，甕）が出土している。

**所見** 第1・3号墳の間を通り、第3号墳の周溝を掘り込んでいることから、第1号溝のように古墳を意識し

て掘り込んだものと考えられる。溝の時期や性格は不明である。二次利用されている道路は、尾根筋にあたり、丘陵上に近世の祠が存在することから、第1号溝跡と同様に峠道として利用されていたものと考えられる。道路の時期は、祠と同時期に存在していたとすると近世が想定されるが、明確な時期は不明である。



第109図 第4号溝跡実測図

#### 第5号溝跡 (第110図, 付図)

**位置** 調査区西部のL6f7~L7h1区, 標高96~98mの丘陵東斜面部に位置している。

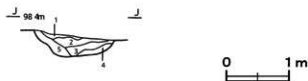
**重複関係** 第2・3号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** L6f7区から南東方向(N-59°-W)に直線的に延びている。確認された長さは18.40mで, 上幅0.90~1.40m, 下幅0.40~0.94m, 深さ34cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 5層に分層される。周囲から土が流れ込んだ様相を示している自然堆積である。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・黄沼パミス少量, 焼土粒子微量
- 4 褐色 黄沼パミス中量, ローム粒子微量
- 5 褐色 ロームブロック・黄沼パミス少量



第110図 第5号溝跡実測図

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる弥生土器片22点(壺), 土師器片21点(杯3, 高台付鉢10, 鉢7, 甕1), 須恵器片2点(杯, 瓶)が出土している。

**所見** 時期は, 弥生時代の堅穴住居跡を掘り込んでおり, 土師器・須恵器が出土していることから, 奈良・平安時代以降であるが, 明確な時期は不明である。

#### 第8号溝跡 (第111図, 付図)

**位置** 調査区東部のK0h2~L0c2区, 標高86mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号陥し穴, 第11号住居跡, 第9号溝跡, 第2~4号柵列跡, 第5号ビット群を掘り込んでいる。

**規模と形状** K0h2区から南方向(N-2°-W)に直線的に延びている。確認された長さは20.10mで, 上幅0.47~0.85m, 下幅0.15~0.50m, 深さ6cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 単一層で, 自然堆積と考えられる。

##### 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる土師器片1点(甕), 須恵器片6点(杯3, 甕3)が出土している。

**所見** 時期は, 平安時代の堅穴住居跡を掘り込んでいることから9世紀後葉以降であるが, 明確な時期は不明である。



第111図 第8号溝跡実測図

#### 第9号溝跡 (第112図, 付図)

**位置** 調査区東部のK0 f2~L0 a2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第11号住居跡, 第1~4号柵列跡, 第5号ビット群を掘り込み, 第8・10号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部は調査区域外に延びており, K0 f2区から南方向(N-2°-W)に直線的に延びている。

確認された長さは17.00mで, 上幅0.66~1.20m, 下幅0.20~1.00m, 深さ10~12cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 単一層で, 自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

I 筋 褐色 ローム粒子微量

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる土師器片24点(杯2, 甕22), 須恵器片14点(杯13, 蓋1)が出土している。

**所見** 時期は, 平安時代の堅穴住居跡を掘り込んでいることから9世紀後葉以降であるが, 明確な時期は不明である。

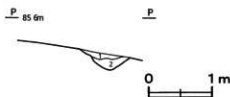


第112図 第9号溝跡実測図

#### 第10号溝跡 (第113図, 付図)

**位置** 調査区東部のK0 h2~K0 j2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

**重複関係** 第1・4号掘立柱建物跡, 第9号溝跡, 第1・2号柵列跡を掘り込んでいる。



第113図 第10号溝跡実測図

**規模と形状** K0 h2区から南方向(N-2°-W)に直線的に延びている。確認された長さは8.80mで, 上幅0.36~0.88m, 下幅0.13~0.50m, 深さ25cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 2層に分層され, 自然堆積と考えられる。

## 土層解説

1 黒 褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量

2 褐 色 鹿沼バミス少量, ローム粒子微量

所見 時期は、重複関係より9世紀後葉以降であるが、明確な時期は不明である。

表 11 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規 模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	重複関係 否 否
				長さ m	上幅 m	下幅 m	深さ cm					
1	L 6 b4 - L 7 b2	N - 46 - W N - 59 - E	U字形	3744	077-220	020-060	30-70	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片	TM 1 2SD3 本跡
3	L 6 c5 - L 6 d6	N - 52 - W	U字形	740	050-070	022-040	10	緩斜	平坦	自然		本跡 SD 1
4	L 6 d5 - L 6 j8	N - 44 - W N - 14 - W	U字形	3050	140-270	027-083	20-40	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片 須恵器片	SDTM3 本跡
5	L 6 f7 - L 7 h1	N - 59 - W	U字形	1840	090-140	040-094	34	緩斜	平坦	自然	弥生土器片 土師器片 須恵器片	SD 3 本跡
8	K 0 h2 - L 0 c2	N - 2 - W	U字形	2010	047-050	015-050	6	緩斜	平坦	自然	土師器片 須恵器片	SD1TP2SD9SA 2-4 PG5 本跡
9	K 0 f2 - K 0 a2	N - 2 - W	U字形	1700	066-120	020-100	10-12	緩斜	起伏	自然	土師器片 須恵器片	SD1SA 1-4 PG5 本跡 SD 8 10
10	K 0 h2 - K 0 j2	N - 2 - W	U字形	880	036-088	013-050	25	緩斜	平坦	自然		SB 1-4 SD 9SA 1-2 本跡

## (2) 柵列跡

## 第 1 号柵列跡 (第114図)

位置 調査区東部のK 0 f2~K 0 i2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込み, 第9・10号溝に掘り込まれている。

規模と形状 確認できた長さは10.7mで, 方向はN-1°-Wである。柱間寸法は1.0~3.7mである。

柱穴 6か所。長径36~56cm, 短径28~50cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く, すべて抜き取り痕と考えられる。

遺物出土状況 流れ込みと思われる須恵器片2点(杯, 蓋)が出土している。

所見 柱間尺に統一性がなく, 崖部の下に沿って並んでいるため, 土止めとして使われていた可能性がある。

時期は不明である。

## 第 2 号柵列跡 (第114図)

位置 調査区東部のK 0 f2~K 0 i2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

重複関係 第1号掘立柱建物跡を掘り込み, 第8~10号溝に掘り込まれている。

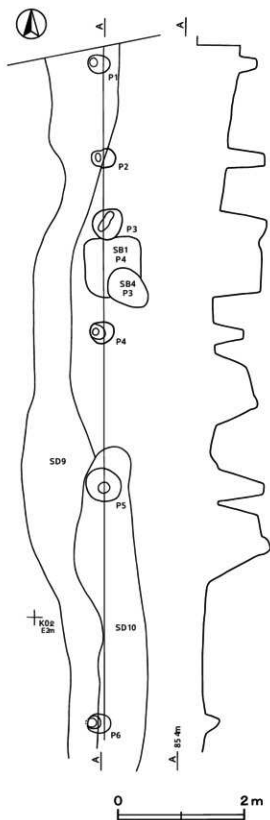
規模と形状 確認できた長さは10.3mで, 方向はN-0°である。柱間寸法は0.4~1.8mである。

柱穴 10か所。長径20~54cm, 短径20~42cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く, すべて抜き取り痕と考えられる。

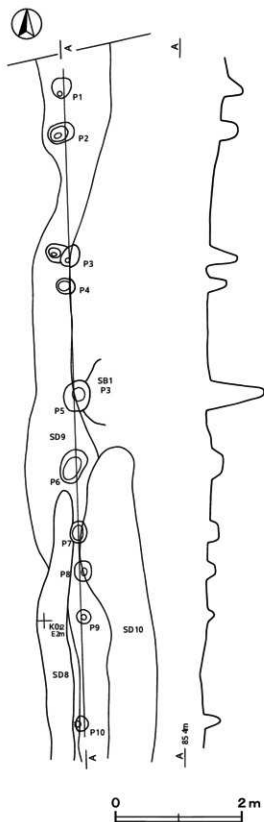
遺物出土状況 流れ込みと思われる土師器片2点(甕)が出土している。

所見 柱間尺に統一性がなく, 崖部の下に沿って並んでいるため, 土止めとして使われていた可能性がある。

時期は不明である。



第1号横列跡



第2号横列跡

第114図 第1・2号横列跡実測図



## 第3号柵列跡 (第115図)

**位置** 調査区東部のK0h2~K012区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。崖部の下に沿って並んでいる。

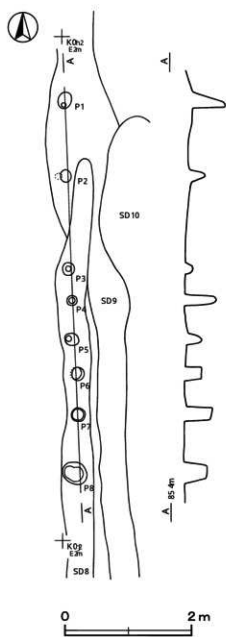
**重複関係** 第8・9号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認できた長さは6.2mで、長軸方向はN-1°-Wである。柱間寸法は0.5~1.4mである。

**柱穴** 8か所。長径15~40cm、短径15~34cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く、すべて抜き取り痕と考えられる。

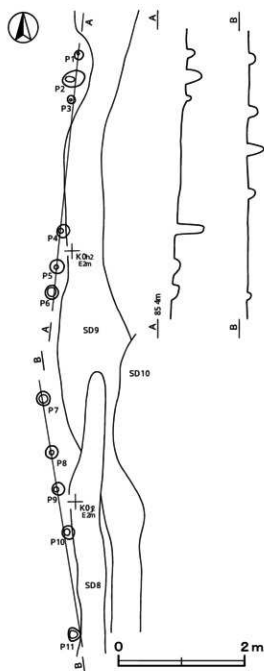
**遺物出土状況** 流れ込みと思われる土師器片3点(杯1、甕2)が出土している。

**所見** 崖部の下に沿って並んでいるため、土止めとして使われていた可能性がある。時期は不明である。



第3号柵列跡

第115図 第3・4号柵列跡実測図



第4号柵列跡

## 第4号櫛列跡（第115図）

**位置** 調査区東部のK0g2～K0j2区、標高85mの丘陵東斜面部に位置し、崖部の下に沿って並んでいる。

**重複関係** 第8・9号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認できた長さは9.4mで、方向はN-7°-Eである。柱間寸法は0.4～2.1mである。

**柱穴** 11か所。長径14～38cm、短径14～26cmの円形又は楕円形である。土層は暗褐色土で締まりが弱く、すべて抜き取り痕と考えられる。

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる須恵器片1点（甕）が出土している。

**所見** 崖部の下に沿って並んでいるため、土止めとして使われていた可能性がある。須恵器片が出土しているが、明確な時期は不明である。

表12 櫛列一覧表

番号	位置	方向	柱穴数	柱穴平面形	長さ m	柱穴間距離 m	径 cm	深さ cm	主な出土遺物	遺 物 重 複 関 係	考 古 新
1	K0f2-K0j2	N-1-W	6	円形、楕円形	107	10-37	20-56	25-73	須恵器片	SB1 10	本跡 SD9
2	K0f2-K0j2	N-0	10	円形、楕円形	103	04-18	20-54	10-93	土師器片	SB1 10	本跡 SD8-9
3	K0h2-K0j2	N-1-W	8	円形、楕円形	62	05-14	15-40	15-53	土師器片	本跡	SD89
4	K0g2-K0j2	N-7-E	11	円形、楕円形	94	04-21	14-38	8-45	須恵器片	本跡	SD89

## (3) 道路跡

## 第1号道路跡（第116図、付図）

**位置** 調査区中央部のL7h5～M8a2区、標高101～105mの丘陵西斜面部に位置している。

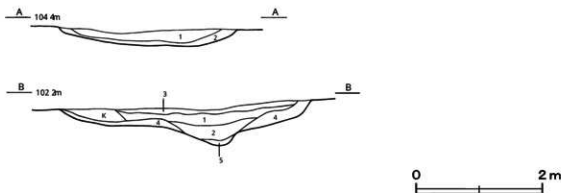
**重複関係** 第8・9号住居跡、第8号墳を掘り込んでいる。

**規模と形状** 西部が調査区域外に延びている。L7h5区から東方向（N-68°-W）にむかって緩やかな弧状を呈している。溝状に掘り込んだ部分の底面を路面としている。確認された長さは31.60mで、上幅1.24～4.10m、下幅0.28～0.62m、深さ22～58cmである。断面形はU字形である。

**覆土** 5層に分層される。周囲から土が流入した様相を示している自然堆積である。

## 土層解説

- |         |               |         |                   |
|---------|---------------|---------|-------------------|
| 1 黒 色   | ローム粒子微量       | 4 褐 色   | 鹿沼パミス中量、ロームブロック少量 |
| 2 灰 褐 色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 | 5 暗 褐 色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量   |
| 3 黒 褐 色 | ローム粒子微量       |         |                   |



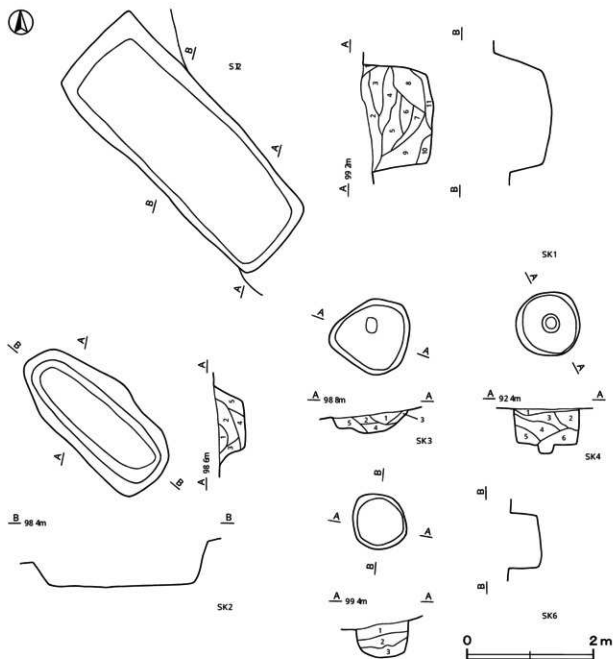
第116図 第1号道路跡実測図

**遺物出土状況** 流れ込みと思われる弥生土器片105点（壺），土師器1点（甕），土師器片49点（坏28，甕21），須恵器片4点（甕）が出土している。

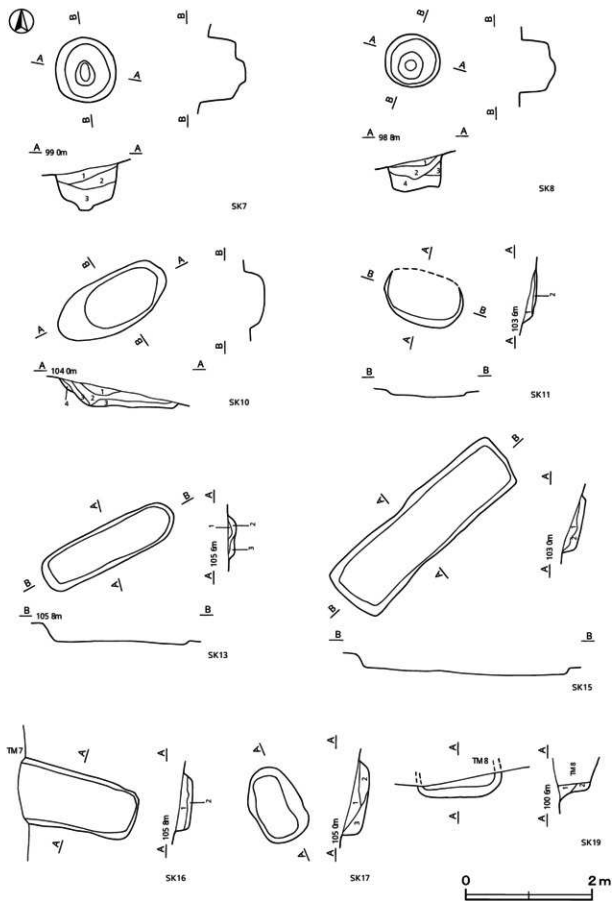
**所見** この道路は、尾根筋にあたり、丘陵頂上部にある舟止め石に向かって延びている。丘陵上には舟止め石の他、近世の祠も存在することから、参道を兼ねた峠道として利用されていたものと考えられる。時期は、出土土器から奈良・平安時代以降であるが、明確な時期は不明である。

(4) 土坑（第117～120図）

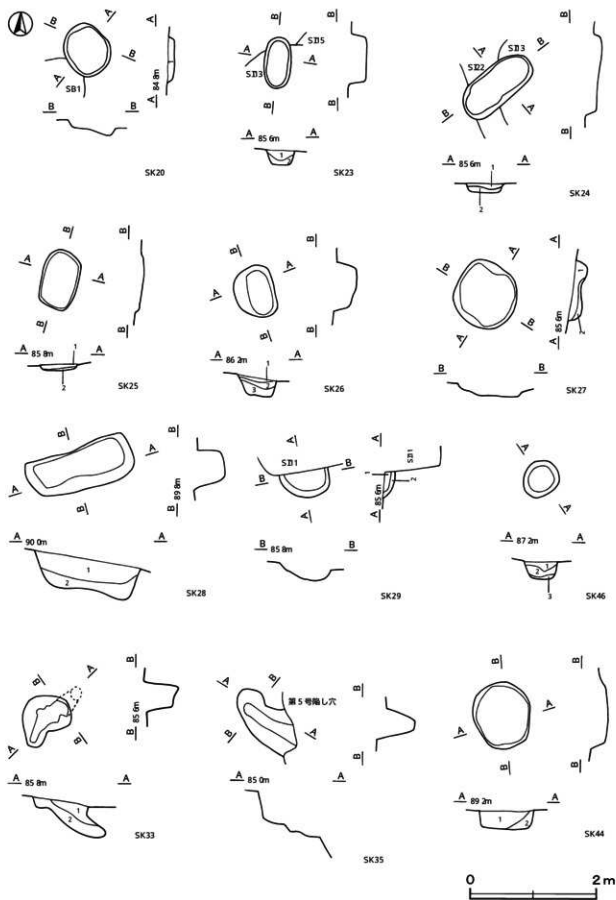
時期及び性格不明の土坑について、実測図と一覧表を記載する。



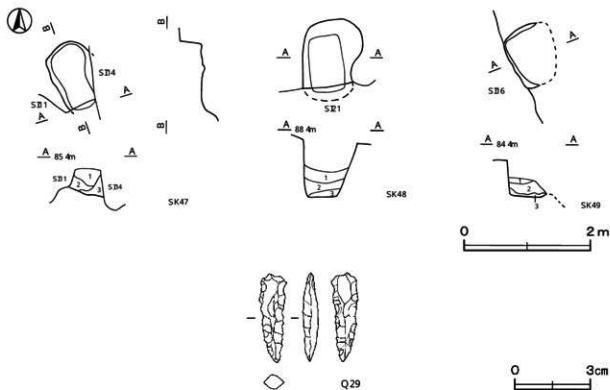
第117図 第1～4・6号土坑実測図



第 118 图 第 7·8·10·11·13·15~17·19 号土坑实测图



第119図 第20・23～29・33・35・44・46号土坑実測図



第120図 第47～49号土坑・第1号土坑出土遺物実測図

## 第1号土坑土層解説

- 1 麻晒赤褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・鹿沼パミス中量
- 6 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量
- 7 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス中量, 粘土ブロック少量
- 8 褐色 鹿沼パミス多量, ローム粒子中量
- 9 暗褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック・粘土ブロック少量
- 10 褐色 ロームブロック多量, 鹿沼パミス少量
- 11 褐色 ロームブロック多量, 鹿沼パミス微量

## 第2号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量
- 4 暗褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量

## 第3号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
- 3 褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 4 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量
- 5 褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

## 第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量, 炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量
- 4 褐色 ロームブロック多量
- 5 褐色 ロームブロック多量
- 6 灰褐色 ロームブロック中量

## 第6号土坑土層解説

- 1 麻晒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 灰褐色 鹿沼パミス少量

## 第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 鹿沼パミス少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 灰褐色 ローム粒子・鹿沼パミス・黒色粒子微量

## 第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス・黒色粒子微量
- 2 灰褐色 ロームブロック・鹿沼パミス微量
- 3 麻晒褐色 ローム粒子少量, 鹿沼パミス微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・鹿沼パミス少量

## 第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 麻晒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

## 第11号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

## 第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

## 第15号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量

## 第16号土坑土層解説

- 1 にぶい褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

## 第17号土坑土層解説

- 1 麻晒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

## 第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 麻晒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス少量

## 第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量

## 第23号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

## 第24号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

## 第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子微量

## 第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子微量

## 第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

## 第28号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 鹿沼バミス少量、ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量

## 第29号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

## 第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量

## 第44号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 鹿沼バミス少量、ロームブロック微量

## 第46号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

## 第47号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

## 第48号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

## 第49号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、砂粒微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒微量

## 第1号土坑出土遺物観察表

番号	種類	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 29	鏡	35	11	0.6	192	チャート	上部は薄く扁平 先端磨利	覆土中	

表 13 土坑一覽表

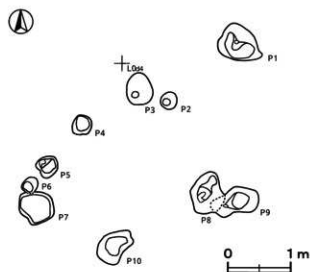
番号	位置	長軸 径 方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 古 新	
				長軸 径	短軸 径 m						深さ cm
1	L 7 h1	N - 45 - W	長方形	4.36	1.70	84	外傾	平坦	人海	石器 鏡	5I2 本跡
2	L 6 f9	N - 50 - W	長楕円形	2.78	1.24	64	外傾	平坦	人海		
3	L 7 g0	N - 103 - W	不整形円形	1.30	1.18	28	外傾	凹状	人海		
4	L 5 c0	-	円形	1.06	1.02	68	直立	凹凸	人海		
6	L 7 f2	N - 60 - W	楕円形	0.94	0.86	52	直立	平坦	人海		
7	L 7 e1	N - 70 - W	楕円形	1.40	0.96	70	直立	平坦	自然		
8	L 7 e1	N - 94 - W	円形	0.86	0.82	54	直立	平坦	人海		
10	L 9 j1	N - 64 - E	長楕円形	1.90	0.87	30	外傾	凹状	自然		
11	L 8 e0	N - 72 - W	長楕円形	1.26	0.84	10	外傾	平坦	自然		
13	L 8 i9	N - 60 - E	長楕円形	2.28	0.64	26	外傾	平坦	自然		
15	L 7 e9	N - 45 - E	長方形	3.35	1.00	24	外傾	平坦	自然		
16	L 8 h8	N - 107 - E	長方形	1.98	0.98	20	外傾	平坦	自然		TM7 本跡
17	L 8 g1	N - 23 - W	楕円形	1.22	0.82	28	外傾	平坦	自然		
19	L 7 h4	-	-	1.36	0.32	52	傾斜	平坦	自然		本跡 TM8
20	K 0 g3	N - 33 - W	楕円形	0.78	0.68	12	外傾	平坦	自然		5B1 本跡
23	L 0 b3	N - 5 - E	長楕円形	0.80	0.42	30	直立	平坦	自然		5I3 15 22 本跡
24	L 0 b3	N - 51 - E	長楕円形	1.26	0.58	18	外傾	平坦	自然		5I3 15 22 本跡
25	L 0 b3	N - 13 - E	楕円形	0.92	0.56	9	外傾	傾斜	自然		

番号	位置	長軸 径 方向	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備 考 層位関係 古 新
				長軸 径	短軸 径	深さ					
26	L 0 c3	N - 14 - W	不整形円形	083	065	28	外傾	傾斜	自然		
27	L 0 c4	-	円形	112	105	14	傾斜	平坦	自然		
28	K 9 j9	N - 70 - E	長方形	170	074	46	外傾	平坦	自然		
29	L 0 a2	N - 79 - E	-	078	041	21	外傾 傾斜	傾斜	自然	本跡 S11	
33	L 0 d4	N - 43 - E	不定形	091	074	54	外傾	傾斜	自然		
35	L 0 c4	N - 54 - W	不定形	126	065	69	外傾	平坦	-	本跡 TPS	
44	L 9 b0	N - 19 - W	楕円形	103	092	25	直立	平坦	自然		
46	L 0 e3	-	円形	060	055	27	外傾	平坦	人為		
47	K 0 j3	N - 25 - W	不定形	109	071	42	外傾	凹凸	人為	本跡 S11+14	
48	K 9 f0	N - 6 - W	長方形	120	095	108	外傾	平坦	自然	本跡 S121	
49	L 0 a4	N - 18 - W	-	096	-	58	直立	平坦	人為	S16 本跡	

## (5) ビット群

## 第1号ビット群 (第121図)

位置 調査区東部のL 0 c4～L 0 d5区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



規模と形状 南北4.0m、東西5.0mの長方形の範囲にビット10か所が確認された。最大のものは長径78cm、短径40cmの不整形で、最小のものは長径27cm、短径22cmの楕円形である。深さは5～46cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず、暗褐色土または黒褐色土で締まりが弱い。

遺物出土状況 土師器片1点（坏）が出土しているが、いずれも細片で図示できない。

所見 配置に規則性がなく、性格は不明である。

時期は、出土土器が流れ込みのため不明である。

第121図 第1号ビット群実測図

## 第1号ビット群計測表

ビット 番号	形 状	規 模 cm			ビット 番号	形 状	規 模 cm		
		長軸 径	短軸 径	深さ			長軸 径	短軸 径	深さ
1	不整形円形	73	54	34	6	楕円形	27	22	13
2	円形	28	28	46	7	不整形円形	61	52	5
3	楕円形	52	43	31	8	不定形	68	55	34
4	円形	35	43	31	9	不定形	78	40	45
5	不整形円形	33	33	23	10	不定形	64	42	13



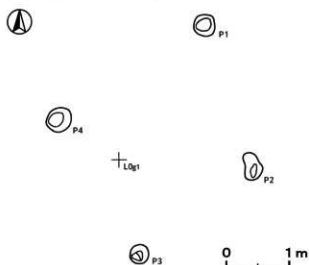
## 第3号ビット群 (第122図)

位置 調査区東部のL 9 f0～L 0 g1区、標高90mの丘陵東斜面部に位置している。

規模と形状 南北4.1m、東西3.6mの長方形の範囲にビット4か所が確認された。最大のものは長径45cm、短径30cmの不整楕円形で、最小のものは長径31cm、短径30cmの円形である。深さは11～56cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず、灰褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性がなく、性格は不明である。時期は、出土土器が無いため不明である。



第122図 第3号ビット群実測図

## 第3号ビット群計測表

ビット番号	形状	規模 cm			ビット番号	形状	規模 cm		
		長軸径	短軸径	深さ			長軸径	短軸径	深さ
1	円形	38	36	11	3	円形	31	30	56
2	不整楕円形	45	30	35	4	楕円形	43	37	15

## 第4号ビット群 (第123図)

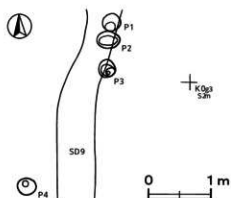
位置 調査区東部のK 0 g2区、標高85mの丘陵東斜面部に位置している。

重複関係 第9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北3.0m、東西1.8mの長方形の範囲にビット4か所が確認された。最大のものは長径38cm、短径27cmの楕円形で、最小のものは径28cmの円形である。深さは26～55cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず、暗褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性がなく、性格は不明である。時期は出土遺物が無いため不明である。



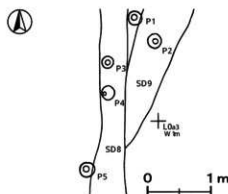
第123図 第4号ビット群実測図

## 第4号ビット群計測表

ビット番号	形状	規模 cm			ビット番号	形状	規模 cm		
		長軸径	短軸径	深さ			長軸径	短軸径	深さ
1	円形	30	28	26	3	楕円形	30	27	44
2	楕円形	38	27	45	4	円形	28	28	55

## 第5号ビット群 (第124図)

位置 調査区東部のK 0 j2~K 0 a2区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



第124図 第5号ビット群実測図

重複関係 第8・9号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北2.8m, 東西0.8mの長方形の範囲にビット5か所が確認された。最大のものは長径25cm, 短径24cmの円形で、最小のものは径18cmの円形である。深さは20~31cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず、暗褐色土または黒褐色土である。

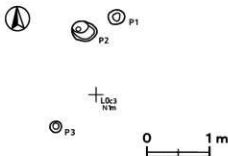
所見 配置に規則性がなく、性格は不明である。時期は、出土遺物が無いため不明である。

## 第5号ビット群計測表

ビット番号	形状	規模 cm			ビット番号	形状	規模 cm		
		長軸径	短軸径	深さ			長軸径	短軸径	深さ
1	円形	23	21	28	4	円形	23	21	27
2	円形	24	22	20	5	円形	25	24	31
3	円形	18	18	23					

## 第6号ビット群 (第125図)

位置 調査区東部のL 0 b2~L 0 b3区, 標高85mの丘陵東斜面部に位置している。



第125図 第6号ビット群実測図

規模と形状 南北2.0m, 東西1.5mの長方形の範囲にビット3か所が確認された。最大のものは長径40cm, 短径31cmの楕円形で、最小のものは径18cmの円形である。深さは27~32cmである。

覆土 柱の抜き取り痕などは確認できず、暗褐色土または黒褐色土である。

所見 配置に規則性が無く、性格は不明である。時期は、出土遺物が無いため不明である。

## 第6号ビット群計測表

ビット番号	形状	規模 cm			ビット番号	形状	規模 cm		
		長軸径	短軸径	深さ			長軸径	短軸径	深さ
1	楕円形	27	22	32	3	円形	18	18	28
2	楕円形	40	31	27					

表 14 ビット群一覧表

番号	位置	範囲 m		ビット数	ビット平面形	ビット規模 cm			主な出土遺物	備考 遺構関係 古 新
		南北	東西			長さ	短径	深さ		
1	L 0 c4 ~ L 0 d5	40	50	10	円形, 楕円形, 不定形	27~91	22~64	5~46	土師器片 坏	
3	K 9 d1 ~ L 0 g1	41	36	4	円形, 楕円形	38~45	30~37	11~56		
4	K 0 g2	30	18	4	円形, 楕円形	28~38	27~28	26~55		本跡 SD9
5	K 0 j2 ~ K 0 a2	28	08	5	円形	18~25	18~24	20~31		本跡 SD8 9
6	L 0 b2 ~ L 0 b3	20	15	3	円形, 楕円形	18~40	18~31	27~32		

## (6) 舟止め石

## 舟止め石 (第126図)

**位置** 調査区中央部のM 8 c2区を中心とし、標高103mの丘陵頂上付近に位置している。

**確認状況** 丘陵頂上付近に自然石が確認されており、トレンチ調査を行った。

**規模と形状** 石は地山の中まで入り込んでいるため、規模や形状は明確ではない。地表面で確認された石は2個である。1つは長軸4.04m、短軸2.0m、地表面からの高さ2.3mの不定形で、長軸方向はN-10°-Eと推定される。この石を支えるように、長軸2.6m、短軸2.0m、地表面からの高さ1.0mの楕円形の石が位置している。トレンチを入れた際に、これらの他に長さ0.6~1.7mの石が3個確認された。石の材質はそれぞれ花崗岩である。

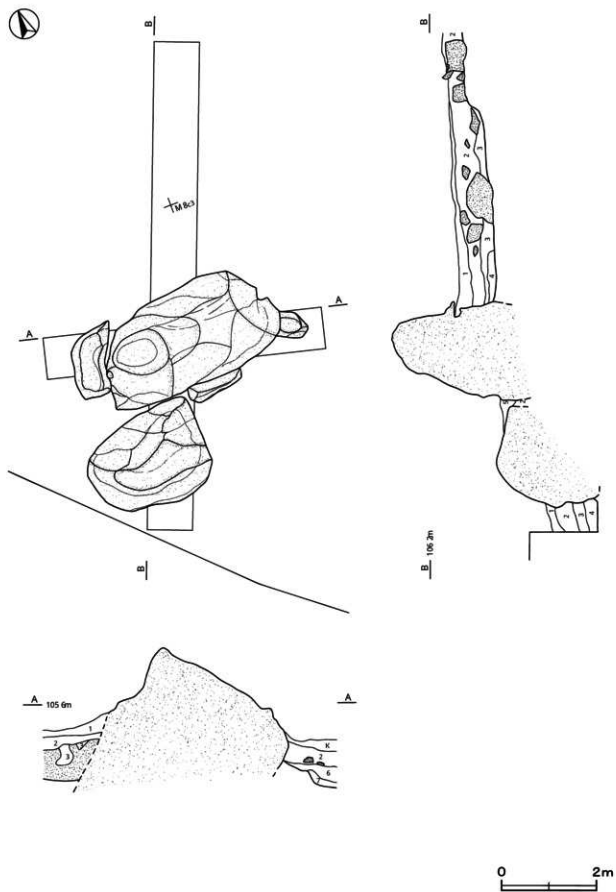
**土層** 土層断面図の第1~4・6・7層は規則的な堆積がみられるため、自然堆積である。第5層は、石の隙間に堆積した層である。

## 土層解説

1	褐色	花崗岩粒子中量、ローム粒子微量	5	褐色	ローム粒子・花崗岩粒子微量
2	褐色	花崗岩粒子中量、ローム粒子微量	6	褐色	ローム粒子多量・花崗岩粒子微量
3	褐色	花崗岩粒子多量、ローム粒子・鹿沼パミス微量	7	褐色	ローム粒子多量・花崗岩粒子少量
4	明褐色	花崗岩粒子多量、ローム粒子・鹿沼パミス微量			

**伝承** この石は信仰の対象とされ、現在でもこの地域の御神体として奉られている。地域に伝わる伝承では、神代の時代にこの石に舟の綱をつなげていたとされ、このことから舟止め石と呼ばれている。

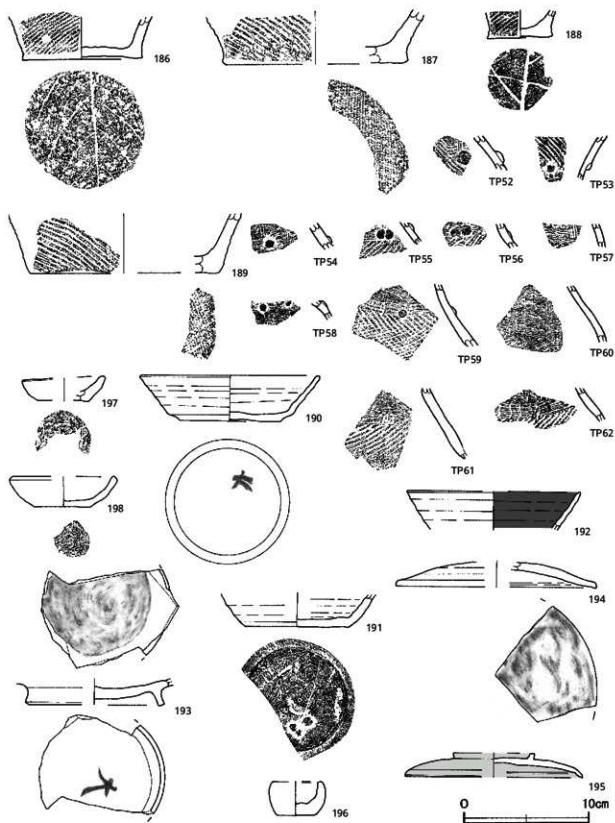
**所見** トレンチの土層から、石は地山内に入り込んでおり、故意に設置されたような痕跡が無いため、自然石である。この周囲に位置する第6・7号墳の周溝からは、奈良・平安時代の高台付坏や中世のかわらけが混入しており、供献土器として使われていた可能性がある。同丘陵の東斜面には奈良・平安時代の集落、北東に位置する丘陵には式内社の加茂大神御子神主玉神社が存在し、この当時より舟止め石は地域の信仰の対象とされ、奉られていたことが想定される。



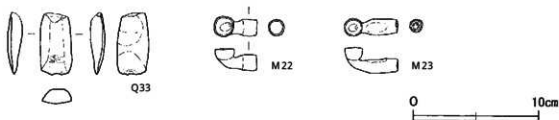
第 126 図 舟止め石実測図

## (7) 遺構外出土遺物 (第127・128図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第127図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 128図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 第 127・128図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
186	弥生土器	壺	-	34	9.5	長石・石英・雲母	橙	普通	胴部付加糸一種 付加2糸 縄文施文 底部木葉衝	TM3 南溝 掘土中	20%
187	弥生土器	壺	-	42	14.8	長石・石英	明赤褐	普通	胴部付加糸一種 付加2糸 縄文施文 底部布目衝	表土	10%
188	弥生土器	壺	-	22	5.3	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部付加糸一種 付加2糸 縄文施文 底部木葉衝	5D4 掘土中	20%
189	弥生土器	壺	-	47	15.0	長石・石英	にぶい黄褐	普通	胴部付加糸一種 付加2糸 縄文施文 底部布目衝	TM7 横丘 掘土内	10%
190	須恵器	坏	140	37	9.8	長石・石英・小礫	黄灰	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転へら切り後ナデ	L 0 a1	底部外面 磨擦 「穴」
191	須恵器	坏	-	27	9.2	長石・石英	灰黄	普通	体部内外面口クロナデ 底部回転へら切り後ナデ	k 0 h2	底部へら印 「J」
192	須恵器	坏	136	31	-	長石・石英	灰黄	普通	内外面口クロナデ	L 9 d	10% 内面油障付衝
193	須恵器	盤	-	21	10.2	長石	灰	普通	底部回転へら切り後高台貼り付け	表層	底部内面 磨擦 底部外面 磨擦 「穴」 転用破カ
194	須恵器	蓋	160	20	-	雲母	灰オリーブ	普通	体部外面口クロナデ	L 9 d5	内面磨擦 転用破カ
195	緑釉陶器	蓋	141	20	-	締密	浅黄	良好	内外面口クロナデ 筋輪	L 0 e5	20%
196	手捏土器	-	38	27	31	長石・石英	橙	普通	内外面ナデ	L 0 d2	70%
197	かわらけ	小皿	64	20	40	長石・石英・雲母・ 赤色粒子	橙	普通	内外面口クロナデ	表層	70%
198	かわらけ	小皿	78	24	44	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	内外面口クロナデ 底部回転糸切り	TM5 南溝 掘土中	23%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TF92	弥生土器	壺	-	28	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文後転用 下面貼衝付	TM4 横丘 掘土内	5%
TF93	弥生土器	壺	-	34	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部付加糸一種 付加2糸 縄文施文 下面貼衝付	TM4 横丘 掘土内	5%
TF94	弥生土器	壺	-	21	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM4 横丘 掘土内	5%
TF95	弥生土器	壺	-	17	-	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM9 南溝 掘土中	5%
TF96	弥生土器	壺	-	18	-	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM3 南溝 掘土中	5%
TF97	弥生土器	壺	-	18	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文後転用 下面貼衝付	TM9 南溝 掘土中	5%
TF98	弥生土器	壺	-	18	-	長石・石英	にぶい黄褐	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文後転用 下面貼衝付	TM7 横丘 掘土内	5%
TF99	弥生土器	壺	-	48	-	長石・石英	明赤褐	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文後転用付 胴部付加 糸一種 付加2糸 縄文施文	TM4 南溝 掘土中	5%
TF90	弥生土器	壺	-	44	-	長石・石英	浅黄褐	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM7 南溝 掘土中	5%
TF91	弥生土器	壺	-	55	-	長石・石英・赤色 粒子	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM3 南溝 掘土中	5%
TF92	弥生土器	壺	-	25	-	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部縮痕状工具による波状文施文 下面貼 衝状工具による縄文施文後転用付 下面貼 衝付	TM6 南溝 掘土中	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 33	磨製石片	49	25	11	19.9	泥岩	片刃 磨製研磨	TM1 南溝 掘土中	

番号	器種	長さ	小口径	火皿径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 22	燧管	33	12	14	825	銅	火皿部円形	TM1 横丘 掘土内	
M 23	燧管	51	10	14	422	銅	火皿部円形 小口内木質残存	TM1 横丘 掘土内	

## 第4節 ま と め

### 1 はじめに

当古墳群は、標高100m程の丘陵に位置する古墳群である。今回の調査では古墳の他に、旧石器時代の石器集中地点、縄文時代の陥し穴、弥生時代の竪穴住居跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などが確認され、古墳時代以前から人々がこの地を利用していたことがわかる。以下、確認された遺構と遺物について概観し、各時代の様相について考察を加えてまとめたい。

### 2 旧石器時代

本跡では、調査区西部と中央部で石器集中地点が確認された。標高96mに位置する第1号石器集中地点は、黒曜石とチャート素材とした石器製作跡で、北西に位置する第4号住居跡の覆土からは黒曜石の未製品も出土している。本地点から出土している黒曜石のほとんどが栃木県高野山産で、わずかに信州産のものがみられる<sup>1)</sup>。第1号石器集中地点より10m高い、標高106mに位置する第2号石器集中地点は、黒曜石より硬質なチャートを主な素材とした石器製作跡である。チャートの石核の他に石英の石核も出土しており、チャート以外を石材とした石器製作も行っている。

両地点では縦長剥片が少なく、尖頭器製作の際に剥離する鱗状の剥片がみられることから槍先形尖頭器を製作していたものと考えられる。岩瀬地域での槍先形尖頭器は、裏山遺跡において<sup>2)</sup>、黒曜石やチャート製の尖頭器が遺構の覆土中から出土しており、本跡と石材や製作器種が類似している。槍先形尖頭器はこの他にも加茂遺跡では黒曜石<sup>3)</sup>、犬田神社前遺跡ではチャート<sup>4)</sup>、辰海道遺跡では珪質頁岩製のものがそれぞれ出土している<sup>5)</sup>。

### 3 縄文時代

調査区東部の標高85～89mの東斜面部に7基の陥し穴が分布している。ここでは、鈴木素行氏の分類<sup>6)</sup>に従って当古墳群の陥し穴を分類し、考察を加えたい。

鈴木氏は、短軸の断面形状と、平面形状との組み合わせで分類を行っている。当古墳群で確認されたのは3種類で、C類は断面形状がU字状、平面形状が楕円形を呈するもので、第4号陥し穴があたり、標高85mほどの東斜面に直交するように位置している。C-p類はC類の底面に小ピットが検出されたもので、第1・2・5号陥し穴が含まれる。第1号陥し穴は、標高89mほどの東斜面に直交し、第2・5号陥し穴は、標高85mほどの東斜面に平行している。D-p類は、断面形状がU字状、平面形状が隅丸方形を呈するD類の底面に小ピットが検出されたもので、第3・6・7号陥し穴があてはまり、第3号陥し穴は、標高85mほどの東斜面に平行し、第6号陥し穴は、標高89mほどの東斜面に直交、第7号陥し穴は、標高89m程の東斜面に平行している。分類ごとにとみると、標高や斜面に対する配置に統一性はみられないが、標高でみると、標高85m付近と89m付近に分かれているのが認められる。規則性がうかがえる陥し穴の配置としては、標高89mに第1・7号陥し穴が斜面に対し直交しているものがあげられ、2基一組と捉えることもできる。

当古墳群で確認された陥し穴が、同時期に機能していたかは定かではないが、標高を意識して構築している様相はうかがうことができる。周辺の遺跡で縄文時代の遺構が確認されているのは、高橋遺跡<sup>7)</sup>と加茂遺跡<sup>8)</sup>で、高橋遺跡からは陥し穴2基、加茂遺跡からは後期の住居跡が確認されており、周辺の丘陵に集落や狩猟場が営まれていたと考えられる。

## 4 弥生時代

## (1) 集落の立地

当時代の遺構は、標高95～106mの丘陵斜面部から竪穴住居跡10軒が検出された。丘陵下に広がる沖積地の標高は62～65mで、その比高は30m以上認められる。水田経営には困難な場所で、川沿いに広がる沖積地に水田を営んでいたとしても、集落との行き来は非効率的である。また、丘陵上には湧水地なども認められず、生活を営むうえでも極めて不便な場といえる。この集落は通常の集落と立地が大きく異なっており、通常の集落とは違う性格をもっていただけと思われる。これに類似する集落は、瀬戸内地域や近畿地方など西側の地域に多くみられ<sup>9)</sup>、高地性集落とされている。当古墳群の集落を立地の異常性から高地性集落として考察したい。

高地性集落については、小野忠親氏が論じており、その概念は広義と狭義があるとされ、広義のものは、時代の趨勢に反する異常な集落、狭義のものは、防御機能をもつものとしている<sup>10)</sup>。広義の高地性集落には4つの機能があるとされ、①縄文時代以来の伝統的生業を営む集落で、狩猟や、原始陸耕すなわち焼畑耕作のムラ、②稲作手助の農耕社会に発生した、政治集団間の緊張にともなう軍事的防衛機能をもつ集落、③低地の農村から分村した開拓村落、④祭祀の施設が考えられている。土塁や堀などの防御施設や祭祀として使用された遺構や遺物は本跡では確認されず、上記の②、④とは考え難い。当古墳群の集落で出土している遺物をもとに弥生土器の他に紡錘車や石鎌があり、石鎌はアメリカ式石鎌で、2点のみと出土数は少ない。石鎌に使用された痕跡は無く、欠けた部分や破損もみられず、保管されていたものか、あるいは石鎌としてではなく別の用途として用いられたものとも考えられる。また、農業に使われたような遺物は無いが、生活を営み、紡織を行っていたと考えられ、①や③のような機能をもった集落と考えるのが妥当であろう。

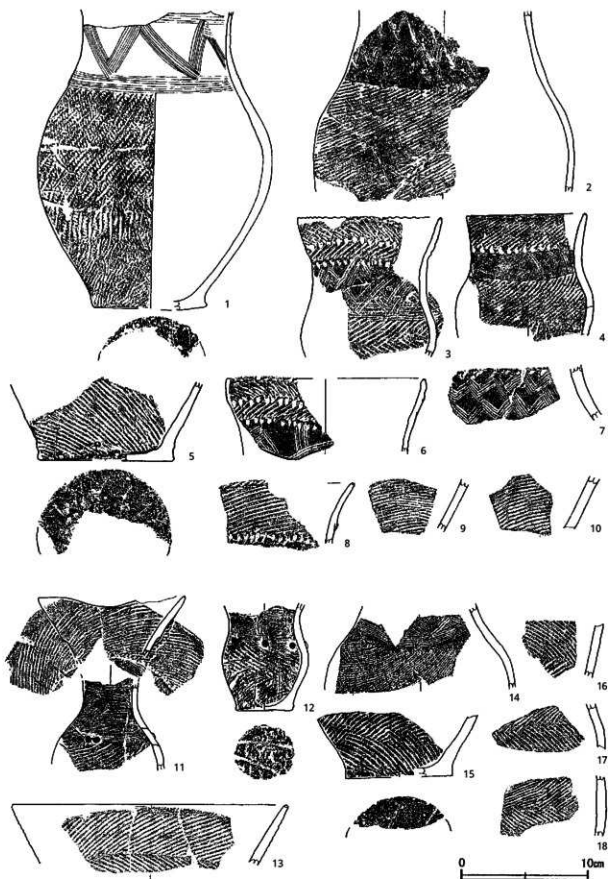
周辺の弥生時代の集落跡は、本跡の丘陵下に位置する加茂遺跡<sup>11)</sup>、高橋遺跡<sup>12)</sup>、筑輪川の対岸に位置する松田古墳群<sup>13)</sup>などがあり、今後これらの遺跡をふまえた検討が必要である。

## (2) 弥生土器 (第129図)

弥生土器は、主に竪穴住居跡から出土しているが、表土中や後世の遺構に混入したものが目立っている。出土した弥生土器はそのほとんどが破片で、器形全体をうかがえるようなものは少ない。壺形土器の文様は、口縁部、頸部、胴部の3つの文様帯で構成されている。口縁部は複合口縁が多く、口唇部には縄文原体の押圧を行っているものが目立っている。口縁部下端にも同様に縄文原体の押圧が施されているものが多くみられる。また、付加条一種(付加2条)縄文が施されているものが多い。単純口縁には、口唇部にキザミを施しているものがほとんどで、文様は複合口縁と同じように付加条一種(付加2条)縄文が施されている。頸部は、無文のものと有文のものがある。有文のものには、櫛歯状工具による連弧文、横位の波状文、山形文などが多く、斜格子文や縦区画内に横位の波状文を充填したものがわずかではあるが含まれている。頸部と胴部を区画する部分には麻状文や横走文が施され、その上にボタン状の貼瘤を貼り付けているものも存在する。胴部は、付加条一種(付加2条)縄文を施されているものがほとんどで、羽状構成のものやそうでないものが混在している。底部は木葉痕が大部分を占めているが、布目痕や無文のものもわずかにみられる。

本跡で出土している弥生土器は、高橋遺跡<sup>14)</sup>や松田古墳群<sup>15)</sup>で出土している二軒屋式の様相を示すもので、わずかに十王台の様相を有するものも含まれ、これらの遺跡をふまえた土器の検討をすることで畿西地域の土器の様相が明確になっていくであろう。





第 129 図 松田古墳群 ( 1 ~ 10 ), 高幡遺跡 ( 11 ~ 18 ) 出土弥生土器  
 ( 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第 226・228 集より )

## (3) アメリカ式石鎌

アメリカ式石鎌は、有柄式で柄の部分の先端がT字形に突出したもの<sup>16)</sup>とされており、東北地方や北陸に多く出土している。一様にアメリカ式石鎌といっても、刃部や基部に形状の違いがみられ、坂本和也氏はそれらをふまえた形態分類を行っており<sup>17)</sup>、刃部が直線的で三角形を形つくるものをⅠ類、刃部が膨らみを持ち、先端付近に肩部を有し五角形を形つくるものをⅡ類としている。そこからさらに基部の形状を3つに分類し、基部が直線的で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するものをa種、基部が凹形で、刃部幅と同幅かそれより外に突出するものをb種、基部が直線又は凹形で、刃部幅より小さいものをc種としている。これに準じ、本跡出土のアメリカ式石鎌は、Q13・Q14が同じ形状をしており、同じ形態に分類される。刃部の形状は、抉りの部分からやや丸みをおびながら先端に向かい、三角形の形状を呈している。基部は丸みをおびた凹形で、刃部幅より小さいことから、Ⅱ類c種に分類できるものと思われる。県内では、ひたちなか市（旧勝田市）東中根遺跡から1点出土しており、Ⅱ類a種とされ<sup>18)</sup>、加茂遺跡<sup>19)</sup>でも1点出土し、刃部は直線的で、基部は刃部幅より小さいためⅠ類c種と考えられる。

本跡で出土したアメリカ式石鎌は、前述したように、保管あるいは石鎌本来の用途意外に用いられた可能性がある。坂本氏は、機能や用途についても論じており<sup>20)</sup>、直接もたらされたものは矢としては使用されず、装飾品として手にいれたものと想定している。このように想定すると、加茂B古墳群出土のアメリカ式石鎌も装飾品として考えることも十分可能である。今後、県内からの資料が増加することを期待するとともに、社会的背景や用途についても考察していく必要がある。

## 5 古墳時代

## (1) 古墳

加茂B古墳群は、旧岩瀬町の分布調査で円墳6基からなる古墳群と捉えられてきた。今回の調査の結果、方墳1基、円墳8基が確認され、丘陵の頂上部から斜面にかけて築かれていることが判明した。周辺を踏査したところ、南に延びる尾根上に地彫れ状の高まりが確認できることから、同丘陵の尾根から斜面にかけても、さらに分布が広がることが予想される。

第1号墳は、一辺13.8mの方墳である。周辺で確認されている方墳は、間中古墳<sup>21)</sup>と花園古墳<sup>22)</sup>で、これらの古墳は6世紀後葉から7世紀初頭の年代が想定されており、本墳より時期が下るもので、同時期のものは確認されていない。墳丘は、西に向かって傾斜する斜面部を利用して構築され、盛土をしない低墳丘で、葺石は認められない。周溝は、南側の上幅が狭く、北側より20cmほど深く掘り込まれているなど、墳丘と周溝の形状から、斜面部を意識して構築していることがわかる。埋葬施設は、墳頂部に位置する木棺直葬で、掘り方内に木棺を安置し、その周囲に鹿沼土を多く含む暗褐色土を埋め込んでいる鹿沼土層である。周辺で発掘された古墳の埋葬施設は、石室が形成される前までは、孤塚古墳<sup>23)</sup>や青柳古墳<sup>24)</sup>でみられるような粘土層であった。本墳でみられる鹿沼土層は、岩瀬地域においては確認されておらず、稀有な例といえる。粘土の採取できない丘陵上に位置するため、地山の一部である鹿沼土層を掘り込んで使用したと思われる。

第6号墳は、丘陵の東斜面に位置する径約13mの円墳で、高さ0.2mほどの低墳丘である。今回調査された古墳の多くは斜面部に築かれ、斜面側の周溝を深く掘り込み、盛土をせずに地形を利用して墳丘としたものや、わずかに盛土しているものばかりで、墳丘を高く見せるための工夫がなされていることが想定される。埋葬施設は、墳頂部に東西に並んで2基確認され、東側の第1主体部は、墳丘の中心部に位置し、

長方形の掘り方内に2基の木棺が安置されていた。2基の木棺は、土層断面からは時期差が認められず、平行に並んでいることからほぼ同時に埋葬されたものと考えられる。西側の第2主体部は、長方形の掘り方内に木棺が安置されたものである。副葬品として、直刀1振り、ガラス小玉11点<sup>25)</sup>が出土している。

本墳は第1主体部の被葬者の古墳として築造され、後に第2主体部の被葬者が埋葬される。第1主体部には、近親者同士が埋葬され、そのすぐ隣に構築された第2主体部には、第1主体部の被葬者の近親者が埋葬されたものと想定される。第2主体部の上面から出土した遺は、周溝内から出土した須恵器杯より時期は古く、伝世したものとすると第1主体部の被葬者から伝わった可能性が高く、その他の副葬品も伝世されたと考えられ、副葬品が第2主体部から出土し、第1主体部で出土しないことも肯ける。これに従うと、第6号墳の築造時期は5世紀後葉が想定され、6世紀前葉に第2主体部の被葬者が埋葬された継続的に使用されていた古墳で、第1主体部の被葬者と密接な関わりをもつ人々の墓として使用されていたのであろう。

第7号墳は、丘陵頂上部に位置する径約13mの円墳である。墳丘は第6・8号墳と同じように50cmほど盛土した低墳丘で、規模も類似している。周溝は、斜面部に位置する古墳のように一部分を深く掘り込むことはなく、均等である。周溝底面からは土師器杯がほぼ完形で出土している。南側は、地山が一部掘り残され土橋状になり、すぐ北の墳丘部には主体部が位置しており、土橋として機能していたと考えられる。周溝の底面にも埋葬施設と考えられる土坑状の掘り込みがみられ、同様の周溝内埋葬施設は第8・9号墳にも確認することができ、いずれも周溝の底面を掘り込んで構築している。本墳の主体部は木棺直葬で、同じ埋葬施設内への追葬は困難であるが、墳丘裾部に位置しているため、追葬可能な部分は多い。しかし、周溝内に埋葬していることから、被葬者の近親者のような人物ではなく、従属的な身分の人物が考えられる。

当古墳群の埋葬施設にみられる粘土は、丘陵で採取することができず、丘陵下から採取してきたものと考えられる。また、古墳はいずれも斜面部に位置し、第1～5・8・9号墳は西斜面、第6・7号墳は北から東にかけての斜面部に構築されている。これらの古墳の立地は、被葬者に関わる人々の目に入る位置に構築され、地形を利用した構築法も、より大きく古墳を見せるための工夫を施したものと考えられる。これに従うと、西側の筑輪川沿いに広がる沖積地や、東側の丘陵上など古墳を望むことができる場所に集落を形成していたものと推測される。

## (2) 石棺

当古墳群からは、小形の箱式石棺3基も確認されている。第1・3号石棺は第8号墳の北側、第2号石棺は第8号墳の周溝内に位置している。3基の石棺は、長軸1.4～1.6mと小形で、第2号石棺のみ、底面に石が敷かれているが、板状の石を組み合わせている点に共通の構築方法が認められる。

3基の石棺には、側壁の板石の数や組み方に違いがみられ、第1号石棺は、長方形の石を横位、その他の大きさの揃った石を2・3枚縦位で組み、第2号石棺は、長方形の石を3枚横位で立てている。第3号石棺は長方形の石を縦位で5枚立てており、重なり合わないよう構築している。阿久津久・片平雅俊の両氏による箱式石棺の分類<sup>26)</sup>によると、板石を横位で組むものや横位と縦位を合わせて組むものから、縦位で組むものへの変化がみられるようで、第1・2号石棺は前者、第3号石棺は後者に当てはまる。従って、第1・2号石棺の後に第3号石棺が構築されたという時期差が存在する可能性が考えられるが明確ではない。

## (3) 出土遺物

出土遺物は、土師器、須恵器、直刀、刀子、ガラス小玉などで、土器類はそのほとんどが周溝内からである。また、直刀、刀子、ガラス小玉は副葬品であり、主体部からの出土である。第3号墳から出土している須恵器の杯・蓋はTK23併行期、第6号墳の須恵器の甕はTK208併行期、杯はTK10の併行期でそれぞれ東海産のものである。第6号墳の甕は、やや肩張りの形状をしており、残存する頸部に文様は確認できない。体部には孔を通して沈線が施文され、その沈線を中心として刺突文が羽状に施文されている。文様が異なるが美浦村沢田古墳群<sup>27)</sup>2号墳から出土しているものと同時期とみられる。第6号墳出土の甕は、唯一周溝外の第2主体部上面から一か所に破片の状態で出土し、故意に破砕された様相を示していることから、主体部の上で土器を破砕した祭祀行為が考えられる。第9号墳からも甕が出土しており、口縁部や頸部は破損により不明であるが、体部には刺突文が施され、第6号墳の甕と同時期に位置づけられる。第7号墳から出土している土師器杯は、ひたちなか市半分山遺跡第44号住居跡から出土しているものと同時期<sup>28)</sup>で、MT15の時期が与えられる。

岩瀬地域では、墳丘上に埴輪を配置する代わりに土器を置く特徴が多く、古墳でみられ、当古墳群でも埴輪は確認されず、墳丘上や周溝内に土器が配置されていたものと推測される。出土した土器は周溝内の一か所に集中しており、その位置は各古墳とも様々で、配置されていた場所がそれぞれ異なっていたと考えられる。今回確認された主体部4基のうち2基から直刀2振りが出土している。どちらも刀身のみで、鞘や鏝などは出土していないため、刀身を布などで包んで埋葬したものと思われる。

#### (4) 古墳群の変遷と様相 (第130図)

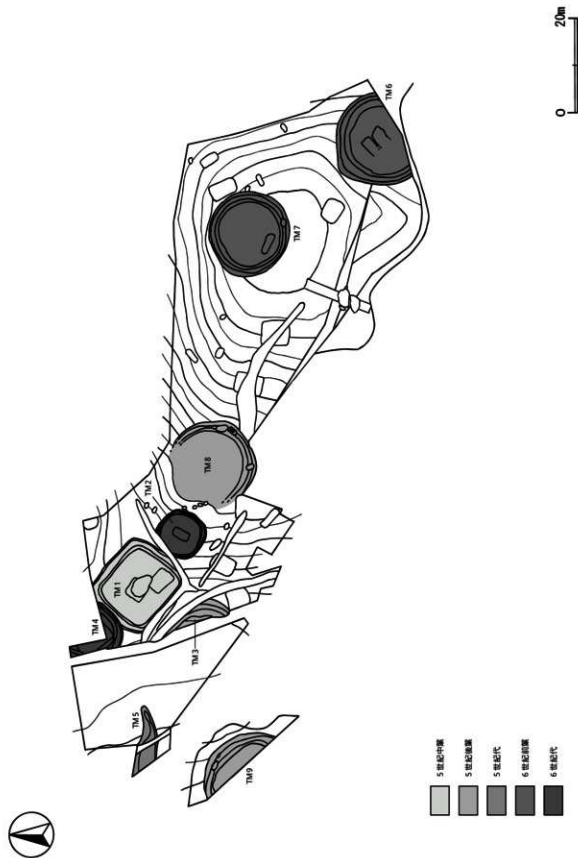
当古墳群が形成された古墳時代中期は、大和王権が前代に数多く出現した首長層を序列化し、編成しなおすことにより支配を強化することで、弥生的な地方連合が消滅する時期である。

今回の調査で最も古い5世紀中葉を示す第1号墳は、方墳という墳形から、王権の直接的支配に入っておらず、地域首長の支配下にある共同体成員層の墓地としてわずかに残る古墳と考えられる。また、岩瀬地域の古墳の特徴である埴輪を持たない古墳築造をしていることから、これまでとは別系統の新興勢力の被葬者は考え難く、長辺寺山古墳や狐塚古墳を頂点とする支配体制にのっとった前代の伝統を継承する被葬者像が想定される。

関東においてもこの時期の方墳は神奈川県御座敷1号墳<sup>29)</sup>、同県加瀬台8号墳<sup>30)</sup>、千葉県安須2号墳<sup>31)</sup>などわずかにみられるが、本墳に関しては、遺物も少なく、様相が明確ではないため、今後の方墳調査の成果をふまえて再考したい。

第1号墳以降、方墳は消滅し、小形の円墳から成る群集墳が築造されていく。方墳に続く5世紀後葉に位置づけられるものとして、第2・3・8・9号墳があげられる。この時期の円墳は、前代の第1号墳の周辺に集中して立地し、丘陵の下方向へ築造されている様相がうかがえる。また、同時期に古墳が築造されているにも関わらず、墳丘の規模、埋葬施設、出土遺物や副葬品はそれぞれ様相を異とし、このことは6世紀前葉の第6・7号墳も同様で、これらの古墳の被葬者は、首長層ではなく、その下位に位置する中小豪族、いわゆる当地域の有力者層が推測される。

前述したように次の時期の古墳には第6・7号墳が位置づけられる。ただし、各古墳から出土している土器の時期をふまえると、TK23のものは確認できず、第7号墳の前段階に位置する6世紀初葉の古墳は認められない。第6号墳は、出土土器の様相から第7号墳より若干新しく、古い時期の甕が出土していることや主体部が2基あることから、5世紀後葉から6世紀前葉にかけて使用されていた可能性がある。5世紀後葉の古墳が、丘陵下に向かって築造されていくのとは対照的に、第6・7号墳は丘陵の頂上や尾根筋



第 130 図 古墳変遷図

といった丘陵の上を意識して築造されているようである。

次の6世紀中葉以降の古墳は今回の調査で確認されず、6世紀後半から7世紀前半にかけて、墳丘や周溝などの施設を持たない箱式石棺が出現する。第2号石棺は第8号墳の周溝内に位置しており、古墳の被葬者との縁故関係が想定される。第3号石棺からは隣接する第8号墳と同時期の5世紀後半を示す鉄鏃<sup>32)</sup>が出土しており、伝世したものと考えられ、この鉄鏃は第8号墳の被葬者との血縁・地縁的なつながりを示すものと考えられる。第1・3号石棺は、古墳の周溝外に構築されており、簡易的な構造を呈している。この存在は、6世紀後半から7世紀前半に入り、古墳を構築できる力も無く、当古墳群が衰退する状況を示しているものと考えられる。第7号墳の北東に位置する第2号墓坑は、第6・7号墳の主体部と様相が類似し、石棺と同様に周囲に墳丘や周溝を持たないことから、古墳と石棺の間の時期に当てはまる可能性があり、これに従うと、「古墳→墓坑→石棺」という当古墳群の盛衰が想定される。

当古墳群の第6・7号墳が築造される頃、対岸の丘陵に位置する松田古墳群では前方後円墳の第1号墳が築造される。この古墳からは、銅鏡、直刀、刀子、鉄鏃、ガラス小玉が副葬品として出土しており、当古墳群よりも上位の階層の人物が埋葬された墳墓と考えられている<sup>33)</sup>。また、埴輪が出土していることは、古墳に埴輪を樹立していたことを示すもので、前代までのこの地域における古墳の特徴にはみられないことから、前方後円墳を築造し得る在地首長権を獲得し、新たに羽黒盆地に分立した首長層と想定できる。従って、当古墳群の被葬者は、松田古墳群の被葬者である首長クラスの人物を頂点とし、同じ筑輪川流域に位置する木植古墳群や曾根古墳群などと共に、それぞれの小さな地域や集落を治めた中小豪族と考えられる。さらに、当古墳群は石棺を加えると5世紀中葉から7世紀前半までの古墳であるが、わずかに途絶える時期が認められ、時期に連続性がみられないことや、古墳の形状・規模の変化、立地する場所の変化などから、当古墳群の被葬者内でも権力の移り変わりがあったことが考えられる。加茂部地区という狭い範囲内に、当古墳群を築造した中小豪族を有力者層とする人々の存在が想定でき、その中で、世襲のみではなく、他の有力者への権力の移譲もあったものと考えられる。

## 6 奈良・平安時代

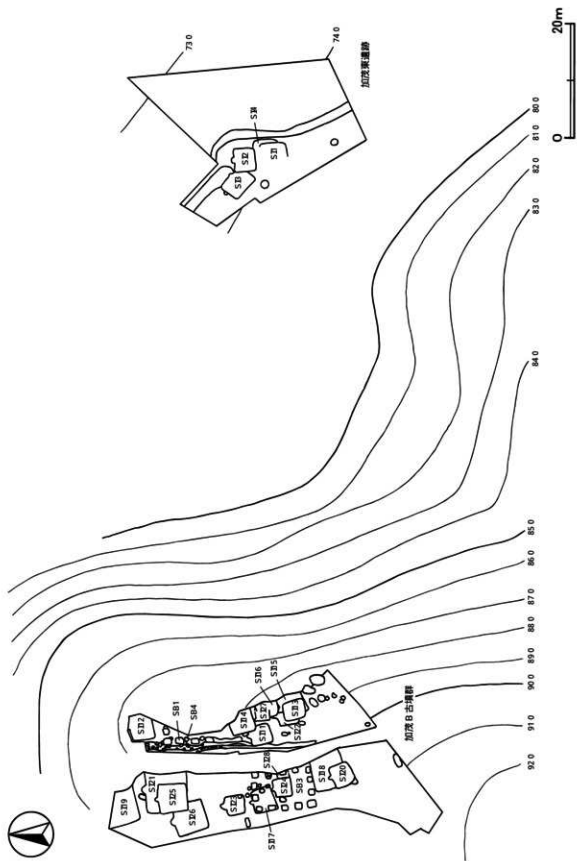
当時代の遺構は、調査区東部の標高84～90mの東斜面部から堅穴住居跡18件、掘立柱建物跡6棟、調査区西部の標高94mの西斜面に土坑1基が確認されている。この斜面は段状になっており、上下2段に遺構が存在し、南北に延びる斜面上に集落が広がっているものと考えられる。確認された遺構の時期は、8世紀から10世紀までで、集落が継続して営まれていることがわかる。ここでは、集落の変遷と出土遺物から若干の考察を加え、当遺跡の様相に迫りたい。

### (1) 集落の変遷

#### 8世紀

この時期の遺構には第11・16・18・19・21・26号住居跡、第3号掘立柱建物跡、第51号土坑が該当する。遺構が立地する場所は、斜面に整形された狭い段切状の部分で、集落を形成するのに適した場所とはいい難い。

この集落で最も古い時期の8世紀中葉には第18・21号住居跡の2軒が該当し、段差の上段に立地している。第21号住居跡は一边が6.5mを測る当集落最大の住居跡で、遺物の出土量が特徴的である。特に杯の数は11点と突出しており、その他にも供膳具が多い。甕は、砂質粘土を用いた頑丈な造りで、火床面は煉瓦の様に硬化し、他の住居跡の甕にはみられない両袖の外側に甕施設に伴うピットが存在している。また、



第 131 図 加茂B古墳群・加茂東遺跡 奈良・平安時代遺構位置図  
 (『茨城県教育財団文化財調査報告』第 228 集より一部加筆)

本跡は二度の建て替えが行われており、地山の岩盤層を掘り込んで拡張していることがわかる。後葉に入ると上段に掘立柱建物が構築されるようになり、下段には竪穴住居が構築される。

集落から丘陵を越えた反対側の西斜面に位置する土坑は氷室として利用されていたものと考えられる。この土坑の覆土中層から土器がまとも出土し、その中には底部が穿孔された須恵器杯も検出されている。この土坑が位置する西側は、現在でも雨乞い信仰が残る加茂山をのぞむことができ、意識して作られたように思われる。氷室としての機能が失われた後、土器を投棄したものであろう。

8世紀代の住居跡は、第21号住居跡をはじめ比較的規模が大きく、一辺5mを超えるものが5軒を数えることができる。これらの配置をみると、上段に構築された中葉の住居廃絶後に第3号掘立柱建物が構築され、上・下段に住居が構築されるようになる。特筆すべき遺物は、墨書土器で、「大」と書かれているものはこの時期に多くみられる。

### 9世紀

この時期では、第12・15・17・20・22～25号住居跡の8軒が該当する。前葉の住居跡は、8世紀中葉の分布と同様に上段に構築され、中葉から後葉に入ると下段にも住居跡がみられるようになる。規模は前代に比べて小形化し、最大のもでも一辺4.6mで、その他は3～4mのものとなり、8世紀代より1m以上の差が認められる。前葉の住居跡である第20・23・24号住居跡は、5～6mの間隔をおいて、一列に並ぶように位置し、第24号住居跡は第3号掘立柱建物跡と重複して構築されていることから、この時期に掘立柱建物跡が廃絶していることがわかる。8世紀後葉の第16号住居跡の上には中葉の第22号住居跡、さらに後葉の第15号住居跡が重複しており、短期間で住居の構築・廃絶が認められ、この後の10世紀代の住居跡も重複してくることから、この位置が居住区として長期間にわたり、使用されてきたと考えられる。北には、第1・4号掘立柱建物跡が存在し、それらとの関連性が想定される。この時期の特徴的な遺物は、墨書土器の他に前代より転用硯が多くみられることで、第12・15号住居跡から出土しているような朱墨のついたものもこの時期にみられる。また、斜面下に位置する加茂東遺跡<sup>9)</sup>は、9世紀代から10世紀代の集落跡で、当遺跡の集落として時期は同じであり、住居の構築・使用・廃絶が短期間であることなど当遺跡の集落の特徴と同じであり、密接に関連した集落と考えることができる。

### 10世紀

この時期では第13・14・27号住居跡の3軒が該当する。住居跡は下段のみで、集落が下に移動している。第13号住居跡からは、「跡山」と墨書された土師器杯の他に、釈文不明の墨書土器片2点があり、第14号住居跡からは二次焼成を受けた緑釉陶器皿が出土している。墨書土器が継続的に出土しているのに対し、転用硯の出土はこの時期からみられなくなる。この時期を最後に遺構は確認されなくなり、加茂東遺跡でも同じような状況を示し、集落の終焉を迎えるものと思われる。

#### (2) 墨書土器(表15)

今回確認された墨書土器は計17点である。墨書土器が出土しているのは、第11～13・15・18・19・23・26号住居跡、第1号掘立柱建物跡の抜き取り痕で1点、表土中で2点確認されている。器種は、杯が11点と多く、高台付杯、盤、蓋がそれぞれ2点ずつで、明確な文字は「大」「跡山」「徳」「全」「大十九」などであり、その他のものは破損や摩耗により判読は不可能である。

最も多く検出されているのは「大」で、第11・12・18・19号住居跡、第1号掘立柱建物跡で出土している。これらの遺構は、8世紀代のものが多く、以降の時期ではほとんどみられず、9世紀後葉の第12号住居跡で「大」と思われる墨書土器片が出土している。他の遺跡でも「大」はできるが、「大」はこの地が古



代新治郡の大幡郷に比定されている<sup>30)</sup>ことから、「大幡郷」の「大」を称したものと考えられる。

特徴的なものは、「冪山」で、10世紀初頭の土師器杯に記されている。「冪」は、「めづらしい、貴重な」といった意味合いをもつ字で、「山」は本跡が位置する丘陵を指すものと考えられる。遺跡の北側には式内社加茂大神御子神主玉神社が鎮座し、丘陵上には古墳や御神体とされる「舟止め石」も存在することから、当時の人々にとってこの丘陵は特別な場と想定され、「冪山」の文字はこの土地を指し示していたものと推測している。この他にも特徴的な文字資料があるが、意味について現時点では不明であり、今後の文字資料の増加を期待し、それをふまえて再考察したい。

表 15 奈良・平安時代墨書土器一覽表

番号	訳文	種別	材質	器種	部位	方向	遺構	所属時期	遺物番号	備考
1	大	墨書	須恵器	蓋	天井部外面	横位	第1号住居跡	8世紀後半	65	内面墨痕
2	田カ	墨書	土師器	杯	体部外面	横位カ	第1号住居跡	8世紀後半	72	内面黒色処理
3	大カ	墨書	土師器	杯	体部外面	正位カ	第1号住居跡	9世紀後半	73	内面黒色処理
4	冪山	墨書	土師器	杯	体部外面	正位	第1号住居跡	8世紀末～10世紀初頭	80	内外面油煙
5		墨書	土師器	杯	口縁部外面		第1号住居跡	8世紀末～10世紀初頭	81	内面黒色処理
6		墨書	土師器	杯	体部外面		第1号住居跡	8世紀末～10世紀初頭	82	内面黒色処理
7		墨書	土師器	杯	体部外面		第1号住居跡	9世紀後半	92	
8	大カ	墨書	須恵器	杯	体部外面	正位カ	第1号住居跡	8世紀中葉～後半	117	
9		墨書	須恵器	杯	体部外面		第1号住居跡	8世紀後半	128	
10		墨書	須恵器	高台付杯	底部外面		第1号住居跡	8世紀後半	130	
11	大	墨書	須恵器	盤	底部外面		第1号住居跡	8世紀後半	133	
12	盤 大	墨書	須恵器	盤	底部・体部外面		第1号住居跡	8世紀後半	134	
13	金	墨書	須恵器	高台付杯	底部外面		第2号住居跡	9世紀前半	163	
14	大十九	墨書	須恵器	杯	底部外面		第2号住居跡	8世紀後半	171	
15	大	墨書	土師器	杯	体部外面	横位	第1号独立柱建物跡	8世紀代	177	
16	大	墨書	須恵器	杯	底部外面		表採		193	
17	大	墨書	須恵器	盤	底部外面		表採 L9C		194	内面墨痕

(3) 転用硯(表16)

転用硯は9点確認されている。7点は壑穴住居跡から検出され、出土している第19・21号住居跡を除くと、いずれも9世紀代の住居跡である。転用器種は、杯、高台付杯、皿、盤、蓋で、特に盤の底部外面が

表 16 転用硯一覽表

番号	種類	材質	器種	部位	遺構	所属時期	遺物番号	備考
1	皿 朱墨	須恵器	皿	底部内面 皿 底部外面 朱墨	第1号住居跡	9世紀後半	78	
2	朱墨	土師器	皿	内外面	第1号住居跡	9世紀後半	94	内面黒色処理
3	皿	須恵器	皿	底部外面	第1号住居跡	9世紀中葉～後半	104	
4	皿	須恵器	皿	底部外面	第1号住居跡	9世紀中葉～後半	105	
5	皿	須恵器	高台付杯	底部内面	第1号住居跡	8世紀後半	132	
6	皿	須恵器	杯	内面	第2号住居跡	8世紀中葉	150	
7	皿	須恵器	蓋	内面	第2号住居跡	9世紀後半	170	
8	皿	須恵器	蓋	内面	表採		188	
9	皿	須恵器	皿	底部内面	表採		194	

多く使用されている。第12号住居跡のものも盤の底部外面を使用した朱墨の付着が認められ、内面には墨の付着が確認できる。第15号住居跡では、皿に朱墨が付着しているものが出土しており、単なる識字刷の存在だけでなく、文書事務に携わる人物の存在をうかがうことができる。

#### (4) 奈良・平安時代の集落の様相

丘陵の頂上部から西斜面にかけての、5世紀中葉から6世紀前半、石棺の構築を含めると7世紀前半までの継続が考えられる当古墳群が選地し、集落は、集落を形成するには適した場所ではない東斜面である。この地に集落を形成した人々は丘陵の古墳を意識しており、この場所に住む必然性のあった被葬者に関連する人々であり、当古墳群の被葬者の末裔を想定したい。

加茂部地区という狭い範囲を治めていた中小豪族は、丘陵の東側を居住基盤にしたものと考えられ、周辺では当古墳群をのぞむ丘陵上やその斜面に位置していたと考えられる。奈良時代に入り、居住基盤に変わりが無い狭い谷津内に住み、墓域の意識は薄れ、東斜面面上段の第3号掘立柱建物跡は、当古墳群の被葬者の末裔で、在地の有力者層の居宅と考えられ、その人物を中心に集落が形成されていったと想定される。この時期には、西側に祭祀を行った土坑が存在し、第8号墳と重複する第1号道路がこの時期より機能していたと想定でき、これは根根筋を通るように舟止め石に向かっており、土坑と舟止め石を結ぶ通路と想定できる。『延喜式』新名上に常陸国二十八座新治郡三座として「稲田神社 佐志能神社 鴨大神御子神主神社」とある式内社加茂大神御子神主玉神社が、当古墳群をのぞむ北東の斜面部に位置しており、9世紀には鎮座していたため、当地域の祖先である古墳の被葬者を祭るための祭祀や信仰が執り行われたものと推測される。集落の居住者も、この丘陵を示すと考えられる墨書土器「弥山」にみられるように、古墳に眠る祖先への想いがあったのだろう。この集落は10世紀前半を最後に終わりを迎えるが、その背景には、住居を構築できる場所がなくなっただけでなく、祖先への想いの薄れからも、集落は徐々に下へと移動していったものと考えられる。

## 7 おわりに

当古墳群からは、旧石器時代から平安時代までのが確認された。

旧石器時代の石器集中地点の発見は、岩瀬地域の発見であり確認されなかった石器製作場の貴重な資料である。弥生時代の集落跡や出土している土器は、県西における後期の文化の交流を解明する上で、重要な遺跡であり、古墳群の調査も松田古墳群など周辺の古墳との関連や岩瀬盆地における古墳文化解明の重要な資料となる。また、斜面部に奈良・平安時代の集落が発見されたことは、今後の集落跡研究においても検討を要する事例であり、地域史研究にも大きな成果となった。

## 註

- 1) 窪田恵一氏の御教授による。
- 2) 黒澤秀雄「一般県道西小島真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告 茨山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第73集 1992年3月
- 3) 島田和宏「加茂遺跡 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第249集 2005年3月
- 4) 寺内久永・須賀用正「大田神社前遺跡3 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第270集 2007年3月

- 5) 仲村浩一郎・後藤一成・宮田和男・芳賀友博・鴨志田祐一「畿海道遺跡Ⅰ 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告書』第222集 2004年3月
- 6) 鈴木素行「武田石高遺跡の陥穴状遺構について」『財』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集武田石高遺跡 田石器・縄文・弥生時代編』1998年1月
- 7) 横倉要次・早川麗司・越田真太郎「高幡遺跡 加茂東遺跡 大田山神古墳 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第228集 2004年3月
- 8) 前掲3)と同じ
- 9) 森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究』第7巻 弥生集落 雄山閣 1986年1月
- 10) 小野忠熙『高地性集落論』學生社 1984年2月
- 11) 前掲3)と同じ
- 12) 前掲7)と同じ
- 13) 横倉要次「松田古墳群 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集 2004年3月
- 14) 前掲7)と同じ
- 15) 前掲13)と同じ
- 16) 坂本和也「アメリカ式石葺考」『みちのく発掘—菅原文也先生選葬記念論集』菅原文也先生選葬記念論集刊行会 1995年9月
- 17) 前掲16)と同じ
- 18) 前掲16)と同じ
- 19) 前掲11)と同じ
- 20) 前掲16)と同じ
- 21) 西宮一男『関中古墳』岩瀬町教育委員会 1982年3月
- 22) 伊藤重敏・川崎純徳「花園壁画古墳（第3号墳）調査報告」『岩瀬町文化財調査報告』第7集 岩瀬町教育委員会 1985年3月
- 23) 西宮一男『常陸孤塚』岩瀬町教育委員会 1969年3月
- 24) 伊藤重敏「青柳2号墳調査報告」『岩瀬町文化財調査報告書』第6集 岩瀬町教育委員会 1983年3月
- 25) 松井氏により、ガラス小玉の分析を行った。G1・G2は銅と鉛が特異的に検出され、鉛ガラスを銅で着色した可能性がある。G3～G13は、銅があまり検出されず、鉄や鉛、カルシウムが検出されている。カルシウムが含まれていることから鉛ガラスとはいえず、断定することができない。
- 26) 阿久津久・片平雅俊「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民族博物館研究報告第44集 東国における古墳の終末（本編）』国立歴史民族博物館 1992年3月
- 27) 本橋弘巳「沢田古墳群 国道125号大谷バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第276集 2007年3月
- 28) 稲田健一氏の御教授による。
- 29) 西川修一・天野賢一・寺村光晴・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・植田弥生『御原敷部遺跡・高森一ノ崎遺跡・高森・窪谷遺跡』かながわ考古学財団調査報告33 1998年3月
- 30) 浜田晋介・長谷川祐紀・菅野和郎・畠山直・折茂克哉「加瀬台古墳群の研究Ⅰ」加瀬台8号墳の発掘調査報告書 財団法人川崎市市民ミュージアム 1996年12月

- 31) 小澤洋「房総における古墳中期から後期への移行」『第6回東北・関東前方後円墳研究大会〈シンポジウム〉中期古墳から後期古墳へ 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会 2001年1月
- 32) 稲田健一氏の御教授による。
- 33) 前掲13)と同じ
- 34) 前掲7)と同じ
- 35) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史』通史編 岩瀬町 1987年3月

#### 参考文献

- ・茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- ・川又清明「釘のあるころー岩瀬盆地を中心としてー」『菟玖波ー川井正一・齋藤弘道・佐藤正好先生選撰記念論集ー』川井・齋藤・佐藤先生選撰記念事業実行委員会 2007年2月
- ・津野仁、谷中隆、森嶋秀一、江原英、藤原祐一『寺野東遺跡Ⅶ』栃木県埋蔵文化財調査報告第209集 財団法人栃木県文化財振興事業団埋蔵文化財センター 1998年3月
- ・石野博信、岩崎卓也、河上邦彦、白石太一郎『古墳時代の研究』第7巻 雄山閣 1992年4月
- ・石野博信、岩崎卓也、河上邦彦、白石太一郎『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣 1991年11月
- ・小澤重雄「山ノ入古墳群 大日下遺跡 北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第255集 2006年3月

## 第4章 金谷遺跡

### 第1節 遺跡の概要

金谷遺跡は、桜川市（旧西茨城郡岩瀬町）西飯岡金谷882番地の2ほかに所在し、桜川市北西部の泉川左岸、標高49～52mの台地上に位置している。調査前の現況は道路である。平成14・15年度に、調査が行われており、調査面積は53,419.04㎡である。調査区を東西に分断する道路部分を平成18年度に調査を行った。今回は道路部分の整理を行う。

遺構は、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、時期不明の土坑2基、溝跡1条、ピット列1か所が確認されている。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱が出土している。主な出土遺物は、土師器（杯・甕）、土製品（支脚・土玉）などである。

#### 1 奈良・平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

##### (1) 竪穴住居跡

##### 第112号住居跡（第133図）

**位置** 中央1区西部S43h3区の平坦な台地上に位置している。東部は平成14年度に調査が終了している。

**規模と形状** 上面が削平されているため、確認された範囲は南北軸6.15m、東西軸は6.40mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。

**ピット** 2か所。P4・P5は深さ93cm・84cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。

**所見** 今回の調査では遺物が出土していないため、時期は不明であるが、平成14年度調査区分の『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集で、時期は8世紀中葉以前と報告されている。

##### 第245号住居跡（第133図）

**位置** 中央1区西部のT43h2区、標高48mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第1416号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 南北軸3.32m、東西軸3.88mの長方形で、主軸方向はN-7°-Eである。

**床** 平坦である。

**竈** 北壁中央部からやや東寄りに付設されている。火床面は火を受けて赤変している。

**覆土** 堆積状況は、層厚が薄いため不明である。

**所見** 遺物が出土していないため、時期は不明である。

表 17 奈良・平安時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 m		壁高 cm	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備 考 調査関係 古 新
				長軸	短軸				注柱穴	出入口	ピット	竪				
112	S 43h3	N - 5° - E	長方形	6.40	6.15	-	平壇	-	2	-	1	-	-		8世紀中葉以前	
245	T 43b2	N - 7° - E	長方形	3.88	3.32	-	平壇	-	-	2	1	-	-			

## (2) 掘立柱建物跡

## 第32号掘立柱建物跡 (第133図)

**位置** 中央1区西部のS 43e2区、平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第111号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と構造** 桁行3間で、桁行方向はN-80°-Wである。規模は桁行8.1mである。柱間寸法は2.7m(9尺)を基調とし、ほぼ均等に配置されている。

**柱穴** 4か所。平面形は方形又は隅丸方形で、規模は長軸80~100cm、短軸71~97cmである。深さは46~77cmである。P 2の底面からは柱のあたりが、P 3からは抜き取り痕が確認されている。

**所見** 桁の1列のみ確認され、北あるいは南側の桁柱穴は削平により失われた可能性がある。時期は、規模や形状から奈良・平安時代と考えられる。

## (3) 溝跡

## 第22号溝跡 (第133図)

**位置** 中央1区西部のS 43j1~T 43a1区、台地の平坦部に位置している。東部は平成14年度に調査が終了されている。

**規模と形状** 上面が削平されているため、規模や形状は明確ではないが、南部が調査区域外に延びている。S 43j1区から7.5mほど西方向(N-88°-E)に直線的に延びており、S 43j1区ではL字に屈曲し、南方向(N-2°-E)に直線的に延びている。平成14年度分は、幅1.64~2.52mで今回確認した部分は、上部が削平されているため幅0.69~1.12mである。

**所見** 平成14年度調査区分の『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集において、第1号ピット列ときほど時期差なく作られ、防衛的役割を果たしていたとされ、時期は9世紀中葉以降と考えられている。今回確認された部分では、本跡とピット列が共に南に屈曲しており、本跡を意識してピット列が構築された可能性が高い。

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、土坑2基、ピット列1列が確認された。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

## (1) 土坑

## 第1416号土坑 (第132・133図)

**位置** 中央1区西部のT 43b2区、標高48mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第245号住居と重複しているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 長軸0.50m、短軸0.46mの隅丸方形で、長軸方向はN-6°-Wである。深さは26cm、底面は平

坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**遺物出土状況** 覆土中から混入した土師器片14点（坏4，甕10），土製品1点（支脚）が出土している。DP430は、覆土上層から出土している。

**所見** 古墳時代の土師器が混入しているが、時期や性格は不明である。

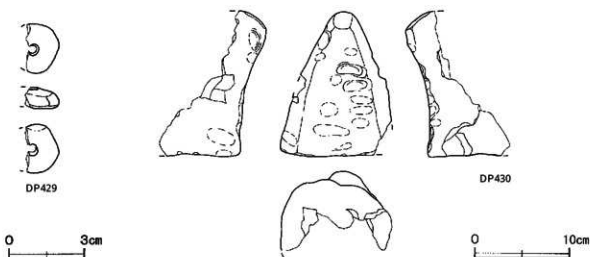
### 第1417号土坑（第132・133図）

**位置** 中央1区西部のT43d2区、標高48mの平坦な台地上に位置している。

**規模と形状** 長軸0.87m、短軸0.71mの隅丸方形で、長軸方向はN-83°-Wである。深さは39cm、底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

**遺物出土状況** 覆土中から混入した土師器片30点（坏16，高坏3，甕11），土製品1点（土玉）が出土している。DP429は覆土中からの出土である。

**所見** 古墳時代の土師器が混入しているが、時期や性格は不明である。



第132図 第1416・1417号土坑出土遺物実測図

### 第1416・1417号土坑出土遺物観察表

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP429	土玉	20	13	09	196	土 石炭	ナゲ	覆土中	SK1417出土
DP430	支脚	104	118	110	460	土 石炭 赤色粘土	指縁腐	覆土上層	SK1416出土

### (2) ビット列

#### 第1号ビット列（第133図）

**位置** 中央1区西部のS43j3区からT43b1区で、標高48mの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第22号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** S43j3区から西に7mほど延び、S43j1区でL字に屈曲して、南方向（N-5°-E）に7mほど延びる。柱間寸法は0.1~1.6mである。

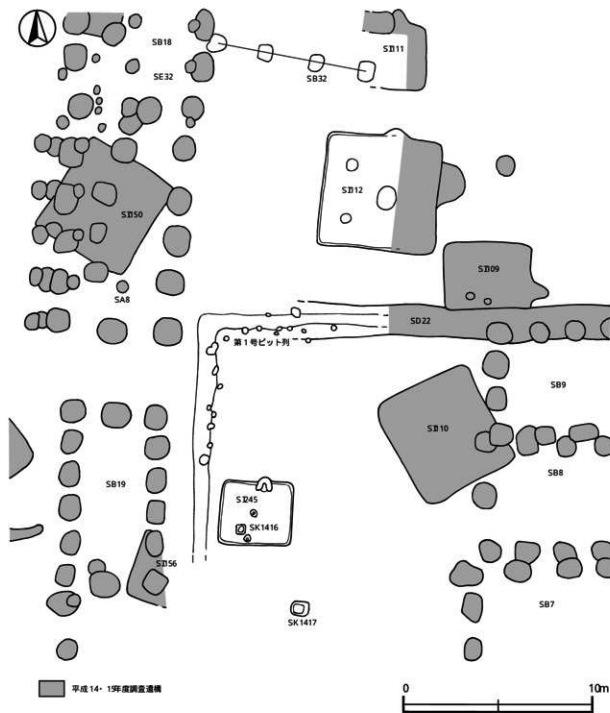
**柱穴** 新たに19か所確認された。長径16~62cm、短径16~40cmの円形及び楕円形で、深さは14~65cmである。

**所見** 『茨城県教育財団文化財調査報告』第225集で、本跡の東側が報告されており、溝と複合した施設で、

槽のような施設であったとされている。今回確認された部分で、第22号溝跡と同じように南に屈曲していることが判明したことから、溝と複合した施設である可能性は高い。

表 18 土坑一覧表

番号	位置	長軸方向	平面形	規模			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	遺構関係 古新
				長軸径	短軸径	深さ					
1416	T 43b2	N - 6 - W	隅丸方形	0.50	0.46	26	外積	平坦	-	土師器 土製品	
1417	T 43a2	N - 83 - W	隅丸方形	0.87	0.71	39	外積	平坦	-	土師器 土製品	



第 133 図 金谷遺跡遺構全体図 (『茨城県教育財団文化財調査報告』第 254 集より一部加筆)



## 付 章

## 加茂B古墳群第21号住居跡の腐植土に係る自然科学分析

## &lt;目次&gt;

はじめに .....	174
1. 試料 .....	174
2. 分析方法 .....	174
(1) 土壌化学分析 .....	174
(2) 微細物分析 .....	175
3. 結果 .....	175
(1) 土壌化学分析 .....	175
(2) 微細物分析 .....	175
4. 考察 .....	176
引用文献 .....	177

## &lt;表・図版一覧&gt;

表 1 土壌化学分析結果

表 2 微細物分析結果

図版1 砂分の状況・種実遺体

## 加茂B古墳群第21号住居跡の腐植土に係る自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

桜川市に所在する加茂B古墳群は、筑波山塊北部の山麓を構成する標高100mほどの緩やかな丘陵上に位置する。吉岡ほか(2001)や宮崎ほか(1996)などの地質記載によれば、丘陵を構成する地質は、新生代古第三紀に貫入したとされる稲田花崗岩であり、丘陵と沖積低地との間に、中期更新世の砂礫層からなる標高70m前後の狭小な段丘が分布している。

発掘調査では、丘陵上に古墳時代中期の終わり頃から後期の初め頃とされる古墳3基と弥生時代の竪穴住居跡などが確認され、丘陵の東斜面には古代の8世紀～9世紀頃とされる竪穴住居跡が多数検出されている。この古代の竪穴住居跡の中には、その中央部にピットを有するものがあり、そのピットを埋めている土が周囲の床面に比べて暗色を呈することが確認されている。発掘調査所見では、ピットは住居構築に伴う地鎮祭の跡である可能性があると考えられている。

本報告では、上述したピットの性格に係わる情報を得ることを目的として、ピットの土壌の理化学性および微細な植物片等の確認を行い、ピット覆土の由来や埋納物の存否を検討する。

### 1. 試料

試料は、古墳群の位置する丘陵の東斜面に設定された調査区の2区で検出された第21号住居跡より採取された土壌である。第21号住居跡では、住居の中心とされる位置にピットが確認されており、試料はそのピットの覆土である。発掘調査所見では、腐植土と呼ばれているが、白色の細礫および砂を多量に含む暗褐色のシルト分かなる土壌である。

なお、試料から、超音波洗浄装置にて泥分を除去し、残渣を実体顕微鏡にて観察したところ、白色の細礫～砂は、最大径約7.5mmの角礫状を呈する石英や長石類の碎屑片であることが確認された。また、微量の角閃石の鉱物粒や表面の風化した黒雲母片なども認められた(図版1-1)。

### 2. 分析方法

#### (1)土壌化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法、腐植含量はチューリン法、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法(土壤環境分析法編集委員会, 1997)でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

##### ①分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mm篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

##### ②リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO<sub>3</sub>)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)

濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 ( $P_2O_5$  mg/g) とカルシウム含量 (CaO mg/g) を求める。

#### ③腐植含量

粉碎土試料0.100~0.500 gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

#### ④リン酸吸収係数

乾土として10.00 gになるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5%リン酸アンモニウム液 (pH7.0) 20 mlを加え、時々振り混ぜながら室温で24時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液100  $\mu$ lを50mlメスフラスコに正確にとり、水約35mlとリン酸発色a液10mlを加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後30分間放置し、420nmで比色定量する。定量された試料中のリン酸量を2.5%リン酸アンモニウム液 (pH7.0) のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

#### (2)微細物分析

試料200cc (301.12 g) を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡で観察し、同定可能な種実や炭化材 (主に径4 mm以上) を抽出する。現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材は70℃48時間乾燥後の重量を求める。分析後の種実を容器に入れ、70%程度のエタノール溶液による浸液保存処理を施して返却する。

### 3. 結果

#### (1)土壌化学分析

分析結果を表1に示す。腐植含量は0.83%、リン酸含量は1.87mg/g、カルシウム含量は1.06mg/gであり、リン酸吸収係数は1240mg/100gであった。

表1 土壌化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植含量 %	P2O5 mg/g	CaO mg/g	リン酸吸収係数 mg/100g
腐植土	SCL	75YR3/4暗褐	0.83	187	106	1240

- 注. 1 土色: マンセル色表系に準じた新版標準土色誌 農林省農林水産技術会議監修, 1967 による。  
2 土性: 土壌調査ハンドブック ベドロジスト懇談会編, 1984 の野外土性による。  
SCL: 砂質腐植土 粘土15~25%、シルト0~20%、砂5~85%

#### (2)微細物分析

結果を表2に示す。栽培種のイネの胚乳5個、穎11個が検出された他、炭化材が0.33g確認された。

以下に同定された種実の形態的特徴を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳の完形1個、破片4個、穎(果)の破片11個

表2 微細物分析結果

分類群	部位	状態	試料名 分析量	腐植土 200cc 301.12g
イネ	胚乳	完形	炭化	5個
		破片	炭化	4個
		破片	炭化	1個
炭化材		破片	炭化	0.33g

が検出された。いずれも炭化しており黒色、胚乳は長さ4.2mm、幅2.8mm、厚さ1.2mm程度のやや扁平な長楕円体。基部一端に胚が脱した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。

胚乳を包む穎果は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ1-2mm程度のやや扁平な長楕円体で、基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言った場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の種殻を構成する。破片は基部の果実序柄の部分で、大きき1mm程度。果皮表面には顆粒状突起が縦列する。

#### 4. 考察

試料中に含まれる多量の細礫および砂は、実体鏡観察により、古墳群の位置する丘陵を構成している稲田花崗岩に由来する石英片や長石片であると考えられる。角閃石および黒雲母の鉱物粒を伴うことも、稲田花崗岩の主岩相が粗粒角閃石含有黒雲母花崗岩である（宮崎ほか、1996）ことと整合する。したがって、試料の採取されたピットの覆土は、古墳群の立地する丘陵の表層に形成された稲田花崗岩を母材とする土壌であると考えられる。なお、土壌の理化学性においてリン酸吸収係数が1200を若干超える値となった。庄子（1983）は、リン酸吸収係数が1200mg/100gないし1500mg/100g以上を火山灰土の日安としている。これに従えば、今回の試料は、火山灰土ではないと判断され、上述した花崗岩を母材とする土壌であることを支持する。火山灰土の基準に近い値を示すことについては、おそらく、桜川市付近にまで、赤城火山や男体火山の噴出物が分布している（例えば町田・新井（2003））ことの影響であると考えられる。

他の土壌の理化学性をみると、試料の腐植含量は1%にも満たないことから、特に腐植含有量の高い土壌とは言えない。また、土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では6.0 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gを超える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通1-50 CaOmg/g（藤貫, 1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。これらの事例と比較すると、今回の試料は、リン酸量およびカルシウム量ともに天然賦存量の範囲内にあることから、特にリン酸やカルシウムの富化した土壌であるとは言えない。上述した腐植含量も考慮すれば、ピット中に植物質および動物質の遺体などが埋納されていた可能性は低いと考えられる。

一方、微細物分析からは、栽培種のイネの胚乳と穎が確認された。可食部である胚乳が確認されたことから、住居内に持ち込まれ利用されたことが推定され、当該期の集落周辺域におけるイネの利用が示唆される。したがって、第21号住居跡内の他の遺構や周辺住居からも、イネやイネ以外の栽培種が検出される可能性がある。ピット内にイネが「埋納」されたことについては、検出された数が非常に少ないことと、上述した土壌の理化学性を考慮すれば、その可能性は低いといえる。

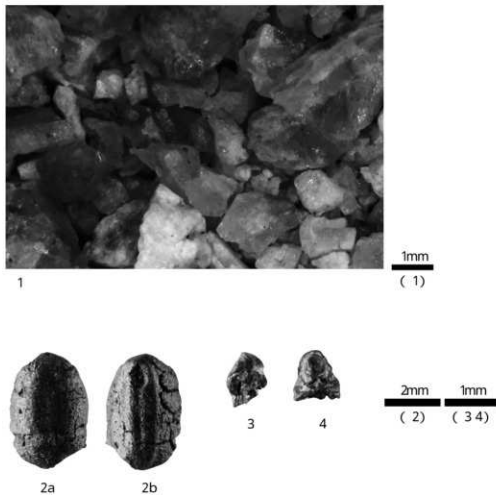
なお、イネと共に検出された炭化材は、遺跡周辺遺跡の森林植生に由来すると思われる。住居内から検出されていることから、構築材の可能性もある。これらの植物遺体は、何れも炭化していることから、火を受け残存したことが推定される。

以上に述べたように、今回の分析からは、第21号住居跡中央のピットが地鎮祭に係わる遺構であったことを示唆あるいは支持するような結果は得られなかった。ただし、本分析をもって、地鎮祭に係わる遺構であったことを否定するものではない。今後の類例等における検討も必要であると考えられる。

## 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 28-36.
- Bowen, H.J.M., 1983, 環境無機化学—元素の循環と生化学—, 浅見輝男・茅野充男訳, 博友社, 297p.
- Bolt, G.H.・Bruggenwert, M.G.M., 1980, 土壌の化学, 岩田進午・三輪晋太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 学会出版センター, 309p.
- 土壌環境分析法編集委員会編, 1997, 土壌環境分析法, 博友社, 427p.
- 藤貫 正, 1979, カルシウム, 地質調査所化学分析法, 52, 57-61.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 川崎 弘・吉田 潔・井上恒久, 1991, 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量, 農林水産省 農林水産技術会議事務局編 土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 23-27.
- 町田 洋・新井房夫, 2003, 新編 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 336p.
- 宮崎一博・笹田政久・吉岡敏和, 1996, 真壁地域の地質, 地域地質研究報告 (5万分の1図幅), 地質調査所, 103p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ベドロジスト恩談会編, 1984, 土壌調査ハンドブック, 博友社, 156p.
- 庄子貞雄, 1983, 火山灰土の鉱物学的性質, 日本土壌肥科学会編 火山灰土—生成・性質・分類—, 博友社, 31-72.
- 吉岡敏和・滝沢文教・高橋雅紀・宮崎一博・坂野靖行・柳沢幸夫・高橋 浩・久保和也・関 陽児・駒澤正夫・広島俊男, 2001, 20万分の1地質図幅「水戸」(第2版), 地質調査所.

図版 1 砂分の状況・種実遺体



- 1 . 砂分の状況 ( 第 2 号住居跡 ; 腐植土 )      2 . イネ胚乳 ( 第 2 号住居跡 ; 腐植土 )  
 3 . イネ穎 ( 第 2 号住居跡 ; 腐植土 )      4 . イネ穎 ( 第 2 号住居跡 ; 腐植土 )

写 真 图 版

加茂 B 古墳群

金 谷 遺 跡

PL 1



調査区西部全景（西から）



調査区中央部全景（南から）



PL 2



調査区東部全景（北から）



調査区東部全景（北から）



第1号墳完掘状況



第1号墳主体部完掘状況

PL.4



第2号墳完掘状況



第2号墳主体部遺物出土状況(直刀)



第6号墳完掘状況



第6号墳第1主体部完掘状況

PL 6



第6号墳第2主体部棺内遺物出土状況(直刀)



第6号墳周溝遺物出土状況

PL 7



第7号墳完掘状況



第7号墳主体部完掘状況

PL 8



第 1 号 石 棺  
確 認 状 况



第 1 号 石 棺  
遺 物 出 土 状 况



第 2 号 石 棺  
確 認 状 况

PL 9

第 2 号 石 棺  
完 掘 状 况



第 3 号 石 棺  
確 認 状 况



第 3 号 石 棺  
遺 物 出 土 状 况

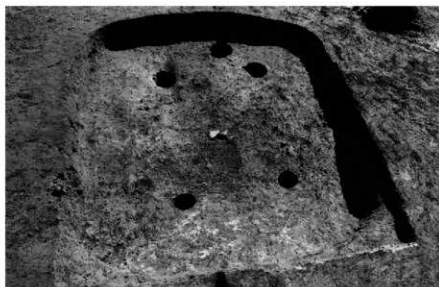




PL 10



第 1 号住居跡  
完 掘 状 況



第 7 号住居跡  
完 掘 状 況



第 7 号住居跡  
炉 完 掘 状 況

PL 11

第 11号住居跡  
完掘状況



第 11号住居跡  
遺物出土状況



第 11号住居跡  
竈遺物出土状況



PL 12



第 17号住居跡  
完掘状況



第 18号住居跡  
完掘状況



第 21号住居跡  
完掘状況

第 21号住居跡  
遺物出土状況



第 21号住居跡  
完掘状況



第 25号住居跡  
完掘状況



PL 14



第1号掘立柱建物跡  
完掘状況



第3号掘立柱建物跡  
完掘状況



第4号陥し穴  
完掘状況

第 5 号 陥し 穴  
完 掘 状 况



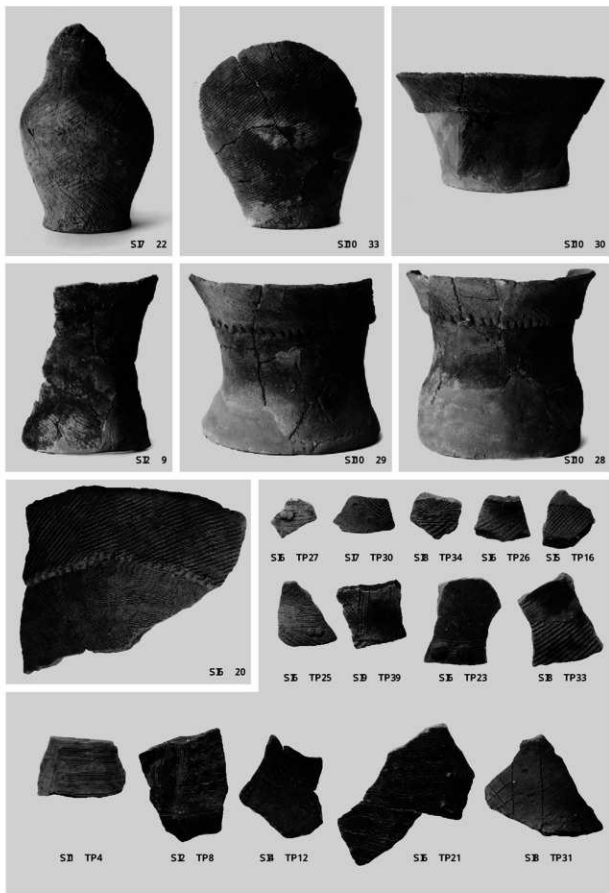
第 5 1 号 土 坑  
完 掘 状 况



第 5 1 号 土 坑  
遺 物 出 土 状 况



PL 16





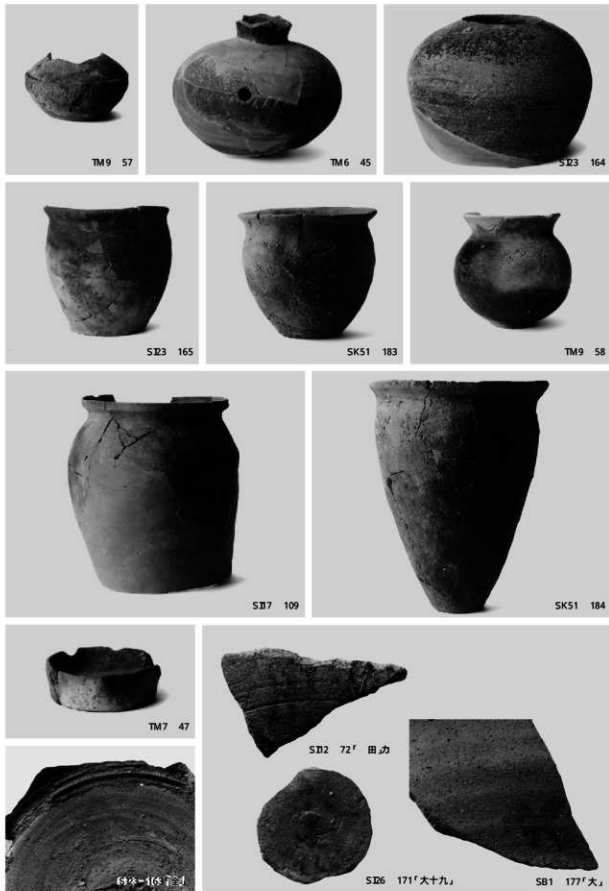


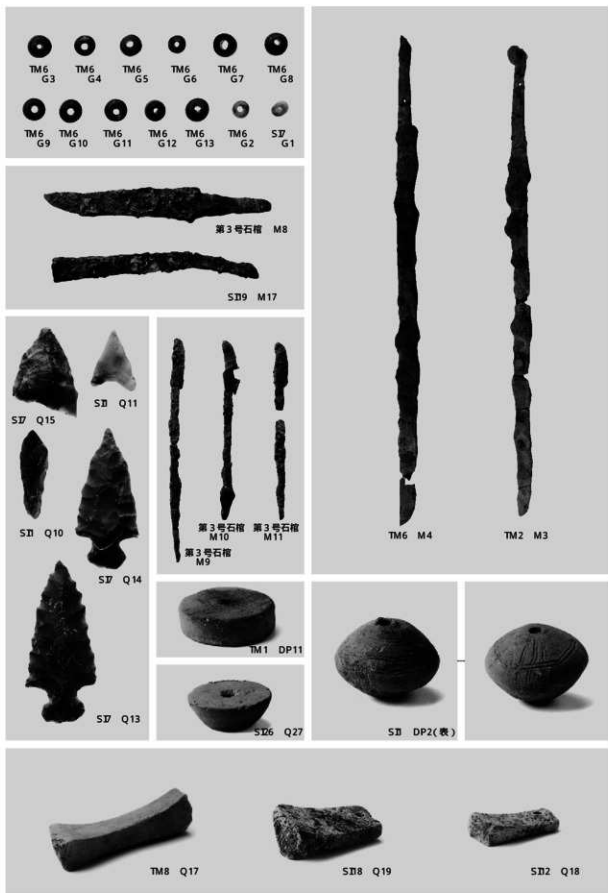
PL 18





PL 20





PL 22



金谷遺跡  
調査前全景



金谷遺跡  
完掘全景（北より）



金谷遺跡  
完掘全景（東より）

茨城県教育財団文化財調査報告第304集

加茂 B 古墳群  
金谷遺跡

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書 X V

平成20（2008）年3月19日 印刷  
平成20（2008）年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL. 029-225-6587

印刷 南平電子印刷所  
〒970-8024 いわき市平北白土西ノ内13番地  
TEL. 0246-23-9051